
とある男子の風紀委員（ジャッジメント）

花天月地

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある男子の風紀委員
ジャッジメント

【Nコード】

N7315K

【作者名】

花天月地

【あらすじ】

舞台は学園都市

主人公は先輩の白井黒子に色々な事件に無理矢理パシられます。

そんな生活を過ごしていると………？

とある科学の超電磁砲にかなり絡ませて、絡ませて、結局ダメダメです…。

自分は趣味で小説を書いているので、かなり酷いですが、読む勇気がある人はご覧下さい。

一話

家の外から爆発音がする、かなり危ない……。だが好奇心旺盛な僕は、野次馬として外に出てみた。扉を開けると、コインが飛んできた、雷を纏いながら。

「…………し、死ぬかと思った」

コインは今、僕の足元にめり込んでいる。

僕の能力は重量操作グラビティコントローラー：長くてすいませんね。自分を中心とした半径5メートルの中にある物体の重さを操る事ができる。

さっき飛んできたコインは、重さを50キログラム+して軌道をずらし、ようやく足下に落とすことが出来た。

コインが飛んできた方に行くと、爆破されている銀行、何かに貫かれていた車、泣きじゃくる子供、そしてなにより……写真でしか見たことはないが、常盤大中学の制服を着ている、この学園都市に七人しかいないレベル5の超電磁砲がそこにいた。

……………射程距離外で良かったなあ……

レールガンの射程距離内にいたら、僕の能力では到底防げないだろう。

「あら、岡富じゃありませんの」

げっ、白井さんだ…。

白井黒子、レベル4のテレポート。

ジャツジメントの先輩……この人は苦手なんだよなあ…。

「丁度良いですわ、貴方の能力で、この邪魔な車を少しでも軽くして下さいな」

「エエエエエ…白井さんの能力なら重い軽いなんて関係無いじゃないですか」

「軽い方が動かしやすいのですわ…と言うわけで早く軽くしなさいな」

「はああい…分かりましたよ」

僕の能力は時間を掛ければその分対象の重さを変えられる。

この後、僕は車を軽くして白井さんはその車を軽々とトラックの荷台にテレポートさせた…。

ちなみに言っておくが…僕もジャツジメントの一員だ。

あああ…早くレベル4になりたいなあ…。

一話（後書き）

ぐだぐだで申し訳ございません。

この小説はとある科学の超電磁砲を元に制作しました。

主人公の詳しい説明

おかとみゆうや
岡富悠哉

男、13歳、B型、身長は165cm体重は秘密さ！

一人称は僕

中学一年生

一話（前書き）

少し修正しました。

一話

今日、僕は白井さんの命令で…スキルアウトのアジトに、

殴り込みさせられました……………アハッ。

いやあ…怖いですね、スキルアウトの人達、皆で機関銃を打ち続けてさ…一瞬でも能力を解除したら死んじゃうよ…しかもこの能力は連続では、五分間が限界なんです。

現在三分目！

「なんで、奴に弾が当たらねえんだよ！」

なんでって言われても、今僕の半径5メートル内に入ると全ての物は重さを30キログラム+されるからとしか…。

さあて、そろそろヤバイな…

デュアルスキル
二重能力というのは知っているかな？

二重能力は一人の能力者に対し二つ能力がある事をさす。

デュアルスキルは通常不可能と呼ばれているが…僕には使えた。

僕のデュアルスキルのもう一つは…。

「かあ…めえ……………」

「なんだ！アイツ何か言ってるぞ」

「はあ……………めえ……………」

「かめ めは、か？もしかしてかめ めは、なのか？」

「能力者なら充分有り得るぞ！」

皆さん、僕はまだかめめめ、しか言ってますよ。
ネタバレをしないでよ……………。

「はあああああ！」

手からビームが！……………、出ません。

スキルアウトの皆さんは、どうやらリアクションだけは凄く、武器を盾にしています。

そんな隙を僕は見逃しません！

本当のもう一つの能力を使います。僕の袖から黒いナイフみたいな物が…スキルアウトの方に飛んでいきます。

グサッ！グサグサ！

まるでルビーを液体にしたような、紅い体液がスキルアウトの皆さんから、

出ませんでした、黒いナイフは全て機関銃に当たりましたよ。

いや、当てました。

次の瞬間……。

機関銃が急に50キログラムでも重くなった様に、地面に落ちました。

「白井さぁん、やっと終わりましたよ……」

僕は無事にスキルアウト約30人を捕獲し、警察でいう交番の様な場所に帰って来ました。

今日は色々と疲れました、お家に帰って早く寝ることにします。

二話（後書き）

いやあ……直すべきところを教えてくださいました皆様。

誠に恐縮です。

三話（前書き）

常盤台の漢字が間違っていました、すいません。

三話

僕のもう一つの能力は…自分から半径5メートル内にいる能力者の能力を塊にしてナイフの様な形にして飛ばすことが出来ます。

僕の重量操作を飛ばすと、塊に触れた物の重さを変えられます。

テレポートだと、塊に触れた物は何処かにテレポートしてしまいます。

だいたいはそんな感じですよ。

とにかく前回のスキルアウト戦ではその能力を使ってスキルアウトの皆さんの機関銃を重くしただけです。

そのあとは、スキルアウトの皆さんは武器が無いので全員で降伏してくれました。

今、家に着きました。

扉を開けると…

「……………」

同居人は、とても無口です。

同居人もジャツジメントの一員で、能力は炎撃使い（パイロキネシス）

レベルは3です、とある科学の超電磁砲で出てきたパイロキネシスの人と同じ能力と同じ威力ですが、加減が出来ないのでレベル3扱いです。

名前は…久しく聞いてませんが、たしか葛谷、観月（くずや、みづき）だったけな、もちろん男ですよ

彼も一年生なので接しやすいです。

「晩飯は何にする？」

「何でもいい」

会話終了！

とりあえず冷蔵庫にあった冷やご飯と卵などを使って簡単にチャーハンを作りました。

「おいしいかい？」

「……………うん」

会話終了……………もう少し話しても良いじゃないか。

「明日は、能力検査」

「モグモグモグ…分かった…モグモグ」

我ながらチャーハンが旨くできました！

次の日、

能力検査の結果、

僕はレベル3

彼もレベル3

はぁあ……。

「オイッ聞いたか？」

「何をだよ？」

「前回レベル2だった新山がレベル4になってたらしいぜ」

「マジかよ？」

「この世は残酷すぎて怖いですね。」

三話（後書き）

勘のいい人は気づきましたか？

次回からレベルアップ編です。

四話

確か、新山くんの能力はバウンドノイズ拡声砲
聞いたことのある音を何倍にも大きくして口から放出する能力で
した。

なんの意味があるのでしょうか？

けど、声真似とかなどにむくのでジャツジメントでは重宝される能
力です。

しかし、前回から3ヶ月でレベルが二つも上がるわけがありません。
白井さんに相談しようと思っても、レベルアップだかなんだか
の件で忙しいそうで切られちゃいました。

今日は観月と一緒にジャツジメントの仕事をしています。

仕事というか…白井さんがレベル4のウィンドマスターと闘ってる
のを手伝ってるだけですけどね、流石レベル4同士の闘いですね僕
の黒いナイフは届く前に吹き飛ばされてしまいました。
観月の炎も消されるし、色々と残念です…。

結局白井さんがテレポートで後ろに回りこみウィンドマスターを捕
獲してくれました。

最初にやらなかった理由を聞いたらタイミングを図るのに時間が掛

かったそうです。

つまり僕たちは囿？

体中かまいたちなどでキズだらけです。

基地に戻ってキズの手当てをしようと向かったら、

レベル5のレールガンがいました。

「お姉様あああああ！」

黒子さんがレールガンの御坂さんに抱きつきました

「わっ、黒子やめなさい！男子が見てるでしょ！」

「あなたたちは帰りなさい！ですの！」

そっぴいなながら、御坂さんの服を…アレ？

バチ…バチバチバチ！

バアアアアアアアアン！！！！

……御坂さんが爆発しました。

次の日、白井さんは病院のベッドで目を覚ましたそうです。

……白井さんバカだな………御坂さんってスカートの下に短パンは
いてるんだな……。

あっ、そっぴえば御坂さんと赤外線でメルアドゲットしました。

四話（後書き）

こんなぐだぐだな小説もどきをよんで頂き誠に恐縮です。

レベルアップの時は別に白井さんは入院してない？

いいんですよ、別に。

五話

「観月…さすがの僕でもこればかりは負けられないなあ…」

「……………負けてもらおうなんて最初から考えてない」

「ほう……………」

「……………」

最初はグー！

じゃん拳、ポイツ！！！！

僕、グー！

観月、パー！

何をかけてじゃん拳をしていたか、それは。

どちらが、白井さんのパシ……………お使いに行くかを決めてました。

今回のパシ…お使いは、レベルアップパーを使った、バウンドボイスの能力者の捕獲です。

ま、まさかだけどさ…この前の新山くんじゃないよな…。

そのまさかでした！

「新山くん！ああそおぼ！」

「ふざけんじゃねえよ！お前ジャッジメントの仕事で来たんだろ！

！！！」

「そうだよ」

「君は勝手にレベルアップなんて変なのを使ったんだ、大人しく捕まっつてよ」

「嫌だね！」

「そうかよ……」

僕は基本紳士ですけど、怒ったら……怖いよ。
まず相手の能力はただ聞いた音を再生するだけだ、なんの問題もない。

「……………すう」

何か来ますね。

「x x x x！！！！」

妙な音を発してますね。

「x x x x！！！！」

いい加減うるさいな、「貴方には悪いですが、さっさと終わらせませす！」

くらっ……あれ？

目、眩が、す、る。

なんで、だろ？から、だがう、ごかな、い……。

「何しやがった、」

「催眠術って知ってるよな？その応用さ……今お前が聞いた音は、聞いたら体中が麻痺しちまうっていうなんとも妙な音だよ……」

それを聞いたから、こうなったのか……まったく、しょうがないなあ。

「……すう……」

「何やってんだてめえ？俺の真似事か？」

袖口からあ……例の黒いナイフさ！

あらよっ！

僕は黒いナイフを、新山くんの足下に投げました、そして耳線を装備！

× × ！

「なんでこの音が……!?!?」

……僕は治って来ましたね、

ムクッ……

「新山くん…君を逮捕します…」

「ハハハ……」

「なんだよ…最後に何か歌でも歌うのかい？」

かん高い音が……聞こえた…けど体には何も無い…。

「ハハハハハハ…これでめえも同罪だ！」

同罪？……まさか！

「今のがレベルアップ？」

「そっだよ！めえもレベルアップを聞いたんだ！俺と同罪なんだよ！」

嘘だろ……オイッ！

五話（後書き）

いやぁ……勘のいい人は気づきましたか？

こんな展開、誰でも思い付きますよね……。

岡富くん、勝ったけど負けましたね。

六話（前書き）

続き、です。

文章などは、もう諦めてください！！！！！

六話

まさか、レベルアップを能力で再生するなんて…。

「レベルアップの解除方法は？」

「ねえよ…諦めな」

「……………」

白井さんにはバレたくないな。

とりあえずこの人を連行しますか。

「岡富、貴方レベルアップを使ったって、本当ですか？」

何故バレた？

ああ…新山くんがばらしたのかな…。

「新山くんに聞かされました、黙っていてすみません…」

「……………岡富、今日は病院に行きなさいな」

「レベルアップの解除方法があるんですか？」

「検査ですわ、貴方を調べればレベルアップについて何かが分か

るかもしれませんが」

「断つたら？」

「私が貴方を、病院に連行しますわ」

「今、白井さんは僕の5メートル以内ですよ？」

僕の袖口に黒いナイフ出現！

それを僕は自分に刺しました、けど痛くはありません、所詮能力の塊です。

テレポート開始！

僕は何処にテレポートしたのかな？暗いな…アレ？寝転んでるのかな？

起きないと。

ガン！

痛い！！！！

頭をぶつけました。

どうやらベッドの下にテレポートしたみたいです。

「な、何！！？」

女の子の声がかかります…少し説明がめんどくさいですね。

「あの…すみません…突然ここにテレポートしちゃったみたいで…
…って？」

お着替え中でした、ちょうど今ブラジャーのホックに手をかけてる

とこでした。

……ここからするべきことは。

「キヤアアアアアアアアアアア……！」

逃亡開始!!!

窓を開けて、外にダイブ!!!

ここは四階みたくです、下に落ちたら死んじゃうよ……。

そこは能力を使うことにします……。

自分の重量を -50して……。

ヒュー……………

アアアレエエエ……………

風に飛ばされました……いままでには経験したこともありません。

僕の体重はたしか、!!!50以下でした!

そりゃ……………飛びますよね、とりあえず+10キログラムするとします。

着地!!!

ゴキツ!!!!!!!

足を折ったみたいです。

このあと僕は白井さんに捕まり、病院送りです。

六話（後書き）

……岡富くんの足おれたのでジャツジメントの仕事はお休みかな？

七話（前書き）

入院！入院！

七話

足首の骨が折れました、全治一週間……アレ？骨折にしては全治早いな？

どこからか、インコが飛んできました。

「カカカ、サクシャノツゴウササササ……！」

エエエエエエエ……

……諦めよう、あのインコが言ったことは全て嘘さ、そうに決まってる。

ガラッ……

「……元気？」

「ああ……観月か……」

「妹もついてきた……」

は？……妹？

観月にそんなのいたっけ？

「そろそろ来る……」

ダダダダダダダダダダダダダダダダダ……！！！！

「あのっ！……！！」

ビクッ！

な、なんだ！！？

「ここは……岡富悠哉さんの病室ですか……!?!」

「はい……!?!、そうです……!?!」

「祐希、うるさい……!?!」

「あつ、お兄ちゃん……!?!」

「……正反対な性格の兄妹……!?! アニメとかでよく見るパターンだなあ……!?!」

「……あつ……!?!」

「……!?!」

観月も気付いたみたいです、彼女……!?! スカー트가捲れています。

「祐希、スカート……!?!」

「あれえ……!?!?!?!」

「やっとなつてみたみたいです、彼女の……!?! 白パンツ……!?! ナイスつす……!?!?!」

「あ……!?!、とりあえず自己紹介でもしてください……!?!」

「ええと、私の名前は葛谷祐希、12歳です……!?!」

「あれ? 双子かな?」

「学校は……常盤台……!?!」

「エエエエエエエエエエ……!?!」

「病室だよ……静かに……」

常盤台イイイ……エエエエエ……。

「あのさあ……祐希……さん、もしかして、白井黒子さんって知ってる?」

「はい!同じクラスですが!??」

(;) ! ! ! !

へえ……。

「あのさ……能力は?」

「アタシの能力ですか?」

「アタシの能力は……メインボックス貴方空箱でレベル4ですよ! ! ! !」

メインボックス?聞いたこと無いなあ……。

「アタシは相手の足下から箱を作ったり出来るんですよ! ! !」

つまり相手を閉じ込めたりする能力か……。

「箱を作るには、箱の量に合った何かが必要になるんですよ! ! !」

「アタシの場合は、水が必要なんですよ!」

……能力も正反対なんだな……。

「祐希、うるさい……静かにして……」

「はあ！お兄ちゃん！アタシそんなに大きな声出してないよ！！！」

………ケンカするなよ………こんな部屋で能力者が二人暴れたら僕じ
ゃあ止められないよ

七話（後書き）

ここまで読んで下さった人へ、

本当にありがとうございました！！！！

葛谷 祐希 （クズヤユウキ）

12歳、女子

髪型は、茶髪でポニテ！

ポニテなのは作者が大好きだからさ！

一人称はアタシ

八話

病室を飛び出し、病院の屋上にて、葛谷兄妹の闘いが始まります。

「お兄ちゃん、アタシも手加減は出来ないよ……！」

「手加減なんて必要ない……………」

「行くぞ……」

まず、観月が大きな大きな炎を……って、当たっちゃうよ！僕にも当たっちゃうよ！

「そんなのじゃあ当たらないよ！」

あれ？あれって白井さんが観月たちがくるまえに置いてった…。

（疲れもぶっ飛ぶ！すっぽんの生き血&ハブジュース）

わぁー…飲めない理由が出来たよ……！！

嬉しいなあ！

祐希ちゃんがジュースを投げて、両手を会わせました。

パンっ……！！

ペットボトルが破裂して中身が………ギヤアアアアアア！

あれ？ジュース、あんなに合ったっけ？

周りの水分を吸収してるのかな？

ジュウウウウ！！

あの火の玉を防ぐなんて流石レベル4！

タタタッ！

観月が……殴ったあ！！！！！！……？？？？？

「え、え？？？？」

驚きの連続！！！！

「痛いじゃない！！！」

祐希ちゃんも殴った！！……？？？

バキッ！グキッ！

カラカラカラカラ……。

車椅子はカラカラうるさいですね。

バキッ！グキッ！

観月も祐希ちゃんも鼻血とかが出てますね、……ふう……。

「はい、ドーン！」

ちかくにあった石ころを結構強めに重量操作したら……。

シュパァン！！

「「「???」」」

石ころがシュパアン?

石ころがあつたとこを見ると、丸っこい穴が。

「ちょっと観月!下の階に行くぞ!」

「……………ああ!……………」

屋上の下の階に行くと、穴が開いてました。

穴に指を突っ込んで石ころを取り出すと、ただの石ころでした、僕の能力はやはり…レベルアップのせいで強化されてるみたいです。

……………。

「お、お、!!!岡富お兄様!!!」

へ?

「アタシ!お兄様に惚れました!!!」

へ?

「……………悠哉?大丈夫かい?……………」

ハハハ……………お兄様か……………それも良いなあ!!!

「お兄様とは、何をすれば祐希さんに言わせられますの？」

「し、白井……さん？」

「あつ！白井さん！元気！！！！？」

「……………」

観月さん！逃げないで！！！！

「祐希さんをたぶらかすなんて…………許せませんわね…………」

ギヤアアアアア！！！！

八話（後書き）

お嬢様の友情の前に、岡富は敗れるのであった。

九話

「ほら、次の実験だ五番」

「はい、解りました……………」

後藤博士

僕が何をしたのさ、僕はただ…親にここで博士の言うこと聞きなさいと言われただけなのに…………お母さん…………寂しいよ…………。

最近、この夢ばかり見てしまう…………、ハハハ…………懐かしいな。

「お兄様！！やっとなきたんですか！！！」

止めてくれ、お兄様と呼ぶのは…………白井さんに殺される…………。

あれからやっとな週間がたった。

入院中に何かに取り付かれたみたい…………うなされていたらしいですね。

それに、レベルアップ事件は終わったみたいですし…………はあ……………。

コンコンコンっ！

「はい、どござ……」

「僕の可愛い……実験生物の入院してる病室はここかな？」

えっ……………？

「あ、このこは岡富悠哉の病室ですが……！？」

止めてくれ！祐希ちゃん！ソイツは……ダメだ……。

「ほう……岡富と名乗ってるのか……フッフ……」

止めてくれ……それ以上言うな！

「自分を……捨てた」

止める！

「母親の姓を名乗るなんて……」

クロス……………コロシテヤル……………！！！！！！

僕は、病室に入ってきた……………お爺さんに殴りかかりました、が……
……女の子に止められました。

祐希ちゃんではありません……………。

「四番、五番を回収するぞ」

「ハイ、ゴトウハカセ」

僕の右手を掴んでいた女の子が消えました。
テレポート!!!?

気付いたら車の中です。

「やあ、五番久しぶりだね…」

「あんた…いつ俺の居場所をつかんだ？」

「んっ？最初からだけど？」

なっ!!!?

「四番はここにはいないから、君の能力でも逃げられないよ」

重量操作では？

「逃げられないよ、君の能力は今制御できないだろ？」

やってみるとしますか……………。

「へぶっ!!!」

すいません僕の声です……………。

僕の帽子が重くなりました。

ヤバイな……………逃げられない。

「五番、一緒に来てくれるよね？」

「断る」

「レッシンゴー!!」

話を聞けエエエエエエエエ!!

九話（後書き）

新章！！？

この小説長くてすみません。

十話

「……ハカセハナゼイマゴロシツパイサクノゴバンヲ……」

「四番、そんな言い方はよせ」

五つの席に二人だけで座ってる男女。

それぞれの名は、男が二番、女は四番。

ひとつ目の席は破壊され、三つ目の席は……。

「五番、いい加減にしなさい」

「やだね、僕はもう五番じゃあ無いから」

「四番……!!五番を殺りなさい……本当は言いたくありませんがね」

女の子が、来まし……

ボゴオっ……!!

「がつ……………」

腹に一発。

ドゴオツッ！！！！

顔に一発。

ハハハ…女の子にタコ殴りにされるなんて……………白井さん以来だな

……………白井さんより一発、一発が強いけど。

「ゴバン、ハカセニフクジュウシロ」

「断る」

「シツパイサクノブンザイデハカセニサカラウナ」

ハカセハカセハカセハカセハカセハカセハカセハカセハカセハカセハカセハカセハカセハカセハカセハカセ

「ワタシハオマエヲコロス……………」

「さあ……………五番、貴方には今から四番と戦ってもらいます。

せいぜい死なないように頑張つて下さい。」

無茶ゆーなよ、博士の命令か……………久しぶりだなあ……………。

「ちなみに四番は三重能力トリプロスキルの実験に成功したので、テレポート以外にも能力がありますよ」

四番……………が消えました。

「シニヤガレ」

とりあえず黒いナイフを作って、効果を試してみます。

3つ作りしました。

「ほらよっ」

壁に当たりました。

壁の一部が消えました。

四番の能力は、テレポートと透明になる能力の様ですね。

もうひとつを自分に刺しました。

テレポートのナイフです。

……テレポートには成功したみたいです。

五つの席がありますね。

一つは壊れていて、二つは埃だらけです。

二つ目の席に誰かいます。

「ようこそ五番、俺は名前は二番、能力は……」

先手必勝、もうひとつのナイフを投げてみました。

「デュア……………」

グサツ！！

「ルノイズ」

あれ？何も発動しないな……………？

「……………ぐう……………ぐう……………」

あ……………寝た。

逃げよう！！！！

病院前

「まったく、岡富は何処に行ってますの？」

「黒子、岡富くんにも事情があるじゃない」

「し、白井さん！！！！」

「どうしましたの初春？」

「お、岡富悠哉という人間は学園都市には存在しません！」

十話（後書き）

文がヤバイな……………。

ここまで読んで頂き、ありがとうございます。

後藤博士〓ポジティブな変態

二番〓実はナルシ設定

四番〓博士に忠実すぎる

十一話

「じゃあ、岡富は誰ですか？」

「分かりません！ただ顔から考えると、後藤研究所という場所にいた……………」

はああ…………この建物、まるで迷路だな…………。

あれから誰にも会わないし、誰もいないのかな。

「拝啓五番へ、」

この間抜けた声は、博士かな…。

「貴方が見つからないのでいつそこの研究所を爆破することにします」

い、今なんていった？

「あと十分くらいかな…そんなくらいで爆発すると思うよ」

適当だ！……！

チクシヨオ…こんな適当な奴に僕は振り回されてんのかよ…。

「あつ、残り時間分かったよ残り時間九分…半だね！」

少ないなあ…。

初春家

「初春！この情報は本当ですか？」

「は、はい！」

「初春さん！黒子！岡富くんのもとに行こう！」

「お姉様！私は一人、助っ人を呼んで来ますわ…」

「分かった！私と初春さんは先に行ってるから！」

研究所内部

うん…この研究所？からどうやって出ようかな…。

窓も扉も見つかないし…どうしよう…。

「あつ」

またあの五つの席がある部屋に着きました……………。

一番、万案 弘

二番、新庄 真

三番、岡富 悠子

四番、グリミン「スタイル

五番、×× ××

なんだよ、母さんって僕と同じ立場だったのか。

いやあ……………。

五つ目の席になんか乗ってるし。

(五番、能力開発レポート)

……………見てみよ!

一枚目

(五番、本名・岡富)

あれ?名前は?

名前が無いよ。

(能力名・完全同調、パーフェクトシンクロ)

あれ?重量操作じゃあ無いの?

(完全同調、他の能力者のAIM拡散力場に干渉、分析、理解、そして対象の能力を完全にコピーする)

じゃあ、あのナイフが僕の能力だったのかな?

(重量操作は、デュアルスキルが、特別な能力でも可能かどうかの

実験結果)

……重量操作は後付けかよ。

(重量操作解除コード、博士と三番のみ暗記)

暗記って……オイツ……。

「岡富くんの拡散力場の特徴とかは？」

「………SOS信号に似ている」

「初春！拡散力場を感知しますわよ！！」

「は、はい！」

残り時間…約五分かあ……。

うっん………出口が無いよ……。

チリイイイイン！！

バチチチチチチチチチ……

シュパァン!!!!

壁が……………ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア!

「岡富!死んでたら返事しなさいな!!」

「し、白井さん!!?」

十一話（後書き）

ここまで読んで頂きありがとうございます！！！

白井さん達は岡富と合流しましたね。

十二話

「白井さん！遅いですよ！ー！ー！」

「岡富、貴方の名前は？」

「は？」

いきなり、なんですか？

「……悠哉ですけど？」

「違うでしょ……岡富くん……」

御坂さんまで……。

「名前はありません……きつとね」

さっきレポートには岡富としか書いてなかったし、

「では聞きますわ、岡富、貴方の父親の名前は？」

万案さん……違うな

「知りません」

「じゃあ父親の名前は教えますわ、貴方の父親の名前は……」

「万案ですか？」

「何が知りませんのです？知ってるじゃあないの……」

へえ……合ってたんだ。

「白井さん、助けて頂きありがとうございます……」

「そこまでかしこまると逆に引きますわ……」

「僕の名前の件なんですけど、教えないで下さい」

「なぜですか？」

「知りたくないだけです」

「岡富」

「はい？」

「明日からまたジャッジメントの仕事ですわ……」

「はい、明日の僕の仕事はなんですか？」

「私と葛谷と貴方の三人で、あの後藤博士を……逮捕しますわ……」

「はい」

自宅

「ただいま、」

「……………」

懐かしいやりとりだな……。

「明日の仕事、頑張ろう……」

「……………うん」

次の日

「白井さん、御坂さんを助っ人として呼びましょうよ……」

「お姉様に手伝わせるわけにはいきませんわ！」

はいはい……。

「で、後藤博士は何処にいるんですか？」

「ジャッジメント、第16支部の地下ですわ……」

ええええ……そのジャッジメントは馬鹿か！

「そのジャッジメントの名前は、新庄というらしいですわ」

「二番の人か……」

「二番？」

「僕が五番で、後藤博士の実験生物の番号ですよ」

二番さんと闘うのか……あの怖そうだったし、闘うのやだな……

十二話（後書き）

次回から戦闘なので、気をつけて下さい。

十三話（前書き）

今回は白井さん視点で書いてみました。

十三話

「白井さん、私服で来いって言ってましたけど何ですか？」

……また岡富は、いちいちうるさいですわね……。

「男子の制服は動きにくいと聞いたので気をきかせたのですわ、感謝しなさいな」

「はあ……」

しかし、岡富の私服はだっさいですわね……。パーカーにジーンズまでは良いですわ。

「何故イヤホンですか？」

「なんとなく……ぐぼっ」

岡富への飛び蹴りは久しぶりですわ。

葛谷の私服……。

「制服じゃないのですの、葛谷」

「……………すみません」

相変わらず葛谷は無口ですわね……

「そついう白井さんの私服可愛いですわね」

私の服装？想像にお任せしますわ。

そろそろ…行かないと逃げられるかもしれないわね…

「行きますわよ、岡富、葛谷」

「はい！」

風紀委員第十六支部

誰もいなくて、静かですわ

「……誰もいないですね白井さん」

「お、おかしいですわね…」

「白井さん………」

二人の間抜け面が、少し怖く感じますわね。

「な、何か証拠を探し出すのですわ!!」

十分後!!

「白井さん何もありませんでしたあ」

「くっ、何もなんて………」

「……あの」

「何ですの葛谷？」

「何か、あった」

はい？何かあった？

葛谷が指差す先には、地下にでも続いてそうな…扉が一つ。

「……カーペットの下にあった」

「葛谷……ナイスですわ！！」

……だけどカーペットの下とは、ベタですわね。

かつかつかつ……

扉の先には階段、先が見えませんか…。

「白井さん、強いやつがいたら頼みます」

「なんですの！？いきなりの他力本願は！！？」

「白井さんはレベル4じゃないですか」

相変わらず、岡富は腑抜けですわ……。

「アニメとかだと、こんな会話してるときに敵とか来ますよね」

「確かに……ですわね」

……かつかつかつ……

無言で階段を降りると、部屋に出ましたわ。

「流石にあんな狭い場所に敵とか出ませんでしたね」

「敵なんていない方が良くに決まっていますわ」

「すううう……」

岡富は深呼吸でもするのかしら？

「新庄君！！！！アソーボー！！！！」

いきなりコイツは何を言ってますの！！！！？

あら？向こうから何か？

「遊ばオオオオオオオオオオゼエエエエエエエエエ！！！！」

展開に着いていきませんわ！！！！

十三話（後書き）

相変わらずの駄文ですいません。

「まったく、作者が馬鹿で困るのはキャラですよ！」

白井さんの反感を貰いました。

「べ、別に作者なんて…好きじゃないんだから………」

とか御坂さんに言わせたいなあ……。

けど御坂さんの出るパターンが思い浮かばないし……。

白井さんにツンデレさせるかな……。

「私はお姉様にしか…デレませんわ!!!」

それに御坂さんに言わせたら、白井さんがうるさそうだしな……。

「次回も見てくださいな（ハート）」

似合わねえ……

「うるさいですわ!!!」

十四話（前書き）

戦闘は特にありません。

十四話

「あれ？」

「一番さんはこちらを見て何か唸ってますね？」

「常盤台の超電磁砲はいないのか？」

「お姉様に貴方達ごときの相手をさせるわけにはいきませんわ！」

「……多分御坂さんに頼めば来てくれたと思うけど……。」

「三人で俺を倒せるとでも？」

「あら？貴方ごとき、葛谷で充分ですわ」

「????？」

「めっちゃ観月が混乱してるよ……。」

「貴方の能力は、二重能力とはいえ所詮は音を操る能力ですわ」

「し、白井さん……相手をあからさまに挑発しちゃ駄目ですよ……。」

「黙ってればよ……。」

「ほら、怒っちゃった……。」

「すううう……。」

僕が、何故イヤホンを持ってきたのか…。

それは！

「喰らいやがれエエエエエエエエ！…！」

イヤホン装着！…！」

何にも聞こえないけど、観月と白井さんが苦しんでるなあ…。

「なんで、キャパシティダウンがここにあるんですの！？」

白井さんは何言ってるのかな…？

だけど…二番さん、メチャクチャ隙がありすぎる…。

二番さんが苦しんでないのは、僕と同じくイヤホンをしてるからかな？

「白井さん！…！」

「何…です…の！お…か富」

「今白井さんが！なにいつてるかは！知りませんが！！アイツを拘束してきます！！！」

さあて…観月と白井さんの能力をコピーして…パイロキネシスのナイフを二番の足元に…投げました！

ポオオオオオオオオオオ！！

「熱っ！ギイヤアアア！！！！！」

綺麗に燃えてるなあ。

もう少し見てたいけど、テレポートのナイフを投げてやりました。

僕の足元に二番さんがいます。

「白井さん！拘束していいですか！？」

ここだけ聞くと大変な勘違いをされそうです。

「勝手にしなさいな」

かちゃりっ

手と足に手錠を付けて、口にはガムテープを……………けして趣味ではありません。

「んんんうん！！！」

わぁー…見てて面白いなあ。

「アハヒヤハヒヤへハ！！！！！」

誰の笑い声？

「白井さん？」

「違いますわ！」

「……………」

観月では無いな。

「ワタシダヨ！コノクズドモメ！！！」

「白井さん…アイツはテレポアサルトートと透明人間と相手を眠らせる能力を持ってます」

「でしたら、今回は私が活躍する……………」

「あら？白井さんじゃあなくて？」

ん？

「！このいやらしい声は……………」

いやらしい？

「真打ち、登場ですわ！！！」

誰ですか？

十四話（後書き）

誰だか解るかなあ？

名前の読み方は知ってるけど、漢字を知らない作者です！！！

十五話（前書き）

今回は葛谷観月視線で書いてみました。

十五話

「誰ですか？」

「わ、私と同じ常盤台のレベル4の……」

「婚后 光子ですわ!!!」

白井さんを越えるお嬢様だ……。

「タタカイニシユチュウシロバカドモ!!!」

あれ？

あの女、悠哉に……？

「岡富つ!!!?」

「悠哉!!!!」

バタツ………

あ、あれ？悠哉が………。

悠哉？なんでだ？

なんで、悠哉が狙われなきゃ駄目なんだ？

俺は、悠哉を護れなかったのか？

「うあああ……」

悠哉を護るために……着いてきたのに。

「ヒイハツハツハアアア!!!」

あの女、叫んでやがる

「ブザマダナアゴバン!!!!」

五番？悠哉は悠哉だ。

「……いさ……」

白井さんもやられたのか？

「……き……ま」

あの婚後って人もやられてるみたいだ。

「ノコリハオマエダヨ、オネンネシテモラオウカナアアアアアアアアアアアア!!!」

お前だけには、

「……黙れ……屑」

負けられないんだよ……。

ポオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!
!!!!!!!!!!

「オマエゴトキノノーリヨクデワタシニカテルワケネーダローガヨ

「！！！！」

3333333333333333.....4。

ジュアアアアアア.....。

「？ユカガトケテルウ？」

悠哉と白井さんと婚後って人を何処かに移さない。

とりあえず階段の方に移動させた。

「.....屑野郎」

体が火照る、頭が熱い...あれ？俺の周り、炎が渦巻いてる。

「...だるい.....」

「スグニラクニシテヤンヨオオオオオ！！！！」

俺は手を銃みたいのに、構えた。

「.....消えて？.....」

キュイイイイイイ.....

指先に炎が集まってく...

シュドンっ！！！！

炎は、屑野郎の右肩を貫いた。

「ギイヒヒ...テメエエツツ...！！」

屑は僕の後ろにテレポート、そして刃物で僕を……刺せなかった。
僕に当たる前に溶かしてみた。

今までなら、できなかったけど、今は出来た。

「ア、ア、ア、ア………」

「……散れ………」

キュイイイイイイイン……シュドン!!!!

今度は左肩を貫いた。

「……拘束完了………」

屑の両手に、原理は解らないが能力を封じ事ができる手錠を付けた。

「……ふああ………」

「……カツ丼っ!!」

「……カツ丼っ!?!」

三人が起きた……白井さん 婚后 悠哉の順番で。

「……おはよう……」

僕は絶対に悠哉を護る。

十五話（後書き）

いやぁ…………観月君今までで一番喋ったんじゃないですか？

「……………多分」

……………

今回観月君は遂にレベル4になりました。

主人公だけレベル3って……………。

「悠哉は悪くない、作者のせい……………」

もしかして、君はホ……………

十六話（前書き）

バトル少なめのバトルが続いてすみません。

十六話

「……あれ？四番が寝てる……？」

四番が両肩に包帯が巻いてあるな……。

「誰が倒しましたの？」

「……………」

「……その無口君じゃなくて？」

……………観月が？

「そうなのか？観月？」

観月は頷きました……。

「俺だつてやるときはやる……………」

観月が四番を倒したので、次の場所に行きたいと思います。

扉がありました。

「白井さん、開けるべきでしょうか？」

「開けなきゃ先に進めせんわ」

ギィィィ

扉を開けるとそこは……ロボットの兵隊軍団が…。

「……どうします？白井さん」

「…貴方は先に行きなさいな」

「何故？」

「貴方はあの博士と話すことがあるでしょう」

この人は何でも解る何でも博士かな？

「はい…」

「………援護するから…奥の扉まで走って」

「ギャアアアアアアアアアア！！！！」

死ぬ！死ぬ！

脇では、ロボットが燃えていて、片方ではロボットが吹き飛んでは他のロボットにぶつかってます！！

「ここは私の…エアロハンドの出番ですわね！！！！」

ギャアアアアアアアアアア！！！！

扉開きやがれ!!

ガチャガチャガチャ……開かないイイイイ!!?

観月の炎に巻き込まれるウウウウウウ!!

ガチャ……

開いた!!

ボタン!!!!!!

「し、死ぬかと思った……」

「やあ……五番……また会えたね……」

「博士……」

博士そこで……テレビを見てました。

「どうせ、あの二人は負けちゃうって解ってたからね」

「あんだ、俺の名前知ってるんだろ？」

「勿論じゃないか……なんなら君に教えてあげようか……？」

余裕な顔だな。

「言ってみるよ」

「岡富拓海」

カチッ……………

なに？この音？

「五番…君、先輩から名前きいたかい？」

「聞いてません」

「君の名前はね、君のパスワードにもなってるんだよ」

……………それは研究所にあった奴か…

「これで君は、重量操作が不可能になったし僕は能力者じゃないから完全同調も意味なし！！！」

……………いい忘れましたが…

「喰らえ！博士パンチ！！！」

簡単にかわせました。

かわしてからの〜ローリンググソバット！！！！

「へブシッ！！！」

痛みでうすぐまる博士に…蹴り！

「ゴガツ…ゲホゲホっ…ハアハア…」

僕は喧嘩強いですよ？

「…………絶対…あと…づけだ……………」

後付け？ハハハ聞こえないなあ！！！！

十六話（後書き）

ちなみに、実は後付けではありません！

最初はスキルアウト相手に喧嘩だけで勝ってしまう設定でした。

けどそれじゃあつまらないので隠してました。

嘘じゃあないよ？

「んゝそろそろネタ尽きたんでしょ？作者」

なんで皆作者作者って呼び捨てなの？

「そりゃあ…作者は別に偉くないからじゃないかな？」

ハハハ……キツいな。

番外話（前書き）

初の番外編！

番外話

婚后光子編

「そういえば、なぜ婚后光子、貴女はいますの？」

僕も気になっていた！

「…………お散歩してましたら、たまたま貴女方の姿を見ましたのでついで……」

ストーカー!!?!

「ストーカーですの……………?」

白井さんと意見が合うなんて…………明日は雨かな…………。

「誤解ですわ!!!!!!」

「何が誤解ですの!!!!!!」

あーあ…………喧嘩になっちゃった…………。

葛谷祐希編

「あああ…………白井さんもお兄様もお兄ちゃんすらいらないなんて…………何か事件でもあったのかなあ……………」

「気を付けてね、最近あんな輩が多いから……」

……！

「あの……！」

「ん？」

「私とメアド交換してください……！」

「別に良いわよ？」

やったあ！超電磁砲のお姉様のメアドゲット

スカウト編

4月9日……

「おい……兄ちゃん、金貸してくんねえ？」

カツアゲかな？

「嫌です」

なんでこんな奴に貸さなきゃ駄目なんだよ……。

「んだと？てめえ俺がこの辺りのエリアのボスの神谷様だと知っての無礼かあ……！」

ウザいなあ…。

「僕にはエリアとか興味ありませんから、とりあえず僕から離れて下さい」

ブチッ！

「てんめえ…表にでな…」

「今更泣いても許さねえぞクソチビい！」

……はああ…闘うのめんどいなあ…。

「そついう台詞は………」

不良さんに足払いをかまして、転ばし…倒れたとこに……。

「…死亡フラグですよ？」

すんごめの正拳突き…。

そんな生活を繰り返していたら、僕の前に一人のツインテールを靡かせる女子が現れ、喧嘩の才能で僕にスカウトして来たのは別の話。

白井さんの…髪型っていつからツインテールなんだろ？

番外話（後書き）

オリキャラの能力以外の特徴説明

岡富 喧嘩が強い、料理が上手い、頼みを断れないという主人公
スキルを装備済み

観月 無口？、趣味は麻雀、意外にSかも？

祐希 バイ属性、妹属性、やんちゃ、ドジではない。

十七話

「博士……幾らなんでも弱すぎですよ？」

見かけは爺さんなこの人の身体はかなり弄つてある可能性があったので……本気で蹴りをしたんですけど……弱すぎですねえ。

「……す、少しは老人を労ろうよ……五番……」

「身体を弄つてあると思つてたんですよ……」

「酷いなあ、自分に改造を施すわけないでしょ……」

他人は弄るのかよ……。

「それより……僕の実験生物は……別に五体だけじゃあないよ？」

何い！？

「他に誰かいるのか？」

博士は……笑った……。

「六番を紹介するよ……五番、君の妹だよ……仲良くしてあげてね……」

博士はそこまで言つと……気絶しました。

十分後！

誰も来ないよ？

とりあえず…僕は扉を開けて白井さん達のお手伝いでもしますよ…
…。

ギイイイ……

ボカアアア…バタンツ！！！！

フッフ、暫く待とうかな…爆発に巻き込まれたら死んじゃいそうだし……。

「1+1=？」

は？

後ろを振り向くと…そこには、可愛い…女の子が……。

「もう…聞いてますか？、1+1=！！！？」

「2ですかね？」

「せ、正解よ…よくわかったわね……」

この人が六番？

「あゝもしかして貴方が六番さんですか？」

「正解、遊ぼ……お兄さん……」

殺気……ですかね？何かそれっぽい何か伝わって来ました……。

「お兄さん……私の能力を教えてアゲル……私の能力はね……ワンダーランド夢与物語」

……来るか？

「遊ぼうよ！……！」

黒いナイフを作って……作れない？

やばいな……ナイフが使えないなんて……。

「とりいやあ！……！」

彼女の背中から……？

「……んああんっ！……！」

変な声出すな……！

翼……漆黒の翼が……彼女の背中から片方だけ生えている……。

「さあ……遊びましょうっ？」

「断るっ！……！」

逃亡開始！

ドアを蹴り飛ばし、白井さん、観月、婚后さんを見つけ。

「皆！逃げましょうー！ー！ー！」

皆でダッシュしようとしたら。

グサツ！！！！

グサツ？

僕の脇腹には…赤黒い…ドロドロとした血が……。

何が？起きた？？

「私の能力は…この黒い羽…この羽はね…とっても鋭くてとっても有毒なの…」

「なんだと……？？」

「バイバイ」

僕の意識は……途絶えた。「岡富イイイイイイ！ー！ー！」

十七話（後書き）

はい、岡富死ね!!!

作者だけど、作者だけれど……そんなに岡富は気に入って無いんだよな……。

「おいつ!」

おっと…キャラに突っ込まれたかな？

「テメエ作者なのになんだよ!!きつととある魔術の禁書目録の作者さんはキャラクター一人一人にこだわりとか…」

うるさいなあ…

「うるさいゆーな!!」

ではでは、また次回!!

「勝手に終わらせんな!!」

十八話

……あれ？

痛く……ない？

僕は起き上がって、六番を見た。

「何を……した？」

「夢を与えました」

周りを見回すと……まだここは博士の部屋でした。

……ようするに、幻覚かな……。

「黒い羽は……夢を与える……」

ナイフは……またつukれない……。

「貴方の夢を叶えましょうか……？」

「僕の夢を知っている様な口振りだな……」

この人の能力は所詮夢を魅せるだけみたいですね……。

「倒す……！」

この人位なら倒せる！

六番は…口を（ ; ）って感じに開けてますね。

……………白井さんの反応は無し…でもいいんですよ…。

僕は…携帯を閉じました。

「ご、五番君？何そのいきなりのへタレな台詞？」

「ご想像にお任せします…」

六番は…白い羽を…一枚抜いて…それに息を吹き掛けました。

すると…一本の白い剣に羽は姿を変えました。

「綺麗に…血の華咲かしてアゲル」

血の華って…そんなの咲かして欲しくないですね…。

……………やっぱ白井さんにも来てほしかったな…。

十八話（後書き）

まさかの夢……。

それに、六番の説明とかを忘れてました。

六番、ゆめしろ みしろ 努城美代

語呂悪くてすいません。

肉体年齢十八歳

レディオノイズと同じく…悠哉の性転換クローンの肉体だけを成長させて、そうなった。

能力名称、ワンダーランド 夢与物語

黒い左翼、白い右翼、黒い左翼は、羽から電波の様な物を送信し、
相手を眠らし、夢を魅せる。

白い右翼は、羽の一枚一枚が刀の硬度を誇り、羽を一枚抜いて息を
吹き掛けると巨大化し、白い剣になる。

以上！！

十九話

……先程、岡富の情けない声が聞こえた様な？

……血の華はやだな……。

「……バイバイ！」

そういつて僕はドアを開けて……逃げます。

パタン！

………ミシッ……

わぁー逃げろー。

「岡富！？もう博士と話はずんだのかしら？」
僕は走りながら。

「白井さああん！！ヘルプミイイ！！！」

「岡富……今度は何ですか？」

「天使が出てきました！！！！！」

「岡富…貴方の脳がパンクする前に…何故教えて下さらなかったの？」

酷いっ！

……………ミシミシミシ……………

僕は白井さんの肩に手をおさま……………。

シュンッ！

「ほえ？」

僕は、観月の前に…落ちました。

「ポピッ！…！」

……………づう…痛い。

ミシッ…バゴオオン

壁崩壊イイイイ！…？

「五番…酷いよ…私は遊びだったの？」

…何言っただこの人？

「お、岡富にはあのような素敵なの…恋び…」

「違いますって！」

あんな人を彼女とかにはしたくない！！

「…酷いよっ五番ん！！！」

無数の羽が飛んで来ました。

「み…観月頼む！」

観月は頷いて。

ポオオオオオオ！！！！

羽は所詮羽、火には敵いません。

「六番めえ…死んじゃ…ポオっ！」

ポオっ？

観月がこっちをまるで、口から火を吐く人を見たような顔に…素直に言います。

僕の口から火が出てきました。

さっき白井さんに触ったらテレポートした…観月の後ろに隠れたら口から火が…。

まさかだけどさ…（ー）

か、完全同調？

試しに、手を六番に向けて振り上げました！

「喰らえ！六番！」

メラメラ……ボオオオオオン！

おおおお！

火を操れた！

だけど六番は、純白の翼で火を避けました。

……くそお……。

「し、白井さん!!！」

「岡富…私に手伝えと?」

……くそお……白井さんの手伝いは無しか…。

「……完全同調が発動したね……五番…やっぱり、本物は凄いね……」

本物？

「……悠哉…もレベルアップしたの?」

えっ？

「ハハハ…完全同調について調べなかったの？」

調べられなかったんだよ……。

「脳の力を完全同調と重量操作に使ってたのに対し…重量操作を解除したんだから…完全同調の力が強まってもおかしくはないはずだよ」

「じゃ、じゃあ僕は…？」

「ん…レベル4くらいじゃないかな？」

イヤッホオオオイっ！！！！ぼ、僕は遂に…ね、レベル4になったんだあああ！！！！

エへへ…へへへへ

「…岡富…かなりにやけてますわよ……」

だってさあ…っ、遂にレベル4になったんだよ！！！！

「し、白井さんにも勝てるかなあ…」

「無理ですわね」

即答！！？

「……殺ってやる」

白井さんに認めさせてるよ……。

「…………ゆ、悠哉？」

…………殺る！やってみせる！

あの…………誰だっけ？扇子さん？の能力をパクるか…………。

近くにあった石ころを触って六番に向かってなげました。

途中で石ころから風が噴射し…………。

「！！あ、貴方私の能力を真似しないで下さる！」

知るかよ…………。

流石に石ころでは羽を貫けないので…………。

自分を触ってみます。

「アアアアアレエエ……………」

そして六番を…………殴れないので能力をパクってやる…………！！

…………落ちるうう…………間に合わないイイイ…………。

痛っイテテテ背中が痛い！

背中から…………な、なんか…………出る…………！！

バサッ…………

「えっ？」

白と黒…両方出てきた……？

「……ズルいよ…本物に偽物が勝てるわけないよ………」

「いつつも私は本物が目標！貴方のクローンなわたしは……けして貴方以上にはなれない！私は貴方を越えられない…貴方は私の先に行く……そんなのはもう我慢できない…私が貴方を殺して……私が本物になるんだああああああ！！！」

……クローンか…なんかドロドロだな……クローンとか、重大発表なんてレベルじゃないハズなのに随分僕は冷静だな…。

「間違ってるよ」

「……！お、お姉様……！」

「……あつ……御坂さんだ………」

「み、みみみみみさ御坂さん……！」

「……レールガン？」

学園都市最強の七人のレベル5……その一人常盤台の超電磁砲はそこにいた。

「そうやって自分は偽物だって言ってるから…自信がもてないんだよ貴女は貴女…それ以外のなんでもない…偽物でもなんでもない」

「綺麗事言つなあああ!!」

………せっかく御坂さんが立ち直るチャンスくれたのに………よしっ
…。

「御坂さん、」

「何、岡富くん？」

………僕がやらなきゃ……。

「白井さん……」

「なんですの……岡富」

「二人の能力を貸してください」

「分かった」

「しょうがありませんわね……」

………さあて……次は僕が反撃する番だな。

「その羽……もぎ取ってやるよ」

「お……岡富の口調が変ですわ!!?」

十九話（後書き）

いちよう岡富の能力は、相手のAIM拡散力場を解析して自分の能力にすることです。

相手のレベルが3だとしても自分が4だったらその能力を岡富の体内でレベル4相応の強さに変換されますが…
相手のレベルが4で自分の能力が3だしたら…レベル3程度にしかできません。

つまり相手の能力レベルを自分と同じレベルにして使う、それが岡富の能力です。

番外編 夢を追い続ける天使と偽物を騙る人間（前書き）

意味不なのでお気をつけて下さい。

番外編 夢を追い続ける天使と偽物を騙る人間

天使

私は、生まれてすぐ脳に入りきららない程の情報と…まだ子供のはずなのに大人の肉体を与えられた。

人間

僕は、普通に暮らしたかった…珍しい…それだけで調べられ…そして肉体を切り刻まれた。

天使

私は人間から生まれた偽物の天使…けして人間にもなれず…天使にもなりきれない…。

人間

僕は天使でも悪魔でも…神なんかでも無い、人間だ僕は人間だ、僕は偽りの神。

天使

ああ…神よ私の願いが叶うならば私は人間になりたい…人間になりたいのです。

人間

僕は偽物、けして本物ではない…信じて下さい僕は偽物になりたいのです

共鳴

ああ…神よ…この身体を貴方に捧げれば望んだ姿になれるのですか？

天使

私は人間に

人間

僕は偽物に

共鳴

貴方の力を望み己の欲望で己を埋めたいのです

絶望とはなんだ？

希望とはなんだ？

虚無とはなんだ？

無限とはなんだ？

人間とはなんだ？

番外編 夢を追い続ける天使と偽物を騙る人間（後書き）

解りましたか？

自分でも何を書きたかったのかわかりません

二十話

「黒子…これは岡富君の喧嘩よ…手出しちゃ駄目よ」

……

「お姉様…言われなくても私は岡富を手伝うことはしませんわ」

……

「……六番……」

……僕は偽物…他の奴を吸収して僕は偽物になり続けてやる。

「……消えて！」

白と黒の翼…両翼が揃った。

白と黒の刃が僕を貫こうとする…。

「……夢与物語…同調」

漆黒の翼を背中から召喚
そして刃を全て防ぐ。

「なっ！！？」

今更泣いても遅いからな！！

「瞬間移動…同調」

シュンッ！

（あるもの）をテレポートし…六番の背後に移動！

「超電磁砲同調！！！！」

僕は…テレビに向かって電撃を込めた拳を……………！！！！

「うりいやああ！！！！」

「岡富君駄目！！！！」

「岡富！！！！」

ドオオオオオン！！！！！！！！！！

一つの閃光が…一人の天使の前で……………消滅した…。

……………殺すわけないですよ…。

バチ…バチバチ…バチバチバチ…

テレビは…六番の前で停止…何故だと言うと…。

レールガンには磁力操作能力も含まれている…テレビの前に磁力の壁を作りレールガンをぶつけた結果…止まった様に見えたんです。

「わ、私を殺さないの？私はバンクにも記録されていない貴方のクローンだから貴方が私を殺しても罪にはならないよ？」

理由ですか…

「殺したくないだけですよ…」

本当に今日は疲れました。

……………ぐう……………

……………？

あのレールガン当たっていませんか？

お姉様…も吃驚してますし…？

「罪にはならないよ？」

「殺したくないだけですよ……ぐう……ぐう……」

?????

岡富…寝ましたの？

まったく、しょうがありませんわね……。

「葛谷！」

「はい……」

「あの博士達を連行しなさいな……」

……

「黒子…私に手伝える事ある？」

お姉様……

「お姉様…ではあの天使を連行してくださいな……」

「白井さん！私は何を……」

「帰りなさいな」

てゆーかいましたの貴女？

ぶうぶう言いながら帰る婚后光子

あの天使を連行するお姉様……

その他もろもろを連行する葛谷…

……

「…岡富…起きなさい…起きなさいな！」

いくら揺すっても起きませんわね岡富…。

「……ん〜白井さ…すう…すう…すう…」

可愛い！

はっ！私は一体何を？

まったく、この事件が一段落したら…岡富に風紀委員の仕事を擦り付けてやりますわ！

まったく、岡富には最近振り回されまくりの様な気がしてきましたわ…。

「……すう…すう…すう…」

なんかイタズラしたいですわね…

！

「ペンで肉って書いてあげますわよ、おかとみ…フッフ」

肉を書こうと顔に除きこんだら…。

「カツ井!!?」

チュツ!!!!!

チュツ?

ほえ?

私…何を?

「……………白井さん?」

……………!!!!!!

ギイヤアアア!!!!!!

「この獣!わ、私の唇を奪うなんて!」

「ちよつ!まって!グハツ!痛い痛い!!!蹴りは痛い!」

「実は起きてたのですわね!私をずっとそんな目で…あぁいやらしい!!!」

このっ!お姉様に捧げるハズのファーストキスをこんな奴に奪われるなんて!!!

「痛い!ちよつと!誤か…具簿絵え!!!」

……ピクッ……ピクッ……

あっ……

………て入っ！

………レポートで帰るとしますわ………。

……ピクッ………ピクッ

「はああ
「………」

岡富もオマケに連れて帰るとしますわ……。

岡富と葛谷の寮

「………」

「すう………すう
「………」

いつまで寝てるつもりですか？

「………白井さんは帰らないんですか？」

葛谷……！いつもより台詞が長い！

「そうですね、私はもう帰りますわ………」

葛谷は頷いて…

「悠哉の好きな服装は…ワンピースですよ」

！！！

「なっ！！？」

何をいつてますの葛谷！

「頑張つて下さい」

「誤解ですわ！私はべ、別に岡富なんて！」

そうですね、葛谷は何を……。

「……白井さあぁ……ん……すっ……」

！！！！

「ひ、ひゃい！！！」

変な声が出てしまいましたわ！！

「もう帰りますわ！！！！」

ボタンッ！

岡富は次の日無事に目覚めたそうですわ…それと後藤博士は有罪で無期懲役…二番、四番、六番の三人は施設に送られたらしいですわ。

「お姉様ああ…!!」

「なっ！黒子やめなさい！」

離したくありませんわ…!!

「嫌ですの…！」

「…!!」

ゴッ…!!

「痛いですわ！ほんのスキんシップですの…!!」

今日もこの都市は……平和ですわ！

二十話（後書き）

あっけないですね。

次回からは…白井×岡富のターン…!!

「何を言ってますの？作者…!!」

げっ、白井さんだ。

「私を岡富と付き合わせようとしても無駄な足掻きですわよ？」

……作者パワーを使えば平気さ！

「なっ！」

それではまた次回！

「私は岡富とは絶対に付き合いませんわ！」

二十一話(前書き)

前回の最後が…なんか最終回っぽくなってましたが…まだしごとく続きます。

二十一話

……

「お、岡富…どうですか？私…似合ってますの？」

……し、白井さんが…デレた…夢だな。

「ハハハ…夢だな夢に決まってる！」

「し、失礼ですわね…私は岡富はワンピースが好きだと聞いたからこんな格好をしてわざわざ会いに来たのに……」

…正直言つと…めっちゃめっちゃ可愛い！

白井さんは色んな面で僕好みだし、ふ…服装もワンピースなんて白井さんは着なさそうな…白ワンピース最高！

「…………可愛いです…………」

すると…白井さんは上目遣いで下から。

「ホントですか？」

可愛すぎる…！…！

や、ヤバイ…色んな意味でヤバイ…白井さんに惚れそつだ…。

「……………岡富……………」

「ひ…ひゃい！」

僕…変な声が出た。

「今から…私と……………」

わ、私と？

ボソツ「潜入捜査しますわよ」

あっ……………。

「岡富い？どうしましたの？燃え尽きてますわよお？」

ハハハ…そんな事だと…思いたくなかったよ！！！！

「白井さん…僕も私服じゃないと駄目ですか？」

「当たり前ですわ」

お着替えタイム！

前回の博士捕獲の時とほぼ同じ格好ですよ。

イヤホンをつけようとしたら……………。

5つて書いてある……。

何これ？

「ああれええ？五番お出かけ？」

…？この声は？

「どうしましたの岡と……びゃっ！」

白井さんも驚くその人は……。

「努城ちゃんだよお、忘れちゃったあ？」

努城美代…六番と呼ばれていた見かけ十九才の中身は少女がそこに

…は、はだ、はははは…言えません…。

十分後！

「……つまり、博士の最後のコネで釈放なわけ？」

……さっきまでの六番の格好ヤバかった…今日だけでどんだけ理性を揺さぶられたか……。

今、六番はここまで来るときに着ていたという…スーツ姿で白井さんに正座させられている。

「……うう…足があ…し、しびれりゆう…」

「……そうですわ…六番…貴女も一緒に来なさいな」
「なんだと！！？」

「……ほえ？私…何処につれてかれるのお？」

……ここだけ聞くとヤバイな。

「僕も聞いてませんよ、何処に行くんですか？」

白井さんは…やや頬をひきつらせながら。

「学舎の園に侵入捜査に……」

「ちよつと待ったあ！…！」

「なんですの岡富？」

「僕は男です！」

「わかってますわ、しかし常盤台の生徒の彼氏は入れる決まりです」
「の」
「彼氏？」

僕が？

「ビュービュー！五番モツテモテえ！」

……六番の声… 八八八… 白井さん… 八八八。

「岡富? どうしましたの?」

バタツ… … 脳の許容範囲を完全に突破しまし… … …。

「岡富は今日は駄目みたいなので後日来ると岡富に伝えといて下さいな」

黒子っちはもう帰っちゃうみたいだなあ… …。

「バイバイ! 黒子っちい!」

「黒子っちはやめなさいな!」

「ぶうぶう… … 黒子っちは黒子っちだもん!」

「もう疲れましたわ… …」

バタンツ… …。

「… … すう… … すう… …」

… … 五番… … すっかり寝ちゃってるなあ… …。

そっだー！！

「ご・ば・んんん〜起きてよ〜…はい…おはようのキス…んん〜」

ガシッ！

ありい？

「ろ、六番…止め…ぐう…ぐう…」

ちよつと！顔を掴んだまま寝ないでよ！痛い痛い痛い！痛いよ！

「五番！痛いよ！痛いいい…ふえええん…」

痛いいい…。

「カツ井！？あれ六番なんで泣いてるのか？」

なんでカツ井なのお？

「…ヒック…ヒック…なんでカツ井なの？」

「えっ？僕、カツ井とか言っていましたか？」

気づいてないの？

「…とりあえずゴメンね僕が何したかは知らないけど…」

そっだー！

「じ、じゃあ…キスして…五番…」

「なんでそうなる!!!」

ん？反抗する気かな？

「だって私、五番の事好きだもん！」

…フへへへこう言えば五番が困ってる様が見れるから面白いことに……。

「分かったよ……しょうがないな…」

へっ？

「ほら…ん」

エエエエエエ！五番が……こんな反応するなんて……ほえ？

「なんだよ…六番がキスしろって言ったから答えたに…」

「ご、五番が妙に積極的だ…」

……私からみたら…五番って結構綺麗な顔してるなあ…。

は！私は何を!!!？

「……キスして良いの？」

さ…最後に聞いてみる！

「良いけど……」

ちよつと照れてる顔が可愛い……。

「じゃあ……ん……」

……ぱしゃっ！

「何をしたんですか六番？」

……。

「いや…キスを待つ顔が…可愛かったから…つい」

だってホントに可愛かったんだもん！

「六番って意外に携帯持ってたんですね」

「当たり前だよお」

私はもう生まれてから十年たってるんだよ！持ってたって良いじゃん！

「で、六番…写真を削除してくださいね」

「もう黒子つちに送っちゃったよ？」

「黒子つち！？」

「キスしてって言ったところになりましたって書いていたよ！」

…五番の顔が真っ青だあ！

ブウウウ…ブウウウ

五番の携帯が鳴り…五番は携帯を開くと。

「……………」

どうなったんだろ？

「ウワアアアあぁん！！！」

ほえっ！？

「し、白井さんに嫌われたあ…うわぁん……………」

…………私はやっぱり五番のクローンなんだなあ…………。

「五番…いい子いい子……………」

「ヒグッ…ヒグッ……………六番……………」

か…可愛い…………。

「ぼ、僕…白井さんに嫌われちゃったよあ……………」

うっうっ……………私に母性本能が目覚めそう…………。

「大丈夫だよ…黒子っちだって許してくれるよ……」

「六番……」

なんかいいいんきかも！！！！

ガチャっ

「……ただい……！」

あっ！パイロキネシスの人だあ。

「……ごゆっくり」

パタン……。

「み……観月！誤解だ！僕は別に六番とは……」

「……白井さんが可哀想だよ……」

「！」

あっ……。

バタッ……

五番がまた倒れたあ……。

次の日黒子つちは五番を許してあげたんだよ！

学舎の園ってどんな場所かなあ…？

二十一話（後書き）

なんか…岡富のキャラが変わったような…？

「お前が変えたんだろ！」

…白井さん好きの岡富だあ…この変態めっ！

「お前ほどではないから大丈夫だ」

白井さんが好きなのに…六番にデレデレするなんて…最低だな…。

「お前が書いたんだろーが！！！」

あつ時間だあ…ではまた次回！

「勝手に終わらせんな！」

キャラ紹介(今更)(前書き)

今更やって…:…すみません。

キャラ紹介(今更)

岡富悠哉(12)

本作の主人公？

成績などは、家庭科以外普通家庭科だけトップレベル…。

手先がとても器用、料理はプロ顔負け。

外見は…上の下？

まあまあカッコイイ。

黒髪、目の色はオレンジ。

イヤホンの色は紅。

本名は岡富拓海だが…今更名前を変えても変なのでそのままにしている

喧嘩がめっばう強い、初期設定では喧嘩の腕前だけで敵を倒す予定だったほど

能力者の中の不良達の間では…恐れられている。

能力名、完全同調…自分のAIM拡散力場内の相手の能力をコピーすることが出来る、レベルは4。

葛谷観月(12)

主人公の同居人

たまにしか喋らない無口な奴。

成績などは、全てにおいてトップから…五本の指に入るか…入らないか…。

趣味は岡富とその周りの人間観察。

本人曰く「悠哉の周りはトラブルが尽きないから面白い」だそうで

す。

能力名、炎撃使い…その名の通り炎を自ら生み出し操る能力。

葛谷祐希（12）

観月の妹

岡富の事をお兄様と慕っている

白井と同じ常盤台の一年生

兄の観月とはいつも会っては喧嘩をしている。

能力名、貴方空箱…ある条件の間祐希の場合は水を箱のような四角形にできる…氷や、水蒸気も水に戻せる。

努城美代（10？）

岡富のクローン。

シスターズと同じ原理で身体年齢は19歳という…。

少し人をからかったり、人に甘えたりしてしまう幼い性格。

自分は偽物というコンプレックスを未だに抱いている。

能力名、夢与物語…背中から、白と黒の翼が生えてくる、黒い翼は幻覚を魅せる、白い翼は一枚一枚が刀の様な硬度と鋭さをもつ。

裏情報！

岡富悠哉

白井に好意を抱いているが自分では気づいていない。
脳がパンクした後は妙に積極的になる。
耳をいじられると……。

「その設定いらないだろ！」

今回は貴方の出番は無いので黙ってねえ。

葛谷観月

作者も書いてるうちに……なんか知らないけど。
なんか岡富に好意抱いちゃってるような？
気のせいだよな？

「……………悠哉……………」

違つよね！！？

葛谷祐希

ド
M

「アタシの扱い酷くない！！？」

諦めてください。

努城美代

露出狂？

悠哉に……？

ロリじゃないけどロリかなあ？

胸のサイズは……

「教えないでよ！」

エエエエエエ……。

Dですよ。

「作者、酷いよお……」

あ……泣いちゃった……。

「うわああ……サイテー……」

ちよっ……。

「……残酷……」

いや……そのね。

「この変態め……」

最後違わない！？

「まぢ……どうやって調べたの？」

いや……作者だからね。

「……………尾行？」

人聞きの悪い事言つなあああ！

「……………変態だな……………」

また変態かよ…………。

「しかも……私……Eだよ……酷いよお……………」

何だと！！？

キャラ紹介（今更）（後書き）

どうでしょうか？

ここまでこのシリーズを読んでくださった方…誠にありがとうございます！！！！

ちなみに葛谷祐希ちゃんはいちよう中1なのでAかっぷですよ…。

「変態！！！！」

バシイイッ！

殴られた…。

「また次回！！」

今回はキャラに取られた！

二十二話

……僕は…今白井さんと六番に連れられ…学舎の園を歩いています。

「岡富…浮かれてる最中悪いですけど、今回の任務は忘れてないでしょうね？」

うっ！

「今回の任務は透明人間の捕獲ですよね……」

……。

「透明人間の力を使って女子高生とかにストーカーとかするんだっけえ？」

「ですので…六番さんには困になって欲しいのですわ……」

作戦は…まず六番が囷になって不審者を誘き寄せ…白井さんと僕が捕らえる作戦です。

「じゃあ私…遊んで来るね！」

鼻唄を歌いながら六番は何処かに…。

「この作戦うまくいきますかね？」

「地道に待つしかありませんわ……」

「……………すう」

返事してあげました。

「……………ととりあえず……………」

あり？僕の頭が…浮きましたね…まさか！落として起こす気…！？

「よい……………しよ」

……………！！！！？

「とりあえずこうしないと駄目ですわね……………」

ひひひひ膝枕あ！？

最近ラブコメ的要素が多い！！

「……………うう……………周りの視線があ……………」

……………周りの人は何を？

「……………ここでは彼氏と彼女なんですの！誰に見られても恥ずかしくな……………」

「あら、白井さんじゃあなく……………！！！？」

この声は……………！

「婚后光子！！？なななな何故貴女がここに！！！？」

僕も聞きたい…。

「…すう…すう」

「白井さんこそ…な何故男子をここに…は！」

「それ以上は言わないで欲しいですわ！」

……うつつ…僕も恥ずかしい…。

「…白井さんがねえ…フッフ…」

そう言っただけで婚後さんは去って行きました。

「明日から…学校に行けませんわあ…」

……白井さん…ドンマイ。

てゆうか僕と白井さんって同級生じゃね？

どっちも中1だし。

なんで敬語を使ってるんだ？

風紀委員の先輩って言ったって白井さんがスカウトしてきただけだし…敬語じゃなくても良いんじゃないのか！

「……………ぐすつ…」

！白井さん？泣いてる？

僕の顔に…水滴が…やっぱり泣いてる…そんなにショックなのか…
僕が彼氏だと思われて…。

「……………ふぁ……………」

起きてみます。

「あれ？白井さん？泣いてるんで……………ポピッ！」

膝から落とされたああ！！！！

「……………岡富…貴方…私に殺される覚悟は出来ていて？」

「ちよっ…白井さん…何をいきなり？」

殺気が！殺気がああ！！

「貴方のせいで…私…学校に行けませんわ…どう責任とって貰える
んですの？」

「し、白井さん…話せばわかります！まずは話合いましょっぴー！」

「真の戦士は…言葉ではなく…拳で語り合つのですわ……………」

どんなアニメのワンシーンですか！それ？

「死になさいな……………」

やばい！

シュンッ！
シュンッ！

僕と白井さんは同時にテレポート…僕は右…白井さんは…左に…チヤンスだ！逃げ切れるかもしれない！

「脱出！」

「なっ！逃がしませんわ！！」

やばい来る！！

ブウウウ…ブウウウ…

「し、白井さん！携帯鳴ってますよ！」

天の助け！！！！

「貴方を殺してから行きますわ……」

……ギイヤアアア！！！！

「白井さん！僕はまだ死にたくありません！！！！」

「諦めなさいな……」

マジで！！？

「やだね……」

チラッ

脇を見るとやはり野次馬達が待機してました…。

「白井さん…僕は死にたくありませんので…反抗しますよ？」

僕の拡散力場内にある能力は…レポート、サイコメトリー、レー
ルガン、パイロキネシス、メインボックス…あれこの3つの組み合
わせ…？

「すう……………」

「何をする気…させませんわ…!!」

「御坂さああん!!!!白井さんがいぢめてきます…!!!!」

「!!!!?お、お姉様がいますの？」

……………バチ…バチバチバチ…

「くうううろおおお子おおお……………」

おおー怖い怖い…御坂さんが…鬼の様だ…。

「お、お姉様誤解ですの…話せばわかりますの…」

さっきの僕と同じ事言ってる……………。

「お…岡富…助け…」

「嫌ですね」

白井さん……そんな顔も可愛いですよ。

は！僕はそんなキャラじゃない！正気にもど……。

「言い残すことある？黒子……」

「話し合いは大事ですよ……お姉様話し合い！」

「しょうがありませんね……」

「お姉様少しおま……」

シュンッ！

「黒子！アンタ逃げるの……!?!?」

「……………」

「お、岡富……助かりましたわ……感謝しますの……」

「で……六番は何処にいるんですか？」

「……………ビルのな……」

「ち、ちょっと！六番は無事なんですか……!?!?」

「ビルの中という公園の中ですの」

……ややくしい。

「さっそく、行きますわよ」

「ふあああ……眠い……」

六番は…僕と白井さんと犯人？以外誰もいない公園でかなり無防備に……。

「ふにゆうう……」

寝ちやいそうだな……。

「し、白井さん…六番寝ちやうと思いますよ…」
すると…

「寝てしまえば…犯人が襲い掛かってボロをだすかもですわ…」

今僕の拡散力場内にある能力は…レポート、ワンダーランド、アサルト…犯人はいるんですけど場所まではわからないんで……。

「犯人が近いです……」

「岡富…能力のコピーをしなさいな……」

？

「なんでですか？」

「この手の能力者は自分以外には自分の姿が見えないから…油断してますの…その油断を突きますわ」

……………。

パキッ！

「白井さん……」

今六番の前に落ちてた木の枝が折れました。

……………！

六番のスーツのスカートが捲れようと…。

「お…岡富行きなさいな……」

「了解！」

レポートで六番の前に移動して…アサルトで急いで消えます。

「なんだ？」

振り返っても後ろに姿が見える訳ありません……………。

「????？」

そんな見えない人を見つけようとする変態に……。

「チエイサー!!!」

回し蹴りイイイイ!!!

「ポピイイイ!」

今日のポピー、花言葉は…慰め

変態を確保しました。

数分後…

「マジ…生まれてきてすみません……」

白井さんの拷問の結果……こうなりました。

「し、白井さん…何をしたんですか？」

「えっ?別に何もしてませんわ……ねえ、変態さん」

「はははい!しし、白井様は何もしししていません!……!」

……同情するよ。

僕の活躍で無事に変態は捕獲された…。

二十二話（後書き）

……変態の紹介

逸見太陽　へんみたいよう

変態なレベル3

「これだけっすか!!?」

勿論さあ

「作者様！俺にまた出演させてくれますよね？」

作者様かあ……

駄目。

「……………う……………ウワアアアアアアア」

どっか行っちゃった。

それでは……………また

「次回!!!」

台詞取られた!!!?

二十三話

「聞いたか？岡富のやつ…レベル3からレベル0になっちまったらしいぜ？」

……

「知ってる知ってる…レベルアップの影響だって噂だぜ？」

………また変な噂が…。

「佐藤と山崎…また変な事言っつなよ…ドンドン噂流れてるんだからさ…」

クラスメートの佐藤と山崎は…男子の中でも噂に目がない…。

「だって本当じゃん」

………完全同調は秘密だからね…。

「それに……」

それに？

「なんだよ？」

「お前が女子に膝枕されてるところ見たって女子が言ってたぞ…！！誰だ！」

「俺達に紹介しろ！」

……………それが目的か……………。

「断る」

「ほほう……………良いのか？お前が女子に膝枕されている写真を俺が持つてないとも？」

なに？

「嘘だな……………ありえない」

「佐藤……………見せてやれよ……………」

ピラッ

そこには……………白井さんに膝枕されている僕の写真が……………。

「ワアアアアアアアアアアア！！！」

「……………ガッカリだよ……………俺たちとの彼女は作らない条約を忘れるなんて……………」

「酷いな……………」

「そんな条約なんて結んだ覚えは無い！」

「この写真は……………渡せないなあ……………」

コノヤロ!

「良いから渡せよ!」

白井さんに殺される!!!

「返して欲しければこの人の友達を紹介しろ!」

紹介?

「な...何人?」

「最低でも二人!」

.....祐希ちゃんと.....どうしよ?

「.....!」

「何だ何だ?」

祐希ちゃんは...観月が許さないだろうし...
御坂さんは...白井さんに殺されそうだし...
初春さん位かな.....

「初春って人位しか.....」

「一人か?」

うっ.....。

「俺に女子の友達は少ないんだ…諦めてくれよ…」

「…俺達と違ってお前はカッコイイじゃねえかよ!！」

は？

「そーだそーだズルいぜ！」

「俺の写真を隠し撮りするような奴の話など聞いてる暇はない!！」

写真に手を伸ばし…奪取!

「よしっ!！」

「あっ!よこせよ!！」

「誰が返すか!！」

奪取からのダツシユ……駄洒落じゃあないよ…。

「誰かあ!そいつを捕まえてくれ!！」

「捕まえてくれた奴には素敵な商品付き!！」

この学校内では…完全同調使えないからな…逃げるのが大変!

「商品?」

「面白そうだな…」

「いつちよ殺るか?」

殺る？

「お前らアアアアア！！！！」

岡富悠哉vs中学校の生徒全員……逃げ切ってみせる！

「ギイヤアアア！！！！」

「私のサイコネシスで！」

「俺のエレクトロマスターで！」

コピーしたら凄い事になる……。

「電話！電話！」

ポケットから……携帯を取り出して……六番に電話を！

「ろ……努城！今すぐ俺の学校に来てくれ頼む！今すぐだぞ！」

「えっ？何い？」

プツッ……

六番の速さなら……五分もすれば来れるだろ。

問題なのは……サイコメトリーとかだな……相手の思考が読めると言うことは？

「止まれ！岡富い！」

やっぱり先回りだあ！
それに…。

「やっと追いついたぞ…！！！」

やっぱりな…

「挟み撃ちかよ…！！！」

「皆あ！掛かれえ…！！！」

万事休すかな…

「ハハハ…後悔は無いな岡富？」

「……………こつなつたら…」

電話をもう一度取り出して…

「もしもし…俺、悠哉だけどさ…レベル2のやつ…30人位呼んで
きてよ？」

「は？」

「今電話をかけた先は誰だと思っ？」

「ええと……………誰？」

ブルルルンブルルルン！

パラリラパラリラ！

「ここが悠哉のアニキの学校かぁ！..！」

「お、岡富君？この声は一体？」

「誰だっけかなあ？恐いって事は確かだよ？」

勿論ハツタリですよ…携帯の音を…放送室に仕込んで今再生しただけです。

「そこの道開けてね？」

「」「ひゃい！..！」

.....そこを通過して…ダッシュ！！..！

「あっ！よく聞いたらさっきから同じ台詞じゃね？」

「騙されたか？」

今更気付いても遅い！

「お…追い掛けるオオオオ！！！」

わぁー逃げるー

「ごぼ…悠哉ああ…お弁当忘れてたよお」

努城美代登場！

「……………か……………」

か？

「かの……………じょよ？」

彼女じゃないよ…妹だよ……………クローンの

「岡富いい……………お前というやつは……………」

「二股掛けてたのかああああ！！！」

お前から見て……………どう見ても姉ちゃんかなんかだろ？

「……………この……………」

「裏切り者めええ！！！！……………」

佐藤と山崎はそれぞれレベル3のエレクトロマスターとサイコキネシス……………勝つのは難しいな。

「美代姉ちゃん……………」

姉ちゃんを特に大きめに……………。

「姉ちゃん！夢と物語頼む」

ワンダーランドと聞いて皆…はぁ？って顔してる……。

「何かは知らないけど…えいつ！」

白い翼を両方の肩に生やして僕を抱きながら……。

「空を飛ぶ！…！」

「「エエエエ！…！」」

数日後……僕に話しかける生徒は…激減した…。

二十三話（後書き）

どうでしたか？今回の茶番劇は……。

「茶番劇言っな…僕が何回死にかけたか…」

お前の喧嘩スキルを使えば簡単に抜けられただろ？

「喧嘩したら問題になるだろ！？」

それにしても…お前中1だろ？
なんであんな音持つてるんだよ？

「昔貰ったんです」

誰に？

「白い…」

また次回！！

二十四話

最近僕の寮に同居人が一人増えた。

「観月君、お醤油取ってえ」

……

「……………」

「しじば…悠哉あ今日のご飯も美味しいよあ」

「ん…ん…も」

……

「今日ね私い…またナンパされたよあ！」

……

「……………そっ…」

「……………な…馴染み過ぎだああ！！」

「ほえ？」

「なんでまだここにいますか？」

ろく……努城は当たり前のように。

「だって私は悠哉の義姉さんだもん！」

はあ？

「僕の義妹じゃないんですか？」

「博士があ…私の名字を努城から岡富に変えちゃったしい…年齢は私の方が上だから私が義姉さんだよ」

…あんの博士はまた余計な事を…！！

「……………明日…常盤台の祭があるよ」

この後で考えたら観月は僕の機嫌を戻すために言ったのかな？って思う。

「黒子っちの学校のお祭りい？」

「……………そう…僕は祐希に招待された」

「……………三人分」

ピクッ！

「悠哉も……………行く？」

「行く…！！！」

明日が楽しみだなあ…！！！！

「わかってますの…祐希…」

「はい…お兄ちゃんに悠哉お兄様を呼ぶように伝えました」

「フフフ…明日が楽しみですわね…」

「フフフフフフフフフフ」

次の日！

そわそわ…そわそわ…

「悠哉…張り切りすぎ…」

「そんな悠君も可愛いなあ…お姉ちゃん嬉しい！」

「悠君言わないで下さいよ…」

急にお姉ちゃん風になったなあ…。

「悠君は悠君だもぉん！」

……今の台詞撤回

「……もう時間だよ……」

じゃあ……行きますか……。

白井さんに会えるかなあ……。

「ここかあ……」

「すう……」

美代が……。

「黒子つちイイイイ!!!!」

エエエエエエ!!!!?

「こんなところで叫ばないでよ!!!!」

シュンッ!

「なんですの、美代さん?」

白井さん来たああ!!!!?

「なんで!?!」

「いやあ……迷っちゃいそうだからさあ……案内してえ!」

白井さんは疲れた顔で。

「う…初春達の次は貴方達ですの…」

初春さん？

「初春さんも来たんですか？」

「そうですね…おかげでかなり疲れてますわ…」

白井さん…つらそうだな…。

「あああ…だれかに手伝って欲しいですわ…」

「僕が手伝います」

この時、白井さんが邪悪な笑みを浮かべたのに…まったく気付かなかった。

「岡富には早速…着替えて貰いますわあ…」

着替え？

「何にですか？」

「勿論……メイド服ですわ…!!」

何だと…!!…!!？

「白井さん…僕の耳はどうかしてしまったようですわ…」

「何がですか？」

白井さんがフッフフと邪悪な笑みを……。

「お兄様の女装姿…考えただけで…フッフッフフ」

祐希ちゃん…いたの？

てゆーかだいぶ変態なふいんきを醸し出している……。

「少し話し合いましょう…話せばわかりますよ」

「心配しなくていい(ですわ)(よ!)(」

二人で迫ってくるのは止めて下さい…怖い怖い怖い……ギイヤアアアアアアアア!!

「平和だねえ観月君…」

「………確かに…」

少しは助ける素振りを見せろよオオオオオ!!

数分後……

……最悪だ…僕は何かを失ってしまった……。

「髪も長いですし…女子に見えますわよ！囃富…ちゃん…ぷっ」

「お兄様が…お姉様に…フへへへ…」

「ねえねえ！お姉ちゃんって可愛く言ってみて!？」

「……………誰？」

四人の反応もうなずけるらしい…僕はまだ変声期になってないので高いし顔はメイクで誤魔化してるので…周りの人にも何故かバレてない。

「ねえったらあ！お姉ちゃんって言ってみてよ！」

……………くそう…。

「お、お姉ちゃん…」

美代が…。

「可愛いイイイイイイイイイイ」

抱きついてきた!？

「ちよっ…やめ…うわっ駄目だよ！」

「あえぎ声も…フへへへ…」

二人してなに言ってるんだよ!？

あえぎ声って…初期とキャラ変わってないか!?!?

「フフフ…」

カシャッ!

カシャカシャ!

「???’

何して…!?!?

「ちょっと!何写真撮ってるんですか!?!?’

「何って、脅し用の写真に決まってるじゃあないの………」

「止めて下さい!恥ずかしいです!-!’

「……………誰?’

観月はまだ気づかない!?!?’

「黒子お…そろそろ休憩のじか………」

……………御坂さん?’

「……………誰なの、黒子?’

「み……………みしゃ……………御坂さあぁ……………ん……………」

「!!!?お、岡富君?」

助かった!御坂さんに止めてもらおう!!

「岡富君!かわいいじゃない!」

エエエエエエ!?終わったアアアア!!!

「ゆ、悠哉だったの!!!?」

観月は今頃気づいたか……………。

「だ…誰かあ…助けてえ」

「お兄様あ…はあはあ…もつらめええって言って下さい!」

何故に!?

「言わなきや…駄目か?」

白井さんが耳元に…。

「言わなきや…耳をあまがみしますわよ?」

何だと!!!?

「……………それでも言ったら僕の中の何かが終わってしまいます!」

白井さんが……………。

はむっ。

「ひゃああー!!」

白井さん!!?」

「止めて下さいよ!」

一時撤退をし…。

「逃がしませんわ!」

シュンッ!

はむっ

「ひいやああ!」

はむっはむっ!

「や、め…もうらめてよお」

「らめて来たああー!!」

僕の中の何かが終わりを告げて…祐希ちゃんの中の何かが目覚めました。

「オイッ!ゆ…悠哉か?」

「なんで女装なんてしてんだよ!!?」

佐藤と山崎?!?!?

「「めっちゃめっちゃ可愛いじゃねえかよ!?!?!?!」

「「……イヤアアア!?!?!?!?!」

「「写メ撮ろっぜ山崎!」

「「おうよっ!」

「「瞬間移動同調!?!?!?!」

シュンッ!

「「消えた!?!?!」

「「岡富が消えましたわ!?!?!?!」

「「お兄様あ……フへへへ……はあはあ……」

「「悠哉……逃げ切れ……」

「「悠君の初女装姿を写真に写すため……お姉ちゃん頑張るからね!」

「「黒子……いい加減にしてあげなさいよ……ふう」

「「「写メ撮るぞ!?!」」

現在の状況……。

白井さん、美代…姉さん、佐藤、山崎…vs僕、観月、御坂さん。

祐希ちゃんは鼻血をだして保健室に運ばれました。

メイド服は走りにくいなあ………う………周りの男子が性的な眼でコ
チヲをみるう………。

二十五話

「萌ええ」

キモいヲタクがあ…何か言ってるう…。

「いたぞ！」

「岡富いい！」

佐藤と山崎…。

「「可愛いなあ」「」

変態だあああ！！

「んゝ義妹でもいいかもお！！！」

……美代さん！！？

「岡富が可愛く見えてきましたわ……」

白井さんに言われてもやだ！！！！

「悠哉あ……逃げろお……」

観月にしては大声だなあ…。

「ちよっ…黒子！軽くセクハラしな…キャッ！！！」

見たいけど…今は逃げるのが最優先だ！

「悠哉のあの姿…高値で売れそうだな山崎」

「一枚500円ぐらいで売ろうぜ佐藤」

くそっ！逃げ切れない……。

スカートで…すうすうするし…胸パットが揺れるし…もつやだ！

「岡富い…私の能力を忘れてないですわよね？」

シュンッ！

後ろから抱きつかれました！

「ひゃああー！」

白井さんの胸が…当たってるう……。

周りからは。

「百合！」

「GLだ！」

とか聞こえてくる…もつやだあ……。

「ちよっ…白井さん止めて下さいー！」

「やっと追いついたぜ！」

「写真！写真！」

「それだけは止めてくれよ！」

「じゃあ…お兄ちゃん…私…眠れないの…一緒に…寝てよお……っ
て言え！」

「おれには…お兄ちゃんだあいすきい！って言え！」

え？そんなの言うわけないだろ…。

「写真も台詞もやだ！」

「耳をあまがみしてもいいんですの？」

うっ……。

「早く！早く！」

「……お、お兄ちゃん…眠れないの…い…一緒に…寝てよお……」

「ウヒョー！！！！」

佐藤、鼻血をだして保健室に運ばれました。

「お兄ちゃん…だあいすきい！」

「義妹萌え！！！」

……………言ってしまった……………。

「ウワアアア……………」

「ひゃひゃひゃ……………」

……………つく……………よ……………

「……………つ……………しょ……………」

「……………？……………」

「三人共……………」

「……………は、はい……………」

「死ぬ覚悟は？」

「えっ？」

「いやっ、？」

「岡富？す、少し待つべきですわ！話せばわかりますわ！」

「……………夢与物語同調……………」

黒い翼で三人を包み込み……………。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアア」

「「ギイヤアアアアアアアアアアアアアアアア」」

数分後…

頭にたんごぶを付けた涙目の白井さんを見て……………。

ああ…可愛い!!

「岡富い…許してですのお…」

メツチャ可愛い!!!!

白井さん、可愛い!

「あの〜、」

「俺たちは？」

「消える屑」

「「はい…」」

二人はそそくさ帰って行った。

「……………メイド服を着させた本当の理由を教えてくださいよ!」
白井さんが意味もなく俺なんかにメイド服を着せる訳がない……………。

「可愛いかなあ……て？」

それだけ？

「う…嘘ですよね？」

「可愛かったのもう脱いでも良いですわ」

と、何処かへ行こうとしている。

「し…し…白井さん…」

白井さんはコチヲを向いて。

「なんですの？」

「嘘ですよね！」

最後に聞いてみる…。

「嘘ですわ」

良かったああ…。

「ライブの手伝いを無理矢理でもしてもらおうと……」

なんだ…ちゃんと理由があったんだあ……えっ？ライブ？

「僕も出れるんですか？」

「出れますわ」

「私はキーボード…祐希はドラムお姉様がギターとボーカルですわ
！！」

「僕にベースでもやれと？」

白井さんは勿論と言わんばかりに。

「そつに決まってますわ」

「観月い…代わりにやってく…」

「やだ……………」

断られた……。

「岡富はいつもヘッドホンで何かを聞いているので…言ってみましたわ」

確かに聞いているよ…だけどね……。

「僕…楽器なんて殆ど触ったことありませんよ……………」

「なんですって！！？」

「誤算でしたわ…」

……………だって触る機会なんて殆どないし……………。

数分後……僕はベースを完全に出来るようになっていた。

「な……なんで弾けますの？実はベースリスト！？？」

「おに……お姉様は天才ですわ！！！」

いや……せめてお兄様にしてよ……。

何処からか……いつか見たことあるインコが……。

「ササササクシャノツゴゴウウササ」

なんて？

「さささ……作者の都合さ」

やっぱりいい……。

「あとは……お姉様に私が用意した衣装に……」

「誰が着るかぁ！」

という感じの白井さんと御坂さんの激闘を見ながら僕は自分の服に着替えようとしたら……。

「岡富はその格好で出なさいな！！！」

やだね…着替えるよ。

「お姉様がああ…お兄様にいい…」

いや…お姉様じゃ無いしな……

「岡富君！早く着替えちゃいなさい！私がこの二人を抑えてるうちに……！」

御坂さん…まぢ感謝です。

数分後！

「大体こんな感じで良いわね…ねえ黒子」

「岡富が…楽器をここまで弾けるなんて…」

「お兄様はやっぱり天才いい！」

一回皆で合わせて演奏したら皆さんこんな感想を言いましたよ。

「ライブは30分後だから、岡富君は祭を楽しんできてよ」

「けど練習しなくていいんですか？」

「黒子と祐希ちゃんがね…あんな状態だから…」

白井さんと祐希ちゃんのほうに向くと。

「むうう…お姉様があ…」

何があつたんだ…

「お兄様×お兄ちゃん…フッフ」

聞こえないことにしようか…。

……ただ暇だなあ……メイドさん達は次々と怯えて何処かに逃げちゃうし…バイキング料理を食べてると……。

「あら…白井さんの彼氏さんではありませんの？」

……誰だっけ？

「あの…どちら様ですか？」

「なっ、私を忘れましたの！婚后光子ですわ…!!」

……ああ…白井さんを超えるお嬢様かあ…。

「なんの用ですか…モグモグ」

「白井さんと貴方は付き合ってますの？」

……違うよ。

「違いますよ…僕の…モグモグ…片思い…モグモグ…」

「た…食べながら言わなくてもいいですわよ………」

僕は目の前にある料理全てを食べてから。

「で…他に質問は？」

かれこれ…かなりの質問をされてますね…。

「じゃあ…貴方の能力を教えて欲しいですわね…」

……。

「白井さんに止められてるので答えられませんね」

「………」

そろそろ30分かな…。

「婚后さん…僕は行くので…」

「まつのですわー！」

「……わぁー！」

ダッシュ!

ライブ会場は…埋まりきってる……。

「白井さん…どんだけ人気あるんですか？」

「お姉様の人気は…かなりの物ですわ!!!」

「えっ?私のか?」

御坂さんは常盤台の天才だからなあ…。

「お兄様!演奏準備を始めますよ!!」

皆さんの格好は御坂さんはバイオリンを弾くときになっていたらしい格好で白井さんは白いワンピース……可愛いなあ…祐希ちゃんはいド服に白いカチューシャ…僕?僕は何故かスーツにサングラス…しかもイヤホンをつけられましたイヤホンには音楽は流れてませんでただの飾りです。

「皆様、今回私達のライブに来てくださり誠にありがとうございますの」

「このベアシストは気にしなくても良いですわ」

扱い酷いな。

御坂さんが…

「それでは聴いてくださいー!」

「Only my railgun!」

何処かで聞いたことある曲名だな……………。

二十五話（後書き）

久しぶりの作者の都合さ！

岡富は……疲れてばかりだな…。

「本当だよ！」

今回の感想は？

「疲れた」

岡富君のメイド服姿を公開したいぐらいなのになあ…

「それだけは勘弁して下さい」

それではまた次回も見てください！

「……こんな小説に出たくなかったなあ…」

二十六話

キャパシティダウン…それを使う組織がもう一つあった。

「負け犬の会って知ってる？」

「知ってる知ってる！あれでしょ全員がレベル2のスキルアウト擬きの集団でしょ？」

という会話が流れている…。

白井さんは蜘蛛だか何だかを調べるのに時間が掛かっているらしい。というわけで観月と祐希ちゃんと美代を誘ったが…観月は白井さんのパシリになってしまった…哀れな観月よ…。

「祐希ちゃん、スキルアウトと闘うけどさ…大丈夫？」

「お兄様となら…地獄でも天国です！」

………尊敬から…何か別の感情にならない事を祈るよ…。

「義弟の仕事の手伝いができるなんて…義姉で良かった！」

美代は無視して。

「じゃあ早速…行きますか…」

数時間後…

「悠君…ワンダーランド使ってもいい？」

約30人のパイロキネシスの火の玉攻撃が……。

「……美代は駄目だ！俺が完全同調を使うから！」

「義姉さんにも活躍させてよお……」

美代は無視して…。

「炎撃使い…同調」

そのまま炎の大蛇を作り、ポイ捨てをしました。

ポオオオオ！！！！

ドガアアアアアアン！！！！！！

「ぎゃあ！」

「燃える！」

「助けて！」

等聞こえますが無視して…。

「悠君…軽く酷いよ」

「突撃しますよ二人共」

僕たちは三人共イヤホンをつけてます理由はキャパシティダウンが常に流れているからです。

勿論相手もイヤホンをつけてます。

僕たちはイヤホンについてる通信機能を使って話してます。

「負け犬の会には一人だけレベル3がいるそうですよお兄様！」

そいつがボスか…

「祐希ちゃんはなんでそんな情報知ってるの？」

「お兄ちゃんから聞きました！」

観月…ありがとな。

「ねえねえ悠君…」

「なんですか？」

「もしかしてだけどさ…そのレベル3って…後藤博士の実験生物じ

「やないよね？」

「……あの人なら出来そうでもあるな。」

「わからないけど…会うしかないよ…」

アジト内部

「……軽く百人はいるかな…？」

「悠君…ワンダーランド使ってもいい？」

「今回はいいですけど…黒い翼だけですよ？」

「わかってるよ」

「……祐希ちゃんは荷物とか無いみたいだけど…」。

「水なくて大丈夫？」

「お兄様！あたしを心配してくれるんですかあ！」

「いや…怪我されても困るし…」

相手は何を使ってくるかわからない状況で水が無い水使いつて…。

「大丈夫です…あたしには秘策がありますから！」

「なら…任せるよ僕はボスを直接叩くから…」

僕は女の子二人をスキルアウト擬き集団のところに置いてきぼりにし
たく無かったけど…良いよね？

近くにテレポーターがいるのを確認して

「……………瞬間移動同調」

「悠君…怪我しないでねえ」

「お兄様！行ってらっしゃいませ！」

シュンッ！

「負け犬の会のボスは君ですか？」

そこには…傷だらけの高校生がいた…。

「僕は…好きでリーダーになったわけじゃないよ…僕のが…レ
ベル3なんて嘘に決まってるだろ…」

は？

「じゃあ君はなんでそこにいるんだ？」

「僕は…皆に虐められた…ただ…レベルが0なだけで…」

レベル0？そんなわけないだろ？

「じゃあなんであいつらは君の事を…？」

「僕の能力は特殊なんだよ…僕にしか無い…僕だけの能力…」

「……………」

近くのAIM拡散力場をしらべても…さっきの雑魚の能力しかない…目の前の高校生の能力は…あるが…感じた事のない能力だ…。

「僕の能力名は…敗北之王、ソウルテラー…どうだい聞いたことがあるかい？」

敗北之王？聞いたこと無いにきまつてる…。

「僕の能力は今では使えないんだ…だから僕には捕まるっていう選択肢しかないんだ…」

「じゃあ…捕獲させてもらつよ…」

拍子抜けだな…こんなにも簡単に捕まるなんて…。

カチャリ…

雑魚×百人は…二人の少女によって…簡単に…殺られていた。

「僕には…取り柄も…趣味も…特技も…何もない……もうやなんだよ…こんな世界は…消えるべきなんだよ……」

二十六話（後書き）

簡単に捕まりましたね……。

敗北之王ソウルテラー

英語の意味は恐ろしい魂ですが、まったく考えずにやりました。

「……僕的能力はね……」

ちよつと待てええい！ネタバレをするなあ！！

「僕的能力なのに……」

この暗い奴はほつといて……それではまた次回！

「もう出なくても良いよね？」

無理矢理でも出てもらいます。

番外編 敗北の王…

「……………白塚あ…金貸してくれよ…」

また来た…こいつらはいつも週一のタイミングで来る。

僕は白塚陽史…わかっているとは思うが…いじめられっ子だ…。

「先週の分を返してよ…」

「んああ？聞こえないなあ…もう一度言っぞ？金貸してくれよ」

「……………い…嫌だ」

6対1で勝てるわけない…………。

「コラァッ！！何やってるんだよ！！！」

「げっ、風紀委員だ！」

「逃げるぞ！！」

……………風紀委員だ…助かったかな…。

「オイッ…放課後にここに来いよ…来なかったら殺すからな…」

…助かってないな。

「大丈夫ですか？」

……。

「早く助けるよな……」

「な……なんだよ!」

……風紀委員……か……。

「助けたのに……なんだよ!」

風紀委員は帰っていった。

放課後

「お、ちゃんと来たなあ白塚あ」

……来なかつたら学校まで乗り込んで来るんだろ……。

「僕は今日財布持ってないよ」

本当に持ってない、ルームメイトが預かってくれる。

「てんめえ……ふざけてんのかよ?」

ふざけてない。

「金持ってくるんだよ!!」

「……嫌だ」

「……つち……つぎけんじゃあねーよ!!」

いきなり殴りかかって来た。

今朝とは違い3人だが……3対1では分が無さすぎる。

3人ともレベル2……僕はレベル0……能力が何なのかすらわからない……。

……消えそうな意識の中僕は思った。

どうして僕はレベル0なんだ……レベルアップというやつを使っても……能力は発動するどころか……約1日の間気を失ったらしいし。

偽物を売られたんだ……しかもこいつらに……ああ……ム力つく……自分にム力ついてしょうがない……畜生……僕に力があつたら……。

「おらよっ!!」

「雑魚が意気がってんじゃあねーよ!!」

「お前は一生俺達の金鶴なんだよ!!」

畜生……。

「畜……し……」

畜生…僕に…僕に…力が…僕に力があつたら…。

僕に力があつたら…こいつらを…いやこの都市に復讐出来るのに…
…。

学園都市ニュース…速報です。

昨日の放課後、路地裏ごと… ×商店街が破壊されていました。犯人はまだ発見されておらず…犯人はレベル4以上だと思われるそうです。

レベル4？

違うレベル0だ…。

僕は敗者の王……誰にも理解されず、永久に孤独……僕は絶対に勝ては
しないしかし……相手もけして勝てはしない。

番外編 敗北の王…（後書き）

シラツカヨウジ
白塚陽史

15歳 男子

高校一年生いじめられっ子で内気な性格。
能力名は敗北之王ソウルテラー

能力はまだ秘密。

本人はレベル0と言っているが…実力ならレベル4となら対等以上に闘える。

白塚さん…どうぞ！

「……………」
「……………」

げ…元気がないなあ

「……………しょうがないだろ僕はこつこつという性格なんだからさ……………」

じゃあ…読者さんに次回予告してよ……………。

「……………次回も見たければ見ればいい……………」

酷いぞ！白塚あ！

「……僕には関係無いからねしょうがないよ……」

次回もぜひ見てください！

「……いつウザいなあ」

二十七話（前書き）

最初は白塚視線で行きますが…途中から岡富視線に戻ります

二十七話

暗い…少年院の中…。

「ココカラダシヤガレ！」

……隣の女の子うるさいな…。

「四番…いい加減諦めろよ…」

……この人…イジメッコの匂いが…プンプンするな…。

「……五月蠅いですねえ…」

この人とは…気が合いそうだな…。

「……ところで君はなんの罪でここに来たんだい？」

……。

「僕は…勝手に罪を被せられただけだ…」

「ほほう…それはそれは…」

……その男女は手錠ついてるのに…。

「君と僕にはなんで手錠がついてないの？」

「自分の能力には物理的攻撃が不可能でね…」

「それに君は？」

「僕はレベル0だから……」

……くそ……。

「一緒に脱獄しないかい？」

「ダツゴク！」

「ここから逃げられるのかよー！」

……四人で脱獄か……。

「首謀者は僕じゃないよね……」

「勿論さあ……では、脱獄プランを話すぜ……」

……観月もいないし……テレビでもつけるかな。

「学園都市ニュースです……昨晚、少年院から……四人が脱獄しました……」

マジで？

「脱獄した犯人は…新庄真、グリミン、ステイル、白塚陽史、黒嶋謙介の四名で…」

白塚ってこの前僕が捕まえたやつ！

しかも二番と四番も脱獄したのかよ！

「……白井さんと観月に電話しなくちゃ！」

白井さんに電話しても繋がらないので…観月に電話したら…。

「今……病院だから…切る…」

…観月が病院！！？

病院内部

観月を探しているとカエルにそっくりな医者が…。

「葛谷さんの病室はコッチだよ…」

と親切に案内してくれた。

「観月！」

するとそこには…ベッドに寝込んでる祐希ちゃん…と心配そうに祐希ちゃんを見ている観月が…。

「……悠哉……」

「祐希ちゃんどうしたんだよ…?」

「……少年院からの脱獄犯に…やられた」

なっ!!!?

「……悠哉…今日…悠哉が電話してきた理由ってさ…」

「脱獄犯の確保に行くから…来るか?…って誘おうとしたんだよ…」

「俺の答え……解るよね…」

………
勿論。

「行くか…」

「………俺が暴走しても…」

「止めないよ」

「ありがとう」

……………「ただ何処にあいつらいるんだ？」

何処からか……インコが……。

「…イン…コ？」

このインコは！もしか！！？

「ははははん…犯人のばばしよ…場所は……」

来るか！来るか！

「コケッコッコー！！！！」

……………

「…悠哉………焼き鳥にしても良い？」

……………。

「勿論」

「犯人の場所を聞きたくないのか？」

インコが急に喋れる様になってる!!??

「……き…聞かせる……」

観月が怖い……。

「……ヒントは…二番ね……」

そしてインコは飛び立って行きました。

「……悠哉……」

「…十六支部に行くか……?」

……質問じゃない…確認だ…。

「……決まってるだろ…行くさ……」

白井さんと御坂さんには秘密です。

美代を連れてくか……。

「観月……美代を呼ぶぞ……いいよな？」

「ああ……」

「美代か？」

「そだよ！悠君だねえ！何い？」

「……手伝って欲しい……」

すると美代はシリアスな雰囲気を読んだのか……。

「わかった……何処に行けば良い？」

「……風紀委員第十六支部」

「わかった」

プツッ……

「悠哉……我慢が……もう利かないんだよ……先に行く」

観月からは……殺意しか、感じない……。

観月…殺すなよ？

「わかってる」

口から出てたのかな…？

第十六支部…

「ゴオオバアアン…」

「五番とパイロキネシストか……」

「二番と四番か……。」

「オマエタチダケハコロシテヤンヨー!!」

「……殺すからな…覚悟し……」

ボオオオオオオオオオオ!!!

「ナッ?」

「お前らが祐希に何かをしたのか…」

……観月…。

「テメーノイモートナンテシルカ!」

「俺達は脱獄の時には人に会ってないしな…」

どうやらこいつらではないみたいだな…。

「嘘をつくな…」

観月?

「お前らが殺つたんだろオオオオオオオオオオオオ!!!」

……床が…熔けてる…ヤバイ!!

観月は…その手の平から…半径20メートル…ぐらいの火の玉を…
…。

「ヤバイ!」

「やめろ!お前、少年院入りになるぞ!」

「観月流石にやり過ぎだ!止める!」

「悠哉…止めるんじゃないやあねーよ!」

つち…

「瞬間移動同調！」

観月の真後ろにテレポートして…

ドスッ！

「がつ…」

観月は気を失いました…。

そのまま四番と二番の後ろにテレポートして観月と同じ様に。

ドスッ！

「ガッ！」

ボズっ！

「ぎゅあっ！？」

……二番にはやり過ぎたな…。

「観月…観月…観月！！！」

「悠……………哉か…？」

やっと起きたか…。

「観月…奥に行くぞ」

「わかってる…。」

がちゃり…

「おや？君達とははじめましてだあねえ……………君達は風紀委員かい？」

……………こいつが黒嶋謙介か……………。

「……………テメエか？」

観月……………こんどは…。

「やり過ぎるなよ……………」

「何がかなあ？」

「俺の妹に手を出したのはテメエかって聞いてんだよ…！！」

観月……………。

「いきなり大きな声を出さないで下さいよ……………まったく……………」

こいつ……………。

「観月をこれ以上怒らせるなよ……」

「何故？」

「お前……死体も残らないぞ？」

「瞬間移動同調……」

「悠哉あ……良いのかあ？俺を一人にしても？」

「大丈夫って信じるからさ……」

本心だ……観月は殺さない。

シュンッ！

「行かせて良かったのですかあ？」

バヒュウンっ！！！！

「お前……その口をもう開くな……」

「お前は殺さない……死より苦しい……絶望だけを……与えてやるよ」

二十七話（後書き）

観月がマジギレしましたよ……怖いです。

作者である僕にも止められません……。

しかも最近…僕〓インコが出演しすぎのような…？

「作者の都合さ…」

インコテメエ！

「ちゅちゅちゅちゅちゅ」

また次回も見てください！！！！

「作者の都合ですので…見てやって下さい」

インコが凄い！

二十八話

…殺すなよ…観月!

…博士の部屋…誰もいないはずの部屋の中に…白塚陽史…敗北之王はそこにいる。

「……風紀委員か…何の用だよ?」

こいつ…。

「君には少年院に戻って貰うよ!」

「僕には…誰も勝てない…」

何を言ってるんだ?

「じゃあ、君は勝者じゃないか…何が敗北之王だ…結局は勝つんじやあ無いのかよ…」

挑発…効くかな?

「だれも僕には勝てないが…僕も勝てない…」

何を言ってるんだ?

「意味がわかりませんよ?」

「君には理解できないよなあ!誰にも勝てない敗北感が!好きな人

も護れない悔しさが…自分が弱いせいで護れなかった…自分への怒りが!!!」

「じゃあ、次勝てばいい!」

「出来ないから言つて」

「やるまえに諦めていて何が悔しさだ!!!?」

「綺麗事を…言つなあああ!!!」

何処かで聞いたことあるような会話だな…?

「みせてやるよ…俺の能力を…真の姿をなあ!!!」

変身能力か?

いや…そんな能力あるわけない!…とは言い切れないな…俺がその例だし…。

「黒嶋あ!!!」

仲間を呼ぶ気か?

「俺に精神攻撃しろ!!!」

何を言ってるんだこいつ!!!?

すると、白塚の足下から…黒い箱が生まれ…白塚を包み込む…。

台詞の最後には？がついてるはずだ…。

僕への興味が消えたのか…魔神は僕に…拳を繰り出してきた。

「うわっ！」

下降して交わしたが…当たってたら…死んでいただろう…。

しかも、僕には…。

「武器が無い！！！」

攻撃手段がない…絶望的だ…。

せめて…何かあれば…。

「な…何よこれえ！！？」

この声は…美代か！！？

「……………悠君！？」

魔神に向かって僕の名前を言わないで欲しいな……………。

「ギユカカガラスナ？」

「……………ふむふむ……………」

わかるのかよ!!?」

「わかんないや…」

「結局わかんないのかよ!!?」

おもわず…突っ込んだじゃった…。

「悠君…なんで鎧なんて着てるの?」

「速く逃げて!」

魔神にパンチとかされたら…潰される!

「聞こえないよお!」

「ギユイタヌヤミ…」

ヤバイ!魔神が…振りかぶってる!

「シユラララガアアアアアアアアアア!」

「止めるオオオオオオオオオオオオオオ」

二十八話（後書き）

ピンチィ！まじ美代ちゃんピンチィ！！！！

「……………私は死なない！」

……………何その自信……………。

「こういつやつは……………絶対死なないパターンだよ……………！！！」

そう思ってるんだったら言うなよ……………！！？

「作者はほつといて……………それではまた次回……………！！！」

黒い巨人みたいなのが…私にパンチしてきた筈なのに…？

あれ？私…誰かに抱かれてる？

「……………」

目を開けると…義弟…悠君が…私を抱いていた…………。

が…目が…………そう目が…虚空を見つめている…………目に…あるはずの瞳孔が…開ききっている。

「ガツガガガガ…」

あの巨人と同じ様に…理解不明な言語を発している…。

「……………」

悠君は…私を地面に下ろすと…。

「……………ゲテ」

逃げて？

…………ここにおいても悠君の邪魔になるだけだし…観月君の方に…逃げるしか…………。

ボタン……

……。

……。
どうやら、この能力は……感情がトリガーとなって発動するみたいだ

……。今の観月が使ったら……大変な事になるな……。

「……………シラララ……ツカアアアア？」

伝わってようが……伝わってまいが……関係ない！

「オオマエヲ……………」

僕の能力を嘗めるな……！！

「逮捕する……！！……！！」

「ユンムテネクイニリユサアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」
「！」

魔神は……単純な蹴りをしてきた……しかし喰らったら死ぬだろう、今

度は上昇して蹴りをかわすが…しかし…。

「武器は…ないんだな…」

相変わらず武器はない…素手で闘うのか？

「ユンムテネクイニリユサアアアアア」

考える……僕の能力とコイツの能力で出来ることを！

………やっぱり。

「肉弾戦しかないよな？」

僕は魔神の頭の上に乗る……ネリチャギ………踵落としを決めた！

「ギャヌユカアアアアアアアアアアア？」

突然のダメージに驚いてるみたいだ…

僕は…魔神の後ろから拳をマシンガンの様に……。

まあ……単にズルいだけだけどね…。

「ブカカキカクスアテノオ！！！！」

効いてるのか？

それに、ダメージを与える度に……魔神が小さくなって……気がする！！！！

数分後…

僕は…度々の騙し討ちの結果…約5メートルだった体長を…約3メートル付近まで低くした。

「……………はぁ……………はぁ……………」

だけどここのままじゃ…僕の体力がもたない…。

「くそっ！」

「プリノンルモコソ！チヨチツニケオワフ！チヨチツニケオワフ！」

……………？

シューウウウ……………。

残り3メートルはあった魔神は…シューウウウっと溶けていく…。

魔神の中からは…白塚陽史だけが…出てきた。

……勝ったあ……。

「……腕も治ってる……」

あれ？……眠気が……あれ……？

目の前の風景が歪み……口からは……紅い鮮血が……ドバツと出た……。

あれ……正直……やばい……よ……な……。

バタツ

二十九話（後書き）

やっぱり美代は大丈夫だったけど……我等の岡富君は……。

今回は眠いのでキャラとのからみなし！

それではまた次回！

三十話（前書き）

今回は岡富vs白塚の裏場面を…観月視線で書いてあります。

三十話

…殺してやる。

「ほう…死より苦しい絶望ですか…面白いですねえ…」

「…死ぬ準備は出来たの？」

「貴方の能力はレベル4のパイロキネシスですよねえ…」

それが……。

「それがどうした？」

「妹さんの能力は確か…レベル4の貴方空箱でしたよねえ…」

黙れ…。

「お前には関係無いんだよ!!! てめえみたいなのがこの町にいる
せいで俺達の仕事が減らねえんだよ!!!」

「……………しまぁ……………」

この声はなんだ？

「おや……………うちのリーダーですね……………」

「…ねに……………しん……………げ……………し……………」

何を叫んでんだ？あいつ…。

「自分は…頼まれたのは必ずやる主義でしてね…」
黒嶋は…両手を合わせて…。

「……………ほいつ」

……………何もないけどな…。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアア」

何だ！！？

「ほほう…リーダーは…能力を発動した様ですね…」

ズズン……………ズドオン…

……………悠哉は…死なないよな…。

「……………自分の能力を教えてくださいよう…」

「興味ないな…」

「自分の能力は貴方空箱…」

！！！？

祐希と同じだと……。

「ふざけんじゃあ……ねえ！」

次の瞬間……俺の下から……黒い箱が……。

「なっ？」

ズズズズ……ストーン……

「閉じ込められたのか……？」

「自分の声が聞こえますか？」

……貴方空箱の材料はなんだ？

「聞こえるか？」

「自分の貴方空箱の材料は……感情です……」

「はっ？」

「この箱を破壊するには……貴方の怒りの感情を抑えるしかないんですよ……さあ……出てきて自分と闘って下さい」

俺の怒りを箱にしたのか……正解だが……不正解でもあるぞ？

俺の怒りは……常に……。

俺は指を銃の様に構え…。

「無駄な足掻きをするな…イライラする！」

漆黒の箱に…目玉が…。

「私の箱の材料は感情…この箱の材料は…狂気…」

目玉目玉目玉目玉目玉目玉目玉目玉目玉目玉目玉目玉目玉目玉目玉目玉数では表したくない程の目玉が…漆黒の箱に生まれていた。

何処からか…声も聞こえてくる…。

いよいよ、超能力というよりは…オカルトの領域だな…遂には幻聴が…。

「観月君！伏せて！！」

………！

俺は伏せた…すると漆黒の箱に…。

グサグサグサグサグサグサグサグサグサ！！

漆黒の箱に純白の羽が幾つも幾つも刺さった。

「……義弟の友達のお手伝いぐらいは…」

………美代さんか…。

「させて欲しいなあ!!!」

「美代さん！援護を頼みます!」

「了解!」

「2対1とは卑怯な!」

俺の妹に手を出した悪党が…。

「卑怯だとか語るんじゃあ…」

右手の指先に…蒼と紅の炎が…指に集まってく。

「ちっ!」

俺の下から箱を生み出そうとしたが…。

「キュピーン!」

精製中に羽が刺さった箱は…途中で精製が止まってしまった。

「風紀委員が市民に傷を付けていいのかなあ?」

……駄目だ…しかしな…。

「……という作戦を考えた脱獄犯が…自ら当たりに来た…という作戦はどうだ?」

「…………お…お見事」

ポヒユウン！！

炎弾は黒嶋の肩を貫いた。

「…………美代さん…悠哉を助けてきて下さい…」

「わかった…」

群狼は…仲間に怪我を負わせた相手を…けして許さない…自らの身体が尽きようと…首だけになったとしても…相手の身体がこの世から消え去るまで…噛み尽くす…それが…狼達の絆…。

三十話（後書き）

今回の話を書いていて思ったのは…観月怖い……。

「……………」

だけど、もう観月もすっかりしたよね？

「……………ストレス解消にはなった…」

……………黒嶋…どんまい！！！！

「そつえば…たまに書いてある最後の方のあれって何？」

……………さあね？

「群狼とかがって書いてあったけど僕は狼じゃないよ？」

例えですよ…例え…。

「それでは……………また次回……………」

話を無理矢理遮られた！！？

三十一話

……ちく……しょ……引き分けか……

「……い……言つたろ……」

あいつ……目が……覚めてたのか……。

「誰も勝てないし俺も勝てないってさ……」

……そのことかよ……。

「勝てないい？」

僕はな……負けらんねえんだよ……。

「そうだ……誰も俺には勝てない！」

「黙れ……僕の道は僕が決める！」

「じゃあわかるのか？お前に……目の前で姉と兄を殺された俺の気持が……！」

……過去ぱーとに飛ぶのかな……？

「知るか……僕は目の前で人が死んだとは見たことがないが……親に捨てられた事はあるぞ？……それに身体を切り刻まれたしな……」
白塚と僕は……両方とも、何か……過去があるんだな……。

白塚陽史はレベル0でいじめられっ子だという事実は…後に分かったため。

白塚陽史は無罪放免…そして黒嶋謙介、グリミン＝ステイル、新庄真の三人はもう一度少年院入りになった。

後日…

「岡富い！今日から…高校生がこの風紀委員に入ってくれるそうですわ…!!」

高校生？……まさか…？

白塚？

「白塚陽史…15歳…よろしく…」

やっぱりイイイイイ!!!!

「岡富…それと…もう次のぱし…仕事は決まっていますのよ?」

パシりっていいかけたよな！今パシりって!?

「し…白井さん！それなら脱獄犯に怪我させた観月にやらせるべきですよ！」

「……まったく…岡富は……」

「岡富だからなんですか！」

白井さんは僕の耳元に……。

「……耳をあまがみしても良いのですのお？」

！……！！

「ち…やめてくくく下さいよ…僕の弱点に何をすすすすするんですか
！……」

「何って…そりゃあ……あまがみい？」

「僕はあまがみなんかにごどごど動じはしない！……」

はむっ……はむはむ…

「ひゅえっ！」

「どっしたの！……？」

変な声を出したせいで白塚に…心配されちゃった…。

「……………ひゅー！」

白井さんは…満足そうな顔で…微笑んでる…。

「ふふふ…岡富は弱点があつて大変ですわねえ…」

「岡富君…いきなり変な声を出さないでよ…」

……………くそう……………。

「……………悠哉……………そんな趣味があつたんだね…」

「わざわざ言ってるでしょ!?!?」

くそう…パシリでも何でもやってやらあ!…!…!

「で…何の仕事なんですか?」

「このサイトを見て欲しいのです…」

白井さんが出したPCの画面には…。

?男のブログ

?男のブログへようこそ…。

貴方のレベルを必ずあげてみせます…。

特にレベル0の方におすすめ…。

情報提供…等もあります。

「？男を探すんですね？」

？男…謎だな…。

「この？男に聞いてほしいことは…」

偽物と敗者…そして英雄……。
偽物は本物を失い…敗者は敗北を失った…しかし英雄は…。

三十一話（後書き）

？男…名前の由来など……ない！！！！

少しネタバレになりますが…？男さんに登場して頂きます！

「…急いでね…俺は忙しい中、時間を割いてまで来たんだよ…」

…なんかすみません……。

「で何を聞きたいの？」

プロフィール等を…。

「…14歳、B型、趣味は人間観察かな…」

……ほう…本名は？

「勿論秘密さ」

………つち！

「また次回」

バイバイ！！

番外編 敗者の過去…（前書き）

今回は…一人ほど死亡してしまいます…（注意下さい）

番外編 敗者の過去…

三年前

今日、俺は姉と兄に連れられて…学園都市内のある研究所に来ていた。

後藤研究所という場所に…。

兄曰く…この博士は能力開発に長けているから…俺の能力もわかるはずだと言っていた。

「陽史！早くおいでよ！」

姉ちゃんは…元気だな…。

姉と兄は双子で…名前は…。

紀伊と修己…キイとオサミ…二人はそれぞれテレパシーの送信タイプと受信タイプだ…。

「後藤研究所なら大丈夫だよな紀伊！」

「そつだよねえ修己いー！」

二人は分かったとは思うが…それぞれブラコン、シスコンである…。

俺はこの研究所を信用していない…。

研究所内部

「はい…陽史くん、リラアクス…リラアクス…」

言われるがままに意識を…停止へと近付け…リラックスして行く…。

「貴方は今…夢の中にいます…」

「貴方の目の前には貴方の望んだ物があります…それは…なんですか？」

「……………ま……………」

「ま？」

「魔神……………」

「？」

「黒い…………魔神が…………黒い騎士と闘って…………魔神が押されてる…………」

「…………やめましょう…………」

結局駄目なのかよ…………。

「博士…俺には才能が無いんでしょうか…………」

「そんなことないですよ…………人間、必ず才能と呼ばれる物があるんですよ…………」

…………。

俺より小さい…男の子が俺に抱きついてきた。

「お客さんだぁ！遊ばぁー！！」

なんだコイツ…………。

「五番、お客さんに失礼ですよ…………」

五番？

「エエエエ…二番も四番も遊んでくれないんだもん！…！」

「二番？四番？」

「とりあえず今日は遅いですし…泊まっていきなさい…！」

というわけで今晚はここで過ごすようです…。

深夜…俺を含めた白塚は全員寝てしまった後…。

「……六番の能力実験を開始します……！」

「「はい博士」「」

六番と呼ばれる少女はまだ寝ているが…頭に何かコードが無数に繋がってるヘルメットを装着している…。

「……すう……！」

「……電圧を上げて下さい……！」

バチチチチ……。

「もう少し……」

バチバチバチチチチチチ……

「う……アアアアアアアアアアアアアア……あ……うあ……アアア！
！」

少女の背中から……漆黒の翼が……。

バサッ！……！

「実験は成功ですね……」

「アアアアアアアアアアアア……アアア！……アアア！」

漆黒の翼は……その色を……黒から……白へと変えた。

「これは……！」

「実験は成功したんだ！」

「デュアルスキルか！？」

「……は……博士え……痛い……痛いよおお……！」

少女の叫びは……。

「では、今日ここに泊まっている三人を…殺しなさい…」
……この言葉に…止められた。

「紀伊！起きろ！」

「修己い？どうしたのぉ？」

「兄さん…姉さん…うるさいよ…」

僕達が起きると…。

「近くから…かなりの怒りの感情が近づいてきてる…何かが来るぞ
！……！」

兄さんは…何かを受信したようだ…。

「白塚さあぁん…」

誰だ？

「開けるなよ…ソイツが怒りの正体だ」

女の子の声だけど……？

「……修己い…大丈夫だよね？」

「……能力者達には…着いていけないな…」

「白塚さん……夢を魅せてアゲル…」

扉を…黒い何かが切り裂いた。

スパパパ!!!

「……………まじかよ！」

「陽史は逃げて…！」

逃げてって？

「フフフ…間に合わないよお…！」

黒い翼は…白へと変わり……。

「陽史早くにげ…」

ズパツ!!!

兄さんの身体から紅い紅い……鮮血が…。

「修己イイイイイ!!!…」

「おい…何をしてんだよ…兄さんに何をしたんだよ…おい…ウワア
アア…!!!…」

頭が熱い……燃えるように熱い!!!

「殺してやる！！！！」

姉さんは…消火器を持ち出し…振りかぶった！！！！

「…それだけ？」

白い翼は…姉さんの胴体と首の繋ぎ目を……………切り裂いた。

首から鮮血が飛び出す…。

止めるよ…嘘だろ…夢だと言ってくれよ…嘘だ……………アアアアアアアアアアアアアアアア！！

「次は君だよお…」

「殺してやる…」

殺意……………それしか沸いてこない…。

「君、私と闘うの？私は強いよ？」

「勝とうだなんて思っただけだ！」

俺は！俺は！ただお前を！！！！

「殺してやる！！！！」

口から…何かが出てきた…そしてその何か…顔を覆う……………。

何処かで見たとことがあるような……？

「美代姉さん…届けたんだから帰って下さい…仕事が片付きません
…」

「エエエエ…もう、姉さんをいじめて楽しいの!？」

……岡富君には…お姉さんがいるんだね…。

「岡富君…」

「何ですか？」

「お姉さんを…護らなきゃだめだよ…君にはそれだけの力があるんだから…僕みたいになっちゃあ…駄目だからね…」

「は…はい…」

番外編 敗者の過去…（後書き）

敗者之王の能力説明！！！！

まず能力を使用すると自分のレベルと現在の精神状況によって口から黒い体液が出てきて魔神の形を精製します。

大きさは感情の大きさ種類によっても変化します。

魔神に変化中は肉体再生の能力でいう…レベル4あたりの再生能力をもち…力もかなり増加…白塚は暴走してたので言語を喋れてませんでした。

具体的には魔神に変化するだけです…。

自分に危機が訪れると…黒い体液が反応を起こし…触れた物の細胞を破壊する物へと変化し…。

自分が相手を殺してしまうと…自分の心臓が停止してしまいます。

だがしかし能力を解除すると細胞の破壊なども解除されます。

わかったでしょうか？

岡富と白塚がポロポロになったのは白塚がダメージを受けすぎて、魔神のボディはすでに細胞破壊になっていましたが、岡富は調子にのってマシンガンパンチをしてましたし…白塚はいくら自分の能力とは言え…そんな細胞破壊を身に纏っていたのでそれぞれポロポロ

になりました。

「なんか複雑な能力だな…岡富君の完全同調の方が使い勝手が利き
そうだし…完全同調の方が良かったな…」

ゴメンね！

「……俺の魔神は…次はいつ出るの？」

教えられないのだよ…。

「本編も見てください…よろしくお願いします」

白塚はいい子だな…

三十二話

?男…誰だよ…?

「とにかく…私たちも捜しますわ…」

?男 搜索メンバーは…僕、白塚、白井さん、の三人だ。

「……?男…俺知ってるよ?」

何い!?

「本当ですよ!?!」

「世界は狭いなあ……」

まさか白塚が知ってるなんて…。

「俺はレベル0を克服したくて行った事があるんだよ……」

「ば…場所は何処ですよ!?!?」

旧後藤研究所内部

「俺が…教えたんだ…？男に…」

「？男はどういう人物ですか？」

「……………？男か…なんか…性格がやばそうだなあ…」。

「直接は会ったことは無いけど…声は聞いたことある…男にしては声が高かったな…」

「……………胡散臭い奴なのかな…」。

「？男って…本当に実在するんでしょうか？」

もしかしたら後藤博士が仕組んだ実験生物の原石を集めるためだけに作ったサイトかもしれないし…」。

「……………岡富君…？男は…助手が二人いたよ……………名前は忘れたけど

……………」

「どちら様でしょうか？」

「……………」

「わ、私たちは？男に会いに来たのですわ！」

「……………」

……女の子が二人、研究所の奥の部屋のドアから顔だけを覗かしている……。

「私はエカリと申します……」

偽名百パーセントのポニーテールの女の子……。

「……………クスバ……」

偽名五十パーセントの無口な白井さんと同じツインテールの女の子……。

メツチャ怪しい……。

「？男さんは今ここにいますか？」

「……………います……」

観月とメツチャキャラが被るな……観月を連れてこなくて良かった……。

「会いますか？」

「勿論ですの」

「……………案内します」

……………白塚の様子がおかしい……。

「白塚……………どうしたんですか？」

「……ここは、思い出したくない思い出があるんだ…」

僕もここには…何かを感じる…。

「……………主人…お客様…」

……………遂に！

ギイイイ……………

「おや…?」

…仮面を付けてる…。

「……………貴方が？男ですの?」

白井さん、ストレート過ぎるな…。

「?男だよ?」

この話…?が多すぎるな…。

それに…この人…。

「……………俺は…男だと思ってたよ…」

「おや、名前だけで人を判断すると大変なことになるよ…」

分かったとは思うが…？男は女の子だった。

「女子三人で一体何をしましたの！！？」

……白井さん、それは駄目ですよ。

「え？何って勿論……」

アアアア…何も聞こえないなあ！！！！

「そ、そんな事を……」

「……ここにレベル0はいないみたいだね？」

！……！

「岡富君……」

……「イッ」。

「どうしましたの二人共……！！」

白井さんも気付きましたか……ここにレベル0は二人いる筈なのに……？男は僕と白塚の事を……レベル1以上だと判断した。

そんなのは見ただけではわからない筈。

「何故私がレベル0がないと言ったか…教えようか？」

「俺は知りたいな」

……………僕も。

「偽りの王と敗者之王…だろ？」

……………コイツ…どこまで知ってるんだよ…。

「私も君達と同じく…システムスキャンでは感知されない能力なんだよ…」

……………相手の能力を知る能力とかか？

「貴女が特殊なパターンなのはわかりましたわ…」

……………特殊なんて言葉で片付けられるのか…。

「私たちは…ビッグスパイダーについての情報が欲しいのですわ…情報を下さいな」

やっと本題に入ったよ…。

「いいけど…条件がある…」

「何ですの…？」

……………「どういつ裏の情報は高いって良く聞くよな…一体何を…？」

「コスプレをして貰おうか…」

は？

「今…なんて言いましたか？」

「コスプレ」

この人は……………ヲタクか！！？

「……………しかたありませんわね……………」

白井さんのコスプレ…見たいかも！！！！

「おおと…君だけじゃあ私は満足しないなあ……………」

「岡富…やりますわよ……………」

ハイハイ！！！！？

「……………岡富君…頑張れ……………」

「僕にコスプレなんかさせて何が面白いんですか！！！！？」

「いやいや、三人でコスプレしてよ」

……………白塚も道連れか……………。

「エカリ、クスバ、衣装を……………！」

「はい、」

嫌だアアアアア!!!

くそう…シリアスパートかと思ったら…ギャグパートだったのか！
！？

「岡富い…貴方はセーラー服に決まりましたわ！」

何!!!？

三十二話（後書き）

シリアス×
ギャグ

「騙されたあ…」

？男にはめられたな…。

「僕に女装はもう止めてくださいよ！」

諦めな…主人公は不幸なのがセオリーなのさ！

「嫌だアアアアア！！！」

次回は岡富達のコスプレからのスタートです。

三十三話

コスプレの結果…。

僕はセーラー服…

白塚は新撰組？

白井さんはドレス…

「な…なんで僕はセーラー服なんですか！！？」

「…はつきり言っただけ私の趣味の一つだ」

趣味って！？

「岡富はドレスが良かったんですの？」

「もつと嫌です！」

……畜生…僕はまた女装させられるなんて…。

「……俺はこれでも大丈夫かな…」

新撰組…か…まだましたよな…。

「今日そのままの格好で帰ってね…命令だよ…」

？男って…一体何なんだよ！！！！

「私は…テレポートを上手く使えば帰れますわ」

「俺は演芸の稽古の帰りとか言えば大丈夫…」

二人はな…まだいいよな…。

「僕のこの格好は流石に嫌ですよ…！」

「じゃあ…情報はなしだね…」

何!!!?

「「「岡富…!!」」」

ち、畜生オオオオ!!!!

「わ、わかりましたよ…この制服で帰ればいいんですよ…」

「じゃあ…さっそく、ビッグスパイダーの情報を教えるよ」

数分後…

「…これ位かな？」

か…かなりの情報量だったな…。

「ありがとうございます…では岡富、白塚さん帰りますわよ…」

「途中で着替えようとしても無駄だよ…私には…この二人以外にも助手がいるからさ…着替えたら…わかるからね？」

……………この人は危険だ。

旧後藤研究所から僕達はそれぞれの寮にかえるために外に出たのだが…………。

「し…白井さん!!?」

「げっ、初春ですの…私は逃げますわ」

シュンツ!

初春さんが研究所の門の前にしたため…白井さんは逃げ出しました。

「……………初春う…あの人は誰なの？」

……………誰だっけ…たしか…さささ…?

「佐天さん、たしか…岡……………誰でしたっけ？」

……お互いに名前を覚えてない状況……。

「……岡富です」

「ああ！白井さんのパシ……お手伝いをいつもしてくれる！」

……覚え方が酷いなあ……！

「俺は女子が苦手だし……帰るよ」

白塚も逃げ出した。

「ええと……何で男なのに……セーラー服来てるんですか？」

ううう……聞かないでくれよ……。

「こ……これには……深い深い事情があるんですよ……」

「「はあ……」」

「白塚……さっきの新撰組の格好したやつと僕は……白井さんに……ここ
まで言えばわかりますか？」

「わかります……！」

ああ……初春さんが白井さんに振り回されてる仲間で良かった！

「白井さんに無理矢理着させられたんですね！私も経験あります
し……」

ああ…仲間よ！

「白井さんってそんなに酷いことするようには見えないけどなあ…」

「それは違います！！！」

…初春さんと台詞がシンクロした！

「白井さんはいつも人の事をパシリとしか思っていないんです！」

「そうですね！白井さんはいつも人のおやつもとりますし！」

「しかも…」

それから二、三分は白井さんの愚痴を言っていたかな？

「ちょっとストップ！！！」

流石に佐天さんが…。

「「「すみません…」」」

「早く帰った方が良いでしょうね」

「僕も途中まで一緒に行きますよ」

帰宅路……

「ちょっとそこの女子三人！」

「遊ぼうぜえ……」

僕は男子だ！……と言ったら問題になりそうなので……。

「風紀委員です……あなたたちは……今から何をしようと思いましたか？」

不良は……風紀委員がいるのに……興が冷めたのか……。

「っち……」

「佐天さん、初春さん……僕は今女子に見えてしまいますか？」

「見えますよ」

「可愛いですし」

かなりショックだなあ……。

「う……ウワアア……」

僕は走り出しました。

「ちよっ……岡富君……！……！……？」

「岡富さん……！……？」

僕は…寮に着いた。

「…………どちら様？」

観月はまた気付かない。

「僕だよ…観月…」

「…俺に…ボクツコの友達はいない…」

…ボクツコ？

「じゃあ…美代姉さん呼んでくれよ…」

「美代さんは…今お風呂に入ってるので…いません」

…………観月…いい加減気付けよ…。

「観月君！お風呂空いたよお！」

美代！

「美代さん…お客様…」

「ほいほおい！ありい？悠君じゃん、どしたのお？」

「えっ！？悠哉だったのか！！？」

気付けよ……。

「何回も言ったる……」

「ゴメンね……」

「なんでセーラー服なんて着てるのぉ？」

聞かないでくれよ……。

「白井さんに着させられたんです……」

「黒子うち……流石だね！！」

何が！！？

「なんやこんやで……？男に情報が聞き出せた……その情報を元に白井さんと御坂さんはビッグスパイダーを壊滅させたらしい……。」

「……レールガンとレポートか……面白いな……そうだろ、エカリ、ク
スバ……」

「「はい……」」

「そろそろ……私は動かなきゃな……」

？男は…手を振った…すると…宙に切れ目…いや裂け目ができた。
「行ってくるよ…エカリ、クスバ…」

？男は裂け目を潜り…裂け目は閉じた…。

「ご主人様…行っちゃったね…」

「……………うん……………」

暗い…かつて天使と魔神が闘った研究所の中…？男は…消えた。

「私たち…何してよっか…」

「……………そうだね……………」

三十三話（後書き）

やっとスキルアウト編が終わったあ…。

「…やっとだね…」

おや？今日は観月なのか？

「……悠哉は…いじけてる…」

そうだよね！。

「………？男って誰？」

？男は？男だよ。

「…？が多いね…」

？男の本名知りたい？

「知りたい…」

駄目え！教えないよ！

「………殺るかな…」

観月…早まるな話せばわかる！

「………問答無用…」

ボオオオオオオオオオオ!!!

ギイイヤアア!!!

「また次回……」

また……みて……ね。

番外編 同調と共有（前書き）

コシカワさんのとある奇跡の能力共有とのコラボ作品です。

番外編 同調と共有

今日…僕は白井さんに呼ばれて風紀委員第一七七支部に久しぶりにやって来た。」

「失礼します…」

中には相変わらず頭に花を大量に装備している初春さんと…誰だ？

「あ、岡富さん」

「…誰なのね初春さん？」

なのね？てゆうーかコッチも気になる…。

「私と同じ風紀委員の岡富悠哉さんです」

「よろしくお願ひします…」

「でコチラはさっき私がそこで会った睦月優奈さんです」

「よろしくなのね」

……この人の拡散力場…なんか変だな？

「そういえば僕は白井さんに呼ばれて来たんですけど…白井さんは？」

「それがまだ来てないんですよ…」

……白井さんがいない……か。

「今のうちにメアド交換でもしますか？」

「それは良いのね！」

僕のアドレス帳を改めて見ると……女の子のメアドが多いような？

「白井さんは……なんで僕たちを呼んだんでしょうか？」

「また……何か仕事じゃないですかねえ……」

白井さんだからな……ありえるんだよなあ……。

「白井さんって誰なのね？」

「ええと……白井黒子さんは私達の風紀委員の先輩です」

「僕たちは白井さんにパシられてるんですよ……」

「はああ……なのね」

そんな他愛な会話をしていると……。

がちゃり……

「岡富と初春はいますの!!?」

「いますよ……」

白井さん…盛り上がって来たタイミングで…。

「そちらは…?」

「私は、睦月優奈って言うのね!」

「睦月さんですわね、よろしくですの」

二人は、握手を交わした。

「…で今日は何の用なんですか?」

「私も気になります」

「二人には…コスプレをしてもらいますわ!!」

今…なんて言ったこの人?

「僕は断ります」

「初春、岡富を捕らえなさいな!」

何!!??

「初春さん、離して下さい!」

「何か…凄い事になってるのね…」

「フフフ…さあて…岡富、今日はこれに着替えて貰いますわ!」

そこには…白井さんとパールツクになる…。

「常盤台の制服じゃないですか…」

「良いなあ…岡富さんは…常盤台の制服が着れて…」

僕は男なんですよ？

「初春には…これですわ!」

そこには…僕が…祭の時に着させられた…。

「め…メイド服ですか?」

「勿論ですの」

「睦月さん!」

「何なのね!!!??」

「貴女には…これを着て貰いますわ…」

今度は…着物だった…。

「私は着物なのね？」

「そうですの」

「着てみるのね」

いきなり、服を脱ぎ出した睦月さん。

「僕は男子ですが！！？」

「初春…私に岡富を貸してみなさいな…」

人の事を物の様に…。

「はい、白井さん」

はむっ…

「ひいや！」

またこのパターンか！！

「今の声は何なのね？」

「睦月さん、あっちの更衣室で一緒に着替えましょうよ…」

「初春…ひゃっ…しゃあん…見捨てないでえ…くだしゃいよお…」

上手く喋れない…。

僕の懸命な頼みは…。

「早く着替えてきなさいな…」

の一言で打ち消された。

「岡富い…大人しく制服に着替えなさいな…」

「嫌ですよ…僕は男なんですよ…」

「貴方の顔は…正直言つて…女装するためにありますわ!」

なんだそれ!?!?

「僕は断固拒否します!」

はむっ…はむはむ…はむっ…

「いっ…ひいやぁ…らめですよ…」

ウワアアア…………。

十分後

そこには…端からみれば常盤台の生徒が二人、メイドが一人、お姫

様？が一人いるように見える。

「……岡富さんが……涙目ですよ、白井さん……」

「しょうがありませんの……これくらいしないと岡富は着ませんの」

「……大丈夫？」

「……ひゃい……」

睦月さんが心配してくださっているのが……一瞬……天使の様に見えた。

「岡富君の弱点は耳なのね？」

「！！？」

「な……何故それを……」

「一回……触っても良いのね？」

「……触る位なら別に良いか……」

「ど……どござ」

スリスリ……

「……………」。

「とじらせし」

はむっ…

「ひっっ！」

「面白いのね…」

「止めてくださいよ！」

いきなりあまがみをするなんて…なんて人だ！

「睦月さん…やりたければ幾らでもやって良いんですよ？」

えっ？

「冗談ですよね？」

「初春！岡富を捕らえなさいな！」

本日二回目！！！？

「ちよっ！」

「…岡富さん…大人しくあまがみされて下さい…」

絶対に…。

「嫌ですよー！」

「せえのであまがみしますわよ睦月さん！」

「はいなのね！」

「止めてくださいよ！冗談は冗談で止めて下さい！」

「「せえの…！」」

はむっ × 2

「ヒイヤアアア…！！！」

二人で一人の耳をあまがみするって…どんなイベントだよ…。

「ああ…楽しかったですわねえ…」

「岡富君の反応が面白かったのね…」

「僕は帰ります…僕の服を返して下さい」

「貴方の服なら…そこですわ…」

白井さんが指差す先には…洗濯機が…。

「もしかして、洗ってるんですか？」

「勿論ですの…」

畜生オオオオオ。。。

「次は何の格好にするのね？」

「睦月さんは制服に着替えても良いですわ。。残りは。。岡富に着せますわよ！」

「解ったのね！」

「初春は解りましたの!？」

「私はそろそろ宿題をしに。。一度寮に帰ります。。」

「解りましたわ。。行ってらっしゃいな」

「では。。さようならあ」

「初春さん逃げないで!」
ギィィィ。。パタン

。。。。。。。

「次は何の格好にしますの。。岡富い。。」

「私的には。。ナースも良いと思うのね」

二人が迫ってくる。。怖い怖い怖い!!!

ぐうううう…

「は？」

何処から？

「お腹が空きましたわ…」

「そういえば私もお腹がすいてるのね」

………僕は来るときにおにぎりを食べて来たから平気だけどね。

「岡富い…何か作りなさいな…」

「何かって何ですか…？」

「……お…」

お？

「お肉…ですの」

「冷蔵庫の中身使いますよ…」

冷蔵庫の中を覗くと…。

挽き肉…卵…等と野菜が色々と入っていた。

「な…なんでこんなに品揃えが良いんだ？」

「きゃッ！インコが…部屋に入ってきたのね！」

インコだと！！？

「さささ…作者の都合さ！」

何て言う事だ！

「白井さあん…ハンバーグでも良いですかあ……」

「何でも良いから早く作りなさいなあ……」

……じゃあハンバーグで。

十数分後

「「頂きます（のね）！」「」

パクパク…モグモグ…ゴクン…。

「「美味しい（のね）！……」」

良かった…。

「「舌にあって何よりです」

「……これを食べ終わったら……岡富の……」

ぴゅー！

「洗濯が終わったみたいですね」

「流石学園都市の洗濯機ですよ……！」

僕は、白井さん達がハンバーグを食べてる間に着替えを済まし。

「「「ごちそうさま」だったのね」！」

「食器を貸して下さい……洗ったら帰りますから……」

「通りの作業を終わらせ……」。

「じゃあ僕は帰ります……」

「私も帰るのね」

「私は暫く調べる事があるのですわ……私はここに残りますわ」

白井さん……何を調べるのかな？

「では白井さん……サヨナラ」

「サヨナラなのね」

ギィィィ…パタン

「睦月さんはそっちなんですね僕はコツチなのでお別れです、サヨナラ」

「サヨナラなのね」

……結局なのねって何だったんだろ……？

睦月優奈さんかぁ…次会う時には…能力を聞くかな…。

番外編 同調と共有（後書き）

……どうでしたか？

僕は、良く睦月ちゃんを知らないのでキャラ崩壊がしていないかが心配です。

「駄文しか書けない癖に無茶するから……」

…反論できない。

「とある男子の風紀委員…ってさ…正直言ってるセンスないだろ」

（ ……！！ ）

こ、このアドレス帳に殆ど女子しか入ってないムツツリめ！

「何か言ったか？」

キャラに怒られるなんて…ううう…。

「それではまだ次回」

コシカワさんの（とある奇跡の能力共有）をよろしくお願いします！

……じ……実は。

「開かない……」

「「！！！！！！？」」

どうしよー！！？

「……………危険……」

「悠ううう君……私まだ死にたくないよお……」
いや……地震で死なないでしょ……。

ミシミシ……ミシミシ

柱が……ミシミシいつてるよ……。

「く……崩れない……？」

「……………美代」

「な……なにに……？」

こっとなつたら……。

「夢与物語を借りるぞ？」

「う……うん解ったよ」

白い翼で寮の扉を…貫いた。

スパパパーン！！

脱出！！！！

ガララララララ…

崩壊したアアアアアアアアアア！！？

「悠君…今日は何処で寝るのお…？」

……。

「……野宿じゃないよね……？」

「べっしょっか……」

野宿しかないのかな……。

「私、黒子つちに電話してみるね……」

プルルルル…プルルルル…

「もしもし…黒子つちい？」

……白井さんマジで頼みますよ……。

「うん……そう……」

何を話してるのかな……。

「バイバイ……」

ブチツ……トゥートゥートゥー……

「「ど……どうだった？」」

マジで気になる……。

「黒子っちここに来るって……」

現在……十時半……

白井さんにはたしか門限とか合ったよな……大丈夫かな？

十数分後……

「悠君さま、寒いよお……」

寒いのは僕もです。

「我慢して……下さいよ……へっぴゅちゅ……」

じゅ……ちゅ……寒い……。……。

「……………」

観月は両手に炎を灯しました。

家庭 師ヒツ マンリ ーンの超 ぬ気ツ を想像して頂ければ…
近いですよ。

「み…観月…近寄って良いか…」

「観月君…さ、寒いよお…」

ポオオ…

暖かああい…。

「観月…ありがとうな…」

「観月君…大好きい…」

あれ、観月？炎がなんか強まってるよ？

それに…観月の顔が紅い…。

「……………」

観月…もしや！美代に…？

「…どうしたの、観月君？」

「……………」

……………へええ…。

「美代も罪だなあ…」

「私はツミって名前じゃないよお？」

そこまで…鈍感だと…観月が可哀想な…。

シュンツ！

「大丈夫ですよ!？」

「黒子っちイイイイ!!!!」

美代が跳んだ!!!?

「な…なんですの!!!？」

スリスリ…

「黒子っち可愛い!!!!」

「とりあえず美代は白井さんを離しましょうか…」

「……………嫉妬」

観月がなんか言っただけど聞こえない…。

「きゃっ…み…美代さん…そこは…キャッ…」

白井さんが…美代に…うわっ…。

「ちよつちよつとストップ！美代ストップだよ！！」

「ええ…もうちよつと胸とか胸とか胸とか触りたいいい…」

胸だけかよ…。

「……………」

なんか観月がムスツてしてる。

「どうしたのお悠君？悠君も黒子っちの胸触りたいのお？」

「なっ、そそそ…そんなわけないじゃないですか！！！！」

逆に怪しまれるな…。

「…………悠哉…ここは、俺達には刺激が強すぎる…」

そっだな…。

「白井さん…美代を頼むので僕たちは一七七支部に泊まります」

「お…岡富い…私と美代さんの二人きりにしますの！！？」

「……諦めも肝心ですよ？」

後ろから響く悲鳴を無視して僕と観月は歩き出した。

「お…岡富いい……………」

次の日……

僕と観月は風紀委員の集会の様な物に呼ばれた。
昨日のポルターガイストについてだ。

その集会の帰り……

「岡富悠哉さん…岡富悠哉さん…お客様が応接室でお待ちですので…至急応接室へ…」

そんな放送が流れた。

「悠哉…行っておいでよ……………」

「先に支部に戻っててくれよ」

観月が出口に向かうのを確認して、僕は応接室へ向かった。

「失礼します…」

「やあ…待つてたよ…私を覚えているかな？」

「？男さん…」

？男は…。

「その制服…」

常盤台の制服を着ていた。

「私も学生だよ…制服を着ていてもおかしくはない筈だが？」

「？男さんって常盤台の学生だったんですか…？」

まさか…違うよな？

「その通りだよ」

「エカリさんとクスバさんは？」

「彼女達も…常盤台だが？」

マジで！！？

「嘘ですよね？」

「残念ながら事実だ」

？男さんは相変わらず仮面を付けていたが…。

綺麗な茶髪のストレートヘアを腰あたりまで伸ばしている。

「仮面は外さないんですか？」

「素顔は見られたく無いんだよ…」

仮面の下は可愛いだろうに…何でだろ？

「で…今回、私がここまで来たのは…」

急に本題に戻ったな。

「能力者にも不良はいるのは知っているだろう？」

「はい…」

「その中でも特に戦闘能力が高い者の集会在近々行われるのだが…君にも出てもらいたい」

「は？」

僕は風紀委員ですよ、そんな集会に行ったら逮捕しほつだいじゃないですか……。

「君が風紀委員なのは全員に伝わっているからね…君が暴れたら…その全員が君を襲うと思うよ？」

……逮捕は無理かな……。

「僕はレベル0です…」

「バンクに登録されてないだけだろ？私も同じような者だしな…君が出てもおかしくはないから大丈夫だ」

オイオイオイ！

「僕は出ません…」

「君が集会に来てくれるなら、これをあげようか？」

？男は…その手に…。

「ブラジャー？」

「勿論私では無いぞ？君の先輩のブラジャーだ…」

先輩……？

「白井黒子のブラジャーだ」

欲しい！！！！！！

「どうせ嘘だろ？」

「なら…証拠を見せようか？」

すると？男は写真を取り出した。

そこには…？男が持っているブラジャーを外している白井さんの写真が…。

「ぶっ！ー！！」

は…鼻血が…。

「おやあ…随分ウブみたいだねえ…」

「う…うるひゃい…」

くそう…不覚にも煩惱が…煩惱がああ…。

「集会に行くか？」

……悩む…。

「く…くそう…」

「なんなら…御坂美琴のブラジャーもセットで…」

「行きます！ー！！」

僕は、煩惱に敗北しました。

それにしても、？男さんはどうやってぶ、ブラジャーを？

三十四話（後書き）

今回は…？男の凄さがある意味解りましたね。

「…白井さん萌え…」

主人公が壊れたので今回はこころら辺で…また次回！！！！

三十五話

……次のポルターガイスト対策の集会の次の日が…不良集会って…
…ついてないよな…。

「悠哉…あのエレステイーナって人…」

エレステイーナ…何だっけな…エレステイーナなんちゃらこんちゃ
ら？

「あの人はどうしたんだ？」

「あの人…何処かで見たことがあるような……気がするんだ…」

「へえ……」

観月が見たことあるんなら…僕も見たことありそうだな…。

「……！」

「観月、どうした？」

「やばい…白井さんに知らせなきゃ…」

「白井さんがどうしたんだ？」

知らせるってなにを？

「悠哉…白井さんが何処にいるか知ってる？」

「…多分あの喫茶店じゃないか？」

名前が思い出せない…あの…喫茶店…何だっけな…？

「ありがとう…」

観月は…ダッシュで外に出た。

「…観月足早いなあ…」

観月もないしな…僕は二七七支部に行くかな…。

ブウウウ…ブウウウ…

「電話？」

非通知番号で…。

「もしもし…」

「よお…俺様が誰だか解るかあ…？」

…この声…何処かで…。

「どちら様でしょうか…」

「…お前に恨みがある男だよ…今から ×倉庫に來い…」

ブツッ…

「×倉庫となるとなあ…遠いんだよなあ」

まあ…明日の集会に間に合えば良いからな…暇潰しに行くか…。

×倉庫

「……卑怯な……」

そこには…一人の女子生徒を人質にとる…二人の不良がいた。

「俺のこと…覚えてるか？」

「いや、まったく……」

不良はナイフを取り出して…。

「コイツがどうなっても良いのか？」

「ひっ…た、助けて……」

…風紀委員としては助けなきゃまずいな…。

「何をすればその子を解放してくれますか？」

…僕が捕まって隙について逃走…という手段もあるんだよ…。

「おいっ薪…コイツを預かれ…」

「はい…」

薪…という人に人質がわたり…不良の人がコッチに来た。

「俺の事を覚えてるか？」

知らん。

「…すみません…覚えてないんです」

「俺はな…お前へのカツアゲに失敗して…不良としての地位を失った…」

なんか…聞いたことあるな…。

「神谷って名前はおぼえてるよな？」

！！！！番外話のカツアゲ野郎さん！！！！

「テメエには…俺の能力の実験台になってもらっ…」

「断ったら？」

「あの女子は怪我では済まないかもな」

……しょうがない。

「能力…やれよ…」

「風紀委員ならそう言つと思つたぜ…」

その瞬間…神谷は…拳を僕の顎に…。

バキッ…

顎か…くそ…脳震盪だ…クソが…。

ばたっ…

「暫く寝てるよ…じゃあな…風紀委員のクソチビ」

僕の意識は半分以上飛んでいて…殆ど聞き取れなかつたけど…風紀委員のクソチビだけは聞こえたな…。

あれから…何分経つたんだ…携帯を覗くと…着信25回

「多っ！！？」

全部白井さんからだ…。

一回かけなきゃ…殺されるな…。

「……………あつ、もしもし白井さんですか？」

「岡富ですよ！？遅いですわ！」

「すみません…ちょっと風紀委員として仕事をしてまして」

「そんなことより…落ち着いて聞きなさいな…」

白井さんがここまでかしくまると…いうことは何かあったな…。

「何ですか…白井さん」

「観月が…事故に遇いましたわ…」

「なっ！！？」

「今から病院に来なさいな…」

ブツッ……………

「……………観月が事故にあう？ありえない…観月は…？」

あれ、観月って誰？

「……、何処？」

カツカツ…と後ろから聞こえる…。

「おや…風紀委員君…大丈夫かな？」

誰…あの仮面付けた女の子？

「…誰」

「幾らなんでも酷いな…私を忘れたか？」

「だから、誰？」

「…もしや…記憶喪失かな…それに…」

僕の身体をジーと見ている…恥ずかしい。
きおくそうしつ…？

「何で…意味のわからないこといつてるんですか？…僕の家とか知ってますか？」

「知っているよ…コッチにおいで…」

この仮面の女の子を信じよ…で…さっき何か…大切な事があったはずなのに…思い出せない…。

「まさか…私がレベルを上げてやった…神谷が…いや、喧嘩スキルなら…風紀委員君の方が上な筈だが…うん…」

三十五話（後書き）

すみません…少し事情がありました。

三十六話

……困ったな……風紀委員君が……記憶喪失と……しょうがない……病院に連れてくか……。

「お姉さん……お姉さん……」

「何だい？」

「この服……凄いところが窮屈何だけど……」

と……胸のあたりを触る風紀委員君。

「コラッ……駄目だよ、こんな狼だらけのところで胸触っちゃ……」

「狼？……そういえば……お姉さんの名前何て言うの……？」

「……とりあえず？男って読んでよ」

「どうして？お姉さんは女の子でしょ？」

確かにそうだが……。

「私の事はお姉さんで良いよ……」

「わかったあ……」

風紀委員君は私の腕に抱きついてきた……。

「何で抱きつくんだ？」

「周りの男子が怖い…」

周りを見ると…風紀委員君より少し大きな…人達が…。

「ロリっ子…？」

「百合？」

「仮面の下が気になる…」

とか言ってるな…。

「ねえねえお姉さん…」

「何かな？」

「僕の名前は？」

「岡富悠哉って言うらしいよ」

「じゃあお姉さんは僕の事を…何て呼ぶの？」

……うん。

「じゃあ…悠で良いよね？」

「うん！お姉さん！」

私は…この子を…病院へと連れていく事に成功した。

「ねえねえお姉さん…ここが僕の家なの？」

「いや、違うけど…いちよう病院で検査をしなきゃね」

「ここが家って…凄いよそんな人いたら。」

「やあ、？男君だね…その娘は？」

「…少しお話が…」

悠を置いてくことになるが…まあ良いよな？

ガシッ…

「ん？」

「お姉さん…行っちゃうの？」

「少しお話したら戻るから…待っててね悠…」

話の内容は…こうだ。

- 1、まず悠は記憶喪失になったこと。
- 2、性格が明らかに前と違うこと。

3、気付いた人は気付いただろうが…男から女になってたこと。

以上の3つだ。

「では…犯人の能力は…」

「はい…神谷という不良の心身別々のせいだと…」

心身別々とは…相手の身体…性格を変えてしまう能力で…発動条件は…相手を脳震盪状態にすること。

「では…コチラで預かるよ？男君」

このカエル顔の先生は信用できる…。

三十六話（後書き）

わぁー…岡富があ…岡富があ…。

まぁ…良いか。

今回は寝不足なので…バイバイ。

三十七話

まったく…観月は…何を仕出かしましたの…。

「黒子うち…観月君死なないでしょ？」

「当たり前ですの…。」

正直不安ですわ…お医者様には…。

(3日で意識が戻らないと…駄目かもしれない)

「君の病室はここだよ…向かいには重傷者がいるから…静かにしてね」

「はああい」

………岡富？

「悠君………？」

「岡富ですの？」

「ほえ？」

そこには…どこか岡富に似ている少女が…。

「ちやこしいですわ…。」

「……黒子っち……」

「なんですか?」

「あの娘……黒子っちを見つめてるよ?」

見つめてるよ?

少女の方を向くと……。

「……」

目が合いましたの……。

「……か」

か?

「可愛い……」

「にゃっ!?!?」

いきなりの抱きつき……!?!?

「可愛い……」

「貴女は何をしていますの!?!?」

「可愛い……えっ?」

えっ？じゃないですわ！！！！

「だから貴女は何をしていますの！」

「可愛いから…つい」

「では貴女の名前は…！」

「ええと…岡富…悠哉だっけな？」

「「！！？」」

「嘘をつかないで欲しいですわ！」

確かに岡富が着そうな服を着てますけど…むむむ…胸が私より大きい癖に私より背が小さいじゃないですの。

「ええ…嘘じゃないよお…？男お姉さんが言ってたもん！」

？男が…？

「じゃあさ…悠君ちょっとゴメンね」

はむっ…

「ひゃっ…」

反応が一緒ですの…。

「本当に岡富ですの？」

「ううう…耳があ…」

「「可愛い…」

悶えてる姿がなんとも愛らしいですわね。

「ああ…お持ち帰りしたい…」

「お持ち帰り…?」

「同感ですわ…」

「僕、ええと…検査…にゆいんするからお持ち帰りは出来ないよお
?」

「女の子なのに僕…やっぱり岡富かしら?」

ブウウウ…ブウウウ…

「黒子っち電話だよお…」

誰ですの…まったく。

「もしもですの…」

「やあ…白井黒子さん…」

この声は?男…?

「？男ですの…？」

「そこに岡富悠哉と名乗る女の子はいるかい？」

「いますわ…」

「その娘の記憶は…そろそろ戻る筈だよ」

「そろそろっていつのですの？」

「5…」

カウントを始めましたの？

「頭があぁ…痛いよぉ…」

「悠君大丈夫!？」

「4…」

まさかの…!?!?

「3…」

「ううう……にょろ…ん…」

にょろ…ん？

「2…」

「まさかの!!?」

「煩いよ病院では静かにね」

カエル…おもいつきりKYですの。

「1…」

「戻れ(ですの)！」

「0」

「じゃあ!!!!」

にゃあ？

「白井さん？」

「思い出しましたの!!!!?」

「悠君…だけどやっぱり……」

「美代さん？」

「可愛いイイイイ!!!!」

「キャツ!…美し…止め…いや…白井さん!助けて!」

この前とは逆の状態ですわね。

「悠君、女の子になった感想は？」

「女の子？」

岡富は自分の身体を見ると…。

「白井さん…僕の身体は…今どうなってますか？」

そりゃ、勿論。

「女の子になってますわ」

「………ううう…百合でも諦めないぞ…」

百合？誰と誰で百合ですの？

「悠君…黒子っちなら百合でも大丈夫だよ」

「そうですよね…」

「誰と誰で百合ですの？」

「気付かないの？」

まさか…W岡富に言われるとは。

「ところで岡富悠哉は元に戻ったのかい？」

忘れてましたわ…。

「戻りましたわ、で岡富が男に戻る方法がありますの？」

「うーん…もう一度心身別々を喰らうしかないよ」

「やっぱり…ですの。」

「キヤツ…美し…もうやめて…ひゃう！」

岡富がある意味危ないですわね。

「フへへへ…悠君の胸は…こな…？」

「C!?!？」

「岡富…」

「し…白井しゃあん…たしゆけてえ…」

可愛い！

「貴女にはガツカリですの…まさか私より大きいとは…」

「大きいって何が……やつ……ふわあん！」

「岡富…美代さんの犠牲になりなさいな…」

「悠君…可愛い！」

「そちらは色々大変みたいだしな…私は切らせて貰うよ」

ブツッ…

「僕は男なのにイイイイイ……」

そのあと…ヨダレがたらたら美代さんが囃富を食へちゃいそつでしたので助けてあげましたわ。

三十七話（後書き）

では女の子になった感想は？

「ううう…美代に食べられるかと思った…」

今の下着の色は？

「普通に黒いトランクスだよ？」

……っち。

「いや…舌打ちって…」

じゃあ…胸の感想は？

「胸か…」

さわってみれば？

「……んっ…っ…っ…もう触らない！」

………声頂きましたあ……。

「頂きました？」

佐藤と山崎に高値で売れるかな…。

「止めてね!？」

……つち。

「だから、なんで舌打ち？」

男の子の視線は気になる？

「別に、僕は可愛くないでしょ？」

……ふう……一回誰かに襲わせるかな……。

「物騒な事言わないで下さいよ」

「岡富イイイイイイイイコスプレ……着替えますわよオオオオオオ！」

「！！」

行ってらっしゃい。

「行ってきます……」

骨は拾ってやるよ。

「物騒な事言わないで下さいよ……」

三十八話

「白井さん…僕は用事があるので…観月を頼みます」

「残念ながら私にも用事がありますの…」

白井さんは何処にいくきかな…？

「じゃあ…私が観月君を見とくから…二人とも行ってきてね」

「行ってきます」「」

集会所…

「やあ…来たね…悠」

「どうも、お姉さん…あれ？」

悠？…お姉さん？

「悠…やはり二人の下着より…君が着るよつの下着の方が良いんじゃないか？」

「あのお姉…？男さん…なんで悠？」

「ん？君が呼べと言ったじゃないか」

まじすか？

「それに…お姉さんって…」

「それも悠が呼びたいと言ってたからだろ？」

…俺に一体何が…？

「悠…その格好…昨日と一緒にじゃないか…」

「いや…着替える暇が無くて…」

そうじゃなくて着替える勇気が無かったただけだが…。

「よし、まだ集会まで時間がある…着替えを買いつぞ、私の金でな」

「遠慮しま…」

「遠慮するな！」

アアアアレエエエ…。

地下街…

「うーん…悠はなんでも似合うな…」

「只今…ゴスロリ？を来ている僕です…。」

「お姉さん…恥ずかしいです…。」

「駄目…女の子なんだから…わかるだろ？」

「お姉ちゃん…恥ずかしいよお…。」

「よろしい…。」

「別の服にしてくださいよ…。」

「だったら…これ？」

「またゴスロリ…。」

「ゴスロリ以外の服は無いんですか…。」

「今の悠にはゴスロリが似合うのにな…。」

「僕としては…カジュアル？が良いなあ…。」

「やっぱりミニスカートだな」

「ううう…僕は男なのに…。」

「もう好きにして下さい…。」

結局、ミニスカートに…パーカーは許して貰えた。

また集会所

「お姉ちゃん…周りの視線が怖い…」

「大丈夫、私と一緒にいれば襲われないから」

お姉ちゃん…めちゃくちゃ頼りになるう…。

「百合？」

「ロリっ子？」

「？男は…百合なのか？」

とか聞こえる…あれ？前にもこんなあったよっな？

デジャブ？

「悠…君はね…私の助手として出てもらっつよ」

「はい…」

「エカリとクスバには秘密な」

あのポニーテールとツインテール…。

「では座ろっか」

「…今回集まって貰った理由は…」

理由は…？

「キャパシティダウンについてだ…」

キャパシティダウン…。

「それと…ポルターガイストも話合おう」

ポルターガイスト…。

「？男…何か情報はあるか？」

「………あるか？」

ザワザワ…

ざわわっている…。

「教えてくれ」

「代金は？」

「ない」

凄い会話だな…。

「だったら情報は無しだな」

「どうすれば良いんだ？」

「では…心身別々のレベル3以上の奴を連れてきてくれ…それで許そう」

お姉ちゃん…。

「わかった…連れてこよう…いつだ？」

「今すぐだ…」

「一時間…待ってくれ」

一時間後

「なんですか…先輩…俺になんか用事ですか？」

神谷！！？

「そこにいる…お前が女にした元男を元に戻せ」

「わかりました…」

「お手柔らかにな…」

神谷は…拳を繰り出した…。

拳は顎を捉えた。

ばたっ…

「あれ、ここは？」

「起きたか？」

「僕は男ですよね？」

？男は…後退りした。

「いや…実は…」

「？」

「済まない…治らなかった…」

「ニヤニヤニヤ…！！！！！！？」

「本当に済まない…」

「ふえええ〜ん」

「済まない！本当に済まない！許してくれ」

「ヒグツ…僕…男の子に戻れるう？」

「！！！！」

「どうしたの？お姉ちゃん……ヒグツ……」

「萌え萌え〜キュン」

？男は手をハートの形にして言った。

「もえもえ？」

「私は…帰る…！」

？男は逃げ出した。

「お姉ちゃん！！？」

「僕も…病院に行かなきゃ……」

「…あんないい女になるとはなあ…俺がいい女をほっとくわけ無い
だろ…」

背後に…神谷がいるのを気付かない…僕だった。

三十八話（後書き）

「作者あ…僕は元に戻れますか？」

戻れませ…グハツ！

「戻れるよな？」

だから、戻れませ…グハツ！

「戻れるよなああ…」

あ…パンツ見えた。

「見るな！！」

青か……しかも…。

「ニヤニヤするなあ！」

それではまた次回！

「元に戻りたいいい！！！！」

三十九話

「……はあ……」

戻れなかった…ハハハ…僕は、一生女か？

「……」

もう暗い…病院への道…電灯などは沢山あるが…どうしても影はできてしまう…。

「おい…その…」

「はい？」

…二人組で男が近づいて来た。

「ちょっと俺達と遊ばない？」

「嫌です…友達のお見舞いがあ…」

言い切る前に…布を口に当てられた…。

「むう…ん…」

何か薬が…!?!?

「ん…ん…」

僕の意識は途絶えた。

目の前には、はあはあとしながら僕の服を脱がす…変た…神谷が…。

「んっ！！？」

「起きたか…」

「むっんっ」

口にガムテが！！？

「お前に暴れられても困るからな…ちよっと口と両手足を塞がせて貰ったぜ…」

「んっんっ」

パーカーを脱がされ…Tシャツとミニスカだけになってしまった。

「本当にいい女だよな…お前、一生女で良くね？」

絶対嫌だ！！！！

「むむむっ」

「少し煩いな…」

はむっ…

「んっ！」

はむはむ…

「んっんっ…んっ…!!」

耳にくた、助けて…。

「煩い…犯すぞ？」

えっ!!!?

「神谷さん…流石にそれは駄目ですよ」

「薪…お前は相変わらず堅いなあ」

薪さん?…そう言うなら助けてよ!

「むむむ…」

「ガムテを外してやろうか？」

僕は首を縦に振った。

びり…びりびり…

「んっぷはあっ！」

「いい声だなあ……」

何がいい声だ…変態め。

「僕に何がしたい」

「俺の女にしたい」

「！…神谷さん……」

あの薪さん…何かあるな…。

「薪い…俺は別にお前を俺の女にするなんて言って無いぞ？」

へ？薪さんって男じゃ？

「俺は…神谷さんが…好きなのに…いつまで経っても…気付いてくれないんですか……」

びりびりびりびり！！！！

薪さんは自分の服を破った…。

「俺だけを見てくださいよ！神谷さん！！！！」

そこには…ピンク色のブラジャーとジーンズで立つ女の人…。

「薪…お前…俺の事好きだったのか？」
えええ？…えええ？

神谷は僕から手を離して…薪さんと…。

チユツ…

「えええ！！？」

「んっ…」

ちよっと、長くないですか？

「んっ…むっ…」

うわぁ…長い…。

二人が口を離すと…口と口の間…線が…。

「えっ！はい？」

「神谷さん…」

「薪い…」

二人のイチャイチャタイムは暫く続いた。

「神谷さん」

「薪」

ううう…見ててコッチが恥ずかしいよお…。

「あの〜…」

「何だよ」「」

「僕を解放して下さいよ…」

「わかったよ…」

「神谷さんに手出したら…私がお前の××貰うからな！」

えええ…一部言っではいけない言語が出たのでモザイクをつけさせて貰いました…」了承下さい。

361

病院…

「ようやく解放された〜」

僕はこのイチヤイチャタイムのせいで…かなりの体力を消費してしまっただ…。

「観月い〜甦ったかあ…」

「悠君〜！！！！」

ムギユツ!!!

「お兄様アアア!!!」

ムギユツ!!

「岡富イイイイ!!!」

ムギユツ!

「うわっ!!!」

女子三人に押し倒されました。

「お兄様に…私からキスを」

チュツ!!!?

「むっ!?!」

祐希ちゃん!!!?

「祐希さん…やっちゃって下さいな」

クチュ…又チュ…

!!!???

舌が…入ってるよ!!!?

「んっ…むう〜！」

クチュユ……

「「ぷはあっ」「」

「お兄様のお〜ファーストキス〜奪っちゃったあ〜」

ギクツッ！！！！×2

×2のもう一人は…白井さんです。

「な…何やってんだよ！！？」

「お兄様とお〜キスしたかった…キヤツ言っちゃったあ〜」

祐希ちゃん…大胆なのか？

「悠君は…そういう娘が好きなんだ…」

「違いますけど！！？」

「うっ、お兄様…酷いいううう…」

えっ？ちよつと？えええ？

「泣かないで下さいよ…何でもするからな…」

ニヤリッ×2

因みにニヤニヤしたのは美代と祐希ちゃんですよ。

「「じゃあ〜（黒子うち）（白井さん）とキスしてよ〜」」

「「えっ！！？」」

「「キス！キス！キス！」」

えええ！！？何この急展開！！？

「しなきゃ駄目か！？」

「何で私もしなくてはいけませんの！！？」

「「駄目だよ！二人でキスしなよ！」」

何この台詞のシンクロー率。。。

「なんで僕が白井さんとキスなんか…」

「岡富は私とキスが出来ないと？」

え？白井さん？

「私は…遊びでしたのね…」

「はい？」

「私は…遊びでしたのね…」

ええい！どうにでもなれ！！！！

「白井さん！」

「なんですの…。」

白井さんが涙目だよ…可愛い…。

「す…す…すすす…。」

「す？。」

美代と祐希ちゃんがニヤニヤしてる。

「す…すき…。」

「すすき？。」

「好きです！！！！。」

言っちゃったよオオオオオ！！！！

白井さんの顔が紅いし…美代と祐希ちゃんはいタッチしてるし…。

「お…岡富…今なんて？」

もう一度言わなきゃ駄目か？

「好きです…僕は白井さんにスカウトされた時から好きでした…。」

いわゆる一目惚れ……。

「ええと……その……あれ、岡富が私を？……まさか……へ？」
くそう……勘違いだと思われてる……。

「白井さん……」

「なんですの……」

「付き合ってください」

僕は手を出しました。

「ええと……わ……私は……百合趣味はありませんの……すみませんわ……」
……ブチン……

「今の音は？」

「悠君？」

「……白井さん！お兄様が反応しません！」

「えっ……！？」

「悠君」

はむっ……

「……………」

「「「反応がない(ですわ)!!!!」」」

「岡富いい死んだら終わりですの!」

「悠君、帰ってきてええ!!!!」

「お兄様アアアアアアア!!!!」

三十九話（後書き）

岡富いい…死んだか？

「……………」

岡富が力尽きたので次回からはうん…白塚あたりが主人公かな…。

「……………」

……………はぁ…もう今の岡富は駄目だな…。
それではまた次回！

四十話（前書き）

木山を木原と間違えていたので訂正しました。

四十話

……白井さん達は…木山先生と言う人を助けに行った…。

「悠君…観月をよろしくね…私は…サポートしてくるよ」

「……………」

「悠君…やっぱりまだ喋れないの？」

……僕は今…喋れない状態らしい。

コクリ

「悠君…行ってくるよ……」

ボタン……

ブウウウ…ブウウウ…ブウウウ…

メールか…白井さんからだ…。

「……………」

件名、無し

内容、

岡富、起きてますの？

貴方が幾ら落ち込もうが関係ありませんが、私は。
「百合趣味はない」と言いましたのよ？
貴女の力が必要ですの。

白井さん…。

ハハハ…これで行ったら…僕がバカみたいじゃないかよ…。

「悠…哉…」

！！！

観月！！？

「行ってこい…俺は大丈夫だ…」

観月…。

「……………」パクパク…

「喋れないのか？」

コクリ…

「悠哉…とにかく…行ってこいよ」

コクリ…

タタタタタ…

ギィィィ…バタン…

「……………あれ？悠哉に胸が合ったような？」

気のせいではない。

高速道路のアンチスキルvsブルーマーブル

「ふういいい弾があ…そろそろ無くなりそうですう…」

「でもやるしかないじゃん！」

…銃弾交わる戦場…僕は…飛び出した。

「おい！馬鹿！飛び出すなじゃん！！！」

「……………」

僕の心配より…自分達の心配をしてほしいな…。

僕には…拡散力場内に能力者がいないと…普通の学生でしかない…。

けどな…俺の能力には…メモリー…つまり…記憶可能なんだよ！！！！

「……………」すううう…

「こちら…ブルーマーブル、学生一人に怪我をさせるかもしれませんが…良いでしょうか？」

「そんなの構わねえんだよ！こっちはなあレールガンと戦ってんだよ…！！」

…レールガン…御坂さんか…。

「僕には…偽物になる事しか出来ねえがよ…」

「学生への攻撃許可が出た…今から攻撃を開s…」

轟音…………。

周りの空間を…轟音と…爆発が支配した。

「ほええええ…！！」

「なんじゃん！あれ！？」

「最低でもレベル4ですよね…！？」

……………違うレベル0だ。

「次は…レッドマーブルか…」

「お前、誰じゃん？」

「……………風紀委員です…テレスティーナの仲間全員を確保しに来まし

た……」

僕には……偽物になる事しか出来ない……けどな……偽物が本物を越えられないと……誰が決めた？

I a m a p r e t e n d e r .

四十話（後書き）

木山を木原と間違えるなんて…全然キャラちがうじゃないか!!!

「木原くうん!!!」

「木山先生!!!」

上は一方通行

下はて誰だっけ？

こんなにも違う…。

「モルモットの真似事なんかするかよ!!!」

「あの子達を護るためなら…この命を悪魔に売ったって良いさ!!!」

キャラが違いすぎるウウウ!!!

四十一話（前書き）

くそう…まだ木原君が生き残ってやがったぜ…。

と言っことでまた直しました。

四十一話

「こちら…レッドマーブル…応援をたの…ウワアア…」

ブツッ…

「こちら…グリーンマーブル…ウワアアア…!!」

ブツッ…

「こちら…イエローマーブル…学生に…ウワアアア…」

「なんなんじゃん…この状況は…?」

最初のブルーマーブルはあの少女からの炎で燃やされた…。

次のレッドマーブルは何かに潰された様になっていた。

グリーンマーブルは水でショートしていた。

イエローマーブルは装甲の隙間に何か色々と挟まっていた。

…とすると…犯人は最低四人位じゃん…。

が…目撃情報だと…全員が…黒髪…オレンジ色の瞳の少女だって言うじゃん…おかしい…。
…とあるアンチスキルの後日談。

「……ようやく…最後か…」

最後の部隊…ホワイトマール…。

「まさか…この少女が…」

ホワイトマールは全員…コチラに銃を向けて。

「大人しく両手を上げるんだ…」

お望み通り手をあげたよ…けどな…大人しくは守れないな。

手をあげて…。

「夢与物語同調」

黒い翼が…太陽の光を浴びた…。

「なんだ？あの能力！！？」

「自分で考えろよ…ジジイども」

「ウワアアア…手があー!!!」

「目が目があぁ…」

「おえ…ぐええ…」

どんな夢かは…想像にお任せします。

「さあて…僕の仕事は終わったかな…」

「おい…お前がやったのか？」

後ろから聞こえるので振り返ると…そこには…不良集会で仕切っていた人がいた。

「…そうですが？」

「お前、風紀委員だろ？なんで大人を…？」

「…仕事ですから」

「なるほどな…ところで、お前買収って言葉知ってるか？」

「……………」

「俺達にはさ…マーブル部隊を次々と倒してる学生を倒すって仕事があるんだよなあ…」

不良の後ろには…約五十人位…不良がいた。

「誰から殺るんだ…風紀委員？」

「……………全員一気にな……………」

まず、相手の能力の確認…。

おお…五十人もいるから…結構能力があるな…。

僕の能力で記憶できる能力は…全部で七つまで…。

現在のストック…。

瞬間移動
炎撃使い
貴方空箱
夢与物語
重量操作
電撃使い
敗北之王

の七つだ…。

まずは…電撃使いかな…。

パーカーから…小銭を取り出し。

チリイイイン…

「なんだ？」

電撃を…指先に込めて……………。

ヒユウウウ…

放つ!!!

バチイイイイン!!!!!!

「ウワアアア！」

「れ…レールガン!!!？」

等聞こえるが…勿論無視。

「怯えるな！多勢に無勢だぞ!!!？」

「…夢与物語同調」

白い翼で空を飛ぶ…。

バサッ!!!

「と…飛んだ!!!!？」

白い翼を放つ…。

「ギイヤアアア！」

「死ぬうう！！！」

「萌え〜」

…最後のは無視だな。

「まだやるか？」

…不良群は…逃げ出した。

ばたっ…

僕も…疲れたな…。

「お前、しっかりするじゃん！」

「死んじゃ駄目ですよお！！！」

「担架を！急ぐじゃん！！！」

…女子の身体は…体力がないなあ…。

僕の意識は…途切れた。

次の日…

「そうですね富」

「なんですか…白井さん…」

僕は無事に生還した…今一七七支部で雑用をしている。

「もうじき…木山の誕生日で…貴方をお願いしたいことがありますの…」

ううう…上目遣いで僕を見るなあ…。

「ううう…」

涙目で見るなあ…。

「お願いしても…良いのですのお…?」
可愛いイイイイイイイイイイイイイイ。

「じゃあ…ノートとプリントね…」

「ありがとうございますの！お礼は気持ちといついで……！」

うっう……酷い。

頼まれた内容は……ビデオ撮影……。

「木山先生！」

「お誕生日……おめでとう……！」

僕……頑張ったのにな……この扱い……何？

「ありがとうございますの……お礼をしますから……目を閉じなさいな……岡富」
どうせさ……からかって終わりだろ……はあ……。

僕は目を閉じた。

チュッ……

ん？

「あれ〜風紀委員のお姉ちゃん達い…何やってるのお？」

目を開けると…目の前には白井さんの顔……………。

ブチン…

「岡富？」

「黒髪のお姉ちゃんどうしたのお？」

「岡富！起きなさいな！！！」

「まさか…死んじゃったの！！？」

「お…岡富イイイイ！！？」

四十一話（後書き）

改めて考えてみる。

一方通行って性別どっち？

見かけとかは完全に　だけど…名前は鈴科百合子でしょ…　なのか
な…？

「べ…別にお前のたまじゃないんだからな…!!」

オエ…キモ。

「てんめえ…三下の分際だよ…」

一方通行さん？貴方が攻撃したら…僕死んじゃ…ギヤアアアアアア
アアアア…!!

「皮を三割剥いで生きてたら許してヤンよ…!!」

し…死ぬ！

四十二話

…ああ…だるい…。

「今度の大覇星祭について…何か意見がある人は拳手を…」

「はい…」

僕は手をあげた。

「…岡富……さん」

「僕は借り物競争には出たくありません」

「女の子なのに僕は駄目だぞ！なあ山崎！」

「おうよ！それにお前のブル…体操服姿が見たいしな！」

ブルマって言いかけたな今…。

「僕にレベル5の相手をしろと！！？」

「では…岡富さんの借り物競争参加に同意の人は拳手を…」

僕以外の皆が手をあげた。

それ以外にも…コスプレ競争とか、佐藤との二人三脚とか、そういうのしかさせて貰えない。

「僕より適任な人は沢山いると思います！」

「元男のお前が女子の中では現在トップなんだよ……！」

「もし男に戻れたらどうすんだよ！」

僕が……心身別々を同調したら戻れるんだからな……！！

「戻るな……！」

「酷いな……！！」

という会話をいきなり話しても……わからない筈だし……少し遡る。

「悠君……学校は？」

「いけませんよ……この姿じゃ……それに制服もないし……」

「制服なら……持ってるよ！」

は？

「持ってるよって……え？」

「黒子っちがあ……もし岡富が学校に行かないと駄々を捏ねたら……っ

て
」

まじすか…？

「じゃあ…着替えさせてアゲル…」

美代が…制服を手に…迫る…観月もいるが…興味はないみたいだ。

「僕は男ですよ？」

「関係ないもおん」

「……諦めなよ…悠哉…」

「嫌だアアアアア！…！」

数分後…僕は鏡を覗いた…そこには…普通に女の子が写った…。

「……はぁ…行ってきます…」

「行ってらっしゃいのキスは？」

「そんなものはない！」

僕は寮を飛び出し…。

「悠哉ぁ…転ぶなよあ…」

ボテツ！

転んだ。

「痛い痛い」

「だから…転ぶなよって言ったのに…」

観月が心配そうに見てる…。

「何処も怪我はないみたいだけど…痛い？」

僕は頷いた。

「……………俺は逃げる」

何故か急に観月は逃げ出した…なんでだ？

「岡富い！ついに女子に目覚めたな！」

「なんだよ！胸パットまでつけたのか！」

…佐藤と山崎…。

「あれ？」

「背縮んでないか？」

「…変なところに気がつくよなあ…」

「まさか…誰かに心身別々でも使われたのか…!?!?」

「名答…。」

「もしかして神谷じゃねえの!?!?」

「なんでそこまで知ってるんだよ…!?!?」

「俺達と神谷はな…友達だぞ…!?!?!?!?」

「台詞同調…!?!?!?!?」

「じゃあ…神谷に僕を戻す様に言ってよ!?!?」

「友達ならできるはず!?!?」

「全力で断る…!?!?!?!?!?」

「酷いな!?!?」

「言っただけいいか?」

「勿論だよ!?!?」

「だったらさ…!?!?」

「俺たちの命令を聞いてもらおうか…!?!?」

「め…命令…!?!?」

「俺からはさ…耳をあまがみさせてくれよ…」

コイツ…僕の弱点を把握してるのか…!?!?

「コツチはあ…胸を揉ませろ…!」

「この変態ども…!」

「…神谷…!」

う…。

「耳をあまがみするのなあ…!」

「佐藤…行きまあす…!」

はむっ…

「ニヤっ…!」

はむはむ…はむっ…

「に…にゃあ…!」

…ここはまだ通学路だぞ!

周りに人がいないのを良いことに…。

「胸…揉むぞ…!」

モ…

「ひっ…」

モニユ…モニモニ…

「ひゃあ…ひゅう〜」

「わぁおっマジで胸じゃん!〜!」

「「せえの!」」

モニユ…はむっ…

「ニヤアアア!〜!」

「「明日、神谷に言ってやるよ」」

こいつら…。

「それで忘れてた…とかになったら…殺すからな?」

学校内…

なんとか、変態二人の試練を潜り抜け…学校についたと思ったら…。

「岡富君！」

「いや…岡富ちゃんでしょ！」

女子の猛攻！！？

「いや〜胸大きいね〜」

「ちよっ…やめろ…僕は…男だぞ…キヤッ」

「駄目でしょ！今は女の子なんだから男言葉禁止！」

くそっ…女子がこんなにも怖いとは…。

き〜ん〜こ〜ん〜か〜ん〜こ〜ん

教師が教室に入ってきた。

「今日は間近に迫った大覇星祭について話し合っぞ…て言っか…岡富…お前女装癖でも？」

「先生！岡富君は心身別々のせいでこうなりましたあ！」

佐藤…説明ご苦労。

「だったら良いか…岡富、お前女子として出る」

それで良いのか？学園都市！！？

「岡富君にはあコスプレ競争に出てもらいたいです！」

山崎いい！！？

「僕は出たくない！」

「悠哉…諦めなよ…」

観月い！？

「俺と一緒に二人三脚するか！！？」

佐藤！！？

「よし、二つとも採用で…」

「ええ！！！！？」

で今に至るわけだ。

「…先生…僕を殺す気ですか？」

「死なないだろ」

身勝手な！！？

「観月も何か言えよ！！！」

「諦めも肝心」

「ふざけるなあアアアアアアアアアア！」

四十二話（後書き）

「性転換ネタ止める！」

言われなくても飽きた。

「だったら止めるよ!!！」

そろそろ止めるよ…じゃあまた次回。

「男に戻るのか!!？」

四十三話

「只今より…借り物競争を始めます…参加者の皆さんは…指定の場所に移動して下さい…」

はあ…憂鬱だ…。

佐藤はカメラを構えながら…。

「岡富い！お前のブル…有志を納めてやるからな！！」

また佐藤がブルマって言いかけた…。

「行つてきまあす…」

参加者は…僕と御坂さんと…その他もろもろ。

「位置について…」

緊張がつつむ…。

「用意……」

ギリギリ…。

「ドン……」

皆一斉に走り出した…。

「…借り物競争ですね…ええと…場所はここだから…」
来てくれるかな…。

「あと、五分で着きますわ…待ちなさいな」

五分……………。

「オオオリイヤアアア!!!」

「御坂アアア!!!止まれエエエ!!!」

御坂さんがツンツン頭の高校生を引きずって来た。

早い!!!?

シュンツ!

「お待たせですの」

コツチも速い!!!?

「じゃあ行きましようか!」

白井さんの手をつかみ…ゴールに向かった。

二着でのゴールだ…御坂さんは速いなあ。

「二人三脚に参加する選手は…× 高校のグラウンドまで集合して下さい…」

「やば！次までが速い！！！」

「佐藤ウウウ！！！！急ぐぞオオオ！！！」

……………。

「来ない…」

「急ぎなさいな岡富…」

「白井さん…相方がいないんですよ…」

「早く探しなさいな…」

奥の手…使うか…。

「今日のパンツは…」

「何色…！？」

……………来た…。

「ほら、二人三脚に急ぐぞ」

「パンツはあ？」

「急ぐぞ……」

× 高校……

「位置について……」

ううう……佐藤の視線が前じゃなくて……直接僕を見る……。

「用意………」

「……ブルマ……」

キモい……！……！

「ドン……！……！」

僕達は……いきなり転んだ。

「」「ギャッ……！」「」

……結局、最下位でした。

「コスプレ競争に参加する選手は……」

また速い！！？

「急がなきゃ！」

コスプレ競争会場

「この中から衣装を選んでください」

衣装の中には…セーラー服、ナース、メイド、ミッーマウスの着ぐるみ、タキシード、等々……。

「岡富い！ナースを着るんだアアア！！！」

「お兄様アアア！タキシードを是非イイイイ！！！」

佐藤は…って祐希ちゃんもいるし！！？

「お兄様には…男装の麗人を……フへへへ………」

祐希ちゃんがまた壊れた！！？

けど…動きやすいのは…さっきの例には入ってないけど…チアリーダーが動きやすそうなんだよな…。

「全員の選手が着替え終わりましたので…選手と衣装の紹介します…」

外野が騒ぎ出した。

「まず、一番レーン…常盤台中学二年…婚后光子…衣装はメイド服です」

…何処かで見たとあるような…。

「二番レーン…柵川中学一年…佐天涙子…衣装は…セーラー服」

あつ、初春さんといった人だ。

「三番レーン…同じく柵川中学一年…初春飾利…衣装はミッキーウスの着ぐるみ」

あれ、初春さんだったの!!?

「佐天さあん…動きにくいですよお…」

「初春う我慢しなよ白井さんが睨んでるよ」

白井さん!!??

「はい！何処ですかあ!!?!?」

「うっそおいないよお!!」

「もう、佐天さんったら…」

「四番レーン…一番レーンと同じく常盤台中学一年…湾内絹保…衣装はチャイナ服」

常盤台からも二人なんだ…。

「五番レーン…岸岡中学一年…岡富悠子…衣装はチアリーダー」

悠子!!!?

お母さんと今は同姓同名になってるよ!!!?

「以上五人です…」

「位置について…」

僕達五人に緊張と外野連中に…。

「パンチラあるかな…」

「胸とか揺れるかな…」

とか…嫌な希望が生まれた…。

「ヨイ…」

……。

「ドン！ー！！」

「おわぁっ！」

初春さんがいきなり転んだアアア！！！！

「ミッキーマ スが転んだぞ！」

「ミ キーマウス痛そー」

いや…ミッキーマウ から離れようよ…。

現在トップは僕で後ろから…湾内？って言う人が追いかけてくる…。

「岡富い！大変だ！」

佐藤は煩いな…。

「お前の胸…」

また変なところ…。

「かなり揺れてるぞ！」

「ううううううさぁいいいい！！！！」

このペースを保ち続ければ勝てる！

ところが。

「初春の分も走るんだあアアア！！！！」

佐天さんの逆襲！！？

「はあはあ…皆さん…速すぎですよ…」

「少しは…手を抜きなさいなあ……………」

初春さんと婚后？さんがビリ決定戦を頑張ってる…。

「一着…岡富悠子」

「二着…佐天涙子」

「三着…湾内絹保」

「四着…婚后光子」

「五着…初春飾利」

……………
疲れたな…。

とりあえず、午前の部の僕の競技は終わった。

「岡富…お前のチア姿をしっかりとムービー撮ったからな！」

「すぐ消せ」

「……………もう遅い…もう山崎に送ったからな！！！」

「さ…佐藤！！殺す！！！！」

その後…佐藤の原型は…無くなった。

「悠君、お弁当作ってきたよ」

「……………」

美代と観月が来た。

美代の料理は…流石僕のクローン…僕と同じ味になった。

「モグモグ…」

「悠哉…そのゴミ…何？」

おお…流石観月…原型が崩れてもコイツがゴミだと気づいたか。

「てゆうか…何で女子のままなの？」

「……………神谷が大怪我して今は面会拒否なんだよ……………」

事実である…佐藤は約束通り神谷に会わせてくれた…が…。

「神谷あコツチコツチ！」

「今いくから待てよ……………」

神谷が道路を渡ろうとしたら…。

キキキイイイ！！！！

「マジで！！!?」

バアアアン！

トラックに引かれました。

……………早く男子に戻りたい。

「悠哉…パンツ見えてるから隠して」

「おわぁー！」

「……………フッフ…今日は白か…フッフ」

「この変態！！！！」

バチイイイイイン！！！！

佐藤の原型は更に崩れた。

四十四話

僕は…午後の部に1つだけ出る…僕はその競技をやるためだけに大覇星祭に出ていると言っても過言ではない。

「これから、男女混合組み手大会を始めます!!!」

この時間を…どれだけ待ったか…。

「まず一回戦…岸岡中学代表vs色彩中学代表の対戦です!!!」

相手の色彩中学代表は…例えると…ゴリラ。

「女だからって…手加減はしねえからなあ…」

……………ふう。

「試合開始!!!」

ドゴッ!!!

「……………」

ゴリラ君は…倒れた。

「何て言う速さだ!!!岸岡中学代表!!!女子がああの巨体を一発で伸してしまいました!!!」

…説明すると、僕は試合開始と同時に膝蹴りをゴリラ君の鳩尾に喰らわした。

「では次の試合を……」

僕はリング？の上から降りた。

まずは美代が。

「スゴいよ悠君！あのゴリラ君を一発なんて！！！！」

「どうも……」

原型を崩した箸のゴミが。

「……………岡富の有志が短すぎる……」

「お前は見なくても良い」

最後に観月が。

「……………悠哉……次も負けるなよ」

「わかってるって」

次の二回戦の相手が決まったかな？

ええと…。

二期町中学…何処だよ……………？

「二回戦を開始しますので岸岡中学代表と二期町中学代表はリングに上がって下さい！…！」

僕はリングに上がった。

今度の相手は…女の子だった。

「よ…よろしくお願いします…」

うわぁ…こつこつ相手が一番殺りにくいんだよなぁ…。

「試合開始！…！」

「と、とりいちゃあ」

手を回しながら近づいてくる……………。

「可愛いイイイイ！…！」

とか周りから聞こえる。

「えいつ」

女の子のパンチ？をかわして…女の子の首の後ろを…。

ガッツ！

「岡富い！テメエ手を抜け！！！」

もう遅い…。

さっきのゴリラ君は力業だけど、この娘には神経を麻痺させたただけだし…。

「またもや一撃で相手を倒しました！岡富選手はどこまで行けるのでしょうか！？」

さあ？決勝までは行くけどな。

「三回戦目はこのまま行きます！」

…僕の前にもう別の二回戦は終わったのかな…？

「三回戦目…岸岡中学代表vs常盤台第2代表の対戦です！」

…常盤台には第2代表とかあるのか…。

「お…岡富君？」

ん？相手は…。

「み…御坂さん？」

御坂さん!!!?

「へえ…岡富君ここまで来たんだあ…」

「御坂さんこそレベル5なのにこんな大会に出てていいんですか？」

「組み手大会にレベルなんて関係ないでしょ？」

「確かに…ですね」

「試合開始!!!」

御坂さんは僕に回し蹴りを繰り返した…僕は蹴りをしゃがんでかわし…そのままサマーソルト…が御坂さんにはあたらず…最初の体制に戻った。

「岡富君はやっぱりやるわね…」

「御坂さんがここまで強いとは…思いませんでした」

御坂さんは容赦が無い…上段蹴りを顔目掛けて繰り返した…また僕はしゃがむ羽目に…。

僕は…しゃがんだまま、御坂さんの足を払った。

「うわっ!」

御坂さんのバランスは崩れ、倒れたところにすんだめの裏拳…。

「ま…参りました…」

「わぁーい！御坂さんに勝ったーわぁーい！」

「あ…岡富君…次の対戦相手は…く…」

「良かったねえ悠君！」

「岡富い！優勝しまえよ！優勝！」

「……………白井さんか…」

「イエーイ！勝ったあ！！！」

御坂さんと観月が何か言っただけ…何だ？

「決勝も勝つてやる！！！」

「参りました…」

僕は土下座した。

「おおおと！！！？岡富選手…いきなりの試合放棄かあ！！！？」

「岡富…偉いですわね…先輩を立てるなんて…」

白井さんが決勝の相手なんて…くそう…。

「ほら、審判さん…試合結果を伝えなさいな…」

「ゆ…優勝は常盤台中学代表の白井黒子選手です…!!」

「ハハハ…岡富…君…次があるわよ…」

「悠君…ドンマイ!!」

「岡富い…諦めも肝心だぜ…」

「……佐藤…俺の台詞を取るな…」

「ハハハ…白井さんに…手を出せるわけないだろ…ハハハ…」

こうして…僕の大覇星祭は終わった。

四十四話（後書き）

いやあ……岡富……ドンマイ！

「ハハハ……白井さん……ハハハ……」

あああ……岡富がまた壊れた。

「白井さん……ハハハ……」

なんかヤバイ人の台詞に聞こえるな……。
岡富は放っておいて……それではまた次回！

「白井さん……ハハハハハハハハ」

四十五話（前書き）

最初岡富目線から観月目線に変わります。

四十五話

「神谷さん」

「薪」

……またこの二人は……。

「お前は何でいるんだよ？」

「神谷さんに復讐……というのは嘘で少し心配なんですよ」

復讐のしまで言ったら……薪さんに睨まれました。

「神谷さんは渡さないからな！」

「コラッ薪……俺はこのチビには興味なんてないし……俺はお前が好きなんだよ」

「神谷さん……」

「薪……」

……。

「無事みたいなんで僕は帰りますよ」

「まだいたのかよ？」

……。

病院前…。

「よっしゃあ！」

僕は思わず言っちゃったよ！！

だって戻れるんだよ！！！！

男に！！！！

「　　」

一七七支部

「観月い！！！！」

「……おかえり」

「僕…遂に男に戻る！！！！」

「えええ…義妹があ…ううう…」

「…………良かったね」

二人はあまり乗り気じゃないな……。

「レベル4だと…発動条件も違うみたいなんだよ!」

「発動条件はなんなの?」

それは…!…!

「…………デコピン」

「「は?」「」

「観月!僕にデコピンしてくれ!…!」

「良いけど…」

観月は立ち上がって……。

ペチン

「……………したよ?」

プシュー…

「悠君!…!?」

僕の体から…煙が……。

「ゲホッ！ゲホッ！」

煙い！！！！

「……………悠君…？」

「悠……………哉？」

二人は何故…僕を見て？がつくんだよ…。

「僕の身体がどうしましたか？」

「いや…胸はないけどさあ…。」

「……………鏡を見てこい」

？

僕は洗面所の鏡を覗いた…。

「????????????」

そこには…片目の黒目の部分が…真っ赤になってる僕が…。

「悠君…眼え真っ赤だよ…。」

「悠哉…ドンマイ…。」

いわゆる……………。

「これってオッドアイってやつかな？」

二人は…首をすごい早さで縦に振りまくってる…。

「……カラーコンタクトでもつける？」

「悠君…そのままでも良いんじゃないかなあ？」

僕は…眼に異物を入れるのに抵抗があるので結局そのままにしたよ……。

数時間後

「ふあああ…悠君…おやすみ…」

「悠哉…明日は学校だからね？」

「行くよ…勿論行くからさ…」

ううう…この眼で行くのか…。そうだ！？男に聞けば…何か目の色を変える手段があるかな…？

次の日

「悠哉…先に行くよ？」

「悠君 私はお散歩に行つてくるね」

……二人が先に出た…よし研究所に行くかな。

旧後藤研究所

「あら、岡富様ではありませんか…」

「……………うう…」

…エカリとクスバだっけな…二人は常盤台中学の制服で学校に行くつもりみたい…はっ！！

「？男はまだここに居るかな？」

「ご主人様はまだいますよ？」

「……………」

「ありがとう…会つてくる！」

僕は研究所に向かって走った。

ドアを開けると…。

「おや！悠じゃないか何か用かな？」

「？男お姉ちゃ…じゃなくて…僕の左目を見てくださいよ！」

「…カラーコンタクトかい？」

「じゃなくて…心身別々を同調して使ったら…」

「とりあえず、目の色は戻るよ」

「！！！！」

「本当ですか！」

「しかしだな…君のレベルは4かな？」

「そうですね？」

レベル4だと何かあるのか？

「…寝るときには気をつけてね」

「はあ？」

僕は…？男さんと途中まで一緒に登校した。

常盤台中学

「……………エカリい……………」

「何、クスバ？」

「あの岡富って人の事なんだけどさ……………」

「もしかして惚れちゃったの？」

「違う……………ご主人様が惚れてるんじゃないかって心配なの……………」

「ご主人様が？まさか……………ご主人様は男に興味なんて……………はっ！」

「あの人……………一時期女の子だったんだよね？」

「や……………やばいかも……………」

岸岡中学

悠哉は遅刻してきたけど目の色は戻ったらしいけど。

「……………であるからして……………この公式は……………」

「じゅっ……………むっ……………んっ……………」

悠哉は眠そうだな…。

「悠哉…眠いの？」

「うん…先生にバレそうになったら起こして…すう…すう…
寝るの早…！」

「…悠哉…」

「…すう…ん〜」

「あれ？」

悠哉が…小さくなってるよじな？

「しりゃいしやあん…ん〜」

「…！」

声が…高いな…。

「…になるな…よし、観月この計算わかるか？」

先生に指されたな。

「 $3x + 4y - 6$ です」

「正解だ、次は…後ろの…」

悠哉が指される…。

「…悠哉…起きて…悠哉」

「…ふにゅっ」

…やっぱり悠哉の声が高い様な気がする…。

「岡富…この計算わかるか？」

「…6y - 10z - 41ですかあ？」

「正解だ…岡富はまた女の子になったのか？」

「え？」

「お前また胸があるぞ？」

悠哉…？

「先生！岡富の写真を撮っても良いですか！！！！」

「授業が終わってからしろ」

「はい…」

……山崎が違うクラスで良かった…。

「せ…先生…」

「なんだ…岡富」

「…保健室に行つて来ても良いですか？」

「駄目だ…今は授業だからな」

「ううう…佐藤の視線があ…」

「…悠哉は女の子に戻れるのかな…」。

四十五話（後書き）

「さ…作者ああ！」

岡富…男には戻れたじゃないか？

「一瞬じゃないか！！！」

フッフ…最近ストレスが溜まってるからな…岡富…お前で解消してんだよ。

「…この…！」

痛い痛い…手を回しながら近づいてくるな…。

「むむむむむむむむうっ〜」

可愛いなあ…。（ー）

はむっ

「にゃっ！」

それではまた次回！

「み…耳をあまがみすんな！！！」

四十六話

……ううう…。

「今日のHRはここまでだ、日直」

「起立」

やっと学校が終わる…あ、立たなきゃ。

「さようなら」

「観月、帰る」

観月は…少し戸惑いながら。

「わかった」

僕は教室を出て昇降口に向かうのだが…。

「観月のやつ…いつの間に彼女を…」

「ううう…観月君を狙ってたのにい…」

「てゆーか、あの子誰だ？」

とか聞こえるが…やはり無視。

「観月、急ご」

観月の手をつかんで走り出した。

「わっ………」

観月は何で驚いてるんだ？

急に手を捕まれたら誰だって驚くかな？

「…悠哉……」

「何？」

「？男つて人の所に行こう」

………僕が言おうとしてたのに……。

「僕も言おうとしてたよ、行く」

………観月の顔がさつきから少し赤いのは気のせいだよな。

「ご主人様はまだ学校ですので…」

「……座って下さい」

お姉ち…？男はまだ学校か…。

「……悠哉…」

「何？」

「デコピンしたらまた男に戻れるんじゃないかって俺は思うんだけど…」

……先に言えよ。

「じゃ…じゃ…」

僕は、眼に指先が当たりそう…とびびっていたので目を閉じた。

「……キス待ちの顔だ…」

キス？

「行くよ…」

ペチン

……………あれ？

「み…観月、戻らないぞ？」

「……………」

戻れない…嘘だろ…。

「ご主人様が来ました」

「……………」

扉が開いた。

「悠…昼寝しちゃったのかい？」

昼寝？

「……………居眠りしちゃったけどさ……………」

「あああ…やっぱりね」

何が？

「何がやっぱりなの？」

「レベル4程度だと…意識が無くなったり…集中し過ぎると心身別々が解けてしまうんだよ」

はい？

「だ…だったら神谷は車に引かれて意識を失ったけど僕は女の子のままですよ？」

「もし神谷が君に能力を使った時までは…レベル5だとしたら？」

は？

「神谷がレベル5？」

「彼はね私の能力開発を受けたんだよ…まさかそこまでレベルが上がってたなんて…知らなかったよ」

「？男さん…」

「なんだい？そこの…パイロキネシスト君？」

「悠哉は元に戻れますか？」

そこが重要だった…。

「無理」

（ ; ）！！

「う…嘘ですよ？嘘って言ってくださいよ」

お姉…？男は…下を向きながら…。

「………言っただけなら言っただけ……事実は変わらないよ…」

そんな……。

「う」

「悠哉？」

「悠？」

「……ひぐっ……しぐっ……ふええん……」

「な……！？」

「悠！？」

戻れない……うわああん……。

「ひぐ……戻……り……ふええん……ひぐ……しぐ……」

「悠哉……落ち着いて……」

「悠、そんなに女の子が嫌か……」

「嫌あ……だよお……ひぐ……うっ……うっ……」

「……少し……目を閉じて？」

「うん」

僕は目を閉じた……すると。

ペチン

デコピンされた…。

「……とりあえず朝7時〜夜5時までの間は男になれるよ」

へ？

「本当に？」

「だけど、さっき言ったみたいに、眠ったら寝てる間は女の子だし…完全同調の能力とかで計算式が難しい能力とかを使っても女の子に戻っちゃうからね？」

………昼寝したら佐藤と山崎に殺られるな……。

「お姉ち……？ 男さんありがとう……」

「ああ……それと私は暫くないから……次いるのは……三日後位かな？」

………三日って何をしてるんだらうか。

「帰ろ……観月」

「ああ……」

帰り道…

「いやあ…少しだけでも戻れて良かったあ…」

「本当に良かったね…」

帰り道を二人で歩いていると…前から…（白）をイメージさせる…少年と。

「ねえねえ一方通行ってミサカはミサカは可愛く尋ねてみたり」

御坂さんを小さくしたようなミサカと何故か連呼する少女がいた。

「なんだよ…」

それに…一方通行って…。

「あそこにあるパフェを食べたいってミサカはお願いしてみたり！」

「駄目だな…」

一方通行…なんで…なんで学園都市最強の一方通行が…ここにいらんだよ？

「……観月……」

「何……？」

「今すぐここを離れたい……」

「わかった……」

僕は……一方通行から逃げ出した……相手は僕に何も興味はない……しかし……僕は……。

「ブウブウってミサカは軽く拗ねてみたり」

「早く帰るぞ……」

一方通行から……血の匂いがしたように感じたんだ……。

四十六話（後書き）

「……………あの子……………」

岡富…良かったね制限つきで男に戻れてさ。

「……………もしかして……………」

岡富は考え事してるみたいなので…それではまた次回！

「……………御坂さんのクローンなのか？……………」

路地の中とは言え…すぐそこは道だ…。

「うわぁ…」

「風紀委員どうしで…うわぁ…」

「女の子の方嫌がってるのに…」

ギヤアアアアアアアア僕が大ダメージ!!!

「白井さん！落ち着いて下さい!!!」

「私は誰ですの…お姉様…もう知りませんわ…私に黙ってあちらがわの世界に入るなんて…」

……白井さん顔が真っ青…。

「白井さん！」

「岡富…なんですの…私はもうダメですの…あぁ…」

「御坂さんがサブマシンガンを持つ理由がわかりません」

「もう疲れましたわ…岡富ッシュ…」

岡富ッシュ!!!??

「白井さん！御坂さんは短パンをスカートの中にはいてますよね？」

「お姉様は…あのような無粋な格好を…」

「あのミサカさんは…短パンをはいてませんでしたよ?」

白井さんの顔に黒い笑顔が……………。

「フへへへ…今ならお姉様のは…パンツを…」

白井さん?

「白井さん…落ち着いて……………」

「お姉様アアアアアア今行きますわアアアアアアアアアア!!」
「!」

シュンッ!

「白井さん!!?」

白井さんがレポートであのミサカさん…いやミサカさんのパンツを狙っているみたいなので…。

「やばい!…!」

シュンッ!

何故今の状況になったのか…思い返してみる。

ブウウウブウウウ…

「電話か…」

僕は久しぶりの男としての日を楽しんでいた。

「もしも……」

「岡富いい！白井ですの！先程お姉様が野蛮人に襲われてますの！至急地下街に来なさいな！！！」

野蛮人？襲われ？

「今すぐ行きますから落ち着いて下さいよ？」

そして白井さんと合流して御坂さんを探していた…そしたら先程の状況に陥ったのだ…。

「お姉様のパンツ…フへへへ……」

「白井さん！落ち着いて！」

白井さんはかなり足が早く…追い付けなそうだ…。

「お姉様アアアアアアアア!!!」

「……っち」

シュンッ!

「お姉さ…ポピっ!」

今じゃもうお馴染みな首の後ろへの攻撃が見事に決まった。

「白井さん……」

勿論呼びかけに答える筈もなく…。

「……常盤台に運ぶかな……」

常盤台中学の女子寮へと侵入することが確定しました。

ブウウウ…ブウウウ…

「また電話か…もしも…」

「あの、すみません私はエカリです」

エカリとクスバの…アッチか。

「エカリさん…何故僕の番号を?」

「ご主人様が楽しそうに電話をかけようか迷っているところを見て

ましたので」

楽しそうに？

「で、なんの用ですか？」

「私が貴方をナビゲーションしますので…常盤台中学まで頑張ってください」

数分後！

エカリさんの見事なナビゲーションのお陰ですぐに着いた。

「エカリさん…ありがとうございます…」

「ご主人様を哀しませたら…フッフ」

がちゃ…

こ…怖い…。

「白井さんを置いて…早く逃げなきゃな…」

白井さんをベッドに寝かせて…。

「ん？」

足下に熊のぬいぐるみが…。

「何だコレ？」

熊の背中からは…一枚の紙が…。

レールガン軍用モデル…妹達…。

「は？」

僕は…その紙に一通り目を通した…。

「一方通行…」

レベル5の頂点…一方通行。

「御坂さんが哀しんだら…」

白井さんが哀しむ…。

「それによ……」

クローンが傷つけられて……。

「悲しまねえわけないよなあ………」

一方通行だけは許さねえ。

四十八話（前書き）

前書きにも書いておきますが…勘違いです。

「コイツ…知らないふりして乗り過ぐす気がよ…絶対に許さねえ。」

「てめえが幾ら学園都市の頂点だとしても…俺に1%も勝率が無いとしても…」

「妹達の実験はもう終わ…」

「黙れ!!!!!!!!!!」

「あ？」

殺す…殺す…殺す。

「てめえはもう喋るな…殺してやるよ」

「………つち話が解らねえ三下だなアオイツ!!!!!!!!!!」

一方通行の拡散力場の解析……………。

「行くぞオ……………三下アアア!!!!!!!!!!」

一方通行が…目の前に迫る！

一方通行の拳をしゃがんでかわし…バク転で距離をとる……………。

「やんじゃねエかよ三下アアア!!!!!!!!!!」

「黙れモヤシ！てめえごときが僕に触れられると思うんじゃあねえ

一方通行……………。

「殺りあおうぜエ！三下アアア！！！！」

「一方通行同調！！！！」

僕の頭の中に…計算式が…流れ込んでくる…計算を…させられて
る……………。

「死ねよ！！！！」二人同時に拳を振るう…。

拳と拳が当たる……………。

次の瞬間……………。

ズバアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！！！！

拳と拳の間に…壁が生まれた…目には見えないが…確かにそこにあ
る……………。

反射と反射がぶつかりあった……………そこには…破壊の旋律が流れた。

僕と一方通行はお互いに吹っ飛んだ……………。

「「がつ！！！！」

「てめえ！エレクトロマスターじゃねエのかア！！！！」

「俺はレベル0だよ！レベル5のクソヤロウ！！！！！！！！！！」

レベル4並の能力の筈なのに…何故レベル5と相討ちになったんだ？

ベクトルの変換…それは向きを変えるだけであって向きを変えるのに力も何も無い……………。

恐らくは…僕の一方通行には制限時間があるだろう…15分位かな……………。

「これならどうだア！三下アアア！！！」

一方通行は両手を高く上げて…。

ギョルルルルルルル！！！！！！！！！！

「……………」

パチツ…チチチ……………バチバチ……………

……………！

「プラズマ！！？」

今の僕は一方通行になれてないし…プラズマは作れないだろう……けどな…。

「同時に二つが出来るんだ…三つ出来たって不思議じゃないはずだ……………」

心身別々と一方通行と超電磁砲を同時に使うのは…無理かもしれない…が僕は負けられない…勝ってみせる…。

ポケットから100円玉をだす…。

チリイイイン…

指先に電撃と…そしてベクトル操作で電撃の集中と威力増加…。

「行くぞ!!!」(三下アア!!!)(モヤシ野郎!!!)「」

プラズマとレールガン…二つの雷撃が…ぶつか…。

「あつ!一方通行だってミサカはミサカは一方通行を見つけた喜びに身を震わせてみたり!!!」

「岡富君!私の熊のぬいぐるみに入ってた紙知らなああい!?!」

「は?」

いきなりの御坂さんと小さい御坂さんの登場で僕達は拍子抜けし…能力が解除された。

闘いの理由はこうだ…僕はもう中止になった妹達の実験を終わらせるために一方通行に突っ掛かっていった。

一方通行は打ち止めが見つからないので探していたら僕がいきなり

妹達の事を言い出したから僕が打ち止めを拐ったと間違えていたのだ……………。

「……………」

「バアカバアカ！…ってミサカはミサカはこの二人の馬鹿をわらってみたりい！！！」

「岡富君ゴメンね……………」

僕と一方通行は顔を見合わせ……………。

「…いつペン死ね！！！」

僕と一方通行の頬には…それぞれ赤い痕が残った。

「…騙されたな…僕」

番外編その2（前書き）

美代目線

祐希目線

クスバ目線

の順番です

番外編その2

白塚陽史×岡富美代編

今日、私は白塚ちゃんと一緒にデートしてま〜す

「きゅぴ〜ん」

「美代ちゃん待ってよ!」

ムフフ〜白塚ちゃんは可愛いなあ〜。

「白塚ちゃん!私い…白塚ちゃんとチューしたいなあ………」

「み…美代ちゃん!!?」

白塚ちゃんの困った顔も…可愛いなあ〜。

「私じゃ…ダメ?」

「はう!」

「あれ…白塚ちゃん…顔赤いよ?」

「あ…あ…ああ…」

「可愛い…可愛い…!」

ムニユツ！！！

思わず抱きついちゃった！

「うわ！美代ちゃん！皆見てるから！」

周りを見ると。

「良いなあ……」

「俺も抱きつかれたい……」

「あれ？あいつ白塚？」

ムツ……女の子が白塚ちゃんの噂してる……。

「白塚ちゃん……行く……」

「わ……わかった」

私は白塚ちゃんの腕に抱きついたまま二人で歩き始めた。

「白塚ちゃん……」

「な……何？」

「今度から……陽史って呼んでも良い？」

「な……」

白塚ちゃんはやっぱり可愛いなあ。

「だって白塚ちゃん…私のこと美代ちゃんって呼ぶじゃんだったら陽史でも良いよね？」

「え…あの…その…」

「陽史って呼ばれるかチユーするかのどっちかだよ！」

「……………いよ…」

「何？」

「陽史で良いよ…」

「うん……………」

白塚ちゃん…陽史は可愛すぎるよ……………！

「じゃあさ…俺からのお願い…聞いてくれる？」

「何…？」

「……………じゃあ…あれだけとせ…き…き…き…き…」

陽史の顔が真っ赤だ……………！！

「き…？」

「はうう……………」

陽史!!!?

「陽史!大丈夫!!!?」

陽史がいきなり倒れちゃった!!!!

「プシュー……………」

「よ…陽史いいい!!!?」

葛谷×2編

今日はお兄ちゃんに私の料理を作ってあげることになりました。

「お兄ちゃんは何食べる?」

「……………タコさんウィンナー……………」

今のは空耳だよね?

「も…もう一回言って?」

「だからさ…タコさんウィンナー…」

「…ぷっ…」

「…何だよ…」

「イヒヒヒヒ…フヒヤヒヤヒヤ…ムフフ…」

お…お兄ちゃんがタコさんウィンナー…フヒヤヒヤヒヤ…。

「わ…悪いかよ…」

「お兄ちゃんタコさんウィンナー…ぷっ…以外に食べる?」

「…ハンバーグ…」

「上に旗でも立てる?」

フフフ興味本意で聞いてあげるよ。

「……ほんとに?」

「マジで?」

お兄ちゃんまじ嬉しそうなんだけど…。

「あ……ありがとう…」

……お兄ちゃんが可愛い…見かけはめっちゃクールそのなの
に…味覚がお子様だったなんて…妹の私も知らなかったよ…。

「チキンライス食べる？」

「……グリーンピース嫌いだから入れないで……」

か…可愛い…。

「しょうがないなあ…じゃあ…ポテトサラダもちゃんと食べる？」

「う…！……わ…わかったよ…食べるよ…」

やばい…お兄ちゃんがやばい…！！

「じゃあ待っててね！」

このあと私とお兄ちゃんはチキンライスとタコさんウィンナーとハ
ンバーグとポテトサラダを美味しく頂きました。

感想、お兄ちゃん可愛い。

「え…エカリい…」

「どうしたのクスバ？」

ううう…エカリ。」

わ…私の…部屋に…Gが…出た…」

「G!!!?」

Gって言うのは…黒くて…触角が長くて…かさかさ動く…。

「た…助けてよお…」

「まったく…クスバにも能力はあるでしょしかもGに良く効く能力だし」

私の能力は…

「私の熊たんにくつついてるんだもん…」

熊たんがいるのに…使えないよお…。

「熊たんは洗えば良いでしょ…」

「熊たんが可哀想だよお…」

熊たんは…熊たんは…。

「…ふう…わかったわよ…私がGを処理するから…」

数分後

「Gは倒したよ…」

「ありがとう！！」

「熊たんは…クスバがご主人様に貰ったやつだもんね」

私は熊たんを抱きしめた。

「うん…」

「私はゴムを貰ったけどね」

エカリの髪にご主人様に貰ったらしいゴムがついてる…。

「「ご主人様大好き！！！！」」

ゾクッ

「背中に…寒気が…」

誰か、私の噂でもしてるのかな？

番外編その2（後書き）

美代と白塚は付き合いはじめました。

「は…恥ずかしいから言うなよ!!」

観月はお子様…ぷっ…。

「……………殺るかな……………」

まさかの二人とも百合属性…。

「「うっさい!」」

これ以上は僕の命に関わるのでまた次回!

四十九話（前書き）

最初は観月目線最後に岡富目線になります。

四十九話

…なんなんだ…この状況は…。

「…すう…すう…」

俺は悠哉と並んで布団で寝ていた筈なのに…悠哉が僕の布団に…しかも女の子の姿で…。

「悠…哉？」

「う…うん…」

起きない…悠哉は現在女の子の姿で俺に抱きついている…。

「悠哉…起きて…」

「みづ…好き…」

な…！！！！

みづって何…！？

「悠哉…起きろ！」

「カツ丼！………」

カツ丼？

「悠哉…起きた？」

「しいりゃいしゃん！大しゅきでしゅ〜！…！！」

もつと抱きついてきた！…？

「悠哉！寝惚けるなよ！…！！」

「大しゅきなんれしゅよ〜」

「悠哉！目覚めろ！」

「ん〜」

顔が近い！…！！

「み…美代さん！悠哉が！」

現在深夜一時…美代の生活パターンだと完全に熟睡している…。

「しいりゃいしゃんは…僕よりみしりよがしゅきなんでしゅか〜」

「いい加減…起きろ！…！！」

ペチン

「にゃっ！…！！」

「……………悠哉？」

「……あれ…白井さんじゃなくて…観月？」

目が覚めたか…。

「悠哉…幾ら寝ぼけててもあれは……」

「僕…なんかしたか？」

「キスを迫ってきた」

「なっ！！？」

悠哉が頬を赤くした…なんで？

「僕が…観月に…？体は女の子でも…あれ？」

「…なに？」

「なんでもない…寝よう…」

悠哉は自分の布団に戻って…。

「「おやすみ」「」

俺の意識はすぐに眠りに落ちた。

「ふああ…おは…!!?」

「…むう…むう…」

また…また抱きついてる…。

「悠哉…朝だ…わ!!!」

悠哉は寝ぼけながら…上目遣いで…。

「みーちゃん…」

みーちゃん!!?」

「悠哉は起きなさい!」

ペチン

「ぶぎゅ…あれ…」

「悠哉…僕は先に学校に…って朝は男に戻れるんじゃない…」

「男に戻ってないの?」

「うん…」

美代さんをそのまま小さくしたような少女だ。

「…昨日のあれかな…」

「昨日のあれ？」

「一方通行っていうレベル5と闘……」

「何やってんだよ……!」

「ほえ？」

悠哉……………。

「一方通行って言えば…良くない噂があとをたたない…そんな奴に闘いを挑むなんて…このおお馬鹿……!」

「……………ごめんなさい」

ちゃんと…反省してるな……………。

「観月君と悠君どしたの？」

「少し…説教を……」

「ふうん…じゃ私はミサカちゃんと遊んでくるね？」

「「御坂さん？」」

「正確には…御坂ちゃんのクローンかな？クローン同士仲良くなっただ」

「へ、へえ……」

悠哉は気まずそうだ…。

「俺も出るけど…悠哉…ちゃんと学校に来なよ？」

「ほいほい…」

ギイイイ…

「行ってきます」

「行ってらっしゃい…」

「さあて…観月達は行ったしな…着替え…着替！！？」

僕の視線の先には…女子の制服が…。

「さあて制服制服…」

無かったことにした…。

けど。

「ない！…！」

男子制服が幾らさがしても見つからない！！！！

女子制服の上に……。

悠へ、貴女が今日女の子になっているのは読めていました。
なので女子の制服を置いていきます。

男子の制服はエカリとクスバに洗わせときます。

追伸……同時には三つまでしか使わない方が良いでしょう？

………先にいってほしかったよ。

「学校に行きたくないけど……観月が怒るし……行かなきゃな」

……佐藤と山崎に会いませんように。

四十九話（後書き）

岡富「平凡な日常はなし。」

「まで！それは酷い！」

そこは…まってよ！いくらなんでも…酷いよ…
だろ？

「僕は男だ！」

女の子だよ。

それではまた次回！

「神谷のクソヤロウ！！！！」

五十話（前書き）

祝！五十話！！！！

遂にここまで来ました！！！！

五十話

「……はあ……」

僕は今…女子の制服を着ていつもの通学路をトボトボと歩いていきます…。

「……お……」

ん？誰かいるのかな…。

「岡富様、私達です……」

「………です」

エカリとクスバ…何の用だよ…。

「男子の制服でも洗い終わったの……」

期待はしてない…。

「「いいえ」「」

やっぱりな…テンションがまた落ちたよ…。

「岡富様に…少し悪戯をしよう」と…」

ポニテをピョコピョコさせながら迫るエカリは…黒い笑顔で…。

「えいつ」

ドス…

「え？」

ドス？

「岡富様…バイバイ…」

「……………さよなら」

ポニテとツインテの二人は……………誰？

「誰ですか？」

「『大成功！』」

大成功？

「私……………私って誰？」

「貴女の名前は…岡富悠子ちゃんだよ」

「……………悠子ちゃん…」

「岡富…悠…子？」

私の…名前…。

「ほら、学校に行かなきゃ駄目ですよ」

「この子…誰なの？」

「クスバ…頼むわよ！」

「……あい……」

クスバ…さんは私の肩に触ると…。

「な…なんですか？」

「バイバイ……」

私の足下から…煙が…。

「クスバさん？エカリさん？わ…私の足から…な…何か……」

「大丈夫」

「根拠は？」

「無い」

あんまり過ぎる！

「あわわ」

足からの煙が…どんどん強くなってる…。

「GO!!!」

バヒユウウウン

「に…ニヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」?

足からの煙で…空を飛んでる…あ…鳥さんだ。

ヒュー……………

あれ?落ちてる様な?あれ?下に…誰がいるよ?

「ニヤアアアア……………」

ボスン!

私は…知らない人に…お姫さまだっこされています…。

「……………悠哉?」

「……………!」

この人!!!

「悠哉…大丈夫?」

「か…」

「か?」

「かつこ…」

「（ ）？」

「カツコイイ…」

「は？」

何この人…凄いカツコイイ…これが…惚れるのかな…。

「ち…チューしても…良いですか？」

「悠哉…まだ寝ぼけてるの？」

寝ぼけてるって…。

「私は本気です…一目惚れしました…」

「悠哉…俺で遊ぶなよ…」

「私は遊びだったんですか？」

ちよつと大きく言った。

「うわぁ…葛谷…女の子で遊んでたんだぁ…」

「可哀想〜」

「あの子可愛いな」

……。

「悠哉…俺の名前は？」

名前？

「……………王子様！」

「うわぁ…葛谷のやつ…遊びの癖に…王子様とか言わせてんのかよ
……」

「あの子が可哀想」

「最低」

誰？

「悠哉…白井さんに言いつけるよ？」

白…井さん？

「誰なの？白井さんって…もしかして王子様の彼女さんなの？……
…許さない…その白井さんって人は…許さない……」

「ヤンデレ…！？」

ヤ…ンデ…レ…？

「ヤンデレって何？」

「ヤンデレって言うのは…って悠哉は記憶喪失か何かなの？」
記憶喪失？

「記憶喪失？」

「マジで……？」

「王子様……？」

「と…とりあえず俺の事は葛谷君か…観月君って呼んで…」

葛谷？…観月？

「じゃあ……みーくん!!」

「みーくん!!!？」

観月君だったらみーくんだよな。

「みーくんじゃ…駄目？」

「うっ!」

「みーくんじゃ…駄目なのお……？」

「うっ!」

「みーくんじゃ……」

「わかったよ…みーくんで良いから…泣かないでね…悠哉…」

「うん!」

「岡富い…おつ!遂にお前は真の自分に目覚めたか!…!」

誰?あの…?

「誰…ですか?」

「うっ…幾らなんでもこんな人は知りませんは酷いぜ…」

そんなに私は酷い事を…言っちゃったの?

「ごめんなさい…私…記憶喪失…みたいなの…さっきもみーくに
言われて…」

「記憶喪失!!…ていうことは…」

「ん?」

この人…黒い笑顔が…怖い…。

「じゃあさ…チューしてよ?」

その時の私には…この人が心の中では…。

(^^^^…岡富の困った顔が見れるぜ)

なんて考えてるなんて気づかなかったよ…。

「ち…チューですか？」

「うんうん!」

チュー…私のファーストキス…。

この人を傷つけた…私が悪いよね…。

「わかりました…私のキスで良ければ…どうぞお好きになさって下さい」

目を閉じて…口を閉じてみます…。

「え？あれ？はい？」

私は目を開けて…。

「チューしないんですか？」

「えっ…いつものお前なら…殴りかかって来たのに…いきなりツンデレが…デレデレに…なるなんて…ついてけないぜ…」

ツンデレ？デレデレ？

「私…また何かしましたか？…すみません…ごめんなさい…」

「グサツ！…この子の前だと…俺の悪行が…浮き彫りに…」

悪行？

「すみません！すみません！」

「無自覚なのが…怖い…」

バタ……

「あれ？…どうしたんですか？」

「ハハハ…純情すぎる…俺の前には…ハハハ…」

……純情？私…この人に…一体何を。

「怖い…怖い…純情ちゃんは…怖い…」

「はう…私に怖がってたんですね…大丈夫です！私は貴方の味方で
すよー！」

私はこの人を抱きしめました。

ムニユツ…

「むじゅっ…」

「ごめんなさい…ごめんなさい…」

ムニユツ…ムニユツ

「ぶがつ!!!」

「きゃっ!」

私の服に…血がついちゃった…。

「ずまねえ…鼻血が…鼻血がでちまったよ…ずまねえ…」

「大丈夫ですよ…私は…貴方の味方ですから…」

ムニユツ…ムニユニユ…

「……我が一生に…一辺の悔い無し…」

この人の意識が…無くなったみたい…。

「大丈夫ですか!」

「……………」

「生きてますか!」

返事が…ない…。

五十話（後書き）

岡富…君？

「はい？なんですか？」

一人称は？

「私…ですね…」

好きな人は？

「それは…勿論…みーくん…きゃっ…恥ずかしい」

ハハハ…乙女だ…乙女になってやがる…。

「はあ…？」

それではまた次回！

「よろしくお願ひします！」

いい子すぎるろう……。。

五十一話(前書き)

今回はエロいです。

お気をつけて…。

五十一話

「は…恥ずかしいですっ…」

「岡富君はもう性格も女の子なんだから慣れるしかないよ」

わ…私は今…女の子達の玩具にされ…ています。

「ねえねえ岡富君」

「なんですか…」

「まだ耳で感じちゃうの？」

耳で感じちゃう？

「感じちゃうって…ひゃっっ！」

はむっ…

「感じるんだ」

「へえ」

はむっ…はむはむ…

「にゃっ…にゅ…んはぁ…もっらめてよ」

声が…変な風に出ちゃう。

「「「可愛いいい！！！！」」」

「ねえねえ！岡富君！」

「なんれしゅか……………」

「お姉様って言うてよ！！」

お姉様？あれ？お姉様？

「お…姉様？」

「最高……………」

バタ…

倒れちゃった…けど…まだ…耳が変らよ……………。

「じゃあさ…観月君にさ！前から…観月の事が好きだったんだ…私
じゃ…駄目かな？って言うてみて！」

みーくんに？

「は…はい……………」

「なんだよ…悠哉…ここ何？」

体育館裏って駄目だったかな…。

「あの…私…実はみーくんの事が前から…好きだったんです……………」

「なっ！！？」

（ …… ） ； …… って顔かな？

「私じゃ…駄目ですか？」

上目遣い？それを試してみた…。

「もう駄目だ…我慢出来ない…」

みーくんが私の胸を…ひゃっ…。

「みー…くん…？」

「大きいな…俺はこのぐらいの胸は好きだな…」

「みーくん…頭が…ぼお…ってしゅるぅ…」

ムニユツ…ムニユニユ…フニユ…

「どっ、悠哉…？」

「みーくん……私……みーくんにもっとしてほしくなっちゃったよお
……私の胸があ……フニユフニユしてるからあ……私、変になっちゃった
よお……」

「悠哉……」

……… なんてかな……私のスカートの中……あつついよ……。

「悠……哉……」

「なんれしゅかあ……」

「Hしても……良いかな……」

H？

「Hってなんですか？」

「今からすればわかるよ……」

胸をフニユフニユする事かな？

「胸を触りたいなら……どうぞ」

私は完全に油断してた………。

ブスッ……

あれ……身体が……動かないよ……。

「…麻酔」

みーくんが…私の服を脱がしてる…。

「いや…らめ…いやあ…」

私は…上半身裸になっちゃった…。

「ええと…私に何を…」

「勿論…犯す」

犯す？

「じゃあ…静かにして？」

ペロペロ…

「や…」

「……………気持ちいい？」

「……………うん」

「……………良かった」

みーくんは…私の胸を隅から隅まで…恥ずかしいから…言えないよ……………。

「……………もうやめる…？」

「もつちよつと…して」

私…変だよな…すっごい気持ちいい…。

ペロペロ…チュー…

「やつ！…吸っちゃらめ…」

「おしまい…」

終わった…けど…。

「次は何かしないの？」

「してほしいの？」

意地悪そうな目で私を……………やっぱりみーくんはカッコイイ…。

「……………うん」

「へえ…変態なんだね…」

「違うもん…変態じゃあにやいもん…」

「じゃあおしまいだね…俺とやりたいなら…おねだりしないと駄目だよ？」

「お願い…私の胸…もつと弄って…それに…ここが…あついの…」

私はスカートを指差した…。

「大丈夫…すつきりさせてあげるから…」

「みーくん…大好き…」

ビリビリ！！！！

「せつかく私が書いたB.L本になにをするんだ！！！！」

「俺は悠哉を襲わないしね…」

「私…してみたいかも…」

「悠哉！！？」

「だって気持ちいいんですよ？」

「ん〜やっぱり岡富×葛谷は面白いな〜」

みーくん…大好き…。

五十一話（後書き）

岡富のクラスの腐女子さんの小説でした。

眠いので今回はここまで…また次回！

「二人はもとの暮らしに戻りなさい」

「「!!!!!!」」

「エカリとクスバという名前を…返しなさい…これからは本名で過しなさい」

「「嫌です…」」

「では悠を元に戻しなさい」

「「それだご主人様が…あの岡富悠哉に惚れてしまいそうで…」」

「はあ？」

「私が惚れるわけないでしょ…まったく…私は人間を好みませんよ」

「…」

「「本当ですか!!!!!!」」

「「……では悠を元に戻しなさい」」

「「はああい!!!!!!」」

「……ふう…これで大丈夫だ…」。

「悠哉…抱きつくな…」

「駄目なの……?」

「上目遣い禁止…」

「ううう…」

悠哉がこうなってから…一週間が過ぎた…。

「」「岡富悠哉さん」「」

ポニテとツインテ?

「エカリさんとクスバさんじゃないですか」

「」「今日は貴女の性格と記憶を戻しにきました…」「」

「はい?」

「……………」

悠哉が元に戻るのか…良かった…。

「「では…行きますよっ」「」

ポニテが近づいてきた…。

「エカリさん…お手柔らかにお願いします…」

「はい」

ペチン

「wTmj d . t p w g m . t a

悠哉？

「h j m q l . n g f u y l n i d

「その二人…悠哉に何した？」

「「今は…記憶をダウンロードしてますので…」

ダウンロードって…悠哉は機械じゃないのに…。

「……………」

数分後

「 I T Y M r i @ c f o z J …」

「「「長い」」」

「「「ただ記憶のダウンロードに時間かかるの…」」」

「「「さあ？」」」

その時…

「一方通行って白い奴知ってるか…？」

金髪…。

「知らないな…」

「「「貴方は…未元物質…」」」

「俺の事…知ってるのか…？」

未元物質…！

「学園都市の第二位が何の用だよ…」

「いや…その女に用があるんだよ」

悠哉に…まさか悠哉の能力を知ってるのか？

「残念だけど悠哉は今…記憶喪失で…」

ドス…

「「!!!?!」」

「記憶が無かるうが関係無いんだよ…その能力を利用出来ればな」

俺の脇腹に…白い翼が………。

「お前…悠哉で何を…」

「煩い…黙れよ」

俺の脇腹に刺さっていた翼が…横に動いた…。

僕の身体から…赤黒い…血が…。

「「戦略的撤退を開始します」」

ポニテが俺を…ツインテが悠哉を抱えて…。

「エアロシューター開始」

俺達四人は…空を飛んだ…が。

「俺が飛べないとしても？」

未元物質が追いかけてくる。

「v.g.g.wmwwg.mktwnu.gwjtptgajaw」

悠哉はまだダウンロードしてるのか…。

「くそ…」

「h n . g p w m w g p w m j m g p w m x n g w ……」

…悠哉の口が止まった？

「「 岡富悠哉さんのダウンロードは終わりましたが…意識がまだ戻ってないみたいです…」

「…鬼ごっこにも飽きたな…堕ちろよ？」

白い翼から…光が…。

ジュウウウウウウ…

「キヤアア！！」

ツインテの背中から…煙！！？

「大丈夫！クスバ！？」

「日焼けで死ねよ！！！！！！！！」

「させるか…」

俺は…未元物質に火を放った。

「危ね…」

白い翼に防がれた…しかも翼には傷ひとつない…。

それだけではなく…俺達は今落ちている…。

「クスバはもう能力が使えません貴方の火で浮かんだり出来ませんか!!?」

したいけど…。

「痛みで…制御が効かないかも…」

万事休すだな…。

「死ね…雑魚共」

「誰が死ぬかよ？僕の仲間到手えだすな馬鹿」

未元物質より一回り小さい白い翼が…。

「悠哉……おはよう」

「随分派手な目覚ましだね…僕には使いこなせないよ…」

俺達は無事に着地した。

「エカリさん…三人で病院に逃げて？」

「わかりました…」

「悠哉…俺も闘うから…」

「駄目だよ…観月は怪我してるし…クスバさんも背中焦げてるし…」

「それに俺達の闘いに巻き込まれて無事に済まないしな」

悠哉…。

「負けるなよ？」

「死なない…それは約束する」

「じゃあ…行け」

悠哉は死なない…俺にはわかる…悠哉は絶対に負けるわけない。

俺達は…その場から離れた。

「さあして…」

「始めるか…」

「殺しあおむせ」

五十二話（後書き）

岡富悠哉復活！！！！

「煩いな……」

めでたいじゃん？

「ありがとね」

今回は岡富vs垣根をお送りします！！！！

「それではまた次回！」

白い翼から光が…。

「ガッ！！！！！！」

鎧に穴が開いた…しかし穴の中には…傷ひとつない。

「再生能力もあるのかよ…」

「ギガガガガ…ガ…ラララ…ジバニガ…」

「言語能力が無くなったか…」

「バババババジャジャシャチニミヨフレネコオケ！！！！」

雷と炎が…何かの力によって球体になる…。

「一方通行のベクトル操作能力か…面倒だな…」

最初は朱と蒼だったが…もう炎と雷はその原型を失い…黒い禍々しくも神々しい輝きを放っていた。

「……喰らったらヤバイよな…」

がしかし少年にはそれをかわす自信があった。

（あれほどのエネルギー体を飛ばすのは並大抵な力では逆にアイツが死ぬ…）

「バ…バ…バ…ガッ…ジバニガ…」

（それにあれを保つにもかなりの力を使わずだしな）

「さっさと来いよ化物！！！！！！」

少女は…そのエネルギー体を…。

「な！！！！？」

殴り付けた。

その瞬間エネルギー体は消えた…。

そして。

ゴオオオオオオオオ！！！！！！！！！！

少年の目の前で破裂した。

「ガッ…ガアアアアアアア！！！！！！」

（クソッ…テレポートだと…この俺が…この俺が…）

「垣根帝督がアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

ああ…身体が動かない…さっきまで僕は別にそこまでは怒って無かった気がするのに…なんでかな…身体の中に溜められては何かが発したみたい…止まらなかった…。

僕は人を殺しちゃったのかな…けど…後藤博士のファイルに乗ってた敗北之王で人を殺したら…自分も死ぬんじゃないか…？

あれ？

なんで人を殺したら自分も死ぬってわかったんだ？

そんな人を殺すまでわからないじゃないか？

まだ…秘密がある…それに人を殺したかも知れないのに…。

僕の身体には何も変化がないじゃないか？

それに夢と物語と未元物質は…あまりにも酷似し過ぎてる…。

敗北之王も変身系能力に酷似しているし…。

くそ…知らない事が多すぎる…僕は…知らなきゃ…。

「死ねないな……」

観月と約束した。

「帰らなきゃ……」

美代が心配する。

「仕事しなきゃな……」

白井さんに会いたい……。

「……………」

垣根帝督か……。

「お前を……一般人への暴行及び風紀委員の執行妨害の罪で……逮捕します」

日は降り注ぐ……一人の「……」に……
雨は降る……一人の「……」に……

雲は隠す…一人の「」に…
雷は砕く…一人の「」に…

「止まれ…ここから先は学園都市だ…入るには許可証がいる」

「煩いな…だから学園都市は嫌なんだ…」

「しょうがないだろ…私だってめんどくさいのに…はあ…めんどくさいなあ…」

「許可証を出しなさい」

「黙れ」

スパアアアアン…

「あらら〜殺っちゃったね〜」

「我々の目的を忘れたのか？」

「学園都市にばれずに…裏切り者の息子とその周りの覚醒者の回収」

「弱者」

「ププ〜もっくんに笑われてやんの〜その裏切り者の名前ってなんだっけ〜？」

「バリッサの息子だ…忘れるな」

「日本では固言悠子と名乗ってたらしうけどね…」

「偽名」

「ふうん」

「じゃあ…行くぞ?」

「はい」

「了解」

「はっい!」

五十三話（後書き）

チート？なにそれ美味しいの？

さあて次回からは急に新展開に行つてやるぜ！！！

ついでこれない方がいましたら…：…すいません。

それではまた次回！

五十四話

「白井さん…痛いです」

「岡富…痛いのは生きてる証拠ですよ」

白井さんは僕の腕をつねってる。

「悠君と黒子っち、ラブラブだねえ」

「……そうですね……」

ちよつとそこの二人…助けろよ？

「岡富…溜まりに溜まった残業…どうするつもりですか？」

僕が記憶を無くしてた間の仕事の量は明らかに多すぎる…。

「それで垣根帝督は生きてるんですか？」

今はそつちだ。

「垣根帝督は死にましたわ」

「……………」

「死因は一方通行との闘いで既にボロボロな身体を酷使し過ぎてですの」

は？

「僕が殺したんです」

「……悠君…悠君のあれはね…当たってなかったんだよ？」

「嘘だ」

「……あの翼はそんな簡単に壊せない」

「嘘だ」

「では結論を言いますわ」

「どうぞ」

「貴方のあの攻撃はそもそも発動してませんの」

「は？」

あのエネルギー体が？

「テレポートしたさいにベクトルはテレポートしなくて…テレポート空間の中で既に爆発してましたの、つまりあの爆発はただの余波ですの」

あれが余波？

「悠君は人を殺して無いんだよ？」

あ…。

「う…あ…ああ…」

涙が…止まらないよ…。

「岡富…？」

「ああああああ…うっ…ああ…」

周りの目なんか気にする暇なんか無かった…。

ただ安心した僕は人を殺して無い。

「岡…富い…苦しいですのお…」

僕は白井さんを制服ごと抱き締めてた。

抱きしめてたじゃない抱き締めてただ。

「うああああ…」

「悠哉…白井さん死んじゃう…」

「悠君！黒子つちが…!!？」

「ぐ…ぐ…」

「白井さん!？」

「黒子つち!!?」

「うあああああ…ああ…うっ…うっ…」

白井さんは…気絶していたのに僕は気づいてなかった。

僕はそのあと…泣きつかれてすぐに寝てしまったらしい。

「岡富…私は死にかけましたのよ?」

「反省しています…」

僕は土下座で白井さんに謝っています。

「それに私の制服にシワが出来ましたし…」

「シワ直しは僕の特技の一つなので直します…」

「私の制服をこれ以上いじる気ですか?」

「すみません…」

「岡富…貴方の働きによっては許しますのよ？」

「どうすれば？」

「女の子の姿で私に奉仕しなさいな」

「まじすか！！？」

「僕は男ですよ？」

「このやり取り…もう何回目ですか？」

「僕は女の子には戻りたくありません…」

僕の身体は今。

「悠君、今女の子じゃない？」

「悠哉…諦めも肝心だよ？」

「…というわけですよ…諦めなさいな！！！！」

垣根帝督戦で…能力を使いすぎた…。

「不幸だあああ……………」

僕には平穩の二文字はあるのかな…。

「もっくん〜つまないつまない!~!」

「戯言」

「もっくんの馬鹿馬鹿あ!~!~!」

「戯言」

「戯言しか言っていないじゃあん!~!~!」

「言葉は重い物だ」

「珍しく長く喋るなあ〜」

「探知」

「バリッサの息子を見つけたの〜?」

「破壊開始」

「もっくん〜ヒュナスがまだバリッサの息子には手を出しちゃ駄目

だって言ってたから、まずはヒュナスに相談しようよ。」

「長文」

「もっくん〜…もっくんって名前なんだっけ〜？」

「デユグラテオス」

「もっくんの名前こそ長いよ。」

「…憤怒」

「怒っちゃやーよぉ。」

「…潜入」

「ヒュナスには伝えとくよ。」

「Yuya Okatomi…覚悟」

五十五話

僕は…何だ？

「岡富悠哉」

何故そう言い切れる？

「皆がそう呼ぶから」

ただとお前の本当の××は…××だ。

「よく聞こえないよ」

聞こえないのは…まだ聞くべき時じゃないからさ。

「で、君は誰なの？」

さあね？

「まったく…」

ただと言い切れることはあるよ？

「教えて」

僕は…魔術師さ。

「魔術？ハハハ」

何故笑う？

「学園都市には超能力者もいるよ？」

超能力者と魔術師は違うさ。

「じゃあ…君はどんな魔術を使うの？」

真似かな…。

「奇遇だね、僕も真似…いや偽者なんだ」

君は偽者なんだ…へえ。

「僕は本物を越えられないんだ」

僕は越えられるよ？

「凄いな…」

君も越えられるさ。

「本当かい？」

君と僕…二人で越えれば良いさ。

「君は…もしかして…」

もう時間だ…白井さんによろしくね…。

カーテンの隙間から…日の光が覗いてる…。

「悠哉…起きた？」

「ん…ああ…」

現在は…6時半…まだ僕は女の子か…。

「悠哉…服がはだけてるから…直して」

僕は自分の身体を見てみた。

昨日寝る前にちゃんと着た筈のパジャマは…佐藤が見たら襲いかか
つて来そうな程にはだけてた。

「すまない…すぐ直すよ」

僕ははだけてたパジャマを直してみる。

「んっ…」

すこし…胸のあたりがキツイ…。

「じゃあ…俺はゴミ出ししてくるから…」

「朝飯は任せとけ」

僕は胸を張った…それが少し駄目だった。

パチイン

「いた…」

ボタンが外れて観月のおでこに当たった。

「観月ごめん」

「良いよ…」

観月は部屋を出た。

さあて。

「朝飯つくるかあ…」

今日のメニューは…。

トースト、目玉焼き、サラダ。

という簡単に作れて栄養が接種できる朝の定番メニューだ。

僕は手慣れた手つき…かな？
とにかく朝飯を作り始めた。

フライパンに卵を落とした…。

ジュウウウ…

「ゴミだして来たよ…」

「もうちょっと待って」

他人から見たら…ギャルゲーの主人公とその幼なじみみたいに見える
てしまいそうで怖い…。

「悠君…可愛いよ〜」

「美代姉さんおはよう」

「…おはよう」

「うい〜」

美代姉さんはまだだるそうだな…。

「気にしてなかったけど…美代姉さんは僕達が学校に行ってる間何
をしているんですか？」

「ん〜…陽史の学校の保険医」

へえ……………えっ？

「保険医？」

「うん、私ね教師免許とったよ」

……………。

「いつの間に？」

「悠君が記憶喪失の時」

「観月は知ってたの？」

「…うん」

……………まじかよ。

「目玉焼き…できたよ…」

そんな会話をしながらもちゃんと目玉焼きは作った僕って偉い。

「モグモグ…悠君の目玉焼きは美味しいねえ」

「モグモグ…モグモグ」

「……………美味しい」

「ん？…観月…ちゃんとサラダも食べなきゃ駄目だよ」

「……トマト嫌い」

「観月君、食べなよ」

「うん…」

まるで赤ちゃんが初めて歩く瞬間を見るかのように僕と美代姉さんは観月を見てる。

「パクリ……………」

「もう一個だよ！」

「モグ……モグモグ……」

「悠君…秘奥義を使うよ？」

「秘奥義って？」

「悠君が観月君にア〜ンを……」

「嫌」「嫌」

「ブウブウ……」

やっぱり…こんな平穏な日々は大切なんだな…

「もっくん…バリツサの息子は？」

「……………女子」

「ププ…息子は男の子に決まってんじゃん…もっくんの馬あ鹿」

「…転換」

「むっ…学園都市の超能力とかのやつだね」

「……………周囲」

「しかも人が周りにいすぎて攻撃のチャンスが無くなったと」

「…残酷」

「むっ…天使の気配がしたのね」

「…危険」

「ヒュナスとチマナーに伝えとくよ」

「監視」

「行ってらっしゃい」

五十六話（前書き）

陽史視線でお送りします。

五十六話

「美代：仕事は？」

「むううう」

まったく：美代は。

「仕事が終わったらパフェでも奢るからさ頑張つてよ」

「ホントに！じゃあ頑張るよ！！！！」

現金だな…。

キーンコーンカーンコーン

「岡富先生…岡富先生…来客の方がお越しです…至急応接室までお越し下さい」

「ん～私か～じゃ陽史い…行ってくるね」

「わかった、気をつけてね」

「ふおお～い」

あんなので大丈夫かな…気になるし着いてくかな。

「……………至急」

「おお言葉ですが、私の義弟はそんなに柔じゃありませんよ？私は義弟を信じています…義弟は死にません」

……………何の話かな…上手く聞こえない。

「……………来客」

「誰かいるの？盗み聞きしないで顔を見せなさい」

「岡富先生…」

「ふう…白塚君…盗み聞きなんてしないの…」

「……………好機」

何だ…この人？

「陽史！！避けて！！！！」

え？

「あああ……」

「陽史？」

天使……鎧……。

「アアアアアアアアアアアアアアアア……」

「その女の顔を良く見てみる？」

嘘だ！あの時と……。

「陽史い！！！」

「嘘だアアアアアアアアアアアアアアアア……！！！」

「嘘ではない……事実だ」

美代が……殺した？

「陽史！！！！」

兄さんと姉さんを？

「思い出せ」

あの時？

「陽史い！！！！」

美代は…。

「美代は…」

「何も言わないで！陽史の怪我は酷いんだよ……！」

「美代！……！！！」

「何！？大丈夫なの？陽史い！」

「お前が…お前が…」

「………笑止」

「お前が俺の兄さんと姉さんを殺したのか？」

「陽………史？」

「三年前……！！！」

「三年前……！！！」

「俺は…後藤研究所という場所に訪れた…そこで…翼が生えた女の子に襲われたんだ…」

「うぁ…あああ…あああ………」

「俺の記憶では…！」

「！！！？」

「おまえは死ぬな…お前が死んだらさ…」

「よ…じ？」

大切な人を…これ以上失いたくない…。

「俺は…誰と生きてけば良いんだよ…」

俺は…美代を抱きしめた。

「うあ…ああ…うああああ…」

「…笑止」

あのクソ野郎が…。

「おい…」

俺の…殺意対象はな…。

「…殺意」

「お前が死ぬ」

「拒否」

「拒否だあ…」

俺の身体に…黒い鎧が…。

「…覚醒？」

いや…鎧じゃない…そんな整った物じゃない…。

「俺と美代の過去を思い出させてくれて…ありがとよ…お礼に…」

鱗…鍵爪…牙…血…肉…。

「……異形」

俺の姿がどうなってるかは知らないが…。

「ウオオオオオオオオオ……………ン……………」

俺の意識は…途絶えた。

「崩壊……………」

「陽史……………」

「ggw.dmwajw8.mj.t.ma.j殺wmdmwggmat
pjjtgg……………」

「……………」

「陽史…手伝つよ」

俺は…大切な人を護れるかな？

五十六話（後書き）

次回は！

白塚&美代 vs デュグラテオス

二人の異形は…魔術師に勝てるのか？

今の白塚の姿は…狼男の狼を龍にした感じ…かな？

デュグラテオスの名前は適当です…意味を調べても意味はありません。

それではまた次回！

五十七話

「皆を…逃がさないと」

美代は…走り出した。

「グルルルル…」

白塚…否…異形なる怪物は…ただその破壊衝動を目の前の青年にぶつける…それしか頭には無かった。

「陽史！そいつをお願い！！私は皆を避難させる！！！！」

「ガアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

怪物は…駆けた…。

「来い…」

怪物は爪を振りかざした…それを何も無いようにかわす青年…青年は更に刀で怪物の左腕を跳ねた。

「グガガアアア！！！！」

だが、怪物の左腕はすぐに再生した…そのまま怪物は右腕を青年の首に腕を伸ばすが…雲が腕を止めた。

「私の雲は最強の盾なり…」

その雲に怪物は両腕の爪を刺した。

しかし、青年の顔には余裕の表情しかない。

「笑止なり…我の雲は堅牢なり…」

「オオオオオン!!!!!!!!!!」

怪物は…（エヴァン リオン初号機よろしく）両腕で雲を裂いた。

「なっ!!!?」

青年の顔が驚愕に歪む…。

「ぐがああ…」

そして…怪物の顔には…狂気の笑みが…。

「ま…待て!」

青年の首に怪物の腕が迫る!!!!

そして怪物は…青年の首を掴んだまま…持ち上げた。

「ま…まっ…が…」

「ガガガガガ…キサマニハ…シュウエンヲ…」

バギッ!!!!!!!!!!

その音は…青年…否…魔術師の終りを告げた。

「陽……………じ…?」

「ガガガガガガ…ガガガガガガ…」

何よ…あれ…陽史は何を?

私の目の前には…死体の中身…内臓を引きずりだし…眼球を放り投げ……………。

「オエ……………あつ…あつ」

陽史だよね…あれは…陽史だよね…私の知ってる陽史だよね……!!
……!!

「陽史……!!……!!」

「ナンダヨ…ヒトゴロシノギゼンシャヤロウ…」

陽史?…違っ!

「誰なの…貴方…」

「シラツカヨウジダガア…？」

陽史の姿で…陽史の身体で…陽史の声で…。

「陽史を…騙るな…」

「ハア？」

「陽史を騙るな…化物…」

私は…陽史を倒せないかもしれない…けど…。

「陽史を騙るな化物オオオオ！！！」

私は夢と物語を発動した…白い翼を二枚…。

「ギャギャギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

怪物が向かってきた…私は翼でガードした。

けど…怪物の爪は…私の翼を貫いた…。

怪物の爪が私の首を締め付けた…。

「うっ！！！！」

「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ…ヨワイヨワイヨワアアア！！！！」

陽史…ごめんね…陽史を…独りぼっちにしちゃうかも…。

私は…翼を…怪物の背中に…突き刺した…。

「ウガアツ!!!」

怪物の顔が痛みに歪んだ…。

「陽史…私の全身全霊を賭けて…貴方を救うよ」

私の背中から…白と黒…どちらでもない…金色の翼が生えた…。

「オレヲコロシタラ…カラダノモチヌシモシヌゼエ？」

「殺さないよ…ただ…」

そう、殺さない…私は死んでも構わない…けど…陽史だけは助ける
!!!

私は…金色の翼で…陽史を包み込んだ…。

「ナニヲスル!!!」

私の身体がもたないかもしれない…もしかしたら…陽史の身体に何か後遺症ができるかもしれない…けど…救うんだ！私は陽史を…救うんだ!!!

金色の翼からは…暖かい…光が…。

「おや…誰かが…覚醒したのかな…」

「ご主人様…雲のデュグラテオスが…落ちました…」

「ふうん…あつ！そう言えば！」

「…どうしました？」

「ん？ちよつとね…用事が出来たよ、じゃあ…エカリ！…クスバ！」

「「はい！」」

「外で見張りを頼むよ」

？男は…手を振った…すると手を振った軌道にそって…空間に傷ができた…。

「じゃあ…行ってくるね」

「「行ってらっしゃいませ」」

？男はその傷の中に…入り、傷は…閉じられた。

「エカリ…また暇だね…」

「待つしかないよ…クスバ…」

暗い暗い研究所の中から…少女達は…抜け出した。

五十七話（後書き）

はい！白塚あ何で死んでないの？

「知らないよ…てゆうかさ…君の方が作者なんだからさ…詳しいんじゃないの？」

だって手元の資料に書いてないんだもん。

「…キモ…まあ…いつか教えてあげるよ…」

キモとか言つなよ…。

「じゃあまた次回もよろしくお願いします」

読んで下さい。

五十八話

「黒子…あの子は誰なのよ…」

お姉様…私に聞かれましても…。

「知りませんわ…あんな子は私の知り合いにはいませんもの」

「ん…超電磁砲はどっちかな？」

お姉様を探してますの？

「私がそうだけど、何か用なの？」

「へえ…貴女が超電磁砲のビリビリ女なんだ」

「「なっ！！」」

お姉様をビリビリ女扱いですの！！？

「ん…拍子抜けだな…この都市も…最強のレベル5にも…」

「貴女は何様のつもりですか？」

「私はね…雷のシリウスだよ」

シリウス？星ですか？

「じゃあ…シリウスちゃんは…何の様なの？」

「ええとね〜…足止めかな〜」

足止め?…何が目的ですか?…少し探る必要がありますの…。

「ごめんね…私達は学校に行かなきゃダメなのよ…」

「学校に行く?え?知らないんだ〜」

知らない?

「何が言いたいんですの?」

「岡富悠哉…」

「「!!!?」」

岡富…?

「興味ないなら良いよ〜じゃ私は帰るね〜」

「「待ちなさい(よ)(な)ですの(」)」

「ん〜?」

「今の話…」

「洗いざらい…」

「吐いてもら(うよ!)(ますの!)」

「……人払いしといて良かった」

「お兄ちゃん…あの人誰？」

「知らない……」

俺と祐希が歩いてたら…突然、現れたアイツ…誰だ？

「貴方達には…少し眠って欲しいの…めんどくさいから…抵抗しないだね？」

「全力で断る」

「あらら〜じゃあ私も…本気ださないとね…行くわよ?」

「風紀委員として…貴女を確保する」

「私は…別に風紀委員じゃないけど…まあ確保の手伝いをします」

「私は…雨のチマナーと言います…」

「「「じゃあ…始めるか」「」」

「岡富悠哉だな…」

「どちら様でしょうか？」

スーツにサングラスを装備した…青年…かな？

「これは失礼…俺の名前は…日のヒュナス…お前を…捕獲しにきた者だ」

僕を…？

「いや…僕、何かしましたか？」

「お前の生き死にの問題なんで…黙ってついてきて貰おうか？」

「……………ふう……………」

この手の詐欺は見たことある…たしか能力が暴走してるから…病院に入院してほしいって言われて…一週間位拉致されて…解放されたら医療費だの入院費だのを請求されるやつだったけな…。

「とりあえず…知らない人にはついていけない主義なんだ…」

「そうか…なら力づくでも来てもらおうぞ？」

「ふう…風紀委員として…貴方を確保します」

「こ…こちらB班！」

慌ただしい雰囲気…。

「なんだ…騒々しい…」

「南門にて…B班の一人が首を跳ねられ…死亡していました！」

「なんだとー！」

無線の奥からでもわかる動揺…。

「至急！アンチスキルに連絡を！！！」

「アンチスキル！」

「なんじゃん…いきなり…」

「南門で見張りが一人死亡していた！」

「なんで気づかなかったじゃん！？」

「死体が…まるで雲から日が覗く様に出現したと見つけた奴が言うていた！」

「くそ…至急アンチスキルと風紀委員で侵入者がいないか調べるじやん！！！！」

「くそ…破竹高校ではもう被害が出たみたいじゃん！」

「常盤台中学と…風紀委員一七七支部のまわりのデータが無いぞ！」

「だ…誰もその二つの場所に辿り着けないんです！」

「くそ…この都市で何が起きてるんだ！！！」

「そんな事言っていないでさっさと調べるべきじゃん！！！」

「ふう…まったく…大人は何も気づいていないな…」

何も無い空間…そこに仮面の少女が歩いている…。

「これだから超電磁砲や…幻想殺しの苦勞が絶たないんだ…」

？男は…探す…。

「早く悠を見つけないでな…」

また…一人…。

「急がなくては…」

五十八話（後書き）

今回は誰vs誰にしよっかな。

「まったく…駄目作者ですの…」

よし…御坂&白井vsシリウスかな…。

「一瞬で蹴散らしてやりますの…」

ふっ…どうかな？

「また次回も是非読んで下さいですの」

五十九話（前書き）

更新できなくてすみませんでした…戦闘描写嫌いだな。

五十九話

常盤台中学の校庭…広い…。

「お兄ちゃん…私があの人に牽制するから…」

自信満々な笑顔で…言う台詞じゃないと思うな…。

「殺れ…」

「めんどくさいから…一瞬で眠らせてあげる」

雨のチマナーと名乗ってた女性の上に雲が出現した。

「祐希！」

雲は…水だ！

「了解！」

パン！！！！

祐希が手をあわせた…すると雲がどんどん小さくなり…。

「…………へえ」

水の箱の出来上がりである。

「祐希！落とせ！」

祐希は手をあげてから…手を下に振った。

水の箱がチマナーにかかる。

ビシャ…

「私には相性が悪いみたいね」

チマナーの口から紫色の煙が出てきた。

「何よアレ!?!」

祐希が俺を頼る。

「知らない」

「えっ!?!」

祐希の希望は絶たれた。

「私は水だけじゃなくて…毒も操るの…それを吸い込んだら…動けなくなるから気をつけてね?」

!!

「祐希!」

俺は急いで煙に向かって炎を放つ。

「お兄ちゃん、ありがとう」

「どういたしまして」

毒煙は消えた…かな。

「へえ…凄いわね…ならこの毒は？」

チマナーの足下から紫色のジェルが…キモ。

「キモ！…！」

祐希もマジできもがってる…。

「これは…触ったら…溶けるタイプよ？」

「祐希！水の壁でも作るんだ！」

祐希は手をあわせた…すると毒のジェルの前に水の壁が出現した。

「喰らえ…！」

俺は毒のジェルに炎を放った。

「私は…水も使うのよ？」

炎の前に水が出現する。

ジュウウウ…

「くそが！…！」

連発して炎を放った、けどことごとく水に防がれた。

「貴方と私の能力では相性が悪すぎる…だけど妹さんの能力は厄介だからね…」

チマナーは口から紫色の煙を…。

「祐希！逃げろ！！！」

「言われなくても！！！！！！！」

祐希は駆け出した…俺は毒煙に炎を放つが…やはり水に防がれる…。

「祐希！逃げ！！！」

祐希を毒煙が包む…くそっ！間に合わなかった…。

「てめえ！！！！！」

俺はチマナーに向かって炎でできた槍を投げた。

「ふう…」

簡単に水の壁に防がれた。

「言ったでしょ？貴方と私の能力では相性が悪すぎるって」

「絶対に防げる自信でもあるのか？」

「あるわ」

防げるんだな…よし、ならな…。

「御坂さんに聞いたが、レベル5の悩みはな…全力を出せない事らしい…本気を出したら被害が凄いからな」

「貴方はレベル4でしょ？なら関係ない話はしないで」

関係？…… 大有りだ。

「だけどなレベル4以上の…例えばパイロキネシストとかはな…」

祐希の方を見た。

「…ハア…ハア…」

どうやら溶けてない…ということは煙は神経毒でジェルが溶かすのか…なら闘える。

「俺みたいなパイロキネシストもな…本気でしたら…周りが煩いんだよ…」

レベル3以来だな…久しぶりの本気だ。

「あら…本気なら私に勝てるっても？」

「勝てる？愚問だな…」

俺の炎を…。

俺は狼を俺の真上に立たせた。

ジユウジユウジユウウウ…

「兩位なら簡単に防げるぞ？」

「そうね…だけど妹さんは平気なのかしら!!!!」

「!!!!」

祐希の方を向くと…祐希には雨が当たってない？

「嘘よ」

急いで振り返る、俺の目の前にはチマナーが!!!!

「フフフフフ」

ズバァア!!!!

「ツッ」

高圧水流が何かで切られた…。

「殺しはしない…私の任務は足止め」

「だけど…無傷とは言われてないわ」

「……………」

右肩をやられた…腕が上がらない…しかも、痛みがない…なんとか繋がってる状態かな…。

「出血多量で死ぬ前に降伏して？」

「断る」

「なら気絶させるまでよ」

「おい…お前…後ろが燃えてるけど平気か？」

「はっ…そんな手にはかからないわよ？」

ジユウジユウジユウウウ…

「あああ…本当にあるのにな」

チマナーの後ろから炎でできた竜巻がチマナーに迫る。

「な!!!?」

「王手だな」

「けどね…」

炎の竜巻の前に水の壁が現れた。

「その程度の火力では勝てないよ？」

「そうか…ならな…質より、数で勝負だな」

チマナーの周り360度から炎の手裏剣が迫る。

「甘いわね」

チマナーの周りを水のドームが包んだ。

ドオオオオオオオン！！！！！！

「ハハハ！凄い量の水蒸気ね！！」

煙があたりを包む。

「その水蒸気は俺の味方みたいだな」

「！！！？」

俺は炎を手に宿しながらチマナーに殴りかかった。

「言ったる？王手だつて」

炎付きの拳はチマナーの腹に叩き込まれた。

五十九話（後書き）

はい今回は葛谷兄妹vsチマナーでした！

「お兄ちゃん強いなあ……」

レベル4になったしね。

「私の活躍少くない！！？」

だってさー祐希ちゃん、あんたの能力だと一瞬じゃん。

「いや…普通に苦戦すると思うんだけど……」

観月の右腕やばいね〜。

「まさか左腕で殴るとはね……」

じゃあ次も頑張ってね〜。

「はいー！」

六十話（前書き）

今回は久しぶりに短いです。

六十話

俺の左腕はチマナーの腹に叩き込まれた。

「う……がぁぁ……」

チマナーが痛みで倒れる。

「さぁ……立てよ、俺の妹に手を出した罪を償いやがれ」

「私の水を利用するなんて……」

「解毒剤を出せ」

「あら……私はまだ負けてな……いわよ」

はぁぁ……ただの意気がりにしか見えないけどな。

「雨……止んだな」

「ハア……ハア……」

もう限界なんだろうな。

「早く……解毒剤を……祐希に……」

クソが……目が霞む……目の前が血の色だ……。

「貴方……血を流しすぎよ？」

「知ってるよ…俺の身体だ…お前よりはわかるさ…」

くそ…祐希だけは助けなきゃ…畜生が…。

「あの子の毒は…時間がたてば身体から自然に抜けるわ…それに学園都市の科学力ならすぐに直るわ…」

「そ…そうか…よか……………」

バタ…

「なんでよ…なんで人の為にそこまで頑張れるのよ…」

「……………」

あれ…なんでだろ…右腕が動かない…。

「…兄ち……………」

誰だよ…俺の近くで叫んでるのは…。

「おに……ち」

ああ……俺は負けたのかな……畜生……なんでかな……

「お兄ちゃん!!」

この声……

「ゆ……き」

「お兄ちゃん!大丈夫!？」

「うるさ……いしず……にしてくれ」

「……お兄ちゃん……あの人……あの人……」

祐希が泣いてる……

「ど……した……俺は平気だから……ちゃ……と……喋れ……」

傷口に包帯が巻いてある……誰が？

「……うん」

正直言おうと……また氣い失いそうだけどな……

「あの人……誰かに……連れてかれちゃったよお……怖くて……怖くて……」

「だ……じよぶだ……多分……アンチス……」

アンチスキルなら、何故俺達はまだここにいる？アンチスキルなら俺達を運んだりする筈だ…風紀委員でも同じだ…。

「祐希…その人の恰好…覚えてるか？」

「うん…髪が長くて…仮面を付けてた…あと服は…制服だったと思っ…」

何処から…来た？

「どっから来た…」

「わかんない…急に空中に切れ目が出て…そこから…うう…あ…」

「な…くなよ…」

「う…ああ…」

「よしよし…」

祐希…俺の服にシミができる。

「？男…私に…何用なの…」

「そのこの死体を持って…学園都市から出てって」

「デユグラテオス！？」

「ああ…ぐちゃぐちゃなのは気にしないで」

「気にするわよ…」

「まあ…門のところに私の助手がいるから」

「わ…わかった…」

「あ…それと…」

「何よ？」

「シリウスとヒュナスは私が後から連れてくから…受け取りに来てね」

「わかったわ…貴女…本当に科学から魔術に戻る気はないの？」

「ない」

「そ…じゃ…私は帰るわね」

「バイバイ…」

六十話（後書き）

次回は誰かな？

「私とお姉様の出番にしなさいな！」

そーするつもりだよ。

「ほんとですよ！！？」

フフフフ…。

「どうですよ！！？」

「私は別に超電磁砲と闘いたいのにな」

「黙りなさいな！」

うっさいしました次回。

「な！！？」

「あり？」

六十一話

「むむう……………」

シリウスちゃんはさっきから空に手を掲げて唸ってる…。

あの子は何をしてるのかな？

「……………お姉様…今のうちに逃げませんか？」

「黒子…あの子から岡富君の情報を聞き出すんでしょ？」

「しかしですの…あの子には…近づきがたい…異様な雰囲気か…」

「神雷よ宿れ…我に逆らう敵を…葬れ…」

「なにか来ますわ！！！」

シリウスちゃんの左目の所に天使のわっかみたいなのが回転してる…。

「雷神よ…朧月夜に舞い…神風と迅雷と永遠の闇を呼べ…雷昂砲…水無月！！！」

シリウスちゃんのわっかから私のレールガンが！！？

「黒子！！！！！」

「！！！！！」

「早く解除しなさいよ!!!」

「流石…電撃使いなだけはあるね〜雷震核が効かないなんてさ〜」

「早く黒子を解放しなさいよ!!!」

今も黒子は苦しんでる…早く助けなきゃいけないのに!!!

「私を気絶させれば良いんだよ、私は解除方法はそれしか知らないもん」

なら…。

「喰らえ!!!」

私は最大限の雷を…って!当たったらあの子死んじゃう!

「よ…避けて!」

「避けて?必要ないな〜」

シリウスちゃんの目の前に私の出した雷と同じくらいの雷が出現する。

バチイイイイイイイン!!!!!!

「な!!!?」

防がれた?

「私はね…雷のシリウス、」

「……………」

「ロシアではね…雷神の化身って呼ばれてたんだよ？」

「バリツサ・ラストペインの血…君にしっかりと受け継がれてるか…見物だな」

バリツサ？ラストペイン？誰だ？

「意味がわからな…」

僕の目の前に詐欺師が迫る。

「塵になるか…それとも…」

アップパーをギリギリでかわす。

「うわ！…！」

「破壊神になるかだ」

「危ないじゃないか!!!」

「岡富悠子なら知ってるのか？」

母さん？

「母さんに用か？だったら残念だな母さんの行方なんか知らないさ」

「岡富悠子は…いや…バリッサ・ラストペインは科学側ではなく…
魔術側マジックの人間だ」

そちら？こちら？

「よくわかんないけど…僕には貴方と闘う理由がないんですよ」

「……白井黒子は預かった、返して欲しければ…」

僕は駆け出した…詐欺師をぶん殴るために。

「俺を倒してから行け」

「白井さんを返せよ糞野郎」

ドオオオオオオオン!!!!!!

風紀委員第一七七支部の前の道からは…火柱が上がった。

二人の男の決闘（殺しあい）の幕が上がったのだ。

「霧を纏い空を断て…雷昂砲…朧月！！！」

「こんちくしよお！！！」

私のレールガンとシリウスちゃんの雷がぶつかりあう…そのたびに
大気が震えて、地面が叫ぶ…。

「やっぱり楽しいな」

「早く黒子を解放しなさいよ！！！」

「じゃあ…闘え！！！」

もう、30分は雷を出しっぱなしだ…電池切れになりそう…。

「暗き空を照らし我が道を示せ…雷昂砲…神無月！」

次は小さな雷の弾が私を囲む様に迫る。

「甘い!!!」

私は磁場で砂鉄を操り盾を作った…かなりキツイ。

「宿れ雷神…轟け稲光…雷昂砲…新月!」

雷でできた巨大な拳が落ちてきた。

「くっ!!!」

磁力で鉄に吸い付く様にかわす。

「鬼は哭き神は嘲笑う…雷震核…麒麟!!!」

雷の拳が急に馬の様な形に変わり…私に襲いかかる!

「めちゃくちやよ!!!」

私は雷馬?に雷を放ち相殺した。

「私…強いでしょ」

……電池切れかな…私にはもう電撃をだす余裕がない…けど。

「貴女が…どれだけ強くても…私は…諦めない…いや…諦めたくない!絶対に黒子を助ける!!!」

「あっそ…弱い奴には興味ないし…そろそろ殺るかな?」

シリウスちゃんの指先から…雷の弾が出た。

私は電撃をだすほど体力が残っておらず…。

雷の弾は私に当たる…筈だった。

「おや…御坂さんに悠の先輩じゃないですか…」

けど止められた…私の目の前には一人常盤台の制服を着た私くらいの身長の子が…。

「むっ！お前は！」

「貴女…誰なの？」

女の子はこちらに振り返った。

「あら？忘れたの？貴女と同じクラスの筈だけど？」

その女の子は仮面をつけて…光の剣を持っていた。

「もしかして、！…むぐー！」

いきなり手で口を押さえられた。

「名前は言わないでね？」

「むむう…むっ…むうう…！！！」

「お前…？男…！！！」

「さて…気を直して…」

「…？男…？？」

「御坂さん…加勢に来たよ」

？男と名乗る女の子はそして…。

「けどね…もう勝敗はついてるの…私が来たからね」

「むっ…随分な自信じゃん…」

「……………私の能力でも倒せないあの子…倒せるの？」

「勿論よ」

仮面をつけてても…声だけでわかるほど…自信にみちあふれている。

「む…」

「私の能力はね…皆にはエアロシューターって言うけど…違うの」

「えっ！じゃあ…なんなの？」

まるで…当然だと言うように？男は言った。

「エクスカリバ聖剣伝説とでも言うのかしらね」

？男の握っている剣からは…私達とは次元の違う雰囲気…あの馬鹿（当麻）の右手みたいな感じがした。

「雷震核が効いてない…」

「私の能力よ」

「嘘だ！聖剣にそんな能力なんてないはずだよ！！！」

聖剣？

「あら？別に私の能力はエクスカリバーだけじゃないよ？」

「まさか…マーテナ！！？」

シリウスちゃんが震え始める。

「流石にマーテナは無理よ」

マーテナ？なにそれ？

「な…なんだ…」

あの子をそこまで畏怖の対象にさせる…マーテナって何よ？

「そろそろ、始めるよ？」

「雷神vs聖剣か…楽しそうな展開だね！！！！！！」

二人の女の子の決闘（殺しあい）が始まった。

六十一話（後書き）

シリウス強!!

「お姉様が負けるなんて…ありえませんか…」

?男が来たからには大丈夫だよ。

「?男は…信用なりませんわ…」

?男vsシリウス、岡富vsヒュナスで次回もお送りしたいと思います
ますそれではまた次回!

「お姉様の出番が…orz」

六十二話

「地獄の雷撃…雷昂砲…白夜!!!」

黒と白の雷が挟む様に？男に向かう。

「大人しくここは退いてくれな…」

バアアアアン!!!

「当たった!!!？」

？男…避けるところか…喋り続けてた…。

「まったく…人が喋ってるのに…」

雷からは…まったくの無傷の？男が…。

「な…なんで効かないの!？」

あの子の雷は私のレールガン並の威力なのに…。

「聖剣じゃないけど…まあ…終わらせるからな…」

聖剣？

「氷雪の刻印…究極権化…雷震核…月読!…!…!」

雷でできた龍…でかい…私のレールガンじゃ…無理よ…。

「これをレールガンに使って！！！」

？男は私に向かって大きな…大きな…ハンマーを投げってきた…って
投げてきた！！？

「何よこれ！」

「とにかく殴って！！！！！」

ええい！！！！！！

私は拳を振りかぶって…。

「こんちくしょオオオオオ！！！！！！！！！」

私は電撃を込めて思いっきりハンマーを殴り付けた！！！！

バチイイイイイイイン！！！！！！！！！！

「行け！雷震核！！！！！！！」

バチイイイイイイイン！！！！！！！！！！

二つの雷撃がぶつかりあう…そこに？男が。

グングゲニル
「神槍！！！！！！！！！！！」

？男の剣が槍に形を変えて…？男は槍を二つの雷撃がぶつかりあっ

黒子は…。

「すう…すう…お姉様あ…ああんっ！駄目ですの〜ああん！けど、
そんなお姉様も…フへへへ…」

凄い寝言を言いながら寝てる……。

「黒子……無事みたいね……」

「じゃ…御坂さん…私はシリウスを家に帰すから…白井黒子と葛谷
兄妹によろしく言っというてね」

？男は槍から剣に形が戻った光の剣で空中を切り裂いた。

「えっ！！？」

「悠は今闘ってるから…近づかないことを勧めるよ？」

裂け目にシリウスちゃんと一緒に入る…。

「え？あれ？」

「そろそろ人が集まる頃だし…急いで離れた方が良いでしょう？」

「あ」

あたりを見回してみた…あちこちが焦げ…木は折れ曲がり…校舎も
傷たらけだ…。

「黒子！起きなさい！」

「お姉様の胸は…やはり自己主張の足りな…」

パソコン！

「痛いのですの…っってお姉様？」

「速く…逃げるわよ…黒子お」

黒子の顔からは恐怖が感じられる。

「は…はいですの…！…！」

「お兄ちゃん…保健室のベッドで我慢してね？」

「……ああ……」

俺達はあのまま校庭で倒れてるわけにもいかず…祐希が俺を常盤台
中学の保健室まで運んでくれた。

「さつきさ…御坂さんと白井さんの声が聞こえた…様な？」

「んああ…俺は眠いからさ…後は頼むよ…」

俺が意識を手放そうとしたら。

「葛谷はいますの…!!！」

いきなりドアを開けて白井さんが出現した。

「葛谷君ごめ…!?!？」

白井さんの後ろから御坂さんも来た…二人とも俺の右肩を見る。

「痛々しいですわね…」

「な…なにがあつたの？」

ふう…説明が長くなりそうだな。

「コロナ…発動」

詐欺師の周りの炎の形が…段々変化してる…人？

「プロミネンス発動」

更に次は炎でできた盾が二つ程詐欺師の周りを回り始めた。

「俺は日のヒユナス…」

「母さんの情報を洗いざらい吐いてもらっからな？」

僕は敗北之王を発動した…。

鎧が装着されてく…。

「コロナ…行け」

炎の兵隊が10体位で襲いかかってきた。

「一方通行」

炎の兵隊が僕を殴ろうとする…が殴りかかった瞬間吹き飛んだ。

「ほづ…ならこれはどづだ？」

炎の盾が近づいてくる。

「そんなのあたらな…」

ポオオオ…

「アツツ！！！！」

思いつきり燃えてる！！？

「ハハハ…ベクトルを反射することは調査済だ…お前はな…離れる力を反射してるんだよ」

くそ…一方通行解除！

炎の盾はすぐに離れた。

「服がボロボロだ…」

上の服はほとんどワイシャツの下に着ていた体操服しか意味をしていない…。

「敗北之王をやつてなきゃ今頃…」

僕の身体は燃え尽きててもおかしくない。

「コロナ…」

また炎の兵隊が現れた。

「夢与物語発動」

黒い翼を盾の様に使う…。

「おや…敗北之王の能力である…精神を力に変える能力を使わない

のか？」

精神を力に？

「それに？男の聖剣伝説とか…そういう力を使わないのか？」

？男の能力って？

「それに…お前の完全同調とやら…その能力の使い道がわかってないな…」

「んな！」

く…くそう…まさか能力の使い方まで馬鹿にされるとは…。

「学園都市の力を集めれば…天使にもなれるだろうに」

ヒユナスは…哀れむ様な目をこちらに向けた。

「天使……………！！？」

炎の兵が殴りかかるのをしゃがんでかわし…こちらからは殴れないので後ろに避ける。

「どうした？お前の力を出してみろ」

ヒユナスは真顔で死亡フラグな台詞を吐いたよ…。

「お前の父と母を殺した犯人を知っている」

「殺した？」

僕の父さんと母さんを殺した犯人？だって…父さんと母さんは行方不明じゃないのか？

「流石科学側の奴らだな、何も伝えられてないのか」

伝えられてないのか？

何をだよ？

僕に何が？

父さんと母さんは誰に殺された？

コイツか？

コイツなのか？

コイツだ！

絶対に殺る。

潰す。

僕の居場所が無くなったのはコイツが原因だ。

「お前が殺つたのか？」

「俺だと思っつか？」

調子にのるな。

「お前だろ」

「勝手に思えば良い」

「殺る」

六十二話（後書き）

この展開見たことあるな…。

って方！それは白塚vsデュグラテオスとほぼ同じ様な展開になってるからです！

自分でも気付いた時には…もうなっていました。

それではまた次回！

六十三話

「コロナ!!!」

炎で構成されている兵隊達が…。

「ヒヤハハハハハハハハハハハハハハハ!!!」

黒い鎧…黒い翼…黒い雷…黒い炎…を身に纏い…そして…口からは
黒い何かが漏れだしている…悪魔。

兵隊は悪魔に触れた瞬間消し飛ぶ…。

「学習能力の無い奴だな…プロミネンス!」

炎の盾が悪魔に向かうが…。

「ベクトルをA地点に収束…集中開始」

炎の盾は何かを引き寄せられる様に一点に集まる。

「なっ!!!?」

「黒炎黒雷をA地点に収束…ベクトルブースト構成開始」

黒い炎と黒い雷が一点に収束され…垣根帝督を余波だけで倒した兵
器が構成されていく…。

「あれは…まずいな…」

「お姉様ああ！怖いのですの〜！！！」

白井さんがわざとらしく御坂さんに抱きつく。

「わっ！はなしなさいよ！！！」

御坂さんの拳骨が白井さんの頭にたんこぶを作った。

「痛いのです…ほんのスキンスリップですのに…」

「お……兄ちゃん……すう……すう」

祐希はさっき泣きつかれて寝てしまった…。

「それにしても…今の音…」

「私も気になってますの…」

二人とも不安みただな…。

「……………」

思い出してみよう…。

何故、俺達と白井さん達は襲われた？

まさか…。

「白井さん……」

「なんですかの葛谷？」

「……もしかしたら……悠哉が危ないかも……」

「何ですかの？」

「さっき白井さん行ってましたよね？」

「白井さん達を襲ったシリウスって子が（岡富悠哉）とか言ってたんですよね？俺達の方にも雨のチマナーって言う女がいました……おそらく、悠哉も襲われてるかも……」

「葛谷は待つてなさいな……私とお姉様の二人で行きますの……」

「そんな……」

「俺も……」

「貴方は祐希ちゃんを守つてなさいな、それに今動いたら右腕が二度と動かなくなりたいんですの？」

「くそ……頼みます……」

俺は……無力だ……

「……………はぁ…はぁ…」

「……………クソが…手間かかせるんじゃないやねえよ……………」

「俺の黒点霸道砲を防いどいて…手間かかせるんじゃないやねえよ扱いかよ…」

「黙れよクソが…」

お互いに罵詈雑言を吐きながらも…身体はボロボロだ…悪魔にはもう鎧の原型が無く…頭等からは血が滴り落ちている。

魔術師は左腕をブランと垂らし…身体中に切傷等か…。

「もう…お前には力は残ってないはずだが…俺にはまだコロナー体分なら…出せるぞ?」

「俺は…どうだろうな…でもなてめえには勝てんだよ…」

「ハハ…意気がるなよ…」

「てめえこそな…」

「コロナー!」

炎の兵がジリジリと迫る…。

「俺は勝つてお前を救う……」

炎の兵の色が黒くなる……。

「僕は仇を絶対に討つ」

少年の背からは白く……荘厳な……翼。

「黒点破邪……不知火」

「僕の……力だ」

二つの覚悟が……再びぶつかりあう……。

「泣かないで……笑いなよ！」

彼女は……もういない……。

「もう……久しぶりに会えたのに……」

彼女の笑顔が忘れられない……。

「アハハ……バカ」

護れなかった…。

「私は…そんなヒュナスが好きだよ…」

俺もだよ…バリツサ。

六十三話（後書き）

今回は番外編をお送りします。

シリアスな雰囲気もそろそろ終りを告げそうです…。

それではまた次回。

過去話…

「バリツサ姉さん…そろそろ起きないと駄目だよ」

姉さんも今日から…学園都市に侵入し…スパイ活動を行うのに…まだ寝てるよ…。

「ヒユナスう…まだ眠いよお…」

まったく…もう10時なのにな…。

「弘さんが待つてるよ？」

「弘さん!!!!」

弘さんの名前が出るだけでこれかよ…。

「俺も先に教会の所で待つてるから…急いで来てくれよ…それと寝癖酷いからな」

「えっ?ほおあ〜」

バリツサ姉さんは…いつも天然だな…。

「早く来てくれよ」

「ういいい〜」

「弘さん！」

「バリツサさんはなんですか…いつも抱きついて…」

姉さんは弘さんを見た瞬間に抱きついた…。

「俺は先に行くからさ…二人で追いついてよ」

イチャイチャしてる二人を見てても…俺はイライラするだけだしな。

「弘さんっ！」

「なんだよ…バリツサ…」

「ムフフ…ただ呼びたかっただけ」

「ったく…」

イライラします。

弘さんは日本人だ、しかし孤児だった、それで俺達の組織に拾われ

た。

俺とバリツサ姉さんは姉弟だ、姉さんは茶髪にオレンジ色の目…俺も同じ。

姉さんと弘さんは魔術師ではない、二人とも学園都市へのスパイ活動のために魔術は無用な物らしい、俺は魔術師だがサポートに回るだけなのだ。

俺は急いでイチャイチャしてる二人から離れる。

「ありい？ヒュー君がいない〜」

「僕達に呆れたんだろ」

「ヒュー君待ってよ〜」

今頃気づいたよあの二人は…。

「まったく…」

数年後

「ヒュー君…私ね…弘さんとの子供が出来たのは知ってるよね…それでね、その子の名前を決めて欲しいんだ」

姉さんは…後藤という学園都市にいる内部協力者の施設に入っている…名前もバリッサ・ラストペインから岡富悠子という偽名に変えた。

「うん…結構重要な問題だな…じゃあさ……………拓海とかは？」

「たくみ…かあ…」

「良いかな？」

「うん！弘も喜ぶよ！！！！」

安心した…。

「いつ産まれるの？」

「予定ではね…たしか来週だよ」

「結構すぐだね…」

いつも姉さんは重要なところが抜けてる。

「でね…私達がもし…もしもだよ？もし死んじゃったりしたらさ…この子を頼むね」

「ああ…絶対に護るよ」

姉さんとの約束だ…。

「ほら、指切りしよ？」

指切りとか…。

「指切り…」

「げんまん」

「嘘ついたら」

「針千本のおます」

「指切った」

更に数年後

「私ね…学園都市（じゅく）の中でも汚い方法でのしあがった桐漕（きり）って男の暗殺を言われちゃったよ…」

学園都市の裏組織…後にグループ、スクールなどの組織を作り上げた組織に入らされた姉さんは…たまにこういう任務をしなきゃいけない…。

「もうやだよ…だけどね…これで最後の任務なんだって…この任務さえ終われば弘と私とこの子とヒュー君で仲良く暮らせるんだ…私、頑張るよ…!」

姉さんは…健気だ…。

数日後…

「弘さんと悠子さんの死因は…二人を貫いたこの結晶ですね」

姉さんと弘さんは任務中謎の能力者に襲われた…手かがりは謎の紅い結晶…。

「この子はうちで預かりますよ」

後藤は拓海を抱いている…。

「あ…れえ〜ママは〜？はかしえ〜ボクのママは〜……………？」

拓海君は今にも泣きそうだ…。

「……………来なさい」

後藤は拓海君を連れてく…。

「ママは？ママはどいなの？ママあママあ…！…！」

「護れなかった…」

もうそこにはもう冷たくなった姉さんと弘さんしかいない…。

「俺は…護れなかった」

後悔…。

「あの子は護る」

たった一つの約束。

「姉さん為にも…」

姉さんと俺を繋ぐ唯一の約束。

「強くなりたい」

あの子を護る為に。

「いや…俺は強くならなきゃ駄目なんだ」

ロシアに戻らなきゃ。

魔術師軍団襲来の一週間前

「バリツサの息子の能力はあの子の身体に悪影響を与え過ぎる」

「そうか」

「ヒュナス・ラストペイン」

「なんだ…」

「お前にはバリツサの息子の回収を頼みたい」

「俺だけか」

「お前の他に…チマナー・クラウド、シリウス・スタン、デュグラ
テオス・ラムダの四人を連れていけ」

「わかったよ…」

あの子を護る…その為に俺は技を磨いた…。

「ハハハ…俺の為にあるような任務だな」

待ってるよ拓海君。

「俺は絶対に護る」

もう…失うわけにはいかないんだ。

過去話…（後書き）

ヒユナスは岡富の伯父さん？に当たります。

「俺が父親だ」

的な展開に似てるような……………。

姉との約束を守り抜くヒユナスと両親への誓いを貫き通す岡富の闘い…勝者は？

次回も是非みてください。

六十四話

「ほう…未元物質でも同調したのか？」

ヒユナスがすこし小馬鹿にしたように尋ねる。

「言っただろ？僕の力だって」

少年も小馬鹿にしたように応える。

「では…バリッサと弘の遺伝子の力が見れるな」

「バリッサと言っただけ…僕の母さんは悠子つつんだよ」

二人は睨み合う。

この膠着状態は…長くは続かない。

「岡富！！！！」

少年は声の方に振り向き、そこには常盤台中学から走ってきた白井黒子と御坂美琴の二人が息を切らせていた。

「シリウスはやられたのか…おいお前」

「なんだよ」

「…あの子は」

ヒユナスは少し躊躇い…。

「あの子はお前の大切な人か？」

「ああ」

「俺の大切な人は昔に死んでしまったよ」

「あんたの何だ？」

「大切な姉さんと義兄さんさ」

「そうか…」

ヒユナスはその口から何かを絞り出すように…。

「もうこれ以上失いたくないんだ…だから大人しく捕まってくれ」

その目には涙が滲んでいた。

「人質でもとられてるのか？」

「ああ…人質と言えるな」

問題の人質は目の前にいる…けれど自分との関係は知られなくない…。

「白井さん！御坂さん！」

「なんですの！！！！！！」

「逃げて下さい!!!」

大切な人に…自分の無様な姿を見られくない…。

「……………わかったわ！行きましょ黒子」

「けど…お姉様」

「察しなさい黒子…」

自分の憧れの人がたまに見せる真剣な眼差しは…全てを語っていた。

「わかりましたの…」

二人が避難するのを確認して、少年は笑みを溢した…。

「これで…殺れる」

「一つ言っておくが…黒点破邪は普通のコロナより動きが数段増しているぞ？」

「僕も言っておくが…さっきまでの僕とは比べ物にならないぞ？」

「それは楽しみだ」

黒炎の人形と荘厳な天使は…同時に構えをとる…。

「黒点破邪の喰らったダメージは俺に伝わる…黒点破邪を倒せば俺も倒せる」

「僕に教えても利益はないのにな」

「お前に黒点破邪は倒せない」

「そろそろ話も終わらせるか…」

「奇遇だな…俺も話には飽きてきたところだ」

人形が俗に言う目にも止まらぬ速さで天使に迫り殴りかかる。

天使は首を傾けそれをかわす、そのまま右上段蹴りを繰り出した。

人形は蹴りをわざと受けた。

蹴りを繰り出した靴が溶ける。

天使が後ろに退ける。

人形は指を銃の様に構え炎の弾を放った。

天使は弾を翼で受ける。

「馬鹿か！翼が溶け…！！？」

翼は無傷であった、そのまま翼を広げる、その翼が人形をはね除ける。
「ずっと…気になってた…」

翼は旋風を巻き起こし人形を吹き飛ばした。

人形は空中で受身をとる。

「僕的能力は真似事なのに…美代はちゃんと自分の能力があった」

天使の翼が一对から…二対に増える。

「そして今、僕には翼が生えた…それで確信した」

更に翼は三対に増える。

「僕の能力は夢与物語の更に上だ…」

少年の頭の上に天使の輪の様でありながら…どこか人工的な雰囲気
を醸し出す。

「これは…予想以上だな…」

そう、例えではない…。

「僕の能力は完全同調なんかじゃない」

少年の眼には絶望はない。

「僕の能力だ…名前は自分で決める」

翼から光が漏れる…天使の輪からもこれ以上ない光が漏れる。

「終焉之叫 ラストペイン なんてどうだ？」

天使の輝きは留まる事を知らない。

「「！！！！！」」

「二人共どうしたじゃん？」

「悠……………君？」

「岡富君……………？」

「誰の事じゃん？」

「何かが……………目覚めた」

「目覚めたって……………」

「おや……………遂に悠も目覚めたか……………これで敗北之王と英雄之王……………そして終焉之王がそろったな……………フフフフ……………」

「むむう……………一人で笑って……………少しキモい」

「ああ…すまない…自分が育ててた卵が孵った気分なんだよ…」

「ふうん…変なの…」

「まるで…天使だな」

「ああ…僕には似合わないよ」

本人はそう言っても…現在、少年は少女の姿になっていてかなり似合ってる様に見えてしまうのは気のせいではない。

「ハハハ…俺の目的は達成されたか…」

魔術師の目的は少年の不完全な能力を完全に発動させること…その目的は少年本人によって達成された、もう日本にいる必要などない。

「おい…バリツサの息子」

「なんだ？」

「俺の目的はもう達成された…けどな俺は一人の男としてお前に勝ちたい…」

それは男として強者に挑みたいから…、同時に伯父として甥の成長を確かめるためでもある。

「さあ…こい拓海」

「その名前を知ってるのか…やっぱりアンタは母さん達を殺してないだろ？」

「誰も俺が殺したとは言っていないさ」

二人から殺意が消える…その代わりにただ純粋な戦闘意識が芽生える。

「（俺を）（僕を）倒せるか？」

天使の脚を雷と炎と黒い蒸気と白い光が包む。

人形の拳の禍々しい…絶望と破壊の炎が段々と増加してゆく。

「何回目の激突かな？」

「何回でも良いさ、最後まで立っていた方が…勝者だ」

白と黒が威嚇しあう。

「これで最後だ」

「はいはい…黒子はもう泣かないの」

「白井さんは確かに泣きすぎですよ」

「う…う…う…さ…い…です…の…!」

風紀委員第一七七支部活動記録

白井黒子の記録

まったく岡富にはいつもハラハラさせられまくりですの…。
今回の事件も上ではただの自然災害扱いにされましたの…。
一七七支部は何回もの爆発で吹き飛ぶ始末ですの…今は学園都市の
技術総出で新しい支部が作られていますの。

葛谷観月の記録

記録なんていつも書かないけど…白井さんにも言われたから少し書
いておく…。

今回の事件は自然災害扱いで良かったかもしれない…。
それと、悠哉はまだ退院できそうにない、美代はあの力エル顔の医者に連れられて御坂さんのクローン？と一緒にいる。
俺は白塚先輩の寮に止めてもらってる、白塚先輩と祐希に言われてから自覚したけど、俺の味覚は少し皆とは違うらしい。

岡富××拓海の記録（悠哉という文字が消されている様だ）

今回の事件はただ疲れた、だけどあの後伯父さんから手紙のやりとりをしている、伯父さんには母さんと父さん、それと小さい時の僕の事を色々質問している。

僕はハーフだそうだがロシア人と日本人の。

それと伯父さん曰く僕の性格は父親譲りで外見は母親譲りらしい。

それと最後に、あの事件から3日が経つが…性転換が未だにとけない…何故だ？

「なあ…観月」

「……………何？」

「いつまで経っても飽きないな…この都市は」

「確かにな」

六十四話（後書き）

「なんか…最終回みたいなの雰囲気だな…」

「違やい！まだ完結しないやい！」

「で、ストーリーは用意してあるのか？」

「うっ！」

「してないのか…」

「暫くはほのぼの時間で時間を稼ぐ！」

「なんでも良いけど疲れたからそんなにハードにするなよ？」

「はいはい…それではまた次回！」

「ふあああ…眠い」

六十五話

拝啓、岡富拓海君へ

俺だヒユナスだ。

君には教えておくことが沢山ある。

まず、君の母親と父親を殺した犯人は…撫養むよという人物らしいのだが…もう死んでしまったらしい。

君の復讐は…無理なんだ。

それと俺と君の関係を教えよう、俺は君の母親の弟に当たる人物だ。つまりは伯父なんだよ。

まあ、信じなくても良いがな。

戦つててわかつたが、君の性格は父親譲りだな、冷静に見えて心の中では感情の起伏が激しい。

容姿なのだが、君は途中から女の子になっていたが、あれはなんだ？女の子の時の君はまさしく小さな頃の姉さんそっくりだったよ。

それと君が「似合わないだろ？」と言っていた翼だが…似合っていないぞ？

ふう…後ろで連れが煩いのでここらでペンを離すとしよう。

君は一人じゃない。

ヒユナス・ラストペインより。

「悠哉…煮干し買ってきたよ」

煮干し!!?」

「ホントに!!?」

僕は少し興奮しながら観月に近寄った。

「顔が近い…それに今は女の子なんだからむやみに服が乱れるような事はするな」

観月が真剣にこちらをみる。

「わかったよ…」

ここ3日…女の子の姿から元に戻らなかった…現在4日目だが未だに戻らない。

「ほれ…煮干し」

「にゃっ!」

観月が煮干しを一匹投げるのを僕は口でキャッチした。

「ホント…悠哉の好物って変わってるよね」

「むっ…観月には言われたくないなお子様な舌の癖に…」

「なにか言った？」

観月の睨み付ける攻撃

「な…なにも言っていないよ」

効果は抜群だ

「それと、何読んでたの？」

観月が手紙を指差す。

「伯父さんからの手紙をもう一回読んでたんだ」

「悠哉…今言うことじゃないかもだけど…」

観月が僕の胸を指差す。

「男に戻ってるのか!!」

僕は下を向いたがやはり二つの山は健在だった。

「そうじゃなくて…またはだけてるから直して」

「ああ…」

服をまた直す…。

「悠哉…俺はそろそろ帰るよ」

現在…5時半…6時白塚の寮の門限だからな…。

「うん…バイバイ」

「早く怪我治せよな…」

観月が病室を出る。

「……………さあて」

今から始まる暇タイムをどう過ごすぞうか…。

「エカリ…クスバ…二人に任務を与える」

「はい！」

「エカリは悠の性格だけを変更してきてくれ！」

「はい！」

「クスバは悠の服装を女の子っぽくして来るんだ！」

「はい！」

「それでは、行け！今晚中に成功させるんだ！」

「「はい！」」

ゾクッ！

「背筋に寒気が……」

近くにある……アレを見つめる。

「やっぱり飲まなきゃだめかな……」

そのアレを掴み……フタを開けると……。

「臭っ！……！！」

部屋中に広がる錆びまくっている鉄の様な匂い……。

そう思いながら僕の意識は闇に沈んだ。

六十五話（後書き）

「にゃ…にゃああ…」

お疲れ〜。

「お前も飲めよ…」

ああ…無理まだ死にたくないし。

「僕は死ななかつたぞ」

俺とお前の胃袋は違うんだ。

「酷いな」

ふあああ…最近はずいぶんと忙しくて…眠いや。

「ネタが切れたのと親にそろそろ勉強しろって言われたんだっけ？」

そういうわけで更新が遅れます…週に…三回位かな…。

「十分じゃないか？」

やだやい！やだやい！

「じゃあ、それではまた次回もよろしくお願いします」

よろしくお願ひします！> ㊦ () ㊦ <

六十六話

「岡富い…目覚めのキスだよ」

僕は寝ていたが…気持ち悪い声のせいで起きてしまった。

「なんだよ…佐藤」

僕は目を開け…。

「おお！俺の愛で起きたのか！」

そこには…いつもの佐藤より…数段カッコイイ…佐藤が。

「カッコイイ…」

「なんか言ったか？岡富」

なんでだろ…動作の一つ一つが…芸術品みたいに見える…。

「あのさ…佐藤」

「んだよ…俺に惚れたのか」

「…かもしれない…」

「へっ？」

口を半開きにしてポカーンとしてる佐藤は…いつもなら間抜けとか

って感想が出るはずなのに…可愛く見える…。

「ううう…佐藤がかっこよく見える…」

僕は佐藤なんかきら…ううう…言つどころか…心の中でも言えないのかよ…。

「お…岡富い…俺に惚れると火傷するぜ」

ナルシストっぽい台詞な筈なのに…カツコイ…。

「火傷しても…いい…」

佐藤に顔を近づける…。

「なっ…くそ…記憶喪失の時のアレと同じじゃねえかよ…」

「佐藤は…僕の事…嫌いい？」

上目遣い攻撃！

「かわええ…」

「チューしても…良い？」

自分でも…自分じゃないみたい…。

「お…お前の気がすむなら…良いけどさ…後で殴るなよ」

佐藤が顔を赤く染めてる…可愛い…。

「ほら…んっ…」

目を閉じて…佐藤を待つ。

「くそ…可愛い…」

可愛い…かぁ…えへへ…。

「…………早くう…」

「ええい！」

チュツ…

「んっ…」

佐藤の口の中に舌を入れようとしてみた。

「……………」

だけど…佐藤は口を開けてくれない…むうう…。

「…ぷはぁ……………」

流石にずっとチューしてるのは息が続かないし…一回口を離した。

「佐藤…なんで…舌入れてくれなかったの……………」

少し…涙が溢れそうになる…。

「いや…俺の初めてを奪っておいて…それは…」

「むふふふ…僕が奪っちゃった」

「お前…美代さんと同じ様な風になってるぜ…」

「バーカ…美代姉さんと僕は違うよ」

あれ？僕…こんな性格だっけ？

僕じゃないみたいだ…。

「ハハハ…耳をあまがみしちゃっぜ？」

あまがみ…かあ…。

「佐藤なら…良いけどさ…痛くしないでね…お願いだよ…」

「何!!!？」

佐藤の顔が…真っ赤だあ…可愛い。

「ほら、耳だよ…」

耳を佐藤に向ける。

「な…な…な…」

「可愛い」

僕は佐藤のほっぺにチューした。

「ギャルゲの主人公の気持ちが…ようやくわかったよ…。」

ギャルゲ？

「もう…僕以外にも彼女がいるの？」

「いや…岡富は別に彼女じゃねえだろ…。」

彼女じゃない…そうだよ…僕なんか。

「僕なんかさ…そうだよ…僕なんかじゃ佐藤には…ひぐっ…ひぐっ…あわないよね…ひぐっ…。」

涙が…出ちゃうよ…。

「いや…ちよっ…待ってよ！」

「ううう…佐藤…。」

「あああ！もう！」

佐藤に抱きしめられた。

「…さ…佐藤…」

「泣くならさ…俺の胸で泣いて良いから…」

佐藤の匂いだ…いい香りだな…。

「佐藤…」

「なんだよ…」

「大好き」

僕の口が…佐藤の口にまた触れ…ビリビリビリビリビリビリビリビリビリビリビリビリビリビリビリ…

「ああ…私が書いたBL小説第二弾があ…」

「う…うっさい！僕はこんなじゃない！」

現在…6時…。

僕の病室には佐藤と山崎、更にBL好きないわゆる腐女子である帰き山喜徳やまきとくが来ていた。

「俺はこんな岡富でも良いぜ！」

「良いなあ…佐藤は…一回岡富にパフパフされたんだろ」
ば…

「パフパフってなんだよ！僕はした覚えないぞ！」

「山崎！余計な事を…逃げるぞ！帰山！山崎！」

「「おお〜！」」

三人は物凄い速さで病室を出ていった…。

「コラッ！廊下を走るな！！！！！！」

「「「「「すみません！！！！！！」」」」

とか聞こえる…。

「けどな…」

「パフパフって…何があったんだよ…」

「一つ…疑問ができた。」

六十六話（後書き）

フフフフ…騙し第二弾だぜ！

「め…め……迷惑なんだよ…!!！」

可愛かったよ。

「う…うるひゃぴ!……きゃんだ…」

可愛い!!!!!!

「僕で遊ぶなあ…!!！」

次回も遊ぶかなあ…。

「だ…だからあ！」

それではまた次回！

「よろしくお願ひします…!!！」

六十七話

「閑馬…またレベル2だったんさ？」

「鬮…俺のテレポートは特殊なんだからさレベル3以上は諦めたよ」

「ん…俺はレベル0だからさ…よくわからんさ」

「延長コードさんはレベル2だっけ？」

「重力操作らしいさ」

「白塚はレベル0からいきなりレベル4だしな…」

「たしか…再生能力らしいさ」

「俺達にもチャンスはあるよな」

「俺にはアレがあるさ」

「俺ぐらいなら倒せるよな…」

「てゆうかお前の能力は特殊過ぎて逆に弱いさ」

「白塚にも…勝てるか？」

「わからんさ」

「白塚は風紀委員に入ってから忙しそうだな」

「俺も風紀委員に入ればもつと技に磨きがかかるかな…」

「無理だな」

「ひ…酷いさ…!!!!」

「俺は眠いし…寝るかな」

「ああ…明日の学校ダルすぎるぞ」

「白塚…何これ？」

僕に差し出されたのはカチューシャの様な物に猫の耳がついた…。

「黒子ちゃんからの差し入れ」

問題の品はそれだけじゃない。

「他のやつは？」

「B1本が数冊、ウサミミにイヌミミ、バニーの衣装から、更には

水着まであるよ」

僕の病室の真横にはかなりのガラクタの山が…。

「あつ、それと水着は絶対に着てね」

「な…なんで」

白塚は黒い笑みを浮かべながら。

「美代が見たいって言ってたから」

そう言つて白塚は携帯を取り出した。

「いやだ」

「ふう…男に戻るまでには黒子ちゃんが無理矢理着させようとする筈だよ」

「ぐっ…」

白井さんならなんのためらいもなく着せてくる…。

「それにさ…黒子ちゃんの無理矢理は…裸にさせられちゃうかもよ？」

「そ…それはやだよお…」

「なら…着ようか」

な…なんかのせられた感があるけど…気のせいだよな？

「はい最初は美代からのリクエストの水着」

ぴ…ピンクのフリフリとしか…言い様がない。

「は…恥ずかしいよ…それと…！！！！！」

僕は白塚の後ろにいる変態二人を指差した。

「最高だな」

「佐藤の山崎はなんでいるんだよ！」

「岡富（女）の水着姿は見たことないからな」

「…」

「てめえら…表に出やが…」

「女の子がそんな口調で喋るんじゃないやありません」

「男だ！」

「女だな」

「水着似合ってるぞ」

「美代にそっくりだ」

「誉められてる感覚がしないぞ！」

男なのに女ものの水着が似合ってるなんて言われても不愉快だ。

「これでな…デレれば俺もな…」

「佐藤…お前はもう十分いい思いしただろが」

「さあて…お目当ての岡富君の水着姿の写メ撮れたし黒子ちゃんと

美代…先生に送るね」

美代姉さんはもう先生だからな…同じ学校の生徒にバレたら大変だしな。

ブウウウウ…ブウウウウ

「誰の電話だ？」

「俺と佐藤ではないぜ」

「白塚か？」

案の定。

「ああ……」

白塚が携帯を開く。

「鬮……！！！！」

白塚が顔をしかめる。

「くじ？」

「悪い……少しさ……」

白塚の顔が本気だ。

「行ってくるから……美代によろしく頼む」

白塚は病室を駆け出した。

「あのさ……岡富い……」

「なんだよ佐藤」

佐藤が珍しく真面目な顔をする。

「何かあったら……絶対に俺達に知らせろよ」

「そうだぜ……俺達はレベル3だけどさ……手伝える事は手伝うからさ」

「ありがとな……けど、まだ調子が悪くてさ……無茶出来そうにない」

まだ女なのが証拠だ。

「それなら良いんだ」

「はいはい…」

白塚…。

「無茶するなよ…白塚」

「鬮…閑馬…何のようだ…」

閑馬が低い声で。

「白塚…俺達さ…ある人にお前を勧誘する様に言われたんだよ」

鬮は微妙に高い声で。

「それにお前には否定する権利はないさ…」

白塚は少しイラついた様子だ。

「なんでだよ」

「岡富先生が人質になってるんだよ」

「な！！！！！」

「俺達もそれぞれ人質を取られてるんだよ……」

「で……なんの用だ」

閑馬が。

「終焉之叫の捕獲と」

鬪が。

「聖剣伝説の捕獲さ」

聞き慣れない単語に戸惑う白塚……。

「終焉之叫？聖剣伝説？」

「詳しくは知らないさ……」

「けどな……俺達も人質取られてるからな……」

「絶対にお前を引き入れる」

「諦めろよ」

白塚の周りから黒い粒子が…。

「白塚…その黒いのはなんだ？」

徐々に鎧の形状へと変化する。

「俺の能力だ」

「白塚あ…お前には俺を倒せないさ」

「倒せるぞ」

「ちよい…俺は？」

「お前とは一度決着をつけたかったんさ…」

「俺が勝つ」

「だ…だから俺は？」

二人とオマケの間に緊張がはしる。

「おい作者てめ…俺をオマケにすんなコラ」

怒るな閑馬。

「俺はいちようレベル4扱いだぞ？」

「大丈夫だよ…再生する前に腕でも跳ねれば良いだけだしな」

殺気をお互いにぶつけ合う…。

「高校生の会話じゃねえぞそれ」

「「閑馬煩い」」

「なんだよソレ…!!」

六十七話（後書き）

急展開さーせん。

「ダルいんさあ…早く次回に出演して休みたいさ」

てゆーかさあさあさあさあうっさい。

「仕方ないさあ〜」

お前の口癖はダルいの筈だろ！

「黙るぞ…」

正直な…お前のキャラはDグ のラ とか涼宮八 七の 鬱の鶴
さんとかとかぶってるんだよ！

「誰さそいつら?」

学園都市では放送とかしてないのか!!?!

「知らんさー!」

ではこれからサヨナラ〜。

「結局週3を越えてると…」

…気にするな。

六十八話

白塚は体中に鎧を纏いその手には黒い剣が。

「ん〜俺のコレじゃあ斬れなそうさ〜」

鬪の手には日本刀が…。

「まだ鬪は日本刀を集めてたのかよ…」

閑馬は二人から少し距離を置いてボケ〜としている。

「悪いが…手加減は…できない」

「大丈夫さ…手加減なんていらさないさあ」

二人の手に力がこもる…。

「「斬る!」」

二人はお互いに刀を振り抜いた。

刀は火花を散らしながらぶつかりあう。

「ふあああ…眠い」

白塚が拳を繰り出す。

「危なっ!」

鬪が刀で受け流す。

そのまま無防備になった白塚に刀を振り下ろす。

「効かないな！」

鎧が刃を通さない。

しかし鬪はそのまま白塚の腹に蹴りを入れる。

ぼぐわああああんぐ

とふざけた音が鳴る。

「堅っ！！！！」

白塚は刀を突き出す。

鬪は腰を捻ってかわし…遠心力を利用した斬撃を白塚に当てた。

刀は少し鎧を切り裂いた。

「よし！切れた！」

しかし…。

「あり？」

鬪は力を込めて刀を抜こうと奮闘するが…。

「ぬ…抜けね！」

「喰らえ」

白塚は刀を振り抜いた。

刀が鬪の身体を切り裂いた…と白塚は思ったが鬪は。

「真剣白羽取りって…成功するもんだな」

刀の腹を両手で押さえ…斬撃を受け止めた。

「まじかよ！」

鬪は上段回し蹴りを白塚にぶつけ…刀を一気に引き抜いた。

「白塚…俺はレベル0さ…」

「そんなの知ってる」

「刀じゃ勝てないみたいさ…なら」

鬪は刀を放り投げ…袖の中からは。

「H&Pだったけな…まあそんな銃器だから」

2丁拳銃を取り出した。

「銃かよ！」

鬪は引金を引き容赦なく白塚に命中させるが…。

「堅っ！！！！！」

鎧は少し傷がつく程度でダメージは期待できそうにない。

「とりいあ！！！！！」

白塚は刀を投げてきた。

しかし鬪は刀を撃ち落とすとした…一発で。

「ん〜ハンドガンじゃ無理があるさ…。」

鬪はハンドガンも刀と同じ様に放り投げた。

「閑馬！バツグからH&Rって書いてあるのとれ！！」

閑馬は急いでバツグをあさりはじめた。

「うわっ！け…結構銃がある！！」

白塚は刀で鬪を突いた。

鬪は刀をかわし白塚から距離をとる。

「急げ！！」

「わかってるから急かすな！！」

「閑馬あ！今度こそH&Rを投げろ！」

閑馬はH&Rを投げた…その銃器は放物線を描いて鬪の所まで飛び鬪はその銃器を受け取った。

「あと一番でかいやつを用意しとけ！」

「わかった！」

先ほどまでは騎士の様な鎧に身を包んでいた白塚の姿はすでに怪物のそれになっていた。

「なんか怖いな…」

「い……くぞ……くじい……」

怪物は右手を伸ばした。

右手は鬪の目の前まで一気に迫ってきた！

「うわ！」

鬪は飛び込み前転でかわし、H&Rの引金を引いた。

バン！！！！！！と先ほどの銃器とは比べ物にならない程の爆音が響く。

怪物の右腕が吹き飛んだ。

「ぐがあ！！！！！！」

怪物の顔が苦痛に歪み…。

「…」

鬪の表情もけして良いものではない…流石にまだ高1なのだ…血には抵抗がある。

「白塚…大人しく仲間になれ…」

「…み…美代は助かるのか？」

怪物の右腕が再生した、そして鱗等がボロボロと落ちていく。

「…恐らくな」

「…軍門に降ってやるよ…」

「すまないな…たしか組織の名前は聞いたぜ…なあ…閑馬」

やっと自分の出番かと閑馬が飛び起きた。

「>ロマノフくだったはず」

「四人で一つのチームでな…あと一人は…まだ知らされてないんだ」

「そうか…」

ここに…グループ、スクール等に並ぶ新しい組織…ロマノフが結成された。

「よ……………じ…」

暗い部屋の中…天使は翼をもがれ…首輪をつけられ…閉じ込められた。

「た……………けて…」

誰も応えてはくれなかった。

六十八話（後書き）

白塚…レベル0に負けるとは…。

「能力上の問題です」

能力のせいにするな！

「嫌い！それになんだよ鬮の銃の名前は！適當だろ！」

…そ…そんなわけ無いじゃないか。

「わかりやす…！！！」

ええいとにかくまた次回！

「作者ぐらいなら殺れる自信がある」

六十九話

「退院じゃあ〜！」

やっとな退院出来た〜。

「悠哉…うっさい」

「だってさだってさ！男には戻れたしさ退院できたしさ！」

「戻れたって言ってもまだ制限付きだろ？」

観月が呆れた顔で言っではいけない台詞を。

「うるさい！僕の寝顔見てドキドキしてたくせに！」

「ドキドキなんてしてない」

「いいやしてたね僕の寝顔見て顔真っ赤にしてたよ」

「それよりさ…刑務所に急ご」

本日は後藤博士に色々と能力について聞きたいことがあり刑務所に向かうことにした。

「やぁ…五番」

「五番言つな、それよりさっさと知ってること全部吐けやこら」

この博士見ると…イライラするんだよな…。

「何が知りたいんだい？」

「主に能力についてだな」

「完全同調と終焉之叫の主な違いはね…戦闘能力なら終焉之叫の方が上だけど…コピーできる量とかは完全同調の方が上だよ」

「ん…終焉之叫の具体的な能力を教えてくださいよ」

「長くなるが…いいな？」

「ああ」

博士が一気に喋り出した。

「お前の能力はいわばマイナスの境地だな、マイナスを埋めるために他の能力を呑み込むそれがお前の能力だった」

だった？

「しかしなお前は自分自身の能力が覚醒したからなマイナスからプ

ラスになった…しかしマイナスの名残で少しぐらいになら呑み込めるだろうが…レポート…一方通行などの計算量が半端ないのは使えない」

「前より…弱くなってるんじゃない？」

話を聞いた限りでは能力が目覚めたせいで能力をコピーできなくなつたみたいに聞こえる…。

「いや…能力自体がレベル5並だからね…十分強いと思うよ」

「ふん…」

それだ…。

「敗北之王についても聞きたい…」

「ああ…まかせろ」

「黒嶋…釈放だ」

暗い少年院の中…。

「おや？自分を釈放だなんて…どんな風の吹き回しですか？」

「俺もよくは知らんが…上からの命令だ…大人しく出ろ」

少年は全ての人間を馬鹿にしたような顔で…。

「フハハ…この世は何が起こるかわからないものですねえ！！！！」

「葛谷観月…お偉いさんがお前を呼んでるんだ…大人しく着いてこい」

悠哉が後藤と1vs1で喋りたいと言ってたから待ってたのに…。

「すぐに済ましてくれますよね？」

「ああ…勿論だとも」

「あまみ・ぢゆり尼見治癒炉…ロマノフという組織に入ってほしい」

「たしまりかわいは」

「ん〜…良いのか？」

「んじ」

「……………?」

「辺見太陽君」

「はい!?!」

「校長が呼んでるよ〜」

「校長が!!!?」

「何したんだよ太陽」

「も…もうイタズラはやめたよ…!!」

「とにかく行ってこいよ」

「なるほどね…白塚の能力って…融通利かないな…」

「んあ…久しぶりに真面目に喋るのは疲れるなあ…」

博士がべったりと…机に突っ伏してる。

「お疲れ様です」

「む…最後にさ…拓海君」

拓海…かあ…。

「んだよ…」

「気をつけてね」

僕の後ろの扉が開き…。

「そろそろ…面会終了です」

「はい、じゃ博士さようなら」

僕が面会室から立ち退くと…扉のすぐそこに黒服のサングラスの人がいた。

「どちら様で？」

「岡富拓海だな、貴様をある場所に連れていく様に言われたのでな、大人しく着いてこい」

…ここは刑務所だしな…面倒事になっても困る…仕方ない…ここはついてくか。

「白塚陽史、閑馬雅行、鬮拓海、尼見治癒炉の四人はロマノフに…
葛谷観月、黒嶋謙介、辺見太陽、岡富拓海の四人にはウィルスにな

つてもらおう」

「しかし…葛谷観月と黒嶋謙介には過去に殺し合いをしたデータがあります…」

「ふん…人質は用意してあるのだろう」

「葛谷観月の妹の葛谷祐希はすぐに捕まえて殺せますし…黒嶋の両親と姉はもう捕獲済みです…岡富拓海は岡富美代を捕獲してあります…辺見太陽はその点に関しては問題ありません」

「ならなにも問題はない」

「他の組織は…なんグループほどあるのですか？」

「ロマノフとウィルスを含めて4つ程ある」

「グループとドラゴンではありませんよね？」

「勿論だともあの2つは格が違いすぎるよ」

「では…？」

「ティアラとピリオドの2つだ」

「ふう…またスクールなどに並ぶ組織を潰さなくてはいけないのですか？」

「ああ…都合があるからな」

「…では…」

「ああ…開催するよ…」

「マスクレイド
仮面舞踏会をな」

六十九話（後書き）

ハハハ！平穩なんて過ごさせないぜ！

「まったく…私の出番がないね…」

結局エカリとクスバは出来たのか？

「ん？ああ…退院の前日にやったよ…可愛かったなあ…」

？男があっちに行っちゃったので…これからサヨナラ〜！

「可愛いなあ…」

七十話…嵐の前の静かさ（前書き）

今回からはサブタイトルをつけていききたいと思います…では七十話をご覧ください。

「私になにをさせたいんだ…」

「いや…リーダーにはリーダーっぽくなってほしいんだよ」

「まったく…」

「ん〜駒菜ちゃん…困っちゃった」

「ピリオドのリーダーか…」

「花江ならできるぜ…」

「天海君は黙ってくれない？」

「月夜ちゃん！…？」

「ふう…この四人じゃ仮面舞踏会で勝てる気がしないよ…」

「勝てるぜ！」

「だから天海君は黙って？」

「月夜ちゃん！ストレートすぎだよ！」

「エカリこと遠藤花梨えんどう・かりん…クスバこと楠場黄泉くすば・よみの二人はティアラに入る事を承認しました」

「そうみただいな」

「駒菜千種こまな・ちたねの説得で？男…情報があまりありませんが…とりあえず承認してくれました」

「ふう…あいつ…やっと折れたか」

「？男とは…何者なんですか？」

「ん…あいつの…名前はまだわからないのだよ」

「は？」

「仮名の情報ならある…撫養照美という仮の名前ならな」

「撫養…！！！！まさかあの撫養ですか？」

「ああ…あの子は撫養の養子だよ」

「鬮の能力開発う？」

閑馬雅行が…呆れた目で私を見る。

「俺には能力なんかいらさないさ」

更に鬮拓海が呆れた目で私を見る。

「甘いですね…その戦闘能力に超能力が加われば更に強くなれますよ？」

「更に？」

食いついた…おもわずにやけそうになるのを抑える…。

「安心して…」

私は鬮の耳元で囁いた。

「身体の隅から隅まで…玩んであげるから」

「な!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「なんだなんだ！何かおもしろそうな話をしてるのか！！？」

「閑馬はくんない！」 凄く動揺している…。

「アナタの身を守るためなのです」

「むむむ…」

「ほら…やさしくやりますから」

「やるの字が違くないかい！！？」

「じゃあ…私の止まっている宿泊施設の合鍵ですので…」

私は動揺している鬮拓海に鍵を渡した。

「わわわ…」

「楽しみにしてますよ」

「……うん……」

勝った。

「エカリ…クスバ…あと駒菜…」

「はい」

「なんだい」

まったく…駒菜といると…調子が狂うな…。

「今回の仮面舞踏会に向けて…だが…エカリの能力が最重要だ」

「なんでだい」

「私の能力は相手の記憶…又は性格を破壊します」

「修復も可能」

「ほえ…便利だね」

駒菜はオーバーリアクションすぎる…。

「相手チームのやつを…仲間に引き入れられるしな」

「エカリは凄い」

「クスバちゃんは」

「クスバの能力はエアロシューターだが…特殊でな…」

「特殊？」

「通常のエアロシューターに比べ…クスバのエアロシューターは気体ならなんでも出せる」

「ガスとか…色々出せるんだよね」

「…不便だよ？」

「ん…なんかピンとこないな」

駒菜は頭をポリポリとかいている。

「私の能力はまあ…戦闘に関しては問題ないから」

「たしかに」

「ふん…」

駒菜は興味なしか…。

「駒菜…お前の能力は？」

「秘密だよ」

こいつは…ふざけてるのか？

「まあいい…それより仮面舞踏会はもう一週間後だ…今からもう作

戦などを考えるぞ」

「真面目な話中だけどさ〜…」

「なんだ…」

「リーダーの仮面の下見せてよ」

「「！！！！（私達も聞いたことないのにいい！！！！！！）」」

「私の仮面か…ここにはお前ら四人以外には誰もいないしな…良いだろう…見せてやる」

私は仮面を外した…。

……………他人に見せるのは何年ぶりかな…。

「「ご主人様…萌え…」」

エカリとクスバが倒れて…。

「ん〜…襲いたい」

「もうつけるからな」

「「「えええ！！！！！！」」」

耳が痛い！！！！

「な…なんだ…？」

「そんなに可愛いのに！」

「もったいないよ！！！」

「とにかくだ…もう作戦会議にうつる」

「「「はあい……」」」

私の顔は…男にはみせたくないんだよな…。

「いやあ…んああ……」

少し暗い部屋の中に…妖艶な声が木霊する…。

「「「うが…うがか？」」」

「きゃんっ！！！」

少女は身をくねらせて…もう一人の少女に玩ばれている。

「良い鳴き声……」

少女は…いわゆるドSと言われる人種だった。

「は…初めては…閑馬が良かったのさあ…」

少女は思い人の名を呼ぶ…。

「やはり惚れてたか」

「な！今のナシさ！」

「すまないが…私の頭にはもうインプットされてしまった…」

「ううう…ば…ばかあ…」

「フフ…可愛いな…」

「白塚…となりの部屋煩いくないか？」

閑馬が2つあるベッドの片方で転がりながら問いかけてきた。

「…たしか鬮と尼見治癒炉さんの部…!!…!!…」

「まさか！！！！！！」

俺達のあたまに浮かんだのは…鬨が女子と同じ部屋で…つい尼見に襲いかかったという結論だ。

「「尼見ちゃんが危ない！！！！」」

俺達は部屋を飛び出しとなりの部屋の扉の合鍵をいちよう持っていたので鍵を開けて侵入し…部屋の状況を確認した…。

「か…んま？」

「鬨…だよな？」

そこには尼見ちゃんに襲われてる鬨によく似た女の子って…まさか。

「鬨って女子だったのか？」

閑馬がおもわず問いかけた。

「あらら…本当に気づいてなかったの？」

閑馬が倒れた…どうやら許容範囲を超えたらしい。

「鬨と…尼見ちゃんはとりあえず服を着たら？」

二人は下着姿だった。

「貞操は守られた」

尼見ちゃんが堂々と嘘ついた。

「守られてないさ……!」

まあそうなるな。

「とりあえず、状況を説明してくれないか？」

「ああ…あれはだな何処を触ったらどう反応するかによってどっこの能力かを調べる……」

「嘘さ……!絶対に嘘に決まってるさ……!」

まあそうなるな。

「じゃあ…そうだな…鬮拓海…頭の上から角を出すイメージで力を込めてみて？」

「？」

鬮が…うーんと唸って力を込めていると…。

によき

「「生えた」」

鬮の頭の上には…何か動物の耳の様な物が…。

「なに生えたってなに？」

ああ…意外な終わり方だな。

七十話…嵐の前の静かさ（後書き）

鬮くん！いらっしやい。

「ううう…治療炉の馬鹿あ…」

いつもの元気はどうした？

「お前が一番知ってるだろ？……………」

（さ）はつけなきゃ駄目なのか？

「煩いさ！もう黙るさ！」

じゃしかたないな…それではまた次回！

「閑馬を襲って閑馬の初めてを奪う作戦で行くさ」

七十一話…細菌

「おやおや？そこにいるのは自分を倒した風紀委員君じゃないですかあ？」

黒嶋謙介、こいつは少年院に捕まってたんじゃ？

「観月：大丈夫だよな？」

悠哉は俺がこいつを殺しそうだと思ってるのか…無理もないな。

「大丈夫だ…殺さない」

口ではそういう俺だけど…。

「ん…殺気はやはり気持ちがいいですね」

殺気が出てるらしい。

そんな空気の重い雰囲気は…。

「すんませ〜ん…ここがウイルスの集会所ですか？…っ…つて…」
変なやつが入ってきた…。

「辺見君か？」

「あっ！いつぞやの風紀委員の人…！！」

悠哉の知り合いか…ん？ウイルス？？？

「……悠哉…ウイルスってなにさ？」

「観月は聞いてなかったのか？」

聞いてなかった？

「おやおや…この世の中…情報がないと生きていけませんよ」

こいつに言われるのはムカつく。

「俺が説明するっす」

「ああ…頼む」

変なやつは息をすって…。

「まず今回俺たち四人が集められた理由は四人一組の大会である仮面スカーレド面舞踏会に参加するためっす」

仮面舞踏会…。

「それぞれのチームには名前がつけられていて…俺たちがその中の一つウイルスってわけっす」

黒嶋と力を合わせなきゃ駄目なのかよ…。

「仮面舞踏会って言うのは…ようするにチーム対抗の奪い合いっす」

「何を奪い合うんだ？」

すると、変なやつはすこしためらってから。

「人質の命っす」

「は？」

「俺たち四人は全員この学園都市の上層部に人質を取られてるっす」

「……祐希が危ない……」

「仮面舞踏会のルールは…フィールド…学園都市の中全てを使いどこかに隠されている宝を見つけるっす」

「宝か……」

「そしてその宝を自分の陣地に入れたら勝ちっす」

「テレポーターには有利な闘いだな……」

「だけど…妨害がありっす…しかも殺しさえしなければなんでもありらしいっすよ」

「ふうん……」

「勝てば良いんすよ」

「簡単に言いますね…フフフしかし気に入りましたよその現実を否定する精神」

「観月…勝つぞ？」

「ああ…」

「俺は辺見太陽って言うっす」

自己紹介タイムか…。

「自分は黒嶋謙介と言いますね」

「葛谷観月」

「岡富悠哉です」

「フッフ…ウイルスとはよくいった物ですね…」

「俺達が優勝するっす」

「それだとまずは皆さんの能力の確認が先決だと思われませんが？」

「俺の能力はレベル3の透明人間っすね」

透明人間…宝を運ばせるならこいつだな。

「レベル4の貴方空箱…材料は感情ですね」

よくわからん能力だけだな…。

「レベル4の炎撃使い…」

「未元物質に似てる能力だと思ってくれれば近いです」

「第二位の未元物質ですか？」

驚くのが普通だよな？

「ふむ…この面子だと…自分と葛谷君が攻撃…辺見君と岡富君が宝を護る…という戦略がベストですね」

俺が…。

「お前と手を組めと？」

「しょうがないですよ…自分だって貴方とは相性は良くないと思いますし」

「まあまあまあ二人とも落ち着いて下さいっす」

「……………ツチ」

「ふう…」

あああ……また空気を悪くしちゃったよ…。

「黒嶋と観月…お前らの人質を救うためだ…手を組めよ」

悠哉…。

「わかったよ…」

「フフフ…まとめて下さりありがとうございます」

「リーダーは岡富君で決まりっすね」

「異議はありませんね」

「賛成」

「いや…僕はリーダーとか…向いてな」

「」「決定」「」

「ええええええ！！！！！！！？」

悠哉に決まりだな。

その夜

「あれ？岡富君っすよね？」

うっ！まだ辺見は知らなかったか…。

「悠哉は…ある時間帯にな……」

「わぁー！！！！」

「フフフ…辺見君…自分が教えてあげますよ」

「ありがとうす」

な…なんで黒嶋が僕の性転換を知ってるんだよ！！？

「……紅一点」

「なんか言ったか観月？」

「なんにも……」

黒嶋と辺見の話が終わり。

「へえ…岡富君にはそんな事情が……」

「フフフ…だからと言って襲ってはいけませんよ」
「襲ってはって！！？」

「いや…殺される…っすよ」

辺見はわかってるみたいだな。

「悠哉…俺はもう寝る」

観月はいつの間にか布団を敷いていて…寝る準備まんまだ…。

「僕も…寝るかなあ…」

その瞬間…二人ほどの邪悪な視線が発していたのに僕は気づかなかった。

「辺見君…一人では殺られても…」

「はい、二人ならヤれます」

その二人の会話に気づかなかった。

「ふあああ…！！悠哉…その2つのボロ雑巾はなに？」

僕の布団のとなりには2つのボロ雑巾があっただよ。

「ん？ああ…変態だよ」

昨日の夜…襲って来やがった。

「「きゅ」」

「1616161616」

七十一話…細菌（後書き）

「僕って襲われすぎじゃ？」

それだけ魅力的なんだよ。

「しかも仮面舞踏会とかなんとか言ってるわりには…のんびりし過ぎじゃないのか？」

……………時間稼ぎ。

「はっちゃけた!!？」

それではまた次回！

七十二話…仮面舞踏会初戦開始

「まず…ウイルスvsピリオドで仮面舞踏会を始める」

「各チームに伝えておきます」

「フフフ…ピリオドには悪い事をしたな」

「ピリオドの戦闘能力では…ウイルスには勝てませんね」

「残念だ」

僕達…通称ウイルス宛に手紙が届いた。

「手紙か…古いな」

グサツ！

「今どき紙とは…」

グサグサッ！

「センスがないっすね」

グサグサグサッ！

「あれ？悠哉…どうしたの？」

僕は現在もの凄く落ち込んでます…orz。

「僕なんかさ…伯父さんと手紙のやりとりしてる…流行遅れですよ
おだ…」

手紙にはな…気持ちがこもるものなんだぞ…メールとかと一緒にするなよな…。

「八八八岡富君は面白いつすね！」

「ゆ…悠哉…手紙も良いよね？ね？」

「み…観…月………」

天の助け……。

「古いのは古いんですよ」

o r z

「悠哉…どんまい」

「それより…手紙開けません？」

「今はそちらが先決ですよ」

二人は僕を見捨てたあ…。

「読むつすよ、ええと…今回の仮面舞踏会での試合だが…ピリオド
vsウイルスに決まった…」

ピリオド…………。

「ピリオドのメンバーとウイルスのメンバーだが…君たちに奪い合
ってもらう宝は…能力体結晶の…3rdサンプルだ…」

「能力体結晶の3rdサンプル…自分は見たことがありますか…皆
さんは？」

「…ない(つす)」「」

黒嶋はPCを開いて僕達に画面を見せた。

「この赤い結晶が能力体結晶です…」

画面には謎のカプセルの中に入った…赤い結晶の画像が映っている。

「続きを読むつすよ…開催は…今日の2時からだ…っってもう1時半
じゃないっすか…!!!」

「場所は…!!？」

「俺達の陣地は…風紀委員第一七七支部っす！……！」

「七七支部…白井さんを巻き込みたくない…。」

「「まじ！！？」「」

「相手の陣地は…第二少年院っす！」

「ほほう…その敷地は把握していますよ」

「どうやら黒嶋の収容されていた少年院らしいな。」

「僕達は走りながら会話を繰り返して…。」

「3rdサンプルの場所は…不明っす…」

「そこは…僕と辺見で探す！……！」

「僕的能力をフル活用して…。」

「俺の透明人間は触れた物も消せるっす！一緒に消えて探せるっす」

「観月と黒嶋は相手の妨害を頼む……！」

「わかりました…が、自分の能力では足止め程度しかできませんよ」

「俺はとにかく燃やせば良いのか？」

「なんか…怖い発言っすね？」

「辺見君…諦める」

観月はそういつやつだ…と少し観月にビビってる辺見君に目で伝える。

「わかりました…」

辺見君…それで良いんだよ。

「ここからは二組に別れるぞー」

「わかりました…では葛谷君…行きましよう」

2時…丁度…仮面舞踏会が今始まる。

七十二話：仮面舞踏会初戦開始（後書き）

ピリオドのメンバーの名前と変な部分紹介！

はなえ・しゅんすけ
花江俊介

ピリオドのリーダー

あまかい・きんすけ
天海謹介

熱血漢

つきよ・みり
月夜美里

DS

ちつ・りょういち
地卵稜一

突っ込み約

かな？

それではまた次回！

七十二話…戦闘開始

「月夜さん行きましょう」

赤い髪をポニーテールにして、少しファッションを気にしているような格好をしている少年…地卵稜一は同じ組織の少女である月夜美里に話しかけた。

「……嫌い」

「いきなりっ?!?!?」

月夜は地卵に向かって冷たい視線を送る。

「貴方といると…私の目が腐る」

「目…目がマジだ…」

月夜美里は地卵稜一を無視して、ある場所へと向かう。

「どこ行くんだ?」

「3rdサンプルの場所」

「わかるのか?」

月夜美里は当然だと言う目で地卵稜一を睨み付けてから。

「だって、私のだもん」

確実に3rdサンプルに向かって歩き出した。

「花江…あの二人に任せて平気なのか？」

「ああ…3rdサンプルの居場所がわかるのは月夜だけだからな」

「な…なんでだよ」

「あいつの身体で実験をしたサンプルでな…あいつは3rdサンプルの音が聞こえるらしい」

「声が……」

「『今すぐ殺してくれ』……とな」

月夜美里が歩いていると…。

「なあ…コッ…」

「黙れ」

地卵は先ほどから何回か話しかけた…が『黙れ』という言葉の暴力でうち伏せられた。

「ううう…」

「地卵あった」

「あつたつて…!!?」

二人の目の前には風力発電のための風車が…。

「地卵壊せ」

「僕的能力で…壊せ…」

「壊せ」

「はい」

地卵稜一は足元の土を触って。

「クレイマン
泥人形」

地卵稜一がそう唱えた瞬間…土の形が段々人形になり…顔をよく見ると地卵本人によく似ている。

「あらら…屑がいつぱい」

「酷くないか？」

泥人形が次々と風車を解体し始める。

「遅い」

「泥人形なんだから仕方ない」

「じゃあお前もやれ」

「…わざと？」

地味に少しずつ解体されていく風車を見つめる二人だった。

「地卵の泥人形は陽動に向いているからな…あいつら能力体結晶を奪うのには時間がかかる…俺たちの勝ちだな」

「地卵から電話がかかってきたぜ」

「3rdサンプルを見つけたのか？」

「今取り出しているらしい」

「急げと伝えろ、ウイルスに見つかったら厄介だ」

「了解」

「……………あと少しだ……」

少年の頭の上で輪が回る。

「岡富君！急いで欲しいっす！！！」

少年…辺見太陽は自分の隣にいる輪の少年の岡富悠哉を急かす。

「もうちょい…あと少し」

頭の上で回っている輪が更に回転する。

「頑張つてつす!!」

少年の能力で今やっているのは…AIM拡散力場情報を基に3rdサンプルには数種類もっている筈の能力を探しているのだ。

「辺見…急かすな……」

岡富悠哉の検索は…現在学園都市の約7割の能力者の位置を把握していた。

「くそ…違う…違う…違う…違う…」

しらみ潰しに探す…。

「岡富君…」

辺見が呼んだ瞬間。

「あつた!!!!」

岡富の顔は汗でびっしょりしている。

「どごっすか!!!??」

「発電所だ……」

そついつて岡富は風車を指差す。

「急ぐつすよ」

「捕まれ」

岡富は周りの目を気にしない様子で翼を展開する。

「目立たない様に隠すつすよ？」

急に二人の少年と翼が消えた…そのことに一層周りはざわついた。

「3rdサンプルが動いた…もう敵が持つてるみたいだ」

「敵の能力は？」

岡富は一瞬念じて…と言つても見えないが。

「泥人形クレイマンと不可視壁ウォールだな」

「不可視壁？」

「解析したところだと…自分の近くに人を近づけない能力だ」

「泥人形で陽動…不可視壁が本命…て感じっすね」

「今から作戦を伝える…しくじるなよ？」

今は見えないが…岡富の表情は…確かに笑っていた。

「敵が来た」

「みたいだね」

二人は走りだすのを止めて、見えない敵を探す。

「透明人間か…ウザイ」

「ストレートすぎだよ…クレイマン」

地卵の足元から無数のクレイマンが出現した。

「私は逃げるけど負けるな」

「はいはい」

いつもはキツイ態度で接する月夜だが…今の台詞にはたしかかな信頼があった。

「げっ！あ…あんなに出せるなんて聞いてないっすよ…!!」

急に二人の目の前に二人の少年が出現した。

「お…俺は死にたくないっす!」

「おい、辺見…」

「死にたくないっすうう!!!!!!」

辺見太陽は目的の3rd サンプルとは反対方向に走りだした。

「逃げんなよ!!!!!!!」

岡富の叫びも虚しく…辺見の姿は消えた。

「……………」

地卵と月夜は呆れていた。

「一対一なら良いよな…クレイマン!」

無数のクレイマンが少年に殴りかかるが…。

「近寄るな」

少年の翼がクレイマン達を尻ぎ払った。

「僕のクレイマンが…い…一瞬で…」

地卵が絶望に落ちる…。

「3rdサンプルを渡してもらおうか？」

「断る……」

また…クレイマン達が凧ぎ払われた。

「実力差を考えなよ…人殺しはしたくないからさ」

「僕は最後まで諦めるわけにはいかないんだ」

…クレイマン達が宙を舞った。

周りの風景が変わり始めていた。

「おや？葛谷君の姿が見えませんね…」

黒嶋謙介ははぐれたパートナーを探していた。

「うむ…この場合は相手陣地に飛び込んで殲滅しても…いいんですよね？」

そう言って黒嶋は歩き出した…。

「……………君…誰？」

「おお！申し遅れたな！俺の名前は天海謹介！！！」

対称的な二人である…片方は静かだが…もう片方は台詞を聞いてわかるように煩い。

「……………ピリオドか…」

「それを聞いてくるならお前はウイルスか」

葛谷観月の手に炎が宿り…天海謹介の身体からは蒸気が噴き出している。

「殺しはしない…」

「ハハハ！！！！俺は殺す気で行くぜ！！！！！」

「む？」

花江俊介が陣地で見張りをしていると…そこに。

「おや？貴方一人ですか…ガツカリですね」

黒嶋謙介が歩いてきた…。

「俺はピリオドのリーダー…花江俊介だ」

「フッフ…自分はウイルスの戦闘員…黒嶋謙介です」

花江は腕を前に出した。

「さあて…死ぬ覚悟はあるか？」

黒嶋の足元を黒い渦がうねりながら回っている。

「残念ですが…自分は死にたくありませんので…貴方を殺して生き延びます」

お互いに殺気を放ち…牽制しあう。

ガッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

黒い牙と黄色いレーザーがぶつかりあった瞬間である。

「ハア…ハア…」

「ガハハハハハ！お前！弱いぞお！！！」

葛谷観月は地面に膝をつき…頭から血を流し…息も荒い。

「くそ…お前の能力は…」

「そつだ！水撃使いだ！！レベル4のな！！お前はレベル4の炎撃使いだろ！！？」

「そつだよ…」

天海は高圧水流で地面を切り裂いてから…。

「お前が死ぬんだな」

葛谷に迫った!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

七十三話…戦闘開始（後書き）

皆さんは気付いたと思いましたが…ピリオドの連中の名前は

花江俊介

天海謹介

月夜美里

地卯稜一

名字の頭文字をとると花天月地になります。

適当に名前をつけました。

次回もよろしく願いします!!!!!!

七十四話…逆転

「……おいピリオドの戦闘員」

天使は呼びかけるが…相手の少年は傷の痛みに耐えるのに精一杯な様だ。

「敗けられないんだ…僕は…月夜ちゃんを護る…お前らにとっては残酷だけどな…お前を倒して人質を解放する…」

少年の泥人形が集まり…巨大な拳を形成する。

「……でかいな」

先ほど地卵が解体した風車を超える大きさである…。

「僕の精一杯だ…お前を倒して…月夜を助けるんだ…」

「……」

岡富の脳裏に浮かんだのは…ヒュナスと戦った時の…自分の台詞…。

『お前を倒して白井さんを助けるんだ』

「ハハハ…僕が悪者みたいだな…けど」

拳が岡富の目前へと迫るが…。

「やあ…じいよ」

グゴオオン！！！！

拳が大地を揺るがす……しかし。

ズパアアアアン

「悪いな…敗けられないのは僕もなんだよ」

岡富はポケットからコインを取り出し…親指でコインを宙に舞わした。

「お前の覚悟を連れていく…」

コインが目の前で落下し…それを更に親指で前に弾く。

電撃を纏いコインが地卵の首筋をかすった。

「諦める」

「く…くそ…僕は…無力だ！！！！！！」

地卵稜一が地面を殴る…。

「誰も護れない！誰も…誰も救えない！！！！」

その目に涙が滲む。

わき目も振らず岡富は前に進んだ…。

目の前の地面は抉れ…草木は斬られている…。

「行くか…」

地卵稜一の周りの地形だけ…そのままだった。

「お前が死ぬんだな」

天海が葛谷に迫り…高圧水流の剣が…消えた。

「は？」

「水の弱点は…炎だ」

葛谷の右手は高圧水流の剣を切り裂いた。

そしてその右手には青い炎が纏われていた。

「水は所詮水だ…蒸発させれば害はない」

「俺の力はまだまだだ！！！！！！！！！！」

「うあああ……！」

そのまま水流を葛谷にぶつけようとするが……。

「……決まったな」

炎で蒸発させる。

「くそがあ……」

天海の両手から水が落ちる……。

しかし葛谷の炎はまだ灯っている。

「さよなら」

天海の頬を炎が擦り……。

「み……見逃すのか？」

「ん？そりゃあ……」

葛谷は腹を蹴りつける。

「しっがっ……」

「寝ててよ……殺さないからさ」

天海は倒れ……その天海を無視し……葛谷は進む……妹のために。

「フフフフ…これが貴方の力ですか…ふむ…レベル5の原子崩しに…とても酷似していますね…フフフフ…楽しいですよ」

黒嶋謙介の足元からは黒い刺が突き出ている…。

「お前の能力は…貴方空箱じゃないのかよ…」

黒い刺を指差し…花江俊介は指摘する。

「クフフフフ…自分の能力は感情です…感情は箱なんかじゃ縛れないんですよ」

刺に傷がつき…傷が開くと目玉が覗いている。

「ハハハ…とりあえず、+方面な感情ではないな…」

「クフフフフ…感情に良いも悪いもありませんよ」

次は黒い刺が形を変え。

「クフフフフ…葛谷君がいなくて…逆に助かりましたよ…」

鎌の形に変化した。

「ほう……」

影から刺と同じ黒い渦が黒嶋を包む……。

「死……喰い……(Death Eater)」

その姿は……死神のそれだった。

「自分を倒せますか？」

「……無理かもな……」

黒嶋は鎌を構え……花江は手をつき出す。

「けど……ここから引き離すのはできる」

黄色いレーザーが黒嶋に当たる。

一瞬だった……黒嶋はレーザーに貫かれ……血が吹き出し……その場に倒れる筈だ……普通なら。

「原子崩しは……所詮原子しか破壊できません」

心臓に当たる位置に確かに当たった……が黒い渦に止められた……。

「自分のコレは感情であって物質ではない……」

「やはりな……原子を破壊する俺の能力ではお前を倒すことはまず無理だ」

「貴方の心を…使いますよ」

影が動いた…花江の。

影からは黒い渦が生まれ…箱型に形を変え…花江俊介は閉じ込められた。

「ハハハ…俺の負けだ」

「クフフフ…相性の問題ですよ」

黒嶋を包んでいる黒装束に目玉が映し出される…。

「クフフフ…クハハハハハハハハ」

まさしく…その笑い声は…悪魔のそれだった。

第二少年院を包むのは狂気の笑い。

「黒子…いい加減にしなさいよ…岡富君にも事情があるんだからさ」

風紀委員第一七七支部の中では茶髪を肩まで伸ばした少女と。

「いいえ…お姉様…明らかにおかしいんですの…岡富に限って退院直後に私に何も伝えずにロシアに向かうなんて」

ツインテールの少女は二人の少年を待っていた。

仮面舞踏会の間…岡富悠哉…その他多数の行方は全て、学園都市の外側に出かけたという扱いになっており…岡富悠哉と葛谷観月の二名はロシアに向かったと報告されたのだ。

しかし白井黒子は、岡富悠哉と葛谷観月の二名なら退院した後にいきなりロシアに行くならば連絡してくる筈だと思い…何かあると毎日放課後になるとまっすぐに一七七支部に向かっていた。

「むう…」

頬を膨らませ…拗ねた子供の様な表情のまま自分を襲わない白井黒子を見て…常盤台のエースは。

「まったく…」

少しだけ喜んでいたのは秘密である。

すっかり新しくなってしまった机や椅子を見ると…二人は。

「…」

四人の魔術師が襲ってきた日の少年のアレを思い出す…。

『逃げて下さい』

また…あんなことになってるのではないか…と白井黒子と御坂美琴はやはり一七七支部から離れられないのであった。

七十四話…逆転(後書き)

ふあああ…最近は勉強がダルい…。

眠いよお…。

そんな感じで書き上げた第七十四話ですが…喜んで頂けたでしょうか？

次回あたりでピリオド戦は終わりです…。

そしたらロマノフvsティアラを書かなきゃ…ふあああ…。

また次回もよろしくお願いします…。

七十五話…各チームリーダー（前書き）

見てからのお楽しみ

七十五話：各チームリーダー

花江俊介（はなえ、しゅんすけ）

16歳男：A型

六歳の時に学園都市に入りそのまま入学。

七歳で能力である原子崩し（メルト・ダウンナー）を発動しクラスメイト一名に大怪我を負わす。

それが原因で施設に送られ、試作段階である能力を封じる腕輪の装着の実験対象に抜擢。

九歳の時に施設を離れ通常の生徒と同じ生活に戻る。

能力を封じる腕輪は未だに装着。

十歳で遂に腕輪を外し能力を解放する。

十二歳、岸岡中学に入学：身柄を隠しレベル0を突き通す。

十五歳、同中学を卒業し：破竹高校に入学：レベル0を突き通す生活は続く。

十六歳：現在にいたり能力検査を受ける、判定結果、レベル4の原子崩し。

?男: 仮名、撫養照美

14歳女: RH-型

データなし。

白塚陽史

16歳男: O型

六歳の時に姉兄の後を追うように学園都市に入学。

十二歳: 破竹高校付属中学に入学。

後藤研究所にて岡富美代(16女)に姉と兄を殺害される。
この時に敗北之王に目覚める。

十五歳、敗北之王の力を使い不良グループである負け犬の会を発足。しかし数ヶ月後に岡富悠哉他二名によって解散に至るまでに潰される。

十六歳：現在にいたる。

岡富拓海

13歳男？…A型

零歳：学園都市にて岡富悠子、万案弘の両名から誕生。

三歳：岡富悠子、万案弘の両名が死去…後藤篤俊に引き取られる。

九歳：後藤研究所から脱走し…岡富悠哉と名乗り始める。
脱走先の施設で葛谷観月に出会う。

十二歳：岸岡中学に入学。
白井黒子にて風紀委員に強制的に入る。

十三歳…終焉之叫が覚醒。

遠い昔の記憶…。

今では存在しない…一つの場所…。

女の子がビーチ沿いを歩いている。

「ふう…私はどうせ泳げないよ…」

女の子は頬を膨らませ、一人歩き続けた。

「博士…一緒に泳ごうよ！」

「ん…私は眠いんで…」

少年は博士と呼ばれるにはやや若い人物を起こそうと頑張る。

「……すう…すう……」

白髪の少年は静かに眠り…。

「んっぱっ！んっぱっ！！」

黒髪の少年はひたすら何かを忘れる様に泳ぎ続ける。

七十五話…各チームリーダー（後書き）

は〜い皆さんこんちわ〜！

「」「」「黙れ」「」「」

四人とも！！？

「ウザイ」

「黙れ」

「煩いな」

「正直に言つと…ウザイ」

ひ…酷いな…おい。

「まったく…俺をリーダーにすんなよ…」

「私はリーダーに向いていないのに…」

「……………美代の為だ…美代の為だ…美代の為だ……………」

「ふ〜…消えてよ？」

なんか…酷い…。

「それでは、」

「また次回も、」

「よろしく願います」

「残念なお知らせですが…暫くは事情があり更新が遅れます」

「では～また会いましょう。」

七十六話…行方

「はぁ…はぁ…」

少女は駈ける…少年が天使を止めてくれてると信じて。

「地卵……………」

隣には誰もいない…。

少女は願う。

「どうか…」

どうか地卵が無事でありますように。

「おや…葛谷君ですか…遅かったですね」

黒嶋はまだ箱で花江を封印している。

「……………すまない」

葛谷は近くにあった警備マシンの成れの果てに座る。

「これ、なに？」

葛谷は二つの物に対して問いかけた。

「この箱の中にはピリオドのリーダーが入っていますが、その警備マシンはピーピー煩いので壊しました」

黒嶋はまるで小学生が一日の記録を読むかの様に答えた。

「……………悪趣味だね」

「葛谷君には言われたくありませんね」

「…黒嶋…」

「なんですか？」

「お前の人質って…」

「姉です」

躊躇いながら聞いた葛谷とは対称的に黒嶋からは躊躇いなど微塵も感じない。

「わかった」

「君は…妹さんですよね？」

「ああ…」

「頑張りましょう」

「はあ…はあ…」

少女は白い翼を生やした天使に追い詰められていた…。

「3rdサンプルを渡して下さい…お願いします…」

「嫌だ…私は…私は…」

少女の周りに不可視の結界が張られる…しかし天使からしたら無意味だ。

「私は…私は…花江と天海と…地卵をまもりたい…私は…私は…弟をまもりたいのよ…」

「アンタらも…人質を？」

「どうしたんだア…打ち止め？」

「き…強力な感情の塊が…妹達全員…いや…オリジナルにも受信されてるってミサカはミサカは深刻な状況を伝えてみたり…」

「…また…めんどくせエことになりそうだなアおい…」

「アナタになにかあるわけじゃないよね？ってミサカはミサカは涙目になって抱きついてみたりい…」

「あア…大丈夫だ…」

「!!!!!!」

「お姉様？」

「岡…富君？」

「どうしましたのお姉様？岡富がどうしましたの？」

「岡富君の声が聞こえた……」

「岡富が近くにいますの?」

「……多分学園都市の中にはいる……」

「で、岡富はなんと?」

「『仮面舞踏会なんて……ぶち壊してやる』って」

「仮面舞踏会?」

「はあ……くそぉ……」

少女の手の中にあつた赤い結晶は……天使の手に渡つた……。

「悪いな……(俺)は……負けらんねえんだよ」

「待って!!!!」

天使は無情にも羽ばたき……空に飛び出した。

「行かないで!!!!」

天使は…振り返らない。

「助け出すんだ」

天使の呟きは誰にも届かない。

「黒嶋の姉さんってなんて名前なの？」

葛谷は…なんだかんだ言って黒嶋と打ち解けていた…。

「美里…って言うんだ…月夜美里って」

「お姉さんと名字が違うんだね」

「ああ…自分が旧姓を名乗ってるだけですよ」

「複雑なんだな…」

「ふふふ…そうですね」

「…………到着」

天使が3rdサンプル…否、今は目標物と言うべきだろう。

目標物を持ち…風紀委員第一七七支部に辿り着いた。

「岡富拓海だな？」

「ああ…」

天使の目の前に黒服を纏った大人…そう大人が恐らくは目標物を受け取りに来たのだろう。

「よし…これでウイルスの勝利だな」

「少し…待ってくれ」

天使の翼は花びらの様に舞い落ちた…。

「なんだ…」

「ピリオド側の人質の命を奪うのは止めてくれ」

黒服は黙ってしまった…。

まさか、まだ裏側の人間に…関係のない人間の命まで救おうとするやつがいたなんて…。

「頼む…」

黒服は更に黙り込んでしまう。

…少年は土下座までしている…。

「頼む…この通りだ」

「わかった…上に伝えておく」

「感謝する…」

黒服は思う…ああ、この世界はまだ捨てた物じゃないな。

「あれ？あそこにいるのって…岡富君？」

「岡富！！？」

二人はこの支部の入口にいる岡富と謎の黒服の姿を窓から捉えた。

「助けなきゃ！！」

二人は一気に外に飛び出した。

「岡富い！！！！」

少年は振り返った。

「では私は行くぞ…」

「はい」

黒服はどこかに歩いていく。

「岡富君…いつ帰ってきたの？」

質問ではない…岡富は直感した。

「…さつきです、あの人は（俺）をここまで運んでくれたんです」

「「？」」

いつもと…なにかが違う…。

「岡富…一人称は？」

「もちろん僕ですけど？」

聞き間違い…。

「だよ…ほら黒子、岡富君に言うことがあるんじゃないの？」

そう言われた当の本人は…。

「岡富…いままで連絡もよこさず…まった…」

「白井さん、御坂さん」

話も聞かず、少年は言った。

「（俺）…やらなきゃならないことがあるんです」

そして少年はわき目も振らず思い出の場所…風紀委員第一七七支部から離れていった。

「これ以上…誰も巻き込んでたまるか…」

少年の覚悟。

七十六話…行方（後書き）

ピリオド…完敗。

「負けたな…」

「クソっ！……！！！」

「皆…ゴメンね……」

「月夜…大丈夫だよ…大丈夫だよ…」

皆さん、最後に言い残すことはある？

「皆…俺なんかについてきてくれて…ありがとう」

「あたりめえだ…お前は最高のリーダーだったよ…」

「…リーダーは凄かったよ…私…ゴメンね…私…」

「…リーダーありがとね…僕達を率いてくれて…」

そんなわけで…ピリオドのメンバーを覚えておいて下さい。

七十七話…過去話って後付けの宝庫(前書き)

七十六話のサブタイトルを忘れてた…。

七十七話…過去話って後付けの宝庫

この日、ロマノフの四人で外食に行きました。

「はい、閑馬…あ〜ん……………」

「いや、自分で食べる」

「……………見せつけてくれるわね……………」

「……………黙って食べよな……………」

私達四人はそれぞれの反応を示した、皆は面白そうだったな。

「閑馬は…俺にあ〜んしてもらうの嫌？」

涙目で訴える鬮ちゃんはとっても可愛くて…襲いたい衝動に襲われました…。

「いや、嫌ってわけじゃなくて…そのだな…いきなり女性にあ〜んをしてもらうのにはだな抵抗がな……………」

「じゃあ、前みたいに男だと思えば？」

「男にあ〜んしてもらう趣味などない」

「じゃ、俺は女の子だぞ？」

あ〜あ、地雷踏んじやったね。

「ぐっ……………」

「じゃあ……………口移し?」

「「もつと駄目です……………!!!!!!」」

閑馬とリーダーは二人で鬮ちゃんにツッコミを入れました。

「む……………」

鬮ちゃんのいじけてる顔も可愛いです。

「なあ、白塚……………」

「なんだよ、閑馬……………」

「急になんか鬮のキャラが変わってないか?」

「……………たしかに……………」

「ほらあ……………二人で話してないで……………閑馬あ……………かまってよお……………」

二人の会話の通り……………私が能力開発……………いや鬮ちゃんが女の子だったわかった時から鬮ちゃんの性格が変わってる気がする。

「閑馬の馬鹿……………」

ああ……………拗ねちゃった。

「リーダー、二人つきりにしてあげましようよ？」

「ああ…わかったよ」

私とリーダーはその場から戦略的撤退をしました。

「鬮…お前の性格…明らかに変わってないか？」

「……違つよ…俺はね…女の子だってバレたから…素直に自分の気持ちを出せるんだよ…」

「…いつから、俺のことを知ってた？」

「……じゃあ話すよ…俺の…いや私の話をね」

中3の冬…。

「破竹高校は基本的に制服でも私服でも構いません、どちらで来るかは皆さんしだいです」

破竹高校の私服オツケーっていう話を聞いて受験、そして合格した。

「ふああ…眠いなあ」

特に気にするわけでもなく…ただ単純に頭で入学してやった。

「白塚、昨日のニュースみたか？」

「ああ見た見た、またスキルアウトが暴れたってな」

そこには昨日のニュースを話題にしている数人の男子グループがいた。

白塚と呼ばれた白髪の少年と…もう一人…。

「本当にふざけんなって話だよな」

黒い髪で顔を隠している…美形な少年（ええ…鬨目線です、重要なことなので二回言います…鬨目線です）が…。

「はう……………」

周りの風景などには興味ない…あの少年を見ていると…心が熱くなり…顔が火照り…はう…（また重要なことなので言いますが…これは鬨目線です）。

「か…かつこいい…」

いわゆる一目惚れ？

あの人と友達になりたい…。

私は財布を取り出し、床屋さんにむかった…そう変装だ、男子になりすましてお友達になるんだ…。

「絶対になつてやるんだからね」

「…第一部完…」

「まだ続くのかよ…」

呆れた表情を浮かべる閑馬。

「だつてえ…俺はあ…閑馬の事が…だ…だ…だ…だ…だ…だ…ぶしゅう…」

大好きのいの文字も言えず、鬮は倒れた。

「おい鬮？」

「はううう…」

「鬮！鬮！」

少女はそのあと無事にロマノフの宿泊施設に辿り着いたらしい。

七十八話…男と女との接し方による

「俺は閑馬雅之って言うんだ!」

閑馬雅之……………いい名前え……………。

「わた……………俺は鬮拓海ですっ!!!」

私っでいいかけた…。

「鬮か…よろしくな!」

閑馬の笑顔は確実に俺の心を鷲掴みにした。

「かんちよー!!!」

「ぐあっ!!!」

閑馬が白塚のお尻にかんち……………「ホンッ」。

「白塚…大丈夫?」

白塚の顔を覗き込んで、少し閑馬からめをはなすと……。

「隙あり!!!」

俺のお尻に閑馬の指が……。

「ひいやああっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「閑馬あ……寝るなあ……」

「ZZZZZ……」

授業中だから閑馬を急いで起こそうとしたけど……。

「寝るな閑馬!」

先生の手からチョークが放たれる。

「Z……………ん〜」

閑馬が首を傾け……。

「鬪……………そういえばお前着替え見たことないけど…いつ着替えてんだ？」

「えっ！！！！」

閑馬を撒いてから女子に紛れて着替えてるけど…。

「ええと…体操服を服の下から着てるんだあ……………」

閑馬が黙る……………。

バレたか？

「へえ…なんだ…」

バレてはないみたいだあ…。

「鬨……!!」

「なに？」

「お前ってトランクス派？それとも……ボクサーパンツ派？」

「………」

「トランクスだよ？」

「ほおお………」

「ば……バレてないよね？」

「閑馬の好きな女子のタイプは？」

「ボツキュツボンだな」

「俺はその場に倒れた………」

「うっうっ……」

どうせ俺の胸は……って中学生の時と比べると……大きくなった様な？

「ちょっとゴメン、トイレ行ってくる」

「おお、わかった」

俺はトイレに向かった。

俺はトイレに駆け込み、個室の鍵を締め。

「んし……」

上着を脱いで、サラシをほどくと……。

ポロン……

前に意識して見たときより、倍ぐらいの大きさになってた……。

「……これなら……」

誘惑可能かな？

「とかやっていたら…今に至るんだよね」

俺が過去の出来事を…もし相手が男ではなく、女だったら？とする
と恐ろしいことばかり言っていた。

「……………すまない」

「責任……………取る？」

「なっ……………!!!!」

「取るかい？」

そんなやり取りをしていると…白塚が来て。

「……………ティアラとの戦闘方法が決まった」

雰囲気が一瞬で変わる…。

「ウイルスとピリオドの戦闘方法はターゲットだったが…俺達の戦
いは…3 vs 3だ…」

各チームから3人を代表として出し、戦わせる。
二勝するか、それとも相手が降参するかで勝敗が決する。

代表者

ロマノフ

鬮拓海

尼見治癒炉

白塚陽史

ティアラ

楠場黄泉

遠藤花梨

?男

七十八話…男と女との接し方による（後書き）

携帯の充電がヤバい！！！！

「急ぐさ！！！！」

今やってんだろ！

ええと、とにかく次回からもよろしくお願いします！！！！

「うわっつき…切れる！！！！」

七十九話…パクリって物を食べる音に似てる

暗い闘技場にも見える…そこには四人の少年少女と…二人の大人がいた。

「ここに仮面舞踏会のロマノフvsティアラを行う」

「……………各代表選手は前へ」

白髪の少年が仕切るロマノフからは寝癖が目立つ少女が、仮面をつけた少女の仕切るティアラからは髪をツインテールに結んだ少女が風を纏いながら前に進む。

「鬪拓海、行きます」

「……………クスバ」

鬪は日本刀を抜き、クスバの周りの風は更にうねり…竜巻を生み出していく。

「一回戦開始」

掛け声とともに鬪は日本刀での突きを繰り出す。

クスバは宙に浮かぶことで突きをかわし、空中からカマイタチを鬪に投げつけた。

直後…クスバの肩に紅い染みが出来た。

いくつものラインを描きクスバの着ている常盤台の制服には紅い紋様できた。

だがしかし、その中に鬪の血液は含まれていない。

鬪は刀をただ数回振っただけ…がしかし距離的に無理なはずである。

「鬪の能力か!!?」

馬鹿…もとい閑馬は今の結果を見てそう感想をもらすが…。

「全然検討違いですね」

尼見に一蹴される。

「なにも見えなかったが…」

「これだから表側の人間は…」

尼見が説明を始める。

「あの刀にはワイヤーが仕込んであったんです」

「ワイヤーであんな風に切り裂いたのか？」

「それだけではありませんね、風の軌道を読み風を相殺できるように刀を振ったんですよ」

「鬪……スゲーな……」

そんな会話が聞こえた鬨は…。

(閑馬に誉められた…嬉しい嬉しい嬉しい嬉しい嬉しい嬉しい嬉しい嬉しい嬉しい！)

「ワイヤーと刀で能力者に勝てると……………」

クスバの周りの風に異変が起きる。

「思っなよ…刀ヤロー」

一方、ティアラ側は…。

「く…く…」

「どしたのリーダーとエカリちゃん？」

「クスバが怒った！！！！！！！！！！」

二人の顔に恐怖が浮かぶ。

「そ…そんなにヤバいの？」

「私達の前の隠れ家はな…クスバに壊されたんだよ…」

「はい…「じぎぶ」…ここではGとしておきましょう…とにかくそのGが…クスバの熊のぬいぐるみに引っ付いたんです…」

「そ…それで？」

((勝つて))

((ご主人様と…))

((閑馬と…))

((イチャイチャするんだ!!!))

ゾクツ×2

((な…なんか悪寒が…))

二人は帰ったら早く寝る事を誓った。

「勝つ!!!!!!!!!!!!!!!」

鬪は刀を地面から水平に保ち…アニメとかだったらオーラとかが出
てきそうな程に殺気を放つ。

「なにか…来る…」

「喰らえ!!!!!!!!!」

鬪は殺気を放ちながら構えていた刀を槍投げ競技の様にクスバに投
げつけた。

「……………」

だが風に撃ち落とされる。

「ふぁっ!!!?」

それを見た尼見は。

「これだから表側アツチの人間は……」

「クスバっ今よ……!!」

エカリの声に答えるように、クスバは竜巻を起こしそれを鬨に繰り出す。

「うわあああ……!!……!!」

鬨に竜巻が迫る。

「……とでも言うと思った？」

鬨はポケットからライターを取り出し、竜巻に一つ投げた。

投げられたライターは竜巻に巻き込まれた瞬間……。

ドオオンッ……!!……!!……!!……!!……!!……!!……!!

爆発音が闘技場を包み、爆風が二人を隠す。

「学園都市最新の超小型高性能爆弾の威力はどう？」

一見するとライターに見えるそれはかなりの破壊力を秘めていた。

「私……いや俺の武器への適応力をなめるな」

粉塵が突如晴れる、クスバはカマイタチを放つが。

「なっ!!!?」

先ほどまで鬪がいた場所には誰もおらず、周りを見渡すが誰もいない…。

「ど…ど…」

「時雨蒼燕流攻式9の型…」

ちよつとお!? パクリじゃないかそれえ!!!!!!?!

と…とにかく鬪はクスバの頭上にいた。

「うっし雨」

鬪はかかとおとしを繰り返した。

てゆうか…パクリやめろよ…。

「なっ…」

クスバが崩れ落ちる…。

「楠場選手が気絶した様なので…」 「勝者は鬪拓海」

鬪は閑馬に抱きつき。

?男とエカリは倒れたクスバに駆け寄り無事なのを確認した。

「次の代表選手…前へ」

エカリがクスバに

「行ってくるね」

と声をかけ進み。

「よるめきをこくか」

と屁見も進む。

「「「?????」」」

「「では二回戦開始」」

七十九話…パクリって物を食べる音に似てる(後書き)

修正したの…疲れた……………五回くらい失敗したし…。

「お疲れさ〜」

うっし雨を特式だと勘違いしてた…。

「お前が悪いさ」

それではまた次回……………。

八十話… 友達の力は借りない方が良い時もある（前書き）

自称腐女子の友達の協力を得た結果… 今までで一番長くなりました
…。

他に考えたサブタイトルは… 変態との接し方に気をつける

とかも良かったかな… と思う様なできました。

八十話… 友達の力は借りない方が良い時もある

ロマノフとティアラの激闘の時の… ウイルスの宿泊施設でのお話。

朝早くから、岡富は皆の分の朝ごはんの準備をしていた。

「…………… ダルいなあ……………」

まだ朝が早いために女の子の姿でエプロンをつけている彼女（？）の後ろには変態と呼ばれる人種が二名ほど… 作戦会議をしていた。

「岡富さんに乙女心を期待するのは… やはり無駄ツスカね…」

「いえ、今諦めたらそこで終わりです… 今は耐えるんです」

「そっツスよね！」

二人が監視を続ける後ろでは。

「…………… すう…………… すう……………」

葛谷は眠りに落ちていた。

「あっ」

黒嶋がなにか思いついた。

「なんツスカ？」

「催眠術をかけてみたら……どうなるでしょうか？」

黒嶋の提案はこうである。

- 1、催眠術で女の子みたいな性格にする。
- 2、次に自分達に惚れるように更にかける。
- 3、暫くムフフ。

「いっすね」

「フフフ……」

二人の視線がまた岡富に向けられるが…当の本人は。

「……………んっ！いつもよりいいできだ！…！」

昨日から準備を始めていた味噌汁の味見をしていた。

その後

「岡富君」

黒嶋が朝ごはんの定番メニューである卵焼きを作り終えた所で話かけた。

「なんだよ…黒嶋？」

「少し…催眠術でもしませんか？」

すると岡富は笑いながら。

「ほう…面白そうだな」

「では…目をつぶって…」

岡富は目をつぶり。

「ゆっくり深呼吸して…」

「すう…はあ…」

「るなにこのなんおはたなあ…るなにこのなんおはたなあ…るなにこのなんおはたなあ…」

「?????」

逆さに読むと…貴方は女の子になる。

「るなにこのなんおはたなあ…」

「むっ!…!」

岡富の額に汗が滲む…。

「うっうっ………」

「るなにこのなんおはたなあ!…!…!」

「にゃっ!…!…!」

岡富は奇声を上げた直後。

「ふにゃああ………」

バタツと倒れた。

「黒嶋さん………」

「成功………ですかね?」

二人は眠りについてしまった岡富を見守るのであった。

「ふああ…あれ？なんで悠哉は寝てんの？」

葛谷が起床し、床で寝ている岡富を指差す。

「いや…朝ごはんを盗み食いしようとして二人で来たところ…」

「いきなり倒れちゃったんすよ」

「……………まさか…」

葛谷のこのセリフに二人は少し焦る…。

（まさかバレたのか？）

そんな不安を抱えた二人の横に倒れていた人物がいきなり起き上がった。

「……………?!?!?」

「……………なに見てんのよ……………」

岡富は…鋭く目を尖らせ…三人を睨み付けた。

「……………はい?」

「なに見てんのよ……そんなに見ないでしょ……恥ずかしいから……」

三人の意識が一つになる……。

()()(ツンデレの一種?)()()

「馬鹿あ……コッチ見るなあ……ううっ……ドキドキすんだろお……」

岡富は腕をぐるぐると回して黒嶋と辺見を殴りだすが……本人は攻撃しているつもりなのだろうが……威力が弱いその行動はむしろ可愛い……ため……三人は。

()()(あっ……可愛い)()()

逆に癒されていた。

「ええと……アンタが……私の彼氏なの?」

岡富が指差す方向には……辺見の姿が。

「「は？」」

もちろん他の二人はこうなるが…指を指された本人は…。

「彼氏って…誰が？」

予想外過ぎて…現実逃避を始めていた。

「違っの？」

「「こいつではないのは確か」」

「……………アンタらは私のなによ？」

三人はそれぞれ…。

「親友？」 葛谷

「先輩？」 黒嶋

「彼s…ぼがつー！？」 セリフの途中で二人に蹴り飛ばされた辺
見。

「ん……………じゃあさ…私のさ……………ここがあつついんだけど……………」

岡富は…自分の足の付け根と付け根の間らへんを指さし…。

「誰か、スッキリさせて？」

二人の変態を処刑し終わった葛谷が振り返るとそこには……。

「見て？」

裸の岡と……………えええっ！！！！！！ 作者も予想外だぜ

「なにしてんだよ！！！！」

葛谷が自分のさっきまでくるまっていた毛布を岡富にかける。

「なんでって……………」

岡富は葛谷に抱きつき……………。

「好きだから……………」

「は？」

「……………」

「……………はあああああああ……………！！！！！！……………？……………？……………！！！！！！……………」

「観月って…呼んでも良い？」

「良いけどさ…抱きつくなよ…」

岡富はいやいやながらも服を着たが…観月に抱きついたままである。

「「イチャイチャしてんの反対!!!!」」

「四人でやる？」

「「よろこっ……………」」

二人は葛谷を見た…そこには…。

「……………」

鬼が無言で女の子に抱きつかれてました

「「遠慮します…」」

「じゃあさ…観月い…………やる？」

岡富は更に抱きつく。

「寄るな」

観月は遂に自分の意思を口から放り出した。

「え?」

「寄るな……………」

岡富の目から…涙が溢れる……………。

「う……………ううう……………」

涙で顔がぐしゃぐしゃになる……………。

「観月は…もとの私の方が好き？」

「好きではないな、好きと言うよりマシだ」

岡富は涙でぐしゃぐしゃになりながら…精一杯の笑顔で…。

「ばいばい……………」

また……………倒れた。

「あれ……………女の子のままだ……………」

岡富がまた目覚めた。

「「「誰だ?」「」」

三人がそれぞれ自分のことを指差す。

「観月と辺見と黒嶋」

岡富はちゃんと答えた。

「岡富君、キスしましょう」

辺見が真面目な顔でふざけたことをぬかした。

「良いよ……………優しくしてね……………」

「「「は?」「」」

「辺見……………」

岡富は辺見の身体に絡み付いて……………。

「はい?はい?はあ?????」

頭の中は?で一杯の辺見の唇に……………自分の唇を……………。

「いけません!……!」

黒嶋が辺見を突き飛ばす。

「へぶしっ!……!」

「なにすんだよ……………いいとこだったのに……………」

今のセリフは……………岡富が言った…。

「そつだそつだ！……………えっ！！？」

岡富はまた辺見のほうを向くと……………。

「辺見がさ……………かつこよく見えちゃうんだ……………ねえ辺見……………」

「な……なんでございますですか？」

辺見は混乱している。

「好きってさ……………今使って良いんだよね？」

岡富は辺見の唇に今度こそ自分の唇を重ねた。

「辺見……………」

岡富が熱い視線を辺見に向ける。

「どうするツスか……岡富君が壊れたツス……」

「自分に言われましても……」

「悠哉は一途だからな……辺見……」

「なんツスか？」

「悠哉を泣かせたら殺す」

葛谷の目には……冗談の欠片が……ない。

「辺見いいいい……我慢できないいい……早くうう……チューしてよ……」

もうもはやキャラ崩壊ではすまないほど岡富は……もうやだ……書きたくない……。

「頑張るツス！」

あつ……辺見がナレーションに気づきやがった。

「焦らすなああ……辺見いい……早くうう……」

「辺見君……ここは諦めて岡富君とキスでもしてきなさい……」

「なんか嫌ツスよ……後で恨まれたら怖いし……」

「辺見……行け」

「いや…充分大き…ってなに言わすンスか……………」

「揉んで……………」

「は？」

突然の出来事に辺見は対応できていない！！作者も戸惑っている！！！！

「他人に揉まれると…おつきくなるって聞いたから……………辺見の好きな胸が大きい人になりたくて…」

岡富が後ろの棚の方に行き…中を漁る。

「あつ！！！」

岡富はあるものを取り出した。

「これ……………辺見のでしょ？」

(おつきい娘は好きですか？)

と書かれた……………エロ本がその手に握られていた。

「……………わわわ……………」

「僕の胸なんかね…こしかかないから…辺見が無理してるんでしょ…
…僕ね…辺見のためにね……………胸…大きくしたいな……………駄目
?」

「揉ませて下さい」

辺見はもつ色々ありすぎて…考えるのを放棄した。

辺見が岡富の胸に……手を伸ばし……。

「イップシっ！ー！」

岡富がクシヤミをした。

「あれ？辺見じゃ……ほにやあっ！ー！？」

岡富の胸の形が崩れる……。

「はあはあ…悠哉タン…萌え」

「やつ……駄目……揉むなあ……」

頭の中がショートした辺見の後ろに…二つの影ができる。

「にやつ……みづきい……くろしまあ……見ちゃやだあ……見にやいでよあ……」

「この変態が……」

葛谷は炎を手に灯し…黒嶋の影から黒い触手が伸びる…。

「いっぺん死ね」

触手が辺見を掴み、拘束する。

「もっもっ！ー？」

そして腹が空いたところに……葛谷の炎の鉄拳が……。

「死ね」

ボゴルギッ……!!

リアルに骨の軋む音が宿泊施設に響いた。

「みづき……くろしま……にゃんで……へんみは……ぼくを……？」

今までのあらずじを葛谷と黒嶋は語り……そのあと……更に辺見の骨が軋む音が宿泊施設に響いたそうだ。

八十話… 友達の力は借りない方が良い時もある（後書き）

なにやってんだ！友達B！！！！

B、だってさ、つまらなかったから。

自分で書けよ！！！！

B、めんどくさいよ…それにさこんな小説読んでる人いるの？

酷いなオイ…。

B、今までの騙し小説とかも私が協力したから出来た作品だからな？お前だけだったらとつくに打ち切りだよ。

……………。

B、それになんで私がBなの？

キャラデザインを一緒に考えてくれたのがA。

B、あつ…Y。

イニシャルウウウウ！！？

B、私のも別に良いよ？

いや、そうゆう問題じゃねえしっ！！！！

B、メールでやりとりするの疲れた、やめていい？

良いけどさ…これ以上問題はな…勘弁な。

B、どうせアタの一人芝居だと思われるよ。

酷っ！！！！！！

B、こんなやつですが、根は良いやつなんです…こいつをよろしく
お願いします。

普通は俺が言うやつじゃね？

八十一話…混乱、そして混沌

「二回戦開始」

ロマノフの尼見治癒炉の背中から…巨大な腕が飛び出す。

『私に勝てるのは白塚だけよ』

背中から頭も飛び出し…頭が喋り出した。

『む…あ…とりあえず』

頭が笑い…。

『いい死に様晒してよ?』

腕が状況をのめていないエカリに向かう。

「キヤアアアアアアアアア!!!」

ドスンッ!!!!!!

エカリの身体がぐちゃぐちゃに潰れたのではない……………。

『私の…腕が…何故?』

腕が破裂した音だった。

「ふう……………能力を無理矢理解除させるのは…かなりの演算量なん

だよ……」

腕が崩れた後ろから、ポニテを靡かせエカリが後ろに歩き出した。

「決着がつく前にフィールドから出るのは反則です」

「大丈夫よ」

頭が……口を開く。

『わわわわ私しししなのままま負けけけ……』

「……!?!?」

「あの腕から貴女の脳へと侵入させてもらったわ……おかげで私の……」

審判は戸惑いながらも……。

「勝者は遠藤花梨」

「その名前で呼ばないでよ」

少女の後ろで怪物が崩れ落ちた。

「ハハハ…まさか尼見治癒炉が遠藤花梨に負けるのは想像の範囲を越えていたよ」

「はい、一瞬だったそうです」

「うむ…で君はどちらが勝つと思うかね」

「自分は…白塚陽史のロマノフが勝つと思います…地頼さんは？」

「ふむ…やはり能力を考えると…？男か…」

「フッフ…」

「どうした？」

「いえ…なにも」

「フッフ…やはりアイツは甘いな……なにも解っていない」

「リーダー…すまない…私では力不足だったよ…」

彼女の視線ね先に映る白髪の少年の目には。

暗い天井しかない…しかし、その目は天井の奥にある……………。

「いい……………月だ」

見えない月を捉えていた。

「ご主人様あああああ!!!!」

エカリはクスバを介抱をしている？男に抱きついた。

「エカリ……………よくやった……………」

？男の仮面にヒビが入る…。

「じ」……ご主人様？」

仮面のヒビとヒビの隙間からは…。

「行ってくる」

少女の緋と碧の光。

「それでは三回戦の代表選手は前へ」

白髪の端が……黒くなる。

仮面のヒビが大きくなる…。

少年と少女の殺意が膨らんでいく。

「三回戦開始」

二人は動かない。

「ねえ白塚君、私はね…敗けられないの」

「あああ……………」
「……………言っつていいか？」

少女は仮面を投げ捨てて…。

「もう…隠さない」

仮面は濁いた音を出し、砕け散った。

「言いなよ…白塚陽史」

「わかったよ…後藤焰（ごとう、ほむら）……………」

その場の全員がその名前に注目する。

「行くよ……………エクスカリパー 聖剣伝説」

「ソウルテラー 敗北之王……………」

まず白塚の身体を黒い渦が包み…爬虫類の様な身体に成型していく。

まず牙…次に鎌爪…鱗…角…翼…尾…。

「グビガガガガガガガガガガガガガガ……………」

「じゃあ……………これね」

焰は白塚の姿を見て、光の刀をある形に変える。

少女が剣を振るう、龍は斬られるが…瞬きでもすればもう腕の形だ。

龍が尾を叩き付ける、少女は剣で受け止める。

少女が龍の顙を切り払う、龍は傷も構わず剣を吹き飛ばす。

龍がその強靱な鱗を…そうあの天使の様に降り注がせる、少女は第十一の刃…大太刀を抜き素早い凧ぎ払いで鱗を近寄せない。

太刀で龍を切り刻む少女…龍の再生が止まる…。

「これで……………終わり!!!!!!」

龍の首と身体が離ればなれになった。

「で?」

龍の身体から…更に龍が2、3頭出てきた。

「なっ!?!?」

「神話では龍を殺す話はあるだろうけど……………」

八十一話…混乱、そして混沌（後書き）

？男の本名〓後藤焰

緋と碧のオツドアイ

「うーん…別に隠してたわけじゃないが…」

顔は美人だよな。

「知らん…私の顔なんか普通だろ？」

じゃあ聞くけど仮面なしのとき…何人がお前見てた？

「うーむ…さあ？」

正解は女子も含め全員でした！！！！

「知るか…興味ない」

なんで仮面をつけ始めたの？

「なんか…一日中…追っかけられる生活に疲れたんだ…だから仮面をつけて…常盤台に転入した…」

ふふふふふ〜モテモテだね

「じゃあ…また次回も見てください」

?男……いや焔をよろしくお願いします。

パクるな!!? ……ゴホンツ…鬮は刀を白塚に向ける。

「で…でるぞ…な…なんか必殺技が!!!!」

閑馬の期待の眼差しは鬮に向く。

「なっ!!!?」

しかし鬮は……。

(ううう…ただの騙し討ちでもしようとしたのに……)

鬮は揺れていた。

(騙し討ちして鬮からの評価を下げるか…それとも必殺技みたいな
のを出した後に改めて騙し討ちをするか……)

「鬮ちゃん!!!!」

尼見も急かす。

「あああ!!!もう!!!!」

鬮の刀が地面に刺さる。

「ワイヤー全開」

鍔からワイヤーが数本地面に刺さる。

「最後までわからないぞ？」

ロマンフは闘技場を後にした。

「ご主人様……………」

「大丈夫だ…それより……………すまない……………私が敗けたせいで…駒菜が捕られている人質が……………」

「大丈夫だよ……………リーダー……………」

下を向いていた焰が上を向くと……………。

「だって…最初から想定内だったもん」

「？」

駒菜の背後から…紅い結晶が…6つ。

「ねえ……………義姉ちゃん」

「「ご主人様！！！」」

遠藤と楠場が焰を突き飛ばす。

「なっ！！？」

グジュリ…

結晶が二人を貫く…。

「エカリ！クスバ！！！！？」

「あらら…外れちゃったね」

残り4つの結晶を焰に向け…。

「今度こそ…死んでね？」

4つの結晶は焰に……。

「幻影…狂い桜」

撃ち落とされ…、焰は。

「エカリ！クスバ！しっかりしなさい！！！！！」

二人を抱えて…。

「あれ…まだそんな余裕があったんだ…」

「駒菜…」

空間の裂け目に逃げ込んだ。

「ふう…さあて…パパに報せなきゃね」

紅い結晶が駒菜に…水がスポンジに吸われるかの様に吸収され…駒菜は歩き出した。

「パパあ…ゴメンね…？男を逃しちゃったよ…」

「フフフ…良いです…それに？男の正体があったただけでも儲けものですよ…」

「それに地頼は騙せたの〜？」

「当たり前です…あの程度の頭しか持っていない男を騙すのなんて…余裕すぎて欠伸がでますよ…」

「流石だね〜」

「千種…そろそろ駒菜と名乗るのも終わりにしましょう」

「はい」

「地頼の隠れ蓑ももう捨てますし」

「遂に…だね」

「総括理事会を潰しますよ」

「エカリ！クスバ！」

「す……すいません……」

「私達が…足を引っ張ってしまいました…」

二人はそれぞれ脇腹から血を流している。

「くそっ…出血が酷い…！」

三人の後ろから…。

「お困りの様だね…」

カエルの様な顔が。

「今助けるよ」

希望を見させてくれた。

「へヴンキャンセラー…」

「駒菜っ裏切るのか!!!?」

地頼は足を押さえている…。

「裏切る?…僕は貴方と手を組んだ覚えがありませんね…」

その手には銃が握られていた。

「くそっ!!!」

「貴方がいては総括理事会を潰せませんからね…」

引金は引かれ…鮮血が…。

「駒菜……………」

「駒菜？いいえ…僕の姓は…」

「返り血は…。」

「僕が撫養照美の義父でもある…撫養桂一郎ですよ」

「紅い結晶にかかり…。」

「さて…千種！」

「その後から千種が出てくる。」

「なに？」

「死体の処理を頼む」

「さあ千種…僕のためにその紅い羽根を出してくれ」

「少女の結晶が形を変え…翼になる。」

「最終決戦が近いな」

「そだね」

その翼を生やす少女は…天使と呼ばれるよりは……………。

「夕焼けで…町が血塗れみたいに見えるね」

悪魔に見えてしまう。

八十二話…フラゲフラゲフラゲ (後書き)

うふう…早速間違いが見つかりました……………うふう…。

攻式1の型…車軸の雨

守式2の型…逆巻く雨

攻式3の型…遣らずの雨

守式4の型…???

攻式5の型…五月雨

守式6の型…???

守式7の型…繁吹き雨

攻式8の型…篠突く雨

攻式9の型…うつし雨

特式10の型…燕特攻

特式11の型…燕の嘴

総集奥義…時雨之化

4の型は次回までに調べておきます。

八十三話…この小説は急展開とほのぼののでできています

「あれ？」

葛谷は外を歩いていた…周りには高層ビルの森に……。

「桜だ………」

桃色の華が咲き誇っていた。

咲き誇る…というよりは…桜の華のついた枝がビルから生えていて…どこか不気味だった。

「……………桜咲く…舞落ちる……………」

葛谷は軽く歌を歌いながら……………小道に行く。

「おや？」

黒嶋謙介の視線の先で女の子が泣いていた。

「どうしました?」

少女は泣きながら応えた。

「あのねっ…ヒグツ…風船がね…」

少女が上を指差す。

「むっ…」

ビルから咲いた桜の枝に引っかかっていた。

「今お兄ちゃんが取ってきますね?」

「うん…」

黒嶋はビルに行く。

「げっ…」

小道を歩く辺見太陽の目の前に一人の少女が立ち塞がる。

「コラアツたい!!!!」

少女は大股で辺見に近づき…。

「今までどこにいたのよ!!!!」

「ああ…話せば長くなるツス…」

「良いから話しなさい…」

辺見は姿を消そうとするが…。

「たいっ逃げるな!!!!」

チョップが辺見の頭にヒットする。

「いてっ!」

「たい……心配したんだからね……」

少女が涙を浮かべ、そのまま辺見に抱きつく。

「わかったツスよ……」

二人は気づかない…周りがニヤニヤしながら見ていることに…。

「とにかく、一回落ち着ける場所に行くツスよ……」

「うん…」

二人は近くの喫茶店に行く。

「……………嘘だろ？」

岡富悠哉の目前には…もはや建物としては機能しそうにない…。

「研究所が…潰れてる…」

…午後8時～午後8時半までの間に壊された研究所。

「ん？」

目の前に、一つの…仮面があった…。

「嘘だろ？」

その仮面は割れていて…しかも見覚えがあった。

「これって…」

そう、？男…いや焔が自ら捨てた仮面が落ちていた。

仮面を拾い…仮面を観察すると…裏に…。

(病院に来なさい…カエル顔より)

「っ！！！！！！」

少年は病院へとただ真っ直ぐに行く。

「儂くて…壊れそう…君みたいな花…」

繰り返し…五回は歌っただろう…。

「あっお兄ちゃん！！！！！！？」

後ろから…ポニーテールをピョコピョコさせて…少女が葛谷に…体当たり…。

「ゴフッ！！！！？」

葛谷は五メートル近く吹き飛んだ。

「お兄ちゃああああああああん！！！！！！」

少女…葛谷祐希は久しぶりに見る兄に頬擦りをし…胸を擦り付け…
下腹部をくすぐり…。

「やめる！！！！」

「お兄ちゃん…どこ行ってたのよ！！？」

観月は黙ってしまった…。

「お兄ちゃんの馬鹿…」

祐希は泣いていた。

「……………すまない……………」

「馬鹿馬鹿……………もうお兄ちゃんって呼んであげない……………観月って呼んでやる……………」

「わかったから……………観月でも良いから……………とにかく離せ……………」

「やだよ！観月がどっか行っちゃうもん！！！！」

観月は周りに目配せしてから……………。

「皆見てる」

「あつ……………」

祐希は観月から飛び退き……。

「ゴメン……」

「ああ……わかった」

観月は祐希の頭をガシガシと撫で回した。

「ほら、これで良いですか？」

「うん！お兄ちゃんありがとう！……！」

そう言っつて少女は走る……………。

その道筋にはなにやら柄の悪そうなりーゼントがいるが……少女はこちらに手をぶっつていて気付いていない。

「なっ！ぶつか……」

少女はリーゼントの男にぶつかり倒れる。

「いたっ…ごめんなさ…」

「いてえなっ！」

リーゼントが少女を蹴りつけた。

ビキッ…

「ごめんなっ…ムグっ」

リーゼントはあやまる少女の口を塞ぎ…。

「ごめんですんだらな…警察はいらねえんだよ…」

腕を振りかぶり…。

その腕は…一つの黒い影を殴り付け…。

「いつ…!?」

リーゼントは少女の後ろにいる黒嶋を見つける。

「貴方…死にたいですか？」

殺気の弾丸…そう表現できてしまっなにかが黒嶋から発された。

「ひっ…」

リーゼントは一目散に逃げ出し…。

「お兄ちゃん!!!!」

少女が黒嶋に抱きついた。

「ありがとう!!」

パチパチ…

黒嶋が周りを見ると…。

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ

「兄ちゃんいいやつだな!」

「スツキリしたよ!」

「良かったな嬢ちゃん!そんないい兄貴がいてな!」

(あっ……………)

黒嶋は少し気づいてしまった。

「バイバイっお兄ちゃん!!!!」

「前を向いて走りなさい!!!!」

(周りに…)

まわりのために力を振るうのをうれしく思う自分がいることに。

「んああ…いい加減泣き止めよ…」

「な…泣いてないもん!!!!」

少女は明らかに涙で顔を濡らし、頬が赤くなっていた。

「そ…そんなことより…今まで学校サボってなにしてたのよ!!!!」

「んああ…護ってた」

「なにをよ？」

辺見は立ち上がった。

「まあ…今までの成果が見れただけでもよしとするかな…」

「？」

「あああ…未稀…」

未稀と呼ばれた少女は辺見に…。

「大好きだぞ」

キスされた。

「
× × × !!!!!?」

嬉しさと恥ずかしさが声にならない叫びとなる。

「な…な…ななな!!!?」

「それじゃな」

辺見は消え…少女が残された。

「う…う…う…」

少女は自分の唇を触って…。

「でも…良いかな…」

周りの客は突然開く扉や、なにもない空間から声が聞こえるという怪現象を目の当たりにするのであった。

「あつ…胸揉むの忘れてた」

その台詞がいきなり聞こえた周りの人は…。

「「じゅっ！！！？」」

岡富のチョップを喰らった二人は…床に倒れてもがいている。

「悠……ありがとう……」

顔を真っ赤にして…少し涙目…更には服がはだけている？男は…男
百人中百人が襲いかかりそうなほど美人だった。

「仮面……割れてたよ？」

「ああ…あれね…捨てた」

「なんで？」

「もう隠れないって…私は正面から正々堂々と戦うって決めたから
しっかりと…？男の覚悟が見えた。

「でね…いきなりだけど…私の本名…知りたい？」

「はい」

？男は岡富の耳に息があたるくらい近づいてから囁いた。

「焔っていうの」

その時…窓が割れた。

「「「「！」「」」」」

女子三人はその場に伏せて…岡富は。

「隠れてっ！！！」

翼で三人を護る。

「岡富拓海…」

割れた窓から人が侵入してきた。

「誰…っ！！？」

「お前に手紙だ」

長身で茶髪…サングラスに黒いスーツそして…炎でできた兵士。

「お…伯父さん！」

「可愛い甥が大変だと…ツインテールの彼女から聞いてな」

ヒユナスは病室の椅子に勝手に座り。

「さて…？男…いや……………」

その頃闘技場のあたりに落ちていた仮面が…。

カタカタカタカタカタ………

風に吹かれ…不気味な音を出していた。

「フレイヤ!! スティングレイ」

ヒュナスの言葉に反応出来た人は少ないだろう…。

そうただ一人だけ反応した。

「ヒュナス・ラストペイン…」

その言葉には…まるで王が兵士に呼びかけるように…。…。

「いつわかったの？」

「つい、昨日」

焰は光の剣をだし、その剣は形を変えた…。

「好戦的ですね…姫様」

「…次そう呼んだら………」

剣は…全体的に水晶で構成された…七支刀…7つに枝分かれた刀へと変化を遂げた。

「国の秘宝はやはり貴女様が…」

「ロシアに帰るつもりはない」

刀は冷たい風を纏っていた。

「イギリスの秘宝マーテナⅡオリジナル、マーテナⅡセカンド…」

ヒュナスは淡々と説明を続けた。

「それに並ぶロシアの秘宝…」

七支刀はコロナを意図も簡単に切り裂いた。

「レーニンの指揮棒じゃないですか？」

焰はその口からまるで呪詛の呪文の様に。

「ヒユナス…死刑よ？」

王女 of 言葉を吐き出した。

八十三話…この小説は急展開とほのぼののでできています（後書き）

急展開に続く急展開来たー、（、ー、）ノ

さあて焔にツッコミを入れたい皆さん！

言い訳をさせて下さい。

後藤焔とは日本での名前であり実は本名ではありません。

しかも後藤という名字は…後藤博士とはなんの関係もありませんね…はい…この前書いた時に…。

「あつ…博士と同じになっちまった……………まっ、いいか」

となりました。

それ以外は気付いた人が多数だと思われませんが…焔はお姫様です

時雨蒼燕流守式4の型がわかりました…五風十雨でした。

焔の振り回した刀であるレーニンの指揮棒って…名前は適当です
レーニンって…適当にロシアの人の名前を歴史の教科書から見つけて書いただけです。

まあこんな色々とかオスな小説をここまで読んで下さった皆さん…
誠に誠に恐縮です。

それではまた次回！

八十四話…仮面の裏にはなにが映るの？

二人の魔術師は窓から飛び出し。

「プロミネンス！コロナ！」

炎の魔術師は盾に乗り、周りには炎の兵士達が浮かび上がる。

「第2楽譜…」

焔の足下に氷の結晶が現れる。

「破壊と救済のクレッシェンド」

七支刀から巨大な氷の腕が飛び出し、コロナを粉碎する。

「私も本気でいきますよ？」

プロミネンスと残りのコロナが黒く染まり、周りが塵気楼の様に霞む。

「黒点破邪」

黒い炎は氷の腕を呑み込みまんこ膨れ上がり、大きな口を開ける。

「第3楽譜…」

七支刀の周りにオーロラが現れ、黒点破邪の黒炎は狂った蒸気機関の様な音を放ちながら消えた。

「敗北と勝利のリピート」

そして黒炎はオーロラから吐き出された。

「プロミネンス！……！！」

黒炎と黒炎が互いを消しあい……呑み込み……潰しあう。

「第4楽譜……」

黒く激しい業火を突き破り……その七支刀をつき出す。

「私の負けです」

「永遠と刹那のアレグロ」

七支刀の刃の一つがヒュナスの右腕を貫いた。

二人の魔術師の激突の裏では……。

「ああア………？」

「だからさっきから言ってるでしょ？……さっさと集まって仕事を終わらせんのよ！」

少女の甲高い声は確実に彼の頭を貫いた。

「うっせエな…シヨタコンがよ……」

「なんか言った！！？」

ブツッ

「あっ！！………！」

「お姉ちゃん！！？」

「「ご主人様！！？」」

少女は魔術師と一緒に降り立った。

「フハハ…流石ですねひ…」

ヒユナスはちゃらけた様子で途中まで言うが…。

「……………フフフ」

目の据わっている眼差しで焰は笑っていた。

「わかってるよ……………ね？」

「御意」

怯えた様子でヒユナスが後ずさる。

「……………………………………………………」

三人の少女達（一人は例外か？）はその光景をみて。

（（あの二人なんなの？めっちゃ気になる！！！！）（）

「私から話すよ…実はわた…」

ブウウウウ…ブウウウウ…ブウウウウ…

岡富の携帯が鳴り響く。

「ごめん…少し待って？」

岡富はカエル顔の医者と看護婦さんが言い争っている病室から逃げ出し。

「もしもし…」

「これより…仮面舞踏会の最終戦を始めます」

「なっ！…!？」

いきなりすぎる…囃富はそう思うが…ある事実も思い出す。

『アハハ〜ウフフ〜いい加減さいこ〜!』

(あの作者ならあり得るな)

って酷いし、なんだその台詞!そんな俺は言った覚えないぞコラッ!

「とにかく…どこでなにをすればいい?」

携帯の向こうから聞こえる声は。

「今から指定する場所にウイルス全員で来い」

「なにをすればいい……」

ブツッ

「くそっ！……！」

岡富は病院から走りながらまず葛谷に電話をかけた。

「もしもし！観月か……！」

「あああ……もしかして？」

「今から言う場所に黒嶋も呼んで一緒に行ってくれ！」

「わかった……悠哉は辺見を頼むよ？」

「最初からそのつもりだ……！」

「で場所は？」

「原子力発電所の前……あの場所だ」

「……………」

二人は思い出した……なにもできずに……ただ足手まといになっていたレベルアップ―事件を……。

「勝つぞ……観月」

「ああ！」

もう皆に被害を及ばせてたまるか…少年達はただそのことを思いながら小道を駆け抜ける。

「行くぞ…閑馬…鬮…尼見…」

「あああ！」

「わかってるぞー！」

「ねるすうぢちゃんね！」

「」「」「？」

彼等はまだ知らない…自分達の闘わなくてはいけない相手の顔を…
まだ彼等は知らないのだ…自分達がなにをしようとしているのも…
そして。

「さて千種…アレを使いなさい」

仮面舞踏会の主催者である撫養桂一郎はある一点を指差した。

「おおお！なんか凄いねコレ！！！」

「フフフ…あいつらはまだ知らないのか…」

一人の人間が出しているとは考えられない様な…重く、怪しく、邪
悪な声が響く。

「自分達のしたことが裏の事情を覆すことになるなんてな」

「急げ！！！！」

葛谷と黒嶋二人は高速道路に見える道路の脇についている階段を駆け降りた。

原子力発電所の前に…二つの巨大な箱を見つけた。

「建物かなんかか？」

二人が二つの箱の近くで岡富と辺見を待っていると…。

「お待たせ!!!!!!!!!!!!!!」

周りに人はいない…。

「「？」」

二人は頑張つて岡富と辺見を探すが…。

「おいつ辺見！またお前能力発動してんぞ！」

「おっ！？」

そんな会話の後…岡富と辺見が目の前に出現した。

「待たせたな…早く行くか…」

四人は二つの箱を観察した。

わかったことは、

1、二つの箱にはそれぞれ一つずつ扉がある。

- 2、一つの箱でだいたい剣道場ぐらいの大きさがある。
 - 3、片方の扉に…「M・K大好き」と彫ってある。
 - 4、もう片方の扉にはなにも彫ってはない。
 - 5、二つの箱の間に「二人一組のチームで箱に入れ」と書いてある。
- 「と言うわけで…俺と辺見チーム、観月と黒嶋チームに別れよう」
- 岡富と辺見は「M・K大好き」と彫られている扉の方に入り。
黒嶋と葛谷はなにも彫ってない扉の方に入った。

「さあて…仮面舞踏会の楽しみと言えばやはり…」

「相手の正体を知ることだよな」

「ん…お互いの正体に驚く、白塚陽史と岡富悠哉の対戦を早く見たかったな…」

「だけどさ…あの闘いつて結構残酷だよな？」

「ああ…2vs2と2vs2そしてお互い一勝したら勝ったチーム同士での闘い…」

「私的にはね、葛谷観月に注目したいな」

「なんでだい？」

「あの子は自分の特別な部分に気づくのか…にね」

「それだったら鬮拓海的能力も気になるな」

「「さあ…殺しあえ…血を血で洗う戦場の空気を味あわせてくれないかな？」」

「閑馬…来たよ」

「俺は…オレンジじゃない方な」

鬮は刃地面と水平に構え、閑馬は片手を前に出す妙な構え。

「辺見、僕はどっちをやればいい？」

「じゃあ刀を頼む」

岡富は翼を広げ、辺見は姿を消した。

「……」

四人に緊張が走る。

「俺は鬪拓海：レベルは2だ！」

「僕は岡富悠哉！レベルは0だ！」

「嘘つけ！！！！」

閑馬と鬪は翼を指差しつつこんだ。

「閑馬雅之！レベルは2だ！！！」

「辺見太陽！レベルは3ツス！」

「時雨蒼燕流攻式3の型……」

鬪が鬪いの火蓋を切り、刀を蹴りつけた。

「遣らずの雨」

刀は岡富に向かうが。

「甘い」

翼で防御するが。

「時雨蒼燕流攻式9の型」

刀が当たる感覚がない。

「岡富君！上ツス！」

岡富は上を向く、そこには刀を振り下ろしている鬪がいた。

「うっし雨」

翼の上に振り上げることとで刀を防ごうとするが…。

すかつ

刀は宙を斬った。

「なっ！！？」

鬪は着地し…完全に無防備となった前から…。

「時雨蒼燕流攻式5の型…」

「しまっ…」

無情にも刀は振られた。

「五月雨」

八十四話…仮面の裏にはなにが映るの？（後書き）

最近、感想を書いてくれる人が増えました！イエーイ！！！！

まじ感想って嬉しい！

てなわけで感想を書いてくれる人募集します。

つまらない、面白くない、展開が読めてる…とかそういう感想だと…
………作者が生命維持装置入りを果たしてしまうのでご勘弁を…。

八十五話…敗北之槍

「五月雨」

刃が岡富の翼の下を狙う。

「ふっ！」

岡富が翼に息を吹きかける。

翼の羽一枚一枚が巨大化し…刀が切り裂くだったであろう場所に壁ができる。

刀は翼に弾かれ、鬪はくそつと言いながらもバク転で岡富との間合いをとる。

「時雨蒼燕流守式2の型」

鬪は刀を地面に突き刺し、ワイヤーを展開する。

「逆巻く雨」

砂ぼこりで周りの視界が悪くなる。

「……………」

翼で烈風を起こせば砂ぼこりは吹き飛ぶだろう…が。

（その隙を…狙ってくる）

「時雨蒼燕流攻式8の型」

後ろから声が聞こえる。

「……しかたない」

岡富の翼は舞落ちた。

「！」

鬮は岡富を後ろから奇襲しようとして近づいていたが。

（今突っ込んでたら…）

砂ぼこりと羽の中に…白い羽根が巨大化したような剣を持った岡富が立っていた。

「来なよ…高校生組み手大会優勝者…」

「お前は準優勝だったような気がするさ？」

二人は同時に抜いた。

「時雨蒼燕流守式7の型、繁吹き雨……！」

「はっ……！」

鬮と岡富の周りに爆風が生じ、砂ぼこりが晴れる。

「時雨蒼燕流攻式8の型アア!!!!!!!!!!」

鬪は刀を鞘に仕舞い…突っ込む。

「篠突く雨！」

抜刀の勢いのついた刀が岡富を切り裂かんと迫り。

「たしか…」

岡富は刀を下に突き刺し。

「逆巻く雨だっけ」

刀を振り上げた。

砂ぼこりではなく…砂を纏った斬撃が鬪の刀を弾いた。

「なっ!?!」

「次は…」

剣は縦から横に向き。

「斬る」

剣が刀をはたき落とそうと振り下ろされるが。

「閑馬っ!」

刀ごと鬪が消える。

「テレポートか！」

そして目の前には閑馬と呼ばれた男がいて。

「鬪頼むぜ」

閑馬の左手のあたりから鬪が現れた。

「篠突く雨」

刀は剣を弾き飛ばした。

「能力者…あんたの敗けさ」

鬪がしゃがむとその後ろで閑馬は銃を構えていた。

「これで終いだ！」

パンと湯いた音が鳴るのとほぼ同時に…。

銃弾は床に突き刺さった。

「「な！」」

バチバチと電気の音がする。

「久しぶりに使っかな」

紫電は周りをえぐり、黒い砂鉄が岡富を守るように渦巻く。

「超電磁砲を見せてやんよ」

ポケットの中にはコインが3つあった。

「白塚……」

葛谷は相手の正体を見て……。

「嘘だろ？あんたが相手なのかよ……」

「裏側うらがわではよくあることですよ……葛谷君」

葛谷は下に向き……。

「観月君……黒嶋……お前らが敵だとはな……思わなかったよ……けどな」

白塚の身体に鎧が装着される。

「なんの躊躇いも無しに殺れるぜ？」

巨大な大剣を二本持った白塚は大剣を数回振り回す。

「リーダー…私はどっちを殺ればいい？」

尼見は二人の方向を指差し、白塚にたずねた。

「右側の…影がうねうねしてる方を頼む」

「了解」

白塚は葛谷の方を向き、尼見は黒嶋を睨み付ける。

「葛谷君…来ますよ」

黒嶋は葛谷に問いかけるが…葛谷はうつむいたまま答えない。

「……死なないでくださいよ？」

黒嶋の影が斧の形になり、影は服の様に絡み付き…。

「行きますよ！」

黒嶋は尼見の方向に走り、尼見の背中からは。

『ぷはあっ！行くぜえ！！！！！！』

喋りながらも剛腕が黒嶋を捻り潰そうと上から落ちる。

「斧にしたのは正解でした……ねっ！！！！！！」

斧で自分を捻り潰そうと迫る剛腕を手首のあたりから撥ね飛ばし。

「まだ序の口ですよ……！」

斧を投げつけた。

『私もだあ……！』

剛腕は斧を片手だけでも受け止める、しかし斧は形を崩し剛腕を拘束する形に変化する。

『しまっ……！』

「どうですか、自分の……」

黒嶋は新たに影で作った槍で頭を狙い。

「力は……！！！」

尼見の背中から出ていた頭は両断され、黒嶋はさらに拘束具の形を変化させ剛腕を折り曲げた。

『がっ……がああああ……！！！！！！！！！！』

頭はないのにうめき声が聞こえ、黒嶋は背中から出ていた部分が無くなって何もできない尼見を拘束した。

「は……離せえ……！！！」

「諦めてください」

部屋に入ってから…五分も経たずに決着がついた。

黒嶋が葛谷の方を向くと。

「なっ！……！！！」

葛谷は白塚の前に血塗れで倒れていた。

しかも……………。

「あ……あああ……」

葛谷の脇腹からは…凄い量の血が…。

「葛谷君！……！！！」

黒嶋の行動は迅速だった、まずは出血を止めるために影を変化させ傷口を塞ぎ……。

（自分と葛谷君は同じA型だ！まだ間に合えよ！！！！）

自分の手首に影を突き刺し、葛谷に輸血する。

「白塚…貴方は何故そこまで変わったのですか？」

「俺は美代を護るんだ…多少の傷は仕方ないだろ？」

黒嶋は葛谷を見て……。

「これが…多少？」

影はうねり…なにかを吐き出さんとばかりにボコボコと音を出している。

(三人ともすいません…自分はもう表には戻れません)

影は爆発した。

「来るか……貴方空箱…いや、敗北之槍…」

ディカオス

『やはり貴方は変わった…』

影からは…黒く黒く黒く…闇も怯え出すようなほど暗い槍が飛び出し、黒嶋はそれを握った。

「王(俺)に槍(お前)が勝てるんでも？」

鎧は鱗などに姿を変え、一匹の巨大な龍がその口から黒い煙を吐いている。

『勝てるか…じゃないんですよ』

槍(彼)は思うのだ。

『王(貴方)に勝たなきゃ意味がないんです』

槍(彼)の背中からは黒い闇の煙が蒸気機関の様に吹き出す。

『槍(自分)は王(貴方)を貫きますよ？後で後悔しても遅いです』

「大丈夫だ…お前が先に消えるからな」

龍の口から黒い火炎が流星を思わせる速度と重量と力強さを見せながら吹き出した。

『サヨナラ』

槍（彼）は思う…。

（やっと気づきましたよ…消えていい命なんてこの世には無いんです…どんな悪党にも親がいる…人が消えて哀しまない人はいない…）

『自分は死にません…貴方も死にません…誰も殺させない…誰も死なせたくない…戯言だと言われても構わない…でしょう、姉さん』

黒い槍と黒炎はぶつかりあい…たしかに槍は黒炎を貫いた、しかし槍（彼）はそこで力を使い果たした…。

『姉さん……………』

消えていく意識の中見えたのは…。

一匹の龍が自分を呑み込もうと口を開けているところだった。

『自分を喰らって腹壊しやがれ』

王（白塚）は槍（黒嶋）を喰らった。

槍（彼）はたしかに存在し…王（彼）はこれからも居続ける。

「
」

少女は槍（彼）に取ってもらった風船を片手に小道を歩いていた。

しかし風船は。

パンッ！

「あっ！？」

風船は割れてしまった。

「ううう…割れちゃっ…！」

少女は周りを見渡す…槍（彼）が近くにいたような気がしたのだ。

「お兄ちゃん？」

風が吹き…少女の髪が靡く。

槍（彼）は……。

八十六話…天地喝采

「銃が効かないさ!!」

銃弾はことごとく砂鉄の壁に遮られ、刀は反射される。

「まずは…一人」

岡富が手を振り上げる、すると閑馬の周りから砂鉄の壁が出現し…
閑馬が閉じ込められる。

「捕まった!!?」

岡富はコインを指で上に弾く。

放物線を描きながらコインは再び岡富の真上に落ちて…。

「閑馬ああああああああああ!!!!!!!!!!」

岡富はコインをキャッチした。

「殺さないし、傷つけない」

砂鉄の壁は消え、岡富は二人の顔を見てこう言った。

「降参するなら、これ以上の闘いはしません」

「（閑馬）（鬪）が助かるな……!!!？」

二人はお互い見つめ…顔が真っ赤になる。

「イチャイチャ反对ツス!!!!!!」

鬮の背後から辺見が現れ、鬮の胸の形が変わる。

「キャンツ!!!!!!」

短い悲鳴を上げて鬮は辺見に裏拳をぶつける。

「へブツ!!」

うっう…とつめきながら辺見は転がる。

「ハハハ…じゃ、降参ですか？」

「「ああ」」

二人は箱のドアに手をかけ…。

「白塚は強いから…気をつけるさ」

「尼見は知らんがな」

二人は箱から出ていき…そのドアから一人白髪の子…見覚えがある
あの男が五人程人を引きずっている。

「白塚？」

そう言えば『白塚は強いから…気をつけるさ』って…!!…?」

「ううう…白塚…引きずるなあ…」

「く…苦しいさあ…」

先ほどの二人も引きずられてる。

「葛谷君！黒嶋君！！？」

辺見も叫ぶ。

「観月？」

葛谷と黒嶋が血塗れで引きずられていて…二人とも息がすぐにでも絶えそうだ。

「白塚…お前がやったのか？」

白塚は返事の代わりに五人を箱の外に放り投げ、こちらを睨み付けた。

「辺見、逃げる」

その言葉には重い重圧がかかっていた。

「だけだよ…俺だって…」

「いいから逃げる！…！！！！！！」

「逃げるのを勧めるよ…俺たちの闘いに巻き込まれて生き残れると

岡富は耳を塞ぎながら翼に息を吹きかけ、白い剣を作った。

「アアアアアア……………アアッ！！！」

龍は岡富に向き、いきなり噛みつきつと迫る。

「こんなところじゃあ…狭いだろ？」

岡富は噛みつきをスルリとかわし、壁に向かってコインを弾いた。

「外でパーっとな」

箱は崩壊し、龍と天使は蒼天ひんに飛び出した。

「ではフレイヤ様、私はあの宿泊施設に泊まっているので、なにかご用があればお呼び下さい」

「むう……………フレイヤって呼ぶなあ……………」

焰は病室の片隅でエカリとクスバに抱きつかれながら体育座りをし

ヒュナスは本当になにも気づかず聞いた。

「……………」

二人は顔を見合わせ…。

「はああ……………」

とため息をはいた。

「なっ!!！」

「「じゃあシスコンで」」

「なっ!!!!！」

ヒュナスの顔が赤くなる。

「バカを言うな！」

ヒュナスはズカズカと廊下を歩き出した。

（（素直だな））

「これは…昔々のお話です…」

一人の女性は息子を膝の上に乗せ語り始めた。

八十六話…天地喝采（後書き）

ふあああ…学校が疲れたぜ…。

「中3の受験生がこんな駄文を書いてていいのか？」

グサリ

「こんな駄文を書いている暇があるなら…べんき…」

うわああああああああん!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!! 作者逃亡。

「あらら…:…: あんな先輩いたら後輩が可哀想だなあ…:…: では次回もよろしくお願い致します」

観月に襲われればいいのに。

「なんか言ったか？」

なんにも。

八十七話…三人の王子とお姫様

これは昔々のお話です。

三人の王子様と一人のお姫様がいました。

一人目の王子様はなんでも知ってる頭の良い王子様でお姫様に自分の知識を教えるは、こう言いました。

「感情つてなに？」

王子様はなんでも知ってるけど一つだけ知らないのが感情なのです。

二人目の王子様はお姫様のことがすごい好きでお姫様のためならなんでもするたよりのある王子様です、そしてお姫様に言いました。

「あなたのためならなんでもできるよ」

お姫様がためしにウサギが欲しいと言ったら、王子様は何匹ものウサギを皆から取り上げてしまいました。

王子様はお姫様のためならなんでもするけど、皆のことは考えませんでした。

三人目の王子様は優しい王子様でした。

王子様はいつも皆のためにソファを売ってダンスを売って皆にお金を渡してこう言いました。

「僕は皆の笑う顔が好きなんだ」

王子様はだけど病気になってしまい、ずっと寝たきりになってしま

いました。

お姫様はお父さんにこう言われました。

「三人から一人だけを夫にしなさい」

お姫様は悩みました、一人目の王子様は自分になんでも教えてくれますが、王子様は一回も笑顔も泣き顔もなにも見せてはくれません。二人目の王子様は自分のためならなんでもしてくれませんが、皆はそんな王子様と自分が会つのを怒ります。

三人目の王子様は自分ではなく皆の笑顔が好きなのです、お姫様はそんな王子様が嫌いになりました。

「私と結婚してくれ」

「いや俺とだよ！」

「僕は君が信じる人だと結婚しなよ」

三人はそれぞれ言いました。

ある時、一匹の悪魔が現れてお姫様に言いました。

「私と結婚しなさい」

お姫様は悪魔と結婚なんてしたくありませんでした。お姫様は悪魔にそのことを言つと。

「なら王子の一人を食べさせろ」

三人の王子様にそのことを言いました、すると。

「そんなので死にたくないよ」

「まだ死にたくないな」

「君が助かるなら僕は食べられるよ」

二人の王子様とお姫様は三人目の王子様を悪魔に渡すことにしました。

悪魔はそれで言いました。

「こいつはいいやつだからとっても旨そうだな、けどお前らはどうだ？」

悪魔は続けて言いました。

「お前らはこいつを俺に食べさせて自分達は楽しいことをして遊んでるんだろ？」

けど三人目の王子様はこう言いました。

「三人を悪く言うなよ！僕は病気だから…もう皆のじゃまをしちゃうかもしれない…だから僕は食べられるんだよ」

三人目の王子様は悪魔に食べられてしまいました。

それからしばらく経って、一人目の王子様は気づきました。

「感情っていうのは『わかる』ものじゃないんだ、『感じる』ものなんだね」

二人目の王子様はこう言いました。

「お姫様のために皆に悪いことをするのは間違ってたよ、これからは皆のために頑張るよ」

一人目の王子様は皆のために便利なものをたくさん作って。

二人目の王子様は皆のために畑を耕したりお手伝いをして。

お姫様は二人を手伝ってそれぞれは皆に喜ばれました。

けど三人は辛いことがありました。

けどもう寂しくありません。

三人目の王子様はね死んではないんだよ、三人目の王子様はね……。

「ママあ…なんでいつも途中で終わらせちゃうの？」

男の子は母にたずねた。

「それはね…」

「ただいま〜！」

「あっパパだ！」

男の子は玄関の方から帰ってきた父親に抱きついた。

「悠哉っ！元気が良いなお前は！！！」

父親はその息子の頭をガシガシと撫で回す。

「あなた…おかえり」

「おっっ！」

父親は母親に親指を立てて笑いかけた。

「パパあっお風呂入ろっ！！！」

「じゃあ今日は風呂あがったら牛乳と一緒に飲もう！！！」

ワハハと笑いながら風呂場へと走る父親を見て母親はこう言った。

「おかえり、三人目の王子様」

八十七話…三人の王子とお姫様（後書き）

フハハハゝ意味不明小説第2弾だ！

「誰ですか今の親子は？」

当ててみな！いずれわかるさ！

「ん……………」

まあ読者の皆さんはわかるかな？

「ん……………わからないや……………」

わかった人は感想に書いてみて下さい！

「……………感想を増やすためだったのかよ……………」

そそそそ……………それではまた次回！！！！！！

「義兄さんも強いですよ……………」

白塚は叩きつけられたせいか、頭から血を流していて岡富は砕けている左肩を押さえた。

(痛みが……………しない)

ダメージが許容範囲を越え…左肩は上がらない。

「片手だけで俺に勝てるかな？」

白塚の頭の血は能力ですぐに塞がる。

「勝てますよ」

岡富は翼を三枚広げた。

「岡富？」

白塚は岡富の左側を見ている。

「なんですか？…僕の左肩はそんなに重傷……………！！！！！！」

そう三枚…右側の翼しか広がっていない…左側の三枚は地面に垂れていた。

「嘘……………だ」

白塚は岡富を見て邪悪な笑みをうかべた。

「あああ」

白塚の右足から黒い巨大な足が現れた。

「潰してやるよ」

その足を上に振り上げ、かかと落として潰そうとするが岡富は翼をしまつてスライディングの要領でかわす。

「うあつ！！！」

砕け散った地面の欠片が岡富にぶつかる。

「くそっ……」

（負ける……）

「ハハハっ！！！！いつまで逃げきれるかなあ！！！」

足の次は腕から龍の顎を出して。

「龍王の逆鱗に触れたら………な？」

顎が上から振り下ろされる……何回も何回も。

地面が抉られて欠片は数個、発電所にぶつかった。

「白塚止める！！！！発電所が爆発する！！！！」

だがあまりの騒音はその叫びを遮った。

「くそっ！白塚……！止めてくれ……！」

白塚の顫が嘲笑う。

「王は今正常じゃねえよ……！残念だったなあオイッ……！」

顫から黒炎が吐き出され、黒炎は発電所に……。

「……………！」

「滅びな……学園都市」

岡富は走る……しかし。

(間に合わない)

発電所に黒炎が触れる……その時。

「この学園都市を護るのは私達の出番ですよ？岡富」

黒炎は突如姿を消し、そして地面が爆発した。

轟音と砂煙が辺りを包む中……風紀委員の文字が。

「……………？」

「岡富……！返事は……！」

「はい！……！」

左肩がブランと揺れる。

「……………」

白塚は風紀委員の文字を睨み付ける。

「まさか白塚さんが岡富を襲っているとは想定外でしたわ」

砂煙が晴れ、そこには。

「白井さん？」

白井黒子がおなじみのツインテールを靡かせた。

「貴方はまだ闘えるでしょう……！」

「あ……？」

白髪と赤目の少年は目の前に倒れている少女を見て一つの考えに至

った。

(こいつは…あの岡富とか言つくそやろつに似てやがんな…)

少女の身体を能力を使って状態を調べる。

(薬かなんかで血液の流れを狂わせてんのか…だりいな)

少年は能力を使つての治療を開始した。

「かはっ…」

変化は著しかった、顔色が健康のそれになり…少女は目を覚ました。

「……………あア？」

少女は少年の白髪を見て…。

「よ……………つじ？」

少女はまた気を失った。

「うらあぁっ！……！」

白塚の尾が二人を尻ぎ払う様に振られる。

「白井さん……頼みます」

白井は岡富の髪の毛を掴む。

「いでっ！……！」

二人は白塚の頭上に現れた。

「わわわっ！……！」

白井は白塚を蹴りつけてから着地し、岡富は地面にキスした。

「「へブツ……！」

白塚と岡富は豪快な叫びを上げて倒れた。

「馬鹿ですの……！」

二人を見た素直な感想を述べた。

「痛いですよ……！」

岡富から……煙が出てきた。

「ヤバッ…………！」

岡富は女の子の姿になってしまった……つまり。

「「あぁあ……」

白井と白塚は呆れた顔で岡富を見た。

そう岡富が……。

（ ）（ ）女の子の姿になったのはつまり能力が解除されたことを指すから……（ ）（ ）

岡富はもう能力が使えない状態になってしまったのだ。

「もらい」

白塚は岡富に向かって巨大な腕を伸ばした、岡富はもがくが……無力だった。

「白井……残念だったな……」

岡富が人質に取られ……一気に不利になる。

「あらら……ですの」

握る力が更にかかる。

「ギャツ！……！」

「ヒヤハハハハ！」

「うっ…ああ…」

左肩から…血が…。

「流石に…ダメですの…」

白井が諦めた…その時。

「俺だつてな…やるときはやるンスよ！…！」

銃声が響き、白塚の身体が吹き飛ぶ…。

白井と岡富は銃声の方向を向くと、辺見が足を震わしながらライフルを構えていた。

「ハハハ…やつちゃったさ…こいつ」

「ハハハ…若いなあ…」

鬮がライフルの使い方を教え、閑馬がライフルを取り出したのだ。

「白塚には悪いけど…あれはやり過ぎだね…」

「ああ…あれはな」

岡富は白塚の腕から脱出した。

「まったく…」

白塚は立ち上がった…。

「白井さん…逃げて下さい」

「なにを言ってますの？」

岡富の目は…真剣だった。

「逃げて下さい」

白井はレポートで…辺見達の所に移動した。

「ハハハ…流石にライフルはきついな」

「お前の能力なら大丈夫だろ？」

ライフルの傷口はすぐに塞がり、白塚は巨大な腕をもう一度持ち上げて。

「俺の勝ちだ」

腕は吹き飛んだ…いや（吹く）という表現は違う。

「（俺）は…今はたしかに終焉之叫は使えない…そう終焉之叫はな」

岡富の周りにいくつもの黒い球体が浮かぶ。

ズズズ…と周りの空気を吸い込む様に音を発しているそれは。

「父さんの（力）だ」

そして腕が飛んだ方向にもそれがあつた。

「なんだよ…それ」

「解除コードを逆算し…ロックを更に作成…」

岡富の周りに黒い球体が変化して書かれた数式の羅列が並ぶ。

「そして父さんの重量操作の上位能力である重力操作に変換」

更に数式は並び…周りの地面が浮かび始めた。

「A - 1 8 … R + 2 …」

岡富の周りの球体で書かれた数式の形が更に変わった。

ある文字が書かれた。

「読めるか？白塚」

その文字とは。

これがレベル5だ

八十八話…原点って大事だよな（後書き）

説明しよう!!!

岡富の能力は終焉之叫という天使の様な能力であり…それが発動するまではただのコピー能力だった。

そしてさらにそのコピー能力とは別に能力を後藤博士によって植え付けられていた…それが重量操作だった。

つまり岡富はもう解除された重量操作をさらに強化して自分に植え付けたというわけですね…ハイ。

それに今回の話で出てきたレールガンの約2億ボルトとは御坂さんの最高出力でした…つまり。

岡富はコピーした能力をレベル5並に使えるというわけです。

…だったら性転換もできるだろ！というツッコミはごく都合主義によりガードされてしまうのです。

そして脳内の演算能力を重力操作に当てることによりレベル5並の力を発揮したんですよ。

つまり…

岡富=チート

という計算が成り立ちますね。ここ重要ですよ〜テストに出ませんけど。

それではまた次回！

八十九話…英雄になんてならなくてもいい

「重力操作と重量操作の違いはなんでしょう？」

白塚は何回も何回も猛攻を繰り返して岡富を狙うが、黒い球体に吸い込まれて…。

「知るかよ！」

腕は黒い球体に触れた瞬間に潰れる。

「答えは簡単だよ、重力操作は核を作れるんだ」

黒い球体をお手玉にして遊んでるところだけを見ると害の無いように見えるが…。

「俺の攻撃が届かねえ！！！」

白塚は顔から黒炎を吐き出し、雨の様に拳を降らせ、尾をヤマタノオロチに変化させ襲わせるが…。

「核に物理技は効かないよ」

黒い球体を変化させて作った盾に潰される。

「だけどさ…この（力）は長くはもたないんだよ」

岡富は黒い球体を白塚の敗北之王だけをえぐり取る様に配置し白塚の本体だけがその場に残された。

「お前さ…強すぎだろ…岡富」

岡富はその隙をついて、自分の体重を軽くし超スピードでの接近そして拳を腹に目掛けて振るい触れる瞬間に腕を重くし…。

「俺…なにが間違ってたのかな？」

轟音と共に白塚の身体が跳ねた。

「……………（俺）の勝ちだ」

白塚の体重を軽くして岡富は片手で受け止めるが。

「つつぷ…」

左肩に響いて…岡富は遂に。

「ふにゃあっ！」

白塚を抱いたまま岡富は倒れ込み…二人は静かに眠りについた。

「……………呆気ない最後ですね」

白井は呆れた様子で腕を組み。

「あの子なかなかやるさ」

鬮は閑馬に抱きつきながら岡富を賞賛し。

「んあゝ…結局俺達の負けか…」

閑馬は頭をポリポリとかいて。

「仕方ないツスよゝ先輩」

辺見は上から目線で二人をわざと見下し。

「んゝかなりムカつくねキミ…食べちゃっよ？」

ビビる辺見の頬をペロリと屁見は舐めた。

「……悠哉の勝ちだ……」

「…賞品とかはあるのでしょうかね？」

葛谷と黒嶋は血塗れで痛みを必死に堪えているが笑っていた。

誰もが安堵し結末を目にし…終わったんだ…と誰もが思った。

「ハッピーエンドなんてつまらないよ」

岡富と白塚の周りに赤い結晶が突き刺さり円を描いた。

一同が赤い結晶を突き刺した声の正体に向き直った。

「はゝい千種ちゃんだよお」

破壊された箱の上には赤い結晶を形態変化させた翼を羽ばたかせて悠然と立つ悪魔は子供みたいな純粋な笑みを浮かべた…ただ方向が

違うだけだ。

「学園都市を滅ぼすのにこんなんじゃダメだよ」

赤い結晶で描かれた円にそってラインが引かれ。

「はい二人…捕獲」

突如二人が円から姿を消した。

「それでは皆さんさようなら」

悪魔は翼を広げ飛び立ち、そして街から爆音が聞こえる。

「なんですの!!?」

「爆音から察するに…これは学園都市製さ…それに…数は7、8、9個あるさ」

たった1つの爆音から分析を開始した鬮。

「それに…爆破された場所は…岸岡中学かな？」

葛谷が傷ついた体をも構わず。

「行かなきゃ…」

血液が辺りに飛び散るのも今は構ってられない。

「葛谷君!!!動いてはダメです!出血多量で死んでしまいますよ!

「！！」

黒嶋が影を動かして葛谷を止めようとするが…黒嶋はすでに限界で影は葛谷に巻きついていてもすぐに千切れてしまう。

「皆は悠哉を頼むよ」

葛谷は歩みを止めない…葛谷が歩いた道筋に血の跡が残り葛谷はフラフラとしているが一歩一歩確実に進む。

「俺だって…活躍しなきゃな」

近くを飛ぶ蝶に抜かれ…石につまづいて転びそうになりながら。

「絶対に負けない」

階段を上がると一段上がるだけで身体中が悲鳴を上げる…手すりに手をつくとそれだけで腕が軋む。

「立ち止まるわけにはいかない…俺は歩き続けるんだ」

階段を上りきったがそれだけで息があがりきっていた。

「畜生…こんなんじゃない…」

（俺だって頑張らなきゃいけないのに！）

「あああ…不幸だ」

葛谷が横を見るとそこには黒いツンツン頭の少年が爆発音に驚いた

せいで缶ジュースから完全に炭酸が吹き出っていて残りがほとんどない缶を持って落ち込んでいた。

「くそ……」

葛谷はツンツン頭の少年にすがりついた。

「なんだよ……上条さんは……って血塗れじゃないか……!!」

「頼む……あなたがどこの誰でどういう人物なのかは知らないけど……あんたが俺に同情してくれるんならさ……」

葛谷は精一杯声を振り絞って。

「この町を救ってくれ……!!」

少年からしたらなにがなんだか解らない状況だろう……。

「わかった」

少年はただ葛谷の目だけを見ていた。

「あとのことは任せて大人しく病院にでも行ってくれ」

少年は葛谷の肩をやさしく叩き、爆発の方向へと歩いていく。

「……………」

葛谷は倒れた……無理のし過ぎである、後から追いかけてきた辺見に運ばれていった。

「さてと…」

少年はポケットから携帯を取り出し、ある人物に電話をかけた。

「はい、もしもし…」

と少し緊張が混じっている声が聞こえる。

「ああ…ビリビリ…俺だ上条だ」

「だからビリビリ言うなっ……なにか用？」

真剣な雰囲気を感じた電話の相手に少年は話しかけた。

「お前の友達に風紀委員がいんだろ？」

「黒子になにか用なの？」

自分が相手ではないことに少し苛立つが我慢した。

「今起きている状況が気になるんだ」

「奇遇ね…」

電話の向こうからはバチバチと音が聞こえてくる。

「…あの〜御坂さん？」

「ちょうどあの子達に調べてもらってたのよ」

あの子達とは…妹達のことを指すことを少年は理解した。

「で…爆弾の処理はどうすればいい？」

「じゃあ今からデータを送るからその場所に行きなさいよ！」

少年…上条当麻は携帯に送られてきた地図に示された場所へと走る。

「てめェ…もう歩けんのか？」

白髪の少年は目の前の少女に問いかけた。

「貴方のおかげで助かりました、ありがとうございます」

少女は金色の翼を広げた。

「上からの命令だ…俺の意思じゃねェ」

「それでもありがと」

少女は飛び立った。

八十九話…英雄になんてならなくてもいい(後書き)

上条さんを真面目に初めて出した…。

「…原作の主人公が今頃出てくるのかよ」

つつつこむのは禁止でお願いします。

それに美代さんも復活したし…そろそろ終わっちゃうな…仮面舞踏会。

さあて来週の悠哉さんは…!!

上条めちや転ぶ。

美代空を飛ぶ。

岡富目立たない。

の三本です!

来週も見てくださいね!

ジャンケンホイッ!

チヨキ

フッフ

九十話…今週の悠哉さんw

少年…上条当麻の仕事は爆弾の発見、そして起爆装置の取り外しである。

「御坂！次のコードは赤、緑、紫だ！どれを切れればいい！？？」

「紫のコードを切つて、次に赤を切りなさい！緑は切っちゃダメよ！！！！」

上条は目の前にある三本のコードのうち二本だけを順番通りに切る…ただの人間になら楽な仕事だろう。

「ぐぬぬぬ…」

上条当麻にとって失敗できない仕事というのは幻想殺し（不幸）との闘いなのだ。

パチン…

「ぬぬぬ…」

パチン…

たった2つのコードだがかなりの労働力を上条は使ってしまう…。

「あんたね…随分時間かかるじゃないの…」

電話の相手である美琴も少し呆れていた…。

「よし…次の場所を頼む」

「次は…そこから西に移動して…」

上条は処理した爆弾につまづきながらも指示通りに動いていた…。

「爆発させないでよね？」

「……………勘違いすんじゃないぞ？」

白髪赤目の少年はどんな風にベクトル操作をしているかは不明だが…天井に張り付いていた。

「興味があるのは3rdサンプルだっただけかな？気にしないよ？」

翼を生やしていた少女は地図と一生懸命ににらめっこしながら白髪…一方通行に答える。

「君も協力してよ…学園都市で一番大きい地下空間はどこ？」

一方通行は天井から壁を伝って床に降りて机の上の地図の中心部分から少し北西を指差した。

「よしっ！じゃあ行ってみよお！！！」

美代は翼も生やさないまま窓から飛び降りた…。

「あア？」

「翼広げるの忘れてたあああゝ！！！」

がしゃんがしゃんっ…とか聞こえた後に。

「はにやにやあ……………」

と少し髪の毛とかが跳ねまくっている美代が飛んでいるのが窓から見えた。

「……………」

一方通行は美代を見て…（あアいう馬鹿はほんとくと少しやべエんだよな…）とまたどんなベクトル操作をしているかはわからないが窓から飛び出して空を歩く。

「ふにゅっ……………」

美代はフラフラしながら空を飛んでいた。

（あれは駄目なタイプだなアおい…）

そんな心配をする一方通行と…。

「ぼにゃああん…」

心配をかける…夢と物語だった。

「すう…すう…」

「離せっ！離しやがれっ！！！」

岡富は見事に憔悴しきって寝たままだが…白塚は先ほどの赤い輪での転送で起きたようだった。

「やだようだ」

二人は檻に入れられ千種はやくいとか少し馬鹿にしながら二人を監視していた。

「…………ん…………」

…主人公がそれで良いのか？とツツコミたくなる作者と。

「終焉之叫は可愛いね〜」

主人公との間に檻がなかったら確実に襲ってそつな千種と。

「出しやがれ！！！」

疲れていて能力が使えない白塚だった。

「相手はただの無能力者（レベル0）だ！」

「……………」

「殺つちまえっ！！！」

十人位のレベル3位の裏側の人間がレベル0に向かって一斉に能力を使う、火や電気や鎌鼬や氷が放たれるが。

「時雨蒼燕流……」

能力同士がぶつかり粉塵で周りを包む。

「攻式1の型」

刃が十人を切り裂いて裂いて裂いていく。

それはただの突きだったが…ただの突きだが達人が放てばそれはかなりの脅威となる。

「車軸の雨」

十人が全員倒れる。

「峰打ちだから……あつ…突きだから峰も刃も関係ないか…」

十人の能力者達を倒した元無能力者は歩いていく、その後ろでは閑馬も同じく十人程度の能力者を倒していた。

「お前は正面からかよ…俺なんか不意打ちだぜ？」

能力者全員が銃による一撃で足に風穴が開いていた。

「だけど閑馬の狙撃の腕はなかなかさ」

「褒めても何も出ねーぞ」

鬮は刀についた血を払い…閑馬は銃をベルトのホルスターにしまった。

「良いコンビになれるんじゃないかな俺達？」

「閑馬とならなれるぞ!」

二丁のライフルが閑馬の左手のあたりから現れた。

「さあて…俺は俺の仕事をするかな」

ライフルを構えて閑馬と鬪はそれぞれの破壊対象を狙いつけた。

閑馬のライフルには爆弾の制御装置、鬪のライフルには…。

「すまないさ…尼見」

尼見治療炉が仮面舞踏会のスタッフと話していた。

「命はいらんさ…少し眠ってもらおうからさ…」

ライフルと言っても麻醉銃だった。

「行くぞ?」「」

二人は同時に引金を引いた…二つの銃声が同時に響く。

九十話…今週の悠哉さんw(後書き)

皆さんに連絡があります…。

なんかほのぼののパートの時のリクエストとかあったら言って下さい、採用できるのはします。

「話が浮かばなかったな…コイツ」

てなわけでよろしく願いします…!!

剛腕が拳骨の様に上から落ちてくる、閑馬はその拳骨に右手をかざす。

「飛ばすのは右手」

拳骨の閑馬達に触れそうな部分だけ消え去った。

「がつ!!!?」

「召喚するのは左手」

左手のあたりから肉片が現れた。

「お前も知ってるだろ…俺がテレポートの能力者だってさ」

左手のあたりからは日本刀が現れ、それを鬮に渡した。

「閑馬のレポートはたしかに範囲は短い…てゆーかほとんどないさ」

今度も左手からサブマシンガンが現れ、それも鬮に渡す…。

「それを補うのが…時間だ」

閑馬は鬮を右手で触る…すると鬮の姿は消える…。

『!?!?!?!』

尼見が周りを見渡すが鬮の姿は見えない…そう三次元じさんにはいない。

「行くぜっ！」

閑馬が武器もなにも持たずに突っ込み左手をかざす。

『なっ』

左手のあたりから鬮が現れ、鬮は刀を背中の怪物に向かって振るう。

「オワタだね」

怪物が切断され尼見が隙だらけになる、その尼見のから空きになった脇腹に閑馬の蹴りが刺さる。

『がつ……』

二人の連携は尼見を一瞬で吹き飛ばした。

「……どうだコラア……！！！！！！」

……女の子がそんな言葉遣いをするんじゃないやありません……。

「そこは気にするなさ」

ナレーションにツッコミを入れるな！

「爆弾の処理はもういいらしいわよ!」

「……………」

「……………上条?」

「終わったあ……………」

電話越しにも伝わる脱力感に御坂は少しつられてしまいそうになる。

「あなたは他に用があるんでしょ……………さっさと行ってきなさい」

「わかった……………じゃあな」

上条は……………(外)へと向かうのであった。

「……………この方法を使つたら寿命が縮むが…あんたらは構わないだろ?」

「「勿論」」

焰は黒嶋と葛谷にレーニンの指揮棒を構えた。

「第十楽譜」

「……………」

二人は目を閉じてなにが来るかわからないので覚悟を決めた。

「フォルテッシッシモ
fff」

二人は口から血を吐いた…まだ二人は痛みに耐えている…。

「あれえ…葛谷君…随分痛そうですねえ！」

「はあ?…痛くないよ!」

二人は痛みに耐えているせいでつい大声になる…。

「これぐらい耐えられなきゃねっ!」

「悠哉を助けられないんだよっ!」

黒嶋の影が自身を拘束するように巻きつき、葛谷の周りには蒼い炎が渦を巻きながら自身を包む。

「行くぞ」

影と炎が同時に晴れる、黒嶋は黒い槍を持ち…葛谷は口から炎を吐き出しながら立ち上がった。

「後でかなり生命の危機に陥るから…気をつけて」

「はい、わかりましたよ」

「その前に帰ってくるぞ」

二人は病室の窓から飛び出した。

「黒嶋、捕まれ」

黒嶋が葛谷の足を掴む、葛谷の背中から炎の翼が生えて羽ばたき始める。

「フッフ…まるで火の鳥ですね」

「馬鹿言っな…鳥は別に好きじゃない」

黒嶋と葛谷は空を飛んである場所へと向かう。

「白塚君の位置は…あっちですね」

葛谷は北西を指差した。

「ああ…もうすぐ…」

一人の男が箱を抱き締めた…まるで恋人を抱くように。

「もうすぐだよ…」

箱の中には女性の姿が見える…。

「布浦…」

撫養の背中から…紅い結晶でできた翼が生える。

「早く娘に会わせてやりたいよ…」

九十一話…黒と蒼と紅（後書き）

最近感想が来ないよ…誰か、ヘルプ!!!

「こいつは感想が燃料ですので誰か助けてやって下さい」

そのうち作者太郎（さくしゃ、たろう）って名前でお前ら苦しめてやる!!!!

「こんな馬鹿な考えを起こし始めています…助けてやって下さい」

馬鹿言うな!!!俺はな……………阿呆だ!!!!!!!

「訂正します、こいつを助けなくていいです」

そんなこと言わないでくれ!!!!

「それではまた次回！」

九十二話…覚醒の門

「……………ん」

岡富が目覚めると…そこはいつもと変わらないとある朝の風景だった。

「あ……………寝坊だ」

目覚まし時計を見るともうすでに8時を30分も過ぎていて、岡富はいつも通りに制服に着替えていつも通りの通学路を歩いていつも通りの教室…授業…友達…風紀委員の仕事…。

「あれ？」

違う…僕は…いや（俺）はなにか忘れてる…。

次の瞬間岡富の頭の中に映像が流れる…。

「あああ……………」

地卵…土の人形を操る少年はただ少女を思っただけで闘っていた。

鬮…刀を使いこなして自分をかなり追い込んだ…。

白塚…やられそうになったけど白井さんが助けてくれたおかげでなんとか勝てた。

「あああ……………」

岡富の目の前に紅い門が現れた、それで岡富は理解した…ここは。

「夢か…？」

その門の向こう側には…門と同じ紅い色の結晶が宙に浮いていた。

『ヤア』

結晶からは重々しい雰囲気を裏切る様な明るい声が聞こえる。

「誰だ？」

『ヨク聞イテクレマシタ！！！！』

その台詞を待ってたよと後に続けて紅い結晶は回転していた。

『俺ハナ…お前ヲノ学園都市トカ言ウ場所デ言ウA I M 拡散力場ノ塊ダ！！』

岡富はA I M 拡散力場と言われたので紅い結晶の拡散力場を調べた…しかし岡富は数秒後に後悔した。

「おまつ！！！！」

能力の密度…と言えば良いだろうか？紅い結晶からは数十種類もの能力が感知された…岡富はなにかの間違いだと言わんばかりに顔を横に振っていたが。

『悪イガ事実ダ』

紅い結晶の形が変わり人の形に変化する…だが目、鼻など様々な場

所が欠けていて人形の様に見える。

『コレガ俺ノ全テダ』

紅い人形は門を抉じ開けて岡富に近づいていく。

「誰だよ…あんた？」

紅い人形は両手を合わせてその顔を歪ませてこう言った。

『化物サ』

門が閉じる…そして紅い錠がかけられた。

『才前ト俺デ今カラ…』

紅い人形は岡富を指さしたと同時に周りの空気が重くなる…。

『天使ニナロウゼ』

岡富にはそう聞こえた…紅い人形は指をさしたまま動かない。

「……………」

その少し前…現実世界では。

「岡富をどこに連れてく気だ!!!」

白塚は両手両足を拘束され必死に千種に連れていかれそうな岡富を守ろうと暴れているがそんなもので学園都市製の拘束具が外れるわけもなくただ自身の体を痛めつけていた。

「ん？大丈夫だよ…今からはね」

一瞬の間を開けて千種は暴れている白塚にこう答えた。

「ただ、利用するだけだから」

白塚は敗北之王の能力を使って合鍵の様な物を作ってピッキングしようとして指先に力を込めるが体に変化はない。

「駄目だよ あんまり暴れてると」

ほとんど動けない白塚の腹に衝撃が走った、二発…三発…千種の蹴りが放たれたのだ。

「て、てんめえ…」

千種は白塚を無視して牢屋の外に出ていった。

白塚は必死に指先に力を込めて合鍵を作ろうとするが…疲れのせいで能力が発動しない。

て落ちてきた。

「は？」

美代は恐らく蹴りで天井を貫いたのだろう、美代は蹴りの姿勢のまま落ちてきていて避けようにも瓦礫も一緒に落ちてきたのでかわせない。

「ぐがつ！！！！！？」

蹴りは白塚の腹に吸い込まれる様に刺さった。

白塚は腹に刺さった蹴りにより…白眼をむいてアッチ側の世界へと足を踏み入れようとしていた。

「陽史？」

美代が白塚の肩を掴んで首を前後に振らせるが反応がない。

「ふおわああ……………」

完全にアッチ側へと足を踏み入れていた。

「キスしちやおっかな？」

美代がイタズラっぽく呟くと白塚がアッチから帰ってきた。

「じほっ…おえっ…あふっ…げばっ……………」

数回咳き込んでから白塚は目の前の美代を見つめた。

また白塚はアツチ側へと足を踏み入れようとしていた……………が。

「げほっ…うえっ…………あゝあゝあ…」

耐性がついたのか足は踏み入れなかったらしい……………。

「白塚君…すみません！」

「白塚…………ゴメン」

二人は謝罪の意思を精一杯に伝える。

「あゝあゝ…………大丈夫だから…気にしてないから…」

美代を除くと最年長なのだ…こちらも精一杯に返事をする。

「…………白塚…悠哉は？」

白塚は息を整えてから全員に対して転送されてからの出来事を話した。

「…………としたらお前ら三人が落ちてきたんだ」

「」「心から反省しております」「」

三人は少し目をそらした…。

「…………とまあ…早速岡富助けに行くか…」

白塚がまず立ち上がって黒嶋がフラフラしている白塚を支えた。

「美代さん…悠哉の場所…わかる？」

「勿論！任せて！！」

ついてきてと美代は言っつて白塚達を先導する、廊下を走り…階段を
かけ登り…いくつか部屋に入って隠し通路らしき場所にも入り…全
部書くと大変な量になりそうな道のりを歩くと…大きな広間に出た。

「でかい…ですね」

壁にはなにかの装置がところ狭しと並び、その装置にはコードがつ
いていてコードを辿ると箱があった…いや箱と言っつよりは。

「棺桶みたいだな…」

白塚が言っつた様に十字架や装飾などがついていてまるで棺桶に見え
る。

「あれ？今頃来たの？」

そして棺桶の後ろから撫養千種が現れ、紅い翼を広げた。

「あは」

紅い結晶が空中に出現し矢の様に白塚達に降り注がれた。

「させないよ？」

金色の翼が結晶を弾き飛ばした。

「邪魔だな」

「あなたがね？」

「「「!!!」」」

男子三人は後退りした。

「あはは」

「ふうん」

二人の少女の間には火花がたしかに見えた。

「白塚さん」

葛谷が白塚の方を向く。

「なんだい…葛谷君」

「女の人って…怖いですね」

白塚は葛谷にしっかりと言った。

「ああ……」

千種は火花を散らすのを止めて後ろの棺桶の方に向く。

九十三話…見かけ倒し

轟音と共に棺桶からは天を貫かんと翼が現れ二枚の翼は共鳴し、そして千種は翼を指さし笑い出した。

「あは、3rdサンプルはね彼女を覚醒させるために使ったんだよ」

笑いながら発せられたその言葉に反応したのは…。

「そんなの為に悠哉はあんな苦しそくに叫んでたのか？」

蒼い炎が両手に灯され、葛谷は激昂の感情をぶちまけた。

「そんな下らない実験に…悠哉を…皆を…」

蒼い炎はまるで葛谷の怒りを示す様に轟とつねり…葛谷の髪の毛がああの間を失って金髪になったあの人のように逆立つ。

「下らない？そんなわけないでしょ？」

千種の結晶が紅く光る。

「てめえなんかの下らない実験に俺らを巻き込むな！！！！！！！！」

「下らないなんて言うな！捻り潰すぞ！！！！」

天使の御前で二人の能力者はお互いを威嚇する。

「この計画はお前ら学園都市への復讐だ」

天使の上から紅い結晶を翼の様に生やした男が舞い降りた。

「私はただ救いたいんだよ」

二人の間に着地した男は黒幕には見えない慈愛が含まれた笑みを浮かべる…。

「私はただ妻を蘇らせたいただけだ」

男の発言に反応したのは…。

「あなたの考えは間違ってる」

白髪の少年はボロボロになった体に鞭を打ちながらも男を睨み付けた。

「白塚君、貴方は休むべきですね」

その白塚を制して黒嶋が前に出る。

「貴方は奥さんを蘇らせるために…犠牲を出しすぎたのでは？」

3rdサンプルとは他の能力体結晶とは違って複数の能力の塊。

「複数の能力の塊である3rdサンプルは能力者の命さえ危険に晒す」

更に淡々と黒嶋は無表情で続ける。

「そんな他の命を使ってまで蘇らせたなら…きつと貴方の奥さんは傷つきますよ」

黒嶋は影を槍の形に変化させる。

「布浦は能力者の不良グループに殺された、理事会の奴等にな！！」

男は先ほどまでの慈愛は何処へやら叫んだ。

「その不良グループの大事な人だけを能力体結晶の生け贄にした…まあ月夜の場合はアイツの能力が必要だったただけだ」

男は千種の隣に移動し、二人は同時に紅い結晶を飛ばしてきた。

「効かないですね」

影の壁に防がれて結晶は黒嶋たちには当たらない。

「本気でいきますよ」

黒い蒸気が黒嶋の背中から噴き出す。

「燃え尽きる」

蒼い炎はその美しい蒼とは裏腹に破壊力が凄まじかった。

「……………」

紅い結晶は血の様な紅が綺麗に光っていた。

「ロンギヌス」

黒い槍を投擲し槍は紅い結晶でできた翼を貫いた。

「ほう……」

翼を貫かれた男は結晶で剣を作り、黒嶋は新たに槍を作り二つが交又する。

「やるな」

「貴方こそなかなか」

槍と剣はお互いを削る様に振るわれる、二人の実力は互角……つまり。

「貴方、動きが鈍くなってきてますよ？」

黒嶋の言う通り、男には体力が欠けていた。

「リハビリには丁度いいな！」

しかし男は気迫でそれをカバーする。

黒い槍と紅い剣がお互いをあと一步のところを切り裂きあつ。

「フッフ、自分の勝ちです」

その言葉と同じタイミングで男の背中から衝撃が走った。

「なっ…」

男の影からは黒い槍が飛び出していた。

「自分の能力は感情を武器にすること」

黒い槍が男の背中から抜かれる。

「貴方にはそこで静かにしてもらいます」

黒嶋は天使に向き直り。

「次はアレをどうにかしないといけませんね」

その黒嶋の後ろでは。

「お母さんを助ける為なんだよ！」

紅い結晶が雨の様に降り注ぎ、次々と地面に突き刺さる。

「雑魚は失せる」

火炎は結晶を一つ一つ溶かしていく。

「この結晶って溶けるんだ…初めて知ったよ」

蒼い火炎は周りの機械を破壊して千種を追い詰めていく。

「燃やし尽くす」

炎を竜巻の様にして千種の周りを包囲した。

「ハハハ！私はね、まだ負けらんないんだよ！！！！！」

灼熱の竜巻を突き破って紅い翼は羽ばたく。

「悠哉はただ皆を護りたいと思ってただけだ」

「強欲ね、何かを護るためには何かを捨てなきゃダメなのよ」

「お前に悠哉の何がわかる悠哉はずっと一人で戦ってきた」

「傲慢ね、貴方は彼女の事がわかってるって言うの？」

葛谷は右手をかざした。

「ああ、俺はアイツの事が好きだからな」

その手にはカプセルの様な物があった。

「これがなんだかわかるか？これは」

葛谷はカプセルに着火した、すると黒い火炎が右手から放たれた。

「なんかヤバそっ！！？」

黒い炎に危機感を感じ、思わずかわす千種。

「良いのか？」

黒炎の軌道上には翼を生やした棺桶が黙っていた。

「君は友達を焼く気なのかい!!?」

黒炎は天使の目の前で停止して、爆発した。

「あれは別に特殊な薬品とかじゃないから」

パン、と音を立てて緑とか黄色の火花が周りに散った。

「なに、ただの小手脅しだよ」

花火は綺麗に咲き誇った。

『くおん……』

天使の翼が震える。

「悠哉…あの時の約束は覚えてるよな」

花火の残骸はパラパラと地面に落ちた。

「思い出せよ、お前言ってたろ」

『くおん……くおおおおおん!!』

「全部を護るって言っただろ…てめえ自身も護ってみせろよ!!…!!」

葛谷は親友として棺桶に吼える、棺桶が震え翼が四枚に増える。

「お前が死んだら絶対に俺は許さねえぞ!!!!!!!!!!」

「良く言えました、葛谷君」

直後に黒い鎖が翼を掴み、翼の震えが止まる。

「貴方の岡富君への感情を武器にさせてもらいましたよ」

葛谷は千種に向き直って。

「さあ、終わるよ」

両足に蒼い火炎を灯してその足で大地を蹴る。

「早っ!!」

一瞬で葛谷は千種に迫り、上段の蹴りを放つ。

「……」

千種はしゃがんで蹴りをかわすが……。

「蹴散らせ」

葛谷が蹴りを放った場所から爆発音が響く。

「がっ……」

千種は爆発に巻き込まれ吹き飛ばされる。

「まだだ」

葛谷はまた地面を蹴って高速での移動を行い千種に蹴り掛かる。

「うあっ！！！」

千種が紅い結晶で盾を作って爆発に備えるが。

「朽ちろ」

結晶が熱で溶け、蹴りが千種を吹き飛ばす。

「あ……あああ……」

千種は地面に伏せて……痛みを耐えている。

「立てよ……そして悠哉を解放しやがれ」

「ハハハ！無理だね！！！！！！」

「なら無理矢理でもだ！！！！」

蒼い炎は周りを焦がす、紅い結晶は周りを決る。

「あああああああ！！！！！！」

千種は葛谷の脇腹を剣で貫き、葛谷は千種を爆発で吹き飛ばした。

そして。

「……………」

葛谷は立ち上がった。

「俺の勝ちだ」

『くおおおおおん！！！！』

勝利を讃えるように棺桶が震えた。

「悠哉…待ってるよ」

九十三話…見かけ倒し（後書き）

久しぶりの更新だぜ〜!!!

携帯がブツ壊れました

貸出品を使っではいるんですが…使いにくくて制作に集中できませんした…。

てなわけで次からの更新を少々お待ちを〜。

九十四話…希望には絶望がついてくる

四枚の白い翼は黒い鎖に封され、棺桶はカタカタと震えている。

「問題はどうやって3rdサンプルを取り出すか？だよな」

葛谷は貫かれた脇腹を焼いて塞いだ。

「ん〜…棺桶を破壊すれば悠君の身体から離れるんじゃないかな？」

美代は金色の翼からの光で白塚を照らしている。

「だけど、あの棺桶には封印がされてる…能力では破壊できないぞ」
つまり。

「この場にいるメンバーでは棺桶の破壊は難しいと言っわけですね」
四人は同時にある人物を思い浮かべた。

「『『『『鬮』』』』」

あの少女の身体能力と刀での破壊力なら棺桶ぐらい簡単に切り裂けると皆が考えるが鬮は今頃、地上で。

「閑馬あ〜」

とか言いながら浮かれてるのではないか、と四人は考える。

「頼むぞ佐藤、山崎……………」

翼に巻きついた鎖の亀裂が膨らむ。

「あの変態二人組だね…けど大丈夫なの？」

あの二人の戦闘能力で壊せるのか？という心配。

「あれでもあの二人は小学生なのに高校生スキルアウトグループを潰した程の実力を持つてる」

「意外だね……………」

「美代…どうして俺たちの周りには化物じみたやつしかいないんだろうね…」

二人は一緒に棺桶を見る。

『くおおおおおん！！！！くおん！！！！くおおおおおん！！！！！！！！』

四人に沈黙が流れる。

「あれ…壊れるまでまだどんぐくらいあるの？」

「……………三分もちませんね」

「……………」

翼はバタバタと羽ばたき続けていた。

「……………もつのかな？」

『くおおおおおん！……！……！くおんくおんくおんくおん！……！くお
おおおおおん！……！……！』

「くおんくおんって騒がしいんだよ！……！……！……！……！……！……！」

二人の少年が突如現れた。

「遅かったな」

「まあな…色々と忙しいんだよこっちは」

「ああ、今日だってほしゅ……………学生としての責務がだな……」

二人の少年は少しふざけた様な態度だったが…その手にそれぞれが
獲物を持っていた。

「毎回思うがそれ…中学生の持つ物じゃないだろ……」

「まあな、で…あの棺桶を潰せば良いのか？」

「あの翼とかがかなり危なそうなんだけどな……………」

「大丈夫だ…翼はある程度防げる」

二人は獲物を構えて走り出した。

「行くぞ山崎！」

「オツケー佐藤！」

二人は獲物を一斉に振りかぶって、棺桶に叩きつけた。

棺桶が割れると中からは…巨大な翼とは逆に小さな少女が倒れてきた。

「「可愛いなあオイ……………」」

二人は少女を抱えようとするが。

「……………クルルルルル……………」

翼が邪魔をするように暴れだした。

「「やばっ」「」

翼は二人を吹き飛ばして、六枚へと増えた。

「……………ハハハついに、ついに……………布浦に会える」

男の言葉は誰にも聞こえなかった……………。

紅い門の前：岡富と紅い結晶が喋っていた。

「なあ、良いだろ名前教えてくれよ」

紅い結晶は焦らす様に答えた。

「当テテミナ」

「……じゃあここから出してくれ」

「ソナナノ駄目ダ」

岡富は立ち上がって結晶に向き直った。

「あんたを倒せば出れるのか？」

「才前ナンカジャ俺八倒セネエヨ」

二人は臨戦状態へと覚醒する。

「じゃああなたのことは3rdサンプルからもじってサードって呼ばせてもらっよ」

「好キニ呼ベヨ」

サードの後ろには相変わらず門があり、門が開いた。

「ヨウコソ、身ノ程知ラズノバカ野郎」

何処かの白い神様みたいなことを言いますね…。

「なっ！やめろっ！！！」

サードの台詞に続いて後ろの門から無数の紅い腕が伸びる。

「煩イナア…才前ガ望ンダコトダロオ」

腕は岡富を掴んで門の中へと連れていこうとする。

「絶対にあんたの思い通りにはいかない！」

門の中に引きずられて…ついに体が内側に入ったと同時に門が閉じようとしている。

「精々頑張レヨ、応援シテルゼ」

ボタンという音が響いた。

「サテ、俺ハアイツニ罰ヲ与エナキヤナ」

サードの口らしき場所から、女性が現れた。

「ヤア、調子ハドウダヨ…布浦希美（ふうら、のぞみ）サン」

「…私をここに呼んだのは誰なの」

「行ケバ解ルサ」

「それもそうね」

女性の前に扉が現れ、女性はなんの疑いもなしに扉を潜る。

「人間ノ禁忌ヲ破ル身ノ程知ラズニハ、ソイツニ合ツタ絶望ヲ与エル…ソレガ俺ダ」

…確かにアレは良い感じに完結したし、面白かったよ？けどな…
…ほとんどそんなまじじゃないか！！？

「作者サンヨ…良い作品ノ良イトコロヲ少シ拝借スルコトノ何処ガ悪インダ？」

いや著作権とかあるし。

九十四話…希望には絶望がついてくる（後書き）

パクリ反対って人、すいませんでした。

パクリでも良いよって言う寛大なお心をお持ちの人、ありがとうございます。

貸出品の携帯使いにくい……まあ関係ないって言われたら終わり
だけ。

更新の速度は少し遅くなるかな……。

九十五話…閉会の言葉

少女の身体から紅い光が放たれ周りが紅く染まる、葛谷たちは全員思わず目を閉じてしまうが…。

「布浦…もうすぐ会えるんだよな…俺は…俺は………」

一人の男はその目に涙を溜めながらも…光が目を焼く様に刺さるが男は絶対に目を閉じようとしなない。

『くおおおおおお!!!!!!!!!!』

光が止む、ここでは少女の翼が養分を吸いとられた植物の様に干からびて、翼は消え去って…少女の横には紅いドレスを着た20代前半の女性がたっていた。

『……………まったく』

女性は男を睨み付けた、ギリリという効果音がつきそうな程の睨みで先ほどまでの紅い光に耐えていた男は立ち上がって後ずさる。

「布浦？」

布浦と呼ばれた女性は紅いハイヒールをカツカツいわせて近づき、男の頬をひっぱたいた。

『なにしてるのよっ!!!!!!私なんかに会うために何人犠牲にしてんのよ!!!!!!!!!!』

男は涙を流して…女性はまったくと言ってから近くに倒れている千種に近づいて男に話しかけた。

『この子は…千種？』

「ああ…そうだよ布浦」

その親子の姿を見て葛谷たちはついため息をもらしてしまつ。

「……………親子か…」

「怒る気を無くしてしまいますね…」

「まったく話が見えないな…山崎」

「佐藤…良い雰囲気だしKYにならないように気を付けるんだ」

「美代…あんな風な家族になりたいよな……………」

「私もだよ……………憧れちゃうよね……………」

白塚と美代がふわぁんとアツチ側に行つてしまつていたので葛谷が立ち上がつて涙を流している男……………仮面舞踏会の黒幕であり、岡富の両親を殺した過去をもつ男……………。

「撫養桂一郎……………貴方を風紀委員として拘束します」

男……………撫養は涙を流しながら言った。

「娘は勘弁してやってほしい」

撫養は頭を下げて…続ける。

「私はいくらでも罰を受けよう、君にここでボコボコにされたとしても文句なんて言わない…理事会への復讐なんてコリゴリさ…私はただあの光景が見たかっただけだ」

千種を見て笑みを浮かべている布浦と呼ばれていた女性…葛谷は親子だと予想して考えた結果、撫養にこう告げた。

「娘にも罰は与える」

撫養は葛谷の肩を掴んだ。

「頼むっ！あの子だは悪くないんだよ…私が巻き込んでしまっ…」

葛谷は撫養の前に指を四本立てた。

「4週間の間俺と悠哉と黒嶋と…仮面舞踏会に参加した全員のパシリになってもらう」

撫養が千種の方を見るとそこには精一杯母に抱きつく娘の姿があった。

「娘に一回聞いてやっ…てく…れ…」

撫養は少しフラツとしてから倒れた。

「……………撫養千種……………」

千種は葛谷の方向を向いて言った。

「話は聞こえてたよ……パシリぐらいならなんでもするからさ……
パパの罪を少しだけでも軽くしてあげて……」

「なにを言ってるんだ？お前らを助けるとでも？」

千種の顔が恐怖に歪む。

「お前らは俺たちを絶対に許さない……だから」

葛谷は岡富の方向を向いてから言った。

「お前らには学園都市から出ていってもらつかな？上にバレない
ようにヒユナスさんと焰に協力してもらって逃げ道を確保するし、
外での生活にはいちよう目安はついている」

千種の頭の上にたくさんの？が浮かんで混乱している。

『千種…これは現実よ…それに』

布浦は千種の頭を撫でながら言う。

『人はやり直せるのよ？やり直せるチャンスを買ったんだから、精
一杯生きてくれるわよね？お願いよ』

千種は笑顔で頷いた。

『…時間ね』

布浦の足がなにかに侵食されるように消えていく。

「ママっ!!?」

『千種…あの人に伝えといてね……………大好きだよ桂ちゃんって』

千種は涙を流しながら母に最後に抱きついた。

「いつか、そっちに行くからね…」

『まだ来ちゃダメだからね千種』

消えていく母の温もりを感じながら千種は涙を流し続けている。

「……………仮面舞踏会、これにて……………」

葛谷は親子に背を向け岡富の方へ歩いていく。

「おしまい」

恋人の笑顔がもう一度見たかった撫養桂一郎と見たことのない母の温もりを追い求めた撫養千種。

「悠哉……………」

葛谷は岡富の手に握られている紅い結晶を取り出した。

「……………すっ……………すっ」

岡富は幸せそうな顔で寝ている。

「よかつ……!!」

葛谷の頭に激痛が走る。

「かはっ……」

向こうでは黒嶋も痛みを耐えている。

二人は同時に倒れた。

「白塚さんに美代さん……三人を運びましょう」

「岡富は任せます、あいつが途中で起きたら怖いですし」

佐藤が葛谷を山崎は黒嶋を抱えて外へと歩き出した。

美代と白塚は二人で岡富を運んで、千種は父親を紅い翼で包んで運んだ。

「……すう……観月……大好き……」

白塚と美代が顔を見合わせ笑う。

その言葉に反応するように葛谷も寝言を喋った。

「一昨日来やがれ……」

……もうちよい雰囲気作ってくれよ。

けれど岡富の寝顔はたしかに笑っていた。

「おオ…あツたな……」

白髪赤目の少年は科学的なデザインの杖をつきながらも紅い結晶を見つけそれを拾った。

「これが…3rdサンプルか…」

少年は結晶を握りしめた、パキリという音が鳴り少年が手を開くと結晶は割れていて欠片が落ちた。

「あのやるオが急げツつウから急いでやツたのによオ……ただの下らねエ石じゃねエか……」

少年は杖をつきながら歩き出した。

その目には…なにが写っているのだろうか。

九十五話…閉会の言葉（後書き）

仮面舞踏会終了おおおおお……………。

疲れたあ…慣れない携帯がウザいい…。

さて来週からはほのぼのマックスで行くぜ

シリアスなんてこの作品には似合わない…俺が書きたいのはほのぼの系だ！！！！！！

てなわけでこれからもとある男子の風紀委員を是非見て下さい。

感想をお待ちしています！

九十六話…牛乳と言ったら？

仮面舞踏会から……もう1週間が過ぎた。

「……すう……」

撫養親子は無事に外に脱出して、外で大成功をおさめたらしい。

「……観月い……」

白塚と美代は無事に学校で禁断の教師×生徒プレイを繰り広げているらしい。

「……ふにゃあ……」

鬮と閑馬も……ね？あと何故か尼見と辺見が付き合い始めた……辺見は受けですね。

「……作者のばあか……」

さつきから岡富は病院のベッドにて満面の笑みで寝ている。

「……てめえの　　に手え突っ込んで前歯ガタガタ言わせたろうか？」

寝言だよな？寝言だと信じて良いんだよね！！？

「悠哉……煮干だよ」

病院の扉が開いてそこから煮干を持った葛谷が病室に入る、岡富は相変わらず寝たままだ。

「……………すう……………」

葛谷は花瓶に活けられている花を花瓶から抜いて、誰かが置いていたであろう花を花瓶に活ける。

「……………観月い…そんなのらめらよお……………」

葛谷は岡富の寝言に驚いて思わず振り返ると、案の定岡富は幸せそうな顔で寝ていた。

「……………寝言だよな？……………」

葛谷はもう少し弱くなってしまったお見舞いのリンゴをかじる、果汁は少し垂れそうになるが葛谷はそんなの気にせずリンゴをかじる。

「……………ゆ……………」

「岡富、起きましたの！！！」

葛谷がなにか喋ろうとしたが…同時に入ってきた白井にかき付けされた。

「白井さん、悠哉はまだ……………」

「まだ起きませんの……………」

白井はやれやれと言った様子でお見舞いの品の洋梨にかじりつく。

「モシヤモシヤ…で岡富は…モシヤ…起きませんか？」

「知りませんよ…悠哉は無理をするといつも…ハア…」

葛谷がため息を漏らすが白井はそんなの気にせず洋梨を食べている。

「この洋梨…持ってきたのは誰ですか？」

「……黒嶋」

「あの黒髪のか？」

「はい」

黒嶋は昨日、洋梨をはじめに様々な果物を持ってきたことを白井に説明する。

「岡富はなんの果物が好きですか？」

「……イチゴですね」

「意外に可愛い趣味してますのね…」

「本当に…煮干以外は…乙女なんですよね…」

「あの煮干好きはあるいみ可愛いのです」

二人は同時に煮干をポリポリとハムスターの様に食べている岡富を想像する。

「可愛いのです……」

「……はい……」

岡富はそんな二人に対して……故意にやったのだろうか……。

「……しりゃいしゃあん……しょんにゃとこお……らめれすっよ……」

「あれは襲ってもいいという証明ですか？」

「さあ……俺にはわかりませんね」

「葛谷……私は思うんです……敬語は止めにしませんか？」

「……じゃあ遠慮なく……」

葛谷は両手をパキパキいわせて、肩を数回回して……。

「で、白井さんはなににきたの………?」

「もちろん岡富のねが……」

「聞かなかったことにしたいんだが……」

急に打ち解け始めた二人、けど岡富はまだ起きない。

カエル顔の医者は軽くヤケになりながらも数分後にムサシノ牛乳を持ってきた。

「ムサシノだ！」

牛乳の口をいきなり開けて、そのままらっぱ飲みを始めた。

「んくんくんく……………ぷはああっ！」

牛乳を飲んで、山ほどあった煮干はもうすでに野原と化していた。

「お腹いっぱい……」

数日分の煮干と牛乳を飲んだ岡富はお腹がいっぱいになって満足したのか……。

「ふにゃあ……………眠いよお……………」

「さっきまで寝てただろう……………それに」

扉のところには葛谷と佐藤と山崎がぼかーんと口を開けていた。

「この子たちは君に用があるんじゃないかな？」

「三人とも良くきたね！」

岡富の口の周りには牛乳を飲むことでできる白い髭ができていた。

「葛谷あ…………あれが昨日までずっと眠ってた人間か？」

「流石の俺でも驚いたぜ……」

「悠哉の生命力は凄まじいってことがわかったよ」

岡富は口元を袖で拭って、言い放った。

「僕さ、男に戻れなくなったから」

そう言うってから岡富は伸びをして準備体操を始めた。

「」「」「」

三人は口をパクパクさせて岡富を見るが当の本人は入念に屈伸をしている。

「いや〜……………3rdサンプルに完全同調盗られたよ……」

「じゃあ……?」

「岡富は……?」

「悠哉は完全に女の子になったってことなの?」

三人が岡富の質問を質問で返すと岡富は数秒悩んでから。

「そうなるね、けどしょうがないと思ってるよ」

岡富は窓の外を見て自分の顔を隠す様にして。

「最初からいずれはなる運命だったんだよ……………それが早まっただけ

だからさ……」

「おいおい……」

葛谷は驚愕の表情を崩せない。

「嘘だろ……」

「完全同調は最初から消えるはずだったんだ……けどその前に3rdサンプルに能力を喰われた……覚悟はしてたから……これからは女の子として生きてくよ」

岡富は窓の外を見ているが……その表情が葛谷にはわかってしまう。

「……悠哉はこれからどうするの？」

岡富は頬まで伝っていた水滴を拭わないまま笑顔で振り向いて精一杯の笑顔で、言った。

「誰かの嫁にとってもらうかな！」

精一杯の作った笑顔が葛谷にはわかる……。

「悠哉……」

「大丈夫だよ……佐藤と山崎もそう思うだろう？」

「……岡富が望むままにすれば良いんじゃないか？」

「まだ充分に考える時間もあるさ」

この二人にしては珍しく良い返答が帰ってきた。

「てゆうーかさ」

佐藤が岡富の後ろに回り込み。

「岡富のさ」

山崎も岡富の後ろに回り込む。

「胸は相変わらずでつかいな」

二人は同時に岡富の胸を揉む。

「んっ……佐藤……山崎……」

「なんだ？」

拳に備えて身構える二人とは裏腹に。

「女の子って今みたいにされたらどう反応すれば良いんだ？」

ただ純粹に答えが知りたいだけの無垢な表情が返ってくる。

「……白井さんにでも教われれば良いさ……」

二人は逃げ出した。

「二人とも帰っちゃったな……」

「……へタレめ……」

その瞬間、岡富はなにかを考え付いたのか葛谷の顔を両手で触って自分の方に向けさせると。

「データーごめ」

「はっ。」

九十六話…牛乳と言ったら？（後書き）

岡富悠哉は完全に女の子デビューしました！！！！

しかし自分は最近悩んでるとです…。

感想が来ねえ…と。

感想が来ないと僕死んじゃう！！誰かヘルプ！てなわけで感想を書いてくれる方を募集してますよ。

批判も受けます。それも皆様の声ですし！！

九十七話…岡富はもうすっかり女の子です

日曜日……セブンスミストの入口付近には美男美女と言っても過言ではないカップルがもじもじしていた……。

「……………」

「悠哉……大丈夫？」

我らの主人公、岡富は葛谷とのデートに誘ったは良いが……。

（手を繋いでもいいのかな？……でもいきなり繋いだら幻滅されるんじゃないかな？……観月はどんな風なデートを企画してくれたのかな？……）

と様々なことを考えていて周りが見えてない……葛谷は岡富を頑張っ
て現実世界に戻そうとするが、岡富はなかなか帰ってこない……。

「悠哉……デートするんじゃないの？」

その言葉で岡富は復活した。

「じ……じゃあどこに行くんだ？」

岡富はかなり緊張してる様子ですね〜初々しいですね〜。

「……………買い物する？」

「うん！〜！」

てなわけでセブンスミストに入った二人、を監視する影が……ちらほら見えます。

「岡富はようやく入りましたの……」

「フフフ…葛谷君も大変そうですね」

「黒子…良いの？覗きなんて……」

「あの二人はやっと付き合い始めたね……」

「美代…あれ見てると思い出すな初デートを……」

そんなわけで覗きは白井、黒嶋、御坂、美代、白塚の五人である。

一方、岡富たちは五人の監視に気づかないままデートを続けていた。

「悠哉はなにか欲しいものある？」

「観月が欲しい!!!」

ああ、ラブラブしやがって……はっ、お見苦しいことをすいません。

「じゃなくて…なにか必要なものとか……」

「……服とかも最近は何も困ってないし大丈夫だ」

「ん……じゃ映画でも見に行く？」

「うん……！」

二人はセブンスミストをパパッと見てパパッと映画館へと向かう……。

「熱々ですよ……！」

「二人はラブラブですね……イライラしますよ」

「なんか見てるコッチが暑くなる……！」

「陽史は欲しいものある？」

「ないな……美代は？」

「ないよ」

………なんですかこのダラダラ組は……。

一方、岡富たちは………まだ五人に気づかないまま映画館に入って、なにを見る気なのかな？

「………でずにーだ………」

葛谷君はでいにーが大好きです、はいそこ子供とか言わないであげて。

「やっぱりこついつ時って恋愛ものを見るのかな………けどこれ………バットエンド系だし………」

岡富は真面目に選んでいますね、うん………。

「悠哉…あれ見たい……」

「ん？」

葛谷が指さす先には いずにーの最新作が……。

「良いよー！」

岡富はいい子です、散々悩んで見つけたハッピーエンドものの恋愛映画に目もくれずに葛谷の意見を受け入れました……ほんといい子や……。

その後ろではやっぱり監視五人が……。

「葛谷は…何故あの映画を……？」

「フッフ…岡富君がけなげですね」

「うん……なんか、けなげ過ぎるよ……」

「陽史い……」

「んっ……美代……」

三人は頑張って白塚と美代を見ないように頑張ります、知ってる人だと思われたくないんでしょうね。

さて、映画の内容でも話しましょうか……。

主人公のマイクがあんなことやこんなことをしてバヒューンでズバーンでドッシャーんです。

「悠哉…楽しかったね……」

「うん…予告どおり本当にバヒューンでズバーンでドッシャーんだったね……」

どんな映画だったんでしょね？真相は彼らのみぞ知るって感じですね。

「……葛谷のセンスを疑いますの……」

「フフフ………意味がわかりませんでした……」

「……また見に来よっかな……」

「御坂つちと葛谷君のセンスって似てるところあるよね……」

「……岡富も大変だね……」

そんな感じで、デートは夜まで続きました…けど全部を語ると皆さんがむなやけをおこすと思うので止めて起きます。

「ねえ、観月……」

「なに？」

二人は帰り道も仲良く二人並んで帰っています。

「知ってるとは思っけど、僕は観月が好きだよ……観月は僕が相手でも良い？」

葛谷は…少し黙っています……。

「……………」

岡富は内心ドキドキで胸が張り裂けそうです。

「俺より悠哉には似合う人がいると思う……俺なんかじゃ悠哉を充分にエスコートできないしさ……俺なんかとつき合っぐらいなら……」

パシィイインと音がなりました…そこには顔を真っ赤にして涙を流している岡富と、その岡富にビンタされて何が何だかわかっていない葛谷がいた。

「バカ観月……………」

岡富は帰り道とは逆に走り出しました……葛谷は、その光景をただ見ることしか……いや、葛谷は泣いてました。

「これで、良いんだ……………これで」

葛谷は泣きながらウィルスの宿泊施設に向かう、岡富は泣いて泣いて泣いて……走り続けました……。

「これで、良いんだよな……………」

自分なんかより相応しい人と幸せになってほしい、ただ葛谷はそう

思っていた…自分なんかじゃ岡富とは釣り合わない…。

五人はこの光景を見ていた。

「……………」

「……………」

「そんな……………」

「悠君……………」

「……………あのクソガキ……………!!」

白塚が飛び出しそうになるのを美代が止めました。

「陽史、これはあの二人が自分達で解決する問題だよ……………」

五人はそれぞれの寮に戻ります……………そして葛谷は空を見上げました。

「ちくしょう……………」

嫌なほど綺麗な星空がその目に写る。

岡富は走り続けて、体力の限界に達して息を切らして公園のベンチに座ってました……。

「観月のバカ………」

そこに一つの影が出てきました。

「その君、どうしたの？」

岡富が顔を上げるとそこには観月に少し雰囲気の似た少年が立ってました。

「……誰？」

「僕は新山健太って言うんだ」

傷心の女の子には魅力的過ぎる笑みを見せる新山……岡富は思わず抱きつきます。

「うわああん!!……ひぐひぐ……うっ………」

涙がさらに止まらなくなる……少年は続けて言った。

「なにかあったの？話せる？」

岡富は新山に全部話しました、いきなり初対面の人に話せたのは観月に雰囲気が似てたからでしょう。

「……そうか、その彼氏は身勝手だね……」

「うっ……うっ……」

「歩ける？僕の寮に来るかい？」

「はい、今日は帰りたくありません……」

下を向きながら歩く岡富、安心しきっていて無防備です……しかし新山という少年は……。

「ちよろい」

岡富に聞こえないほど小さい声と邪悪な笑みを浮かべていた。

九十七話…岡富はもうすっかり女の子です（後書き）

岡富の中身は男なんだからホモじゃね？って思う人はいないことを願います。

心身別々という能力で身体だけではなく…心も軽く女の子になってたんです。

だから記憶が無くなった時とかは普通に女の子してましたし、男に戻れないってわかったら吹っ切れたんでしょうね。

葛谷とケンカ？をしてしまった傷心の岡富に変態の魔の手が迫る…そんな次回をよろしくお願いします。

九十八話…とある少年の大火炎撃（パイロキネシス）

「ほら、そっちに座ってね」

新山はベッドを指さしてから、お茶でも入れにいくのか台所に向かった。

「……………」

岡富は俯きながらベッドに座った。

今岡富がいるこの部屋は新山の寮で、内部構造は上条当麻さんの寮の構造とたいして変わらない。

「紅茶入れたけど…飲む？」

新山の差し出した紅茶を受け取り、岡富は一口飲む。

「甘い……………」

「ほら、疲れたときには甘いが良いらしいし、それに失恋には甘いものが良いって聞くしね」

「ありがとう……………」

岡富は少しずつ紅茶を飲む…。

「落ち着いた？」

「はい……さつきは帰りたくないって言ったけど、明日お礼の品でも持ってきますので失礼しま……」

(あれ……眠く……なっ……)

岡富は目を閉じて寝息を漏らし始めた。

「ハハハ…無防備っていうのは罪だよなあ」

新山は立ち上がって眠っている岡富を抱き抱えた。

「さて、連れてくか」

台所のまな板の上………そこには紙があった。

その紙にはこう書かれていた。

(風紀委員に復讐を)

葛谷の電話が鳴る………。

「もしもし、お兄ちゃん……」

相手は観月の妹である祐希だった。

「……なんだ？」

「お姉さまをふったんだって？」

「ああ……で？」

無気力で無関心で……虚ろな言葉。

「で？……じゃないわよ……観月い……あなたの好きな人は誰よ？」

「……」

「それにいつか言ってたよね？」

『悠哉は護ってみせる』

「あの言葉は嘘だったの？それとも今は別の人が好きなの？」

「……」

たまにぐすつなどと泣き声が聞こえる、泣いているのは明らかだ。

「アンタは相手に気を使い過ぎなのよ……もう少しワガママになりなさいよ……」

「……」

「ここでお姉さまを諦めて笑えなくなるか、それともお姉さまと笑って暮らしていくか……どっちよ？」

「……………もる……………」

その目に炎が宿る。

「なに？聞こえないわよ」

「護る……………護ってみせる」

「じゃあね……………」

電話が切れる、そして葛谷はダンスに近づいてあるものを取り出した。

携帯を開いて、ある人に電話をかける。

「初春さんですか？夜分遅くにすいません…葛谷ですが…ちょっと悠哉がどこにいるかわかりませんか？」

「岡富さんなら……………なっ！！岡富さんは今、最近力をつけてきたスキルアウト集団の……………イービルクラーケンのアジトにいます！！」

「わかった」

あるものをポケットに入れて、ドアを開けると…冷たい風が頬に当たった。

「で、どこにあるの？」

「一人で乗り込むつもりですか？」

「はい」

ドアを閉めて、しっかり戸締まりをする。

「誰か増援を……」

「必要ない、むしろ邪魔になるからいい」

葛谷の周りの空間が歪む。

「……一時間だけですよ？」

「はい」

バカでかい倉庫に不良の群れ……なんてお決まりな風景なんでしょう……。

「失礼するよ……」

バカでかい倉庫のバカでかい門を炎の熱で溶かして開ける。

「なんだてめえ？」

さっきの新山君です、爽やかな雰囲気はどこへやら……めっちゃ睨んでます。

「悠哉を取り返しにきた風紀委員だ」

今は私服の葛谷の袖のあたりにつけられたあるものをスキルアウト全員に見せつける。

「やつちまえ！」

新山君が命令をして、十数名が武器を持って突っ込んでくる。

「……………寄るな」

次の瞬間轟音があたり一体を支配した。

「さあて……」

いくつもの火柱がスキルアウトたちの動きを牽制する、スキルアウトたちにとっての弱点は強い能力者なのだ。

「炭になる覚悟があるやつだけ来やがれ」

誰も突っ込もうとしません、当然ですな。

「……………仕方ねえよなあ……………」

新山君が葛谷を睨み付けます、それに反応して葛谷も睨み返します
……………二人の間に火花が散ってますね、もちろん

比喻表現じゃありません。

「……………」

葛谷は火炎を投げつけたのですが、スキルアウトのなんか親玉みたいな奴が葛谷と同じく炎を扱っていて相殺されました。

「新山さん!!」

「そつだ！俺たちには新山さんがついてる!!!!」

スキルアウト集団にいららない活気が戻ります。

「黙れ、社会の不適合者ども……………」

赤い火炎が…青白くなってきました、葛谷君はお怒りのご様子です。

「……………風紀委員さんよお……………てめえらが学園都市の平和を守ってるつて言ってもなあ……………レベル0への差別や苛めは解決されてねえんだよ……………」

急に語り出す新山君の言葉はお怒りの葛谷君に届いているのでしょうか？

「同じレベル0がやられてて、それを黙っとけって言う方が無理だろうが！……！」

いや、能力者に言われても説得力ありませんからね？

「俺は必死に能力を覚醒させようと努力した……その結果レベル4までなれたぜ？」

葛谷君大ピンチですね、レベル4 vs レベル4です。

「なら、レベル0を守るために必要以上の能力者を殺るってのは間違いだ」

葛谷君、やるの字が違うと思いますよ？殺っちゃダメでしょ？

「てめえらが必要以上の能力者を殺ったら……レベル0を狙う能力者と同等に成り下がるぞ？」

「これは復讐なんだよ、仕方ないだろ？」

結構どろどろですねw

「行くぜ……」

新山君が片手を前につき出して火炎を放ちます、しかし葛谷はそれに反応しません。

「（あいつ、当たる気か？）」

どおんと音が響いて、スキルアウトの人たちは我等が新山さんが敵を討ち取ったと勝利の雄叫びを上げてますが……その空気を読まない台詞が炎の中から聞こえてきました。

「生温いな」

スキルアウトたちは慌て始めました、あんな火炎を浴びといて……何故生きてるんだ？と。

「パイロキネシス同士の闘い方を知らないみたいだな」

火炎が消えて中から葛谷が出てきます、皆大慌てしてますね愉快です。

「炎を操るやつに炎ぶつけてなにが起こるんだよ？」

つまりパイロキネシスによる攻撃は意味ないということですね、新山君……ざまあw

「さあて悠哉を返してもらおうか？」

葛谷の周りの空間が歪みます、恐らくは熱でしょう。

「……俺に勝つたら、大人しくてめえの彼女は返してやるよ」

「……そうか」

歪みが消えました、その代わりに葛谷の足に炎が灯りました。

「蹴散らしてやるよ」

九十八話…とある少年の大火炎撃（パイロキネシス）（後書き）

いや〜前回あたりからもう岡富はヒロインになってますね。

「僕は男です！」ももう聞けないとなると……少し悲しくなります、あれ？部屋の中なのに雨が……。

次回もよろしくお願ひします……グスン。

九十九話…ヒロインは可愛いのが必須事項

2つの炎、赤と青。

「……………捻り潰す」

青い火炎が土砂降りの雨の様に降り注いだ、しかし大量の火炎は全て新山に向かう。

「効かねえよ！」

炎を振り払う新山だが、その目の前にはもう葛谷が迫る。

「喰い尽くす」

新山の顔にアイアンクローを喰らわす、そして。

「あああああああ！……！！！！！！」

新山の周りを覆っていた火炎がどんどん葛谷に吸い込まれていく……この場合は喰われていくといった方が正しいかもしれない。

「なめ……………んなー！！！」

新山が葛谷に蹴りをしようとするが、その蹴りより速く、葛谷のヤクザキック？が決まった。

「啜れ」

葛谷は足下の地面を溶かした、その溶けた地面が新山に向かう。

「ぐっ！！！！」

新山はその場で爆発を起こして、その爆風で空を飛んだ。

「らああ！！！！！」

爆発の前に持ってたのか鉄パイプを槍の様に投げる……………けど葛谷の周りの熱でどろどろに溶け……………。

「……………つち……………」

ませんでした、葛谷は蹴り飛ばしました。

「……………かわせば済むのに何故……………！」

新山が葛谷の方を見ると、葛谷が無理をした理由がわかった。

「……………すう……………」

眠り薬で眠ってる岡富を護っていた、かわせば岡富に当たる…溶かしたとしてもその熱で岡富が被害を受ける。

「……………これで形勢逆転かな？」

新山はわざと広範囲な技を使う、岡富に当てない為に葛谷は必死に火炎を全て倉庫の外に放り出す。

「くそ……………」

葛谷に無理矢理多くの力を使わせ、疲れるのを待つ……実にいやらしい作戦ですね。

「ん……………あれ？」

さっきからドカンドカンとバゴオンとかうつさいから岡富が起きちゃったじゃないですか。

「悠哉……………今はまずいつて」

「……………誰がやったの？」

葛谷が振り向くとそこには凄い目が据わってる目が怖い岡富が……めっちゃ怖いです。

「誰が観月に傷を付けたの？」

葛谷が岡富の目線の先のものに気付いた、いつ切ったかは知らないが頬に切り傷があったのだ……………あんだだけ暴れて頬に切り傷って……結構凄くね？

「新山あ……………」

ヒロインが絶対に出してはいけないような声とオーラが岡富の体から発してますね。

「お前がやったんだな？」

翼ではなく、黒いオーラが……………って本当になんか黒いの出てる!!!？

「許さないからな……」

段々と膨れていく黒いオーラ……もとい邪気？は翼にかたちを変えた。

「覚悟はいいかい？」

黒い翼……美代は幻影を魅せる能力だった、しかし岡富と美代の能力は僅かに違う。

「鬼が出るか蛇が出るか……」

葛谷は呟きますけど、まったくその通りなんですよ、葛谷は岡富の黒い翼を見たことありませんしね。

「なんかやばそーだなあ……」

そうですねー一見すると美少女なのにいきなり暴言吐いて、黒いでだして黒い翼をいきなり背中から生やしたんですよ？怖くもなりますよ？

「憎悪と殺意と憤怒と嫉妬と……」

なんか凄いこと呟いてますよこのヒロイン？完全に花も恥じらうこの女になっていたかと思っただら……違いましたね……！！

「……………悠哉」

観月が止めました、偉いです！これ以上岡富を自由にさせたらなにが起こるかわかりません。

「なに……観月？」

満面の笑顔です、この人完全に振られたこと忘れてますね……けどこの場は忘れてほしいです、思い出したら葛谷も標的にしますね……完全に標的を葛谷君に代えますよ、愛が憎しみに変わる瞬間を見れますね……。
見たくないけど。

「悠哉……眼と発言とオーラとその他もろもろが怖い」

その他もろもろの部分になが入るのでしょうか……いや、（いくつ）（なにが）入るのでしょうか？

「わかった……」

黒い翼が白くなりました、他人への憎しみが葛谷への愛に変わりました。

「けど、自分のことは護ってくれ……俺じゃあ悠哉を護りきる実力はないから……ゴメン」

「わかった、外で待ってるよ」

外には二人の戦闘で吹き飛ばされたスキルアウトがいますよ？岡富じゃあかて……あつ勝てますね、岡富なら瞬殺できますね本当に瞬殺ですね。

「……………鎖せ」

「炎は効かねえって……………なっ!!?」

地面を溶かして鎖を作り、新山の周りを囲む……………最初からやればいいんじゃないですかね……………。

「こんなの溶かせば……………」

新山は鎖を溶かして殴りかかるが……………。

「(いない?)」

葛谷がいない……………新山は一瞬、葛谷が逃げたかと思ったが。

「(アイツは絶対に逃げるなんてしねえ……………)」

新山が辺りを見回すが誰もいない。

「(上か!!?!)」

上には誰もいない……………。

「甘いんだよ!!……………!!」

新山の足下に穴が開いて中から葛谷が出てきた、葛谷は新山のあとに向かって拳を振るった。

「がっ!!……………!!」

新山は吹っ飛んで空中に見事な曲線を描いた。

「俺の勝ちだ……………」

葛谷は新山に2…3発殴つてとどめをさした後に倉庫から出ると…

……。

「フフフフ……………」

ヒロインがしてはいけない邪悪な笑みを浮かべている岡富と。

「お助け……………」

「死ぬ……………」

「スキルアウトやめる……………」

「気持ちいい……………」

岡富に散々やられたスキルアウトたちが死にかけてたり、新しい世界に目覚めちゃったりしてました。

「……………観月い……………」

岡富が邪悪な笑みを止めて……………少し泣き出しそうな顔になりました…思い出したのでしょうか。

「ゴメンね観月……………観月は無関係なのに巻き込んだじゃって……………本当にゴメン……………」

岡富は涙を堪えているつもりかもしれないが、岡富の顔は涙で濡れている……。

「悠哉……………」

「僕ね…………観月とはずっと釣り合わないと思ってたんだ…頭よくないし、喧嘩ばっかしてた時期もあるし、可愛くないしね…………観月は僕とは違ってかっこよくて…頭もいいし…優しいし…僕なんてって思ってたけど、頑張って告白したんだ…」

「……………」

「もう諦めもついたらから、観月これからも友達としてよろしくね」

精一杯の嘘、相手を傷つけないための嘘…自分は傷ついても構わない…そんな嘘。

「観月、帰ろっか……………」

岡富は涙を拭って歩き出した、どんどん加速していく…………あれ？もう走ってますね、うわーんって泣きながら走ってますね。

「悠哉あつ！……………」

葛谷は岡富を呼び止めるために大声をあげた、岡富は立ち止まった…………まあ凄く走ってたんで二人の間は軽く20メートル位あるんですけどね。

「悠哉！…明日話がある！……………」

「……………わかったあ！！！」

その会話が終わった瞬間、また岡富はうわーんって言いながら走り出しました……………今度は嬉しくてじゃないですかね？

「さあて……………こいつらを倉庫ん中に入れなきゃな……………」

葛谷のスキルアウト大掃除大作戦が始まったとき。

九十九話…ヒロインは可愛いのが必須事項（後書き）

受験勉強の息抜きが凄く長くなってしまう花天月地です…。

国語の授業で、物語をラブストーリーものを制作しようという内容があったのですが…皆純愛ものなのに、自分だけ浮気とかなんか昼ドラ的な展開を入れちゃったんですね…。

まあ、そんなのほつといて次回をお楽しみに〜。

百話：最終であり最初（前書き）

久しぶりの更新。

書く時間がなかった……。

百話…最終であり最初

岡富悠哉誘拐事件の次の日……岡富と葛谷は自分たちの学校の体育館裏で話を始めた。

「は……話ってなに？」

岡富がもじもじしながら聞きます、実に初々しいですね、この物語の中では冬な設定ですけど……春ですね。

「……俺が悠哉に釣り合わないって話しただろ……あれには続きがあるんだよ……」

「……………」

「悠哉……お前を護りきれないと思うけど、俺で良いのか？」

「うん」

「お前の性別は女になったから、寮が別々になるけど良いのか？」

「ちよつとやだかな……」

「常盤台から推薦入学の案内書が来てるけど見るか？」

「う……えっ！！？」

作者も驚きです、我等の岡富ちゃんが常盤台に行っちゃいます。

「えっ……ええっ!!?」

岡富は完全にパニックってます、空を向いて「かめはめはあっ!」とか言いそうな勢いでパニックってます。

「……岡富の学校が変わるから俺は少し諦めたんだよ……岡富に新しい出会いがあるかもしれないし……」

「馬鹿……観月以外の男子なんて興味ないよ……」

「……悠哉……」

二人の距離が縮まります、10……9……8……7……6……5……4……3……2

……1……。

0。

「僕は常盤台には行かない!」

「……常盤台に誘われて断ると……大変なことになるらしいよ?」

その一言にビビる岡富……もちろん嘘です。

「ま……まさかね、そ……そんなにやわけにやいよね……？」

面白くかみますねこの子W葛谷も思わず顔を緩めてしまいます。

「……………ゴニョゴニョ」

葛谷が耳打ちを始めました、聞いているほうの岡富の顔から体温が抜けてくのがわかります。

「えっ…嘘……やだ……まだ×××とか　　したくない……」

自己規制しました、良い子は自己規制するようなことを言ったり書いたりしちゃダメだぞ!!!

「常盤台に行く？」

「……………うん」

どれだけ凄いこと吹き込まれたんでしょうね、W岡富は顔を真っ青にして答えました。

「悠哉……名前どうするの？」

「ほえっ？」

「悠哉なんて名前の女子はなかないと思っよ？」

「……………拓海？」

「……男の名前だけど女子にもたまにいるからね……」

たしか…お母さ×と一緒に歌のお姉さんはたくみですねw

「……どうしょ……」

「じゃあさ……俺が名前考えてもいい？」

「うん……」

満面の笑みです、眩しいです、葛谷も顔赤くしています。

「……」 考えてる葛谷

「……」 ジーと見つめる岡富

「……綴言つづき」

「ほえ？」

「岡富綴言ってどう？」

「つづき……綴言…ツヅキ…… t u d u k i……」

「……」 どうかな？

「可愛いよ……ありがと……」

おや？二人を見ている影がありますね、少し見てみましょう。

「葛谷は無事にミッションをクリアしたみたいですね……」

ツインテールの彼女の手には一束の書類……。

『岡富をお嬢様にしちゃいますの！大作戦』

……グルだっただんですね。

「葛谷を利用して…岡富を常盤台に転校させる……実に素晴らしい
ですの……」

あっ……葛谷は騙されたみたいですね。

ツインテールの彼女……はめんどくさいから白井さんは愛だの障害
だのブツブツ呟いてますね。

「動きがあるみたいですよ！」

では岡富たちに視線を変えてみましょう。

「あっ……僕レベル0だよ？入れないよ？」

「大丈夫だよ……焰さんがゆう……綴喜の能力をメタモルフオーゼ
だっけ？だと考えたら……レベル3扱いになるって言った」

悠哉っていいかけましたね。

「観月と毎日では会えなくなるのは嫌だけど…頑張るね！」

「ああ…頑張れ」

「大好きだよ、観月」

「ああ……………俺もだよ」

「えへへ……………」

この二人は学校が違って仲良くいけますね、これにて。

とある男子の風紀委員……………おしまい？

百話…最終であり最初（後書き）

とある男子の風紀委員……第二部書くの決定！！！！

だからサブタイトルは最終であり最初。

第二部をお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7315k/>

とある男子の風紀委員（ジャッジメント）

2011年1月31日07時44分発行